

基本計画書

基本計画書									
事項	記入欄							備考	
計画の区分	研究科の専攻の設置								
フリガナ設置者	コクリツダイガクホウジン イバラキダイガク 国立大学法人 茨城大学								
フリガナ大学の名称	イバラキダイガクダイガクイン 茨城大学大学院 (Ibaraki University Graduate School)								
大学本部の位置	茨城県水戸市文京2丁目1番1号								
大学の目的	茨城大学大学院は、教育基本法(平成18年法律第120号)及び学校教育法(昭和22年法律第26号)の精神に則り、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめてひろく文化の進展に寄与することを目的とする。								
新設学部等の目的	<p>本研究科の地域・社会における中核的な人材育成としての機能を更に強化するために、多様な学生の学びに応えるカリキュラムと履修タイプ別による教育システム、そして公認心理師資格対応を含んだ新たな研究科を設置する。</p> <p>本研究科の人材養成目標は、人文科学系と社会科学系の専門知識に基づきながら、変化の激しい社会において、永く高度専門職業人として活躍できるよう、広い視野を持ちながら自ら専門性を深化・拡張し学び続けられる人材を養成することである。</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	大学院人文社会科学研究科 [Graduate School of Humanities and Social Sciences] 社会科学専攻 [Field of Social Sciences] 計	年	人	年次人	人	修士(学術) [Master of Arts]	令和3年4月第1年次	茨城県水戸市文京2丁目1番1号	
		2	14	—	28				
同一設置者内における変更状況(定員の移行, 名称の変更等)	<p>大学院教育学研究科 障害児教育専攻(廃止) (△3) ※令和3年4月学生募集停止 教科教育専攻(廃止) (△22) ※令和3年4月学生募集停止 養護教育専攻(廃止) (△3) ※令和3年4月学生募集停止 学校臨床心理専攻(廃止) (△9) ※令和3年4月学生募集停止</p> <p>大学院人文社会科学研究科 文化科学専攻(廃止) (△13) ※令和3年4月学生募集停止 社会科学専攻(廃止) (△12) ※令和3年4月学生募集停止</p>								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	人文社会科学研究科 社会科学専攻	講義	演習	実験・実習	計	30単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	人
	新設	人文社会科学研究科 人文科学専攻	人	人	人	人	人	人	人
			23 (23)	9 (9)	3 (3)	0 (0)	35 (35)	0 (0)	91 (91)
設	人文社会科学研究科 社会科学専攻	22 (22)	15 (15)	8 (8)	1 (1)	46 (46)	0 (0)	78 (78)	
分	教育学研究科 教育実践高度化専攻	16 (16)	8 (8)	0 (0)	2 (2)	26 (26)	0 (0)	70 (70)	
	計	61 (61)	32 (32)	11 (11)	3 (3)	107 (107)	0 (0)	— (—)	
									令和2年4月届出済み

教 員 組 織 の 概 要	既 設 分	理工学研究科 博士前期課程 量子線科学専攻	38 (38)	15 (15)	4 (4)	4 (4)	61 (61)	0 (0)	47 (47)	
		理工学研究科 博士前期課程 理学専攻	16 (20)	21 (21)	0 (0)	3 (3)	40 (44)	0 (0)	10 (10)	
		理工学研究科 博士前期課程 機械システム工学専攻	17 (17)	14 (14)	7 (7)	4 (4)	42 (42)	0 (0)	4 (4)	
		理工学研究科 博士前期課程 電気電子システム工学専攻	11 (11)	12 (12)	2 (2)	3 (3)	28 (28)	0 (0)	3 (3)	
		理工学研究科 博士前期課程 情報工学専攻	5 (5)	4 (4)	5 (5)	2 (2)	16 (16)	0 (0)	3 (3)	
		理工学研究科 博士前期課程 都市システム工学専攻	6 (6)	7 (7)	1 (1)	2 (2)	16 (16)	0 (0)	1 (1)	
		理工学研究科 博士後期課程 量子線科学専攻	38 (38)	14 (14)	1 (1)	0 (0)	53 (53)	0 (0)	10 (10)	
		理工学研究科 博士後期課程 複雑系システム科学専攻	37 (41)	32 (32)	1 (1)	1 (1)	71 (74)	0 (0)	5 (5)	
		理工学研究科 博士後期課程 社会インフラシステム科学専攻	18 (18)	19 (19)	3 (3)	1 (1)	41 (41)	0 (0)	2 (2)	
		農学研究科 農学専攻	33 (33)	18 (18)	1 (1)	6 (6)	58 (58)	0 (0)	42 (42)	
		全学教育機構	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	16 (16)	
		計	219 (227)	156 (156)	25 (25)	26 (26)	426 (433)	0 (0)	— (—)	
		合計	280 (273)	188 (180)	36 (36)	29 (27)	533 (515)	0 (0)	— (—)	
		教員以外の 職員の概要	職 種	専 任	兼 任	計				
事 務 職 員	235 (235)		人	204 (204)	人	439 (439)	人			
技 術 職 員	47 (47)			12 (12)		59 (59)				
図 書 館 専 門 職 員	7 (7)			0 (0)		7 (7)				
そ の 他 の 職 員	3 (3)			8 (8)		11 (11)				
計	292 (292)			224 (224)		516 (516)				
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	312,031㎡	0㎡	0㎡	312,031㎡					
	運 動 場 用 地	74,277㎡	0㎡	0㎡	74,277㎡					
	小 計	386,308㎡	0㎡	0㎡	386,308㎡					
	そ の 他	424,505㎡	0㎡	0㎡	424,505㎡					
合 計	810,813㎡	0㎡	0㎡	810,813㎡						
校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計						
	147,455㎡ (147,455㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	147,455㎡ (147,455㎡)						
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設					
	128室	192室	540室	4室 (補助職員0人)	0室 (補助職員0人)	大学全体				
専 任 教 員 研 究 室	新設学部等の名称			室 数						
	人文社会科学研究所			81			室			
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	研究科単位での 特定不能なため、 大学全体の 数		
	人文社会科学研究所	1,009,497 [283,199] (1,009,497 [283,199])	17,414 [5,688] (17,414 [5,688])	2,519 [2,516] (2,519 [2,516])	2,761 (2,761)	0 (0)	0 (0)			
	計	1,009,497 [283,199] (1,009,497 [283,199])	17,414 [5,688] (17,414 [5,688])	2,519 [2,516] (2,519 [2,516])	2,761 (2,761)	0 (0)	0 (0)			
図 書 館	面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数			大学全体		
	11,986㎡		865		952,000					
体 育 館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要					大学全体		
	5,695㎡		武 道 場 武 道 館							

経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	国費による	
		教員1人当り研究費等		-	-	-	-	-	-		-
		共同研究費等		-	-	-	-	-	-		-
		図書購入費	-	-	-	-	-	-	-		-
		設備購入費	-	-	-	-	-	-	-		-
学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次					
	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要		-									
既設大学等の状況											
大学の名称		茨城大学									
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地			
人文社会科学部	-	360	-	1440	-	1.03	平成29	茨城県水戸市文京2-1-1			
現代社会学科	4	130	-	520	学士 (現代社会学)	1.05	平成29				
法律経済学科	4	120	-	480	学士 (社会科学)	1.04	平成29				
人間文化学科	4	110	-	440	学士 (人文科学)	1.03	平成29				
人文学部	-	-	-	-	-	-	昭和42				
人文コミュニケーション学科	4	-	-	-	学士 (人文科学)	-	平成18				
社会科学科	4	-	-	-	学士 (社会科学)	-	昭和50				
教育学部	-	275	-	1100	-	1.04	昭和24				
学校教育教員養成課程	4	240	-	960	学士 (教育学)	1.04	平成8				
養護教諭養成課程	4	35	-	140	学士 (教育学)	1.02	昭和50				
情報文化課程	4	-	-	-	学士 (教養)	-	平成元				
人間環境教育課程	4	-	-	-	学士 (教養)	-	平成11				
理学部	-	205	4	828	-	1.05	昭和42				
理学科	4	205	4	828	学士 (理学)	1.05	平成17				
工学部	-	545	20	2220	-	1.02	昭和24	茨城県日立市中成沢町4-12-1			
機械システム工学科	4	130	6	532	学士 (工学)	1.03	平成30				
機械システム工学科(夜)	4	40	-	160	学士 (工学)	1.01	平成30				
電気電子システム工学科	4	125	5	510	学士 (工学)	1.02	平成30				
物質科学工学科	4	110	3	446	学士 (工学)	1.00	平成30				
情報工学科	4	80	4	328	学士 (工学)	1.02	平成30				
都市システム工学科	4	60	2	244	学士 (工学)	1.09	平成30				
機械工学科	4	-	-	-	学士 (工学)	-	平成2				
生体分子機能工学科	4	-	-	-	学士 (工学)	-	平成17				
マテリアル工学科	4	-	-	-	学士 (工学)	-	平成17				
電気電子工学科	4	-	-	-	学士 (工学)	-	平成2				
メディア通信工学科	4	-	-	-	学士 (工学)	-	平成8				

既設大学等の状況	知能システム工学科	4	-	-	-	学士 (工学)	-	平成17	茨城県日立市中成沢町4-12-1
	知能システム工学科(B)	4	-	-	-	学士 (工学)	-	平成17	
	農学部	-	160	10	660	学士 (農学)	1.04	昭和27	茨城県稲敷郡阿見町中央3-21-1
	食生命科学科	4	80	5	330	学士 (農学)	1.03	平成29	
	地域総合農学科	4	80	5	330	学士 (農学)	1.06	平成29	
	生物生産科学科	4	-	-	-	学士 (農学)	-	平成12	
	資源生物科学科	4	-	-	-	学士 (農学)	-	昭和62	
	地域環境科学科	4	-	-	-	学士 (農学)	-	平成12	
	大学全体(学部)	-	1545	34	6248	-	1.04	-	-
	人文社会科学研究科	-	25	-	50	-	0.98	平成29	茨城県水戸市文京2-1-1
	文化科学専攻	2	13	-	26	修士 (学術)	0.80	平成21	
	社会科学専攻	2	12	-	22	修士 (学術)	1.16	平成26	
	地域政策専攻	2	-	-	-	修士 (学術)	-	平成6	
	教育学研究科	-	52	-	104	-	0.99	昭和63	茨城県水戸市文京2-1-1
	障害児教育専攻	2	3	-	6	修士 (教育学)	1.16	昭和63	
	教科教育専攻	2	22	-	44	修士 (教育学)	0.86	昭和63	
	養護教育専攻	2	3	-	6	修士 (教育学)	1.33	平成9	
	学校臨床心理専攻	2	9	-	18	修士 (教育学)	1.11	平成13	
	教育実践高度化専攻	2	15	-	30	教職修士 (専門職)	1.03	平成28	
	理工学研究科	-	348	-	696	-	1.14	-	茨城県水戸市文京2-1-1 茨城県日立市中成沢町4-12-1
	(博士前期課程)	-	-	-	-	-	-	-	
	量子線科学専攻	2	102	-	204	修士(理学) 修士(工学)	0.97	平成28	
	理学専攻	2	45	-	90	修士 (理学)	1.13	平成21	
	機械システム工学専攻	2	86	-	172	修士 (工学)	1.35	平成30	
	電気電子システム工学専攻	2	58	-	116	修士 (工学)	1.09	平成30	
	情報工学専攻	2	30	-	60	修士 (工学)	1.26	平成30	
	都市システム工学専攻	2	27	-	54	修士 (工学)	1.18	平成30	
機械工学専攻	2	-	-	-	修士 (工学)	-	平成7		
電気電子工学専攻	2	-	-	-	修士 (工学)	-	平成7		
メディア通信工学専攻	2	-	-	-	修士 (工学)	-	平成12		
知能システム工学専攻	2	-	-	-	修士 (工学)	-	平成21		
応用粒子線科学専攻	2	-	-	-	修士 (工学)	-	平成16		

既設大学等の状況	農学研究科	-	48	-	96	修士(農学)	0.84	昭和45	茨城県稲敷郡阿見町中央3-21-1
	農学専攻	2	48	-	96	修士(農学)	0.84	平成29	
	生物生産科学専攻	2	-	-	-	修士(農学)	-	平成16	
	資源生物科学専攻	2	-	-	-	修士(農学)	-	平成3	
	地域環境科学専攻	2	-	-	-	修士(農学)	-	平成16	
	大学全体(大学院)	-	473	-	946	-	1.09	-	-
	理工学研究科	-	38	-	114	-	0.65	平成7	茨城県水戸市文京2-1-1 茨城県日立市中成沢町4-12-1
	(博士後期課程)	-	-	-	-	-	-	-	
	量子線科学専攻	3	20	-	60	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	0.56	平成28	
	複雑系システム科学専攻	3	10	-	30	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	0.83	平成28	
	社会インフラシステム科学専攻	3	8	-	24	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	0.66	平成28	
	物質科学専攻	3	-	-	-	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	-	平成7	
	生産科学専攻	3	-	-	-	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	-	平成7	
	情報・システム科学専攻	3	-	-	-	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	-	平成7	
宇宙地球システム科学専攻	3	-	-	-	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	-	平成7		
環境機能科学専攻	3	-	-	-	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	-	平成8		
応用粒子線科学専攻	3	-	-	-	博士(理学) 博士(工学) 博士(学術)	-	平成16		
大学全体(大学院(博士))	-	38	-	114	-	0.65	-	-	
附属施設の概要	<p>名称：茨城大学教育学部附属幼稚園 目的：茨城大学教育学部附属幼稚園として、大学の研究と学生の教育研究の場として、大学と共同研究を行い、それを実証し、その結果をもって地域の幼児教育の向上に寄与する。 所在地：茨城県水戸市三の丸2丁目6番8号 設置年月：昭和42年6月 規模等：-</p> <p>名称：茨城大学教育学部附属小学校 目的：茨城大学教育学部附属小学校として、教育学部の研究計画に基づき、各附属学校園との連携を密にし、教育実践場面における実証的な研究を行うとともに、教育実習生を受け入れ、教員にとって必要な理論及び実践を学ばせるための実習を行わせる。 所在地：茨城県水戸市三の丸2丁目6番8号 設置年月：昭和33年4月 規模等：土地38,290㎡ 建物7,334㎡ (附属小学校・附属幼稚園の合算)</p>								

<p>附属施設の概要</p>	<p>名称：茨城大学教育学部附属中学校 目的： ①茨城大学の教員、学部学生及び大学院生による幼児教育、普通初等中等教育及び知的障害教育の理論的、実践的研究への協力 ②教育学部の方針に基づく、本学学部学生の教育実習や授業研究等、教員養成に必要な実地教育の実施、学部及び大学院における教職に関する教育に寄与 ③茨城県内外の教育機関に対する広く研究成果を還元、県及び県内自治体との人事交流協定に基づく教員の研修、地域の教育力向上への寄与 所在地：茨城県水戸市文京1-3-32 設置年月：昭和33年4月 規模等：土地34,787㎡ 建物7,428㎡</p>
	<p>名称：茨城大学教育学部附属特別支援学校 目的： ①児童生徒の可能性を最大限に引き出すための教育内容・方法に関する、大学及び附属学校園との連携の下、理論と実践についての研究・実証 ②教育実践及び研究をとおした、地域の特別支援教育の推進 ③本学学生の教育実習の実施 所在地：茨城県ひたちなか市津田1955 設置年月：昭和52年4月 規模等：土地19,579㎡ 建物3,640㎡</p>
	<p>名称：図書館 目的：教育研究に必要な図書館資料並びに学術情報を収集、整理及び保管 所在地：（本館）茨城県水戸市文京2丁目1番1号 （工学部分館）茨城県日立市中成沢町4丁目12番1号 （農学部分館）茨城県稲敷郡阿見町中央3丁目21番1号 設置年月：（本館・工学部分館）昭和24年5月 （農学部分館）昭和27年4月 規模等：建物（本館）8,775㎡ （工学部分館）2,154㎡ （農学部分館）1,063㎡</p>
	<p>名称：全学教育機構 目的：全学的な教育・学生支援活動に関する企画、調整、運営、実施、評価等の総括 所在地：茨城県水戸市文京2丁目1番1号 設置年月：平成28年4月 規模等：建物 9,417㎡</p>
	<p>名称：研究・産学官連携機構 目的：研究推進方針に基づく研究力向上、研究機能と産学官連携機能の融合的な発展 所在地：茨城県日立市中成沢町4丁目12番1号 設置年月：平成30年1月 規模等：建物 2,651㎡</p>
	<p>名称：アドミッション・センター 目的：入学者選抜の適正な実施、入学者選抜方法の改善及び高大接続改革の推進 所在地：茨城県水戸市文京2丁目1番1号 設置年月：平成28年5月 規模等：－</p>
	<p>名称：茨城大学保健管理センター 目的：学生の健康管理の拠点 所在地：茨城県水戸市文京2丁目1番1号 設置年月：昭和48年4月 規模等：建物470㎡</p>
	<p>名称：全学教職センター 目的：教員養成教育の質の向上、多様な教育ニーズに的確に対応した教職人材の育成 所在地：茨城県水戸市文京2丁目1番1号 設置年月：平成28年4月 規模等：－</p>
	<p>名称：茨城大学IT基盤センター 目的：学術教育及び情報処理教育、キャンパス情報ネットワーク及び共有基盤データベース等の管理・運用 所在地：茨城県日立市中成沢町4丁目12番1号 設置年月：平成17年7月 規模等：－</p>

附属施設の概要	<p>名称：茨城大学機器分析センター 目的：各種分析機器の共同利用機関 所在地：茨城県水戸市文京2丁目1番1号 設置年月：平成3年4月 規模等：建物1,013㎡</p>
	<p>名称：茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター 目的：河川・湖沼環境保全等地域環境に関する研究 所在地：茨城県潮来市大生1375 設置年月：平成9年4月 規模等：土地9,960㎡ 建物744㎡</p>
	<p>名称：茨城大学遺伝子実験施設 目的：遺伝子に関する教育研究 所在地：茨城県阿見町中央3丁目21番1号 設置年月：平成11年4月 規模等：建物1,824㎡</p>
	<p>名称：茨城大学地球変動適応科学研究機関 目的：気候変動への適応のための工学・応用開発、農業開発等を行う教育研究機関 所在地：茨城県水戸市文京2丁目1番1号 設置年月：平成18年5月 規模等：建物510㎡</p>
	<p>名称：茨城大学フロンティア科学教育研究センター 目的：中性子応用科学及び応用原子科学等の研究拠点 所在地：茨城県那珂郡東海村白方162番1号 設置年月：平成20年4月 規模等：建物：1,270㎡</p>
	<p>名称：茨城大学五浦美術文化研究所 目的：岡倉天心の人文諸科学の研究及び天心の遺蹟・遺品の維持保存、地域の文化と教育の向上に寄与すること 所在地：茨城県北茨城市大津町五浦727番2号 設置年月：昭和30年6月 規模等：土地3144㎡ 建物339㎡</p>
	<p>名称：茨城大学社会連携センター 目的：地域社会への貢献及び大学の教育力と研究力の充実を図る 所在地：茨城県水戸市文京2丁目1番1号 設置年月：平成26年4月 規模等：建物764㎡</p>
<p>名称：茨城大学理学部附属宇宙科学教育研究センター 目的：電波望遠鏡システムによる先端的な宇宙の研究と教育 所在地：茨城県高萩市石滝上台字627番1号 設置年月：平成21年5月 規模等：土地(借地) 370㎡ 建物392㎡</p>	
<p>名称：茨城大学農学部附属国際フィールド農学センター 目的：フィールド科学に関する教育及び研究 所在地：茨城県稲敷郡阿見町阿見4668番1号 設置年月：平成18年10月 規模等：土地220,963㎡ 建物：3,857㎡</p>	

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

国立大学法人茨城大学 設置認可等に係わる組織の移行表

令和2年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
茨城大学				茨城大学				
人文社会科学部				人文社会科学部				
現代社会学科	130	-	520	現代社会学科	130	-	520	
法律経済学科	120	-	480	法律経済学科	120	-	480	
人間文化学科	110	-	440	人間文化学科	110	-	440	
教育学部				教育学部				
学校教育教員養成課程	240	-	960	学校教育教員養成課程	240	-	960	
養護教諭養成課程	35	-	140	養護教諭養成課程	35	-	140	
理学部		3年次		理学部		3年次		
理学科	205	4	828	理学科	205	4	828	
工学部		3年次		工学部		3年次		
機械システム工学科(昼間コース)	130	6	532	機械システム工学科(昼間コース)	130	6	532	
機械システム工学科(夜間主コース)	40	-	160	機械システム工学科(夜間主コース)	40	-	160	
電気電子システム工学科	125	5	510	電気電子システム工学科	125	5	510	
物質科学工学科	110	3	446	物質科学工学科	110	3	446	
情報工学科	80	4	328	情報工学科	80	4	328	
都市システム工学科	60	2	244	都市システム工学科	60	2	244	
農学部		3年次		農学部		3年次		
食生命科学科	80	5	330	食生命科学科	80	5	330	
地域総合農学科	80	5	330	地域総合農学科	80	5	330	
計	1,545	34	6,248	計	1,545	34	6,248	
茨城大学大学院				茨城大学大学院				
人文社会科学研究科				人文社会科学研究科				
文化科学専攻(M)	13	-	26	人文科学専攻(M)	17	-	34	研究科の専攻の設置(事前伺い)
社会科学専攻(M)	12	-	24	社会科学専攻(M)	14	-	28	研究科の専攻の設置(事前伺い)
教育学研究科				教育学研究科				
障害児教育専攻(M)	3	-	6		0	-	0	令和3年4月学生募集停止
教科教育専攻(M)	22	-	44		0	-	0	令和3年4月学生募集停止
養護教育専攻(M)	3	-	6		0	-	0	令和3年4月学生募集停止
学校臨床心理専攻(M)	9	-	18		0	-	0	令和3年4月学生募集停止
教育実践高度化専攻(P)	15	-	30	教育実践高度化専攻(P)	43	-	86	研究科の専攻(専門職大学院)の設置(事前伺い)
理工学研究科				理工学研究科				
量子線科学専攻(M)	102	-	204	量子線科学専攻(M)	102	-	204	
理学専攻(M)	45	-	90	理学専攻(M)	45	-	90	
機械システム工学専攻(M)	86	-	172	機械システム工学専攻(M)	86	-	172	
電気電子システム工学専攻(M)	58	-	116	電気電子システム工学専攻(M)	58	-	116	
情報工学専攻(M)	30	-	60	情報工学専攻(M)	30	-	60	
都市システム工学専攻(M)	27	-	54	都市システム工学専攻(M)	27	-	54	
量子線科学専攻(D)	20	-	60	量子線科学専攻(D)	20	-	60	
複雑系システム科学専攻(D)	10	-	30	複雑系システム科学専攻(D)	10	-	30	
社会インフラシステム科学専攻(D)	8	-	24	社会インフラシステム科学専攻(D)	8	-	24	
農学研究科				農学研究科				
農学専攻(M)	48	-	96	農学専攻(M)	48	-	96	
計	511	-	1,060	計	508	-	1,054	

教育課程等の概要																
(人文社会科学研究科社会科学専攻)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通科目	大学院共通科目	アカデミックプレゼンテーション	1前	1			○								兼1	
		アカデミックディスカッション	1前	1			○								兼1	
		国際コミュニケーション基礎A	1前	1			○								兼1	
		国際コミュニケーション基礎B	1前	1			○								兼1	
		実践国際コミュニケーションA	1前	1			○								兼1	
		実践国際コミュニケーションB	1前	1			○								兼1	
		科学と倫理	1前	2			○								兼1	集中
		学術情報リテラシー	1前	1			○								兼1	集中
		環境情報センシング特論	1後	1			○								兼1	
		原子科学と倫理	1前	1			○								兼7	集中・オムニバス
		知的所有権特論	1後	1			○								兼1	集中
		バイオテクノロジーと社会	1前	1			○								兼3	集中・オムニバス
		持続社会システム論Ⅰ	1前	1			○			1					兼1	オムニバス
		持続社会システム論Ⅱ	1後	1			○								兼5	オムニバス
		地域サステナビリティ農学概論	1後	1			○								兼2	集中・オムニバス
		地球環境システム論Ⅰ	1前	1			○								兼2	オムニバス
		地球環境システム論Ⅱ	1後	1			○								兼2	オムニバス
		人間システム基礎論Ⅰ	1後	1			○			1	4					オムニバス・共同(一部)
		人間システム基礎論Ⅱ	1前	1			○								兼2	オムニバス・共同(一部)
		Science of Food ~Function, Processing, Safety~食品の科学~機能、加工、安全~	1後	1			○								兼8	集中・オムニバス
小計(20科目)		—	0	21	0			—	2	4	0	0	0	兼39	—	
研究科共通科目		テクノロジーと人間社会Ⅰ	1前	1			○			5						オムニバス
		テクノロジーと人間社会Ⅱ	1後	1			○		1							
		専門基礎科目	1前	1				○		22	15	2				
		持続可能なコミュニティ・デザイン論	1・2前	1			○		1							
		小計(4科目)		—	1	3	0		—	22	15	2	0	0	0	—
キャリア支援科目		英語講読Ⅰ	1・2前	2				○		1						隔年
		英語講読Ⅱ	1・2後	2				○		1						隔年
		英文修辞法Ⅰ	1・2前	2					○			1				隔年
		英文修辞法Ⅱ	1・2後	2					○							隔年
		英語音声表現演習Ⅰ	1・2前	2					○							隔年
		英語音声表現演習Ⅱ	1・2後	2					○				1			隔年
		日本語表現法	1・2前			2		○							兼2	共同
		インターンシップ	1・2通	2						1						集中
		実践的キャリアデザイン論	1・2前	2					○						兼1	
		高度情報処理	1・2前	2					○				1			
小計(10科目)		—	0	18	2		—	3	0	1	1	0	兼3			
専攻科目	コア専門科目(メディア・情報社会コース)	現代ジャーナリズム研究	1・2前	2				○		1						
		マスコミ研究	1・2前	2				○		1						
		ポピュラー文化研究	1・2後	2				○			1					
		映像メディア研究	1・2前	2				○		1						
		メディア文化研究	1・2前	2				○		1						
		メディア教育論研究	1・2前	2				○		1						
		電子メディア論研究	1・2後	2				○		1						
		近代日本メディア史研究	1・2後	2				○		1						
		映像広告論研究	1・2前	2				○		1						
		学習デザイン論研究	1・2前	2				○		1						
		情報デザイン研究	1・2後	2				○		1						
コミュニケーションデータ分析研究	1・2後	2				○		1								
コミュニケーション社会学研究	1・2前	2				○		1								

専攻科目	コア専門科目 (経済学・経営学コース)	理論経済学研究Ⅰ	1・2前	2	○			1								
		理論経済学研究Ⅱ	1・2後	2	○		1									
		経済統計研究Ⅰ	1・2前	2	○		1									
		経済統計研究Ⅱ	1・2後	2	○		1									
		経済政策研究Ⅰ	1・2前	2	○		1									
		経済政策研究Ⅱ	1・2後	2	○		1									
		財政学研究Ⅰ	1・2前	2	○				1							
		財政学研究Ⅱ	1・2後	2	○				1							
		金融論研究Ⅰ	1・2前	2	○		1									
		金融論研究Ⅱ	1・2後	2	○		1									
		労働経済論研究Ⅰ	1・2前	2	○		1									
		労働経済論研究Ⅱ	1・2後	2	○		1									
		経営管理論研究Ⅰ	1・2前	2	○					1						
		経営管理論研究Ⅱ	1・2後	2	○					1						
		マーケティング論研究Ⅰ	1・2前	2	○		1									
		マーケティング論研究Ⅱ	1・2後	2	○		1									
		管理会計論研究Ⅰ	1・2前	2	○						1					
		管理会計論研究Ⅱ	1・2後	2	○						1					
		監査論研究Ⅰ	1・2前	2	○		1									
		監査論研究Ⅱ	1・2後	2	○		1									
		経営戦略論研究Ⅰ	1・2前	2	○							1				
		経営戦略論研究Ⅱ	1・2後	2	○							1				
アジア経済論研究Ⅰ	1・2前	2	○				1									
アジア経済論研究Ⅱ	1・2後	2	○				1									
日本経済史研究Ⅰ	1・2後	2	○				1									
日本経済史研究Ⅱ	1・2前	2	○				1									
コア専門科目 (地域政策研究(社会人コース))	特定テーマ演習	1・2前	2		○		1									
	地域資源活用研究法	1・2前	2		○		1									
	地域連携創生研究演習	1通	4		○		1								集中	
小計(100科目)		—	0	202	0	—	22	15	8	0	0	兼1	—			
拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	多文化コミュニケーション論研究	1・2後	2		○									兼1		
	多文化関係学研究	1・2前	2		○									兼1		
	グローバル化と地域開発研究	1・2後	2		○									兼1		
	持続可能な開発とSDGs研究	1・2前	2		○									兼1		
	社会行動論研究Ⅰ	1・2後	2		○									兼1	隔年	
	社会行動論研究Ⅱ	1・2前	2		○									兼1	隔年	
	社会行動論演習Ⅰ	1・2前	2			○								兼1	隔年	
	社会行動論演習Ⅱ	1・2後	2			○								兼1	隔年	
	スポーツ社会研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1		
	スポーツ社会研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1		
	国際政治学研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1		
	国際政治学研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1		
	地方政治論研究Ⅰ	1・2後	2		○									兼1		
	地方政治論研究Ⅱ	1・2前	2		○									兼1		
	社会地理学研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1		
	社会地理学研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1		
	経済地理学研究Ⅰ	1・2後	2		○									兼1		
	経済地理学研究Ⅱ	1・2前	2		○									兼1		
	地域社会論研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1		
	地域社会論研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1		
	環境社会学研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1		
環境社会学研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1			
社会事業史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1			
社会事業史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1			
社会調査法研究	1・2前	2		○									兼1			
社会意識論研究	1・2後	2		○									兼1			
地誌学研究Ⅰ	1・2後	2		○									兼1			
地誌学研究Ⅱ	1・2前	2		○									兼1			

専攻科目	拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	実践哲学研究Ⅰ	1・2後	2	○								兼1	隔年
		実践哲学研究Ⅱ	1・2前	2	○								兼1	隔年
		実践哲学演習Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		実践哲学演習Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		日本古典・近代語研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		日本古典・近代語研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		日本古典・近代語演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年
		日本古典・近代語演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年
		日本古典文学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		日本古典文学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		日本古典文学演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年
		日本古典文学演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年
		日本近代文学研究Ⅰ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		日本近代文学研究Ⅱ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		日本近代文学演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年
		日本近代文学演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年
		中国思想史研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		中国思想史研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		中国思想史演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年
		中国思想史演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年
		中国近現代文学研究Ⅰ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		中国近現代文学研究Ⅱ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		中国近現代文学演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年
		中国近現代文学演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年
		フランス文学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		フランス文学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		フランス文学演習Ⅰ	1・2後	2			○						兼1	隔年
		フランス文学演習Ⅱ	1・2前	2			○						兼1	隔年
		美術史学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		美術史学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		フランス美術史研究Ⅰ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		フランス美術史研究Ⅱ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		英語学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		英語学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		英語学演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年
		英語学演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年
		イギリス文学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年
		イギリス文学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年
		イギリス文学演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年
		イギリス文学演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年
アメリカ文学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年		
アメリカ文学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年		
アメリカ文学演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年		
アメリカ文学演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年		
応用言語学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年		
応用言語学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年		
応用言語学演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年		
応用言語学演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年		
言語文法論研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年		
言語文法論研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年		
言語文法論演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年		
言語文法論演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年		
社会言語学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年		
社会言語学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年		
社会言語学演習Ⅰ	1・2前	2			○						兼1	隔年		
社会言語学演習Ⅱ	1・2後	2			○						兼1	隔年		
考古学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年		
考古学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年		
日本考古学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年		
日本考古学研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年		
中国考古文化研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年		
中国考古文化研究Ⅱ	1・2後	2		○							兼1	隔年		
中国考古学研究Ⅰ	1・2前	2		○							兼1	隔年		

専攻科目	拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	中国考古学研究Ⅱ	1・2後	2	○									兼1	隔年	
		日本文化史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		日本文化史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		日本古代中世史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		日本古代中世史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		日本政治史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		日本政治史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		日本近世史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		日本近世史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		日本社会史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		日本社会史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		日本近現代史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		日本近現代史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		ヨーロッパ政治史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		ヨーロッパ政治史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		ヨーロッパ歴史文化研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		ヨーロッパ歴史文化研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		ヨーロッパ近現代史研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		ヨーロッパ近現代史研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		行動機構論研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		行動機構論研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		行動機構論演習Ⅰ	1・2後	2			○								兼1	隔年
		行動機構論演習Ⅱ	1・2前	2			○								兼1	隔年
		認知行動論研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		認知行動論研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		認知行動論演習Ⅰ	1・2後	2			○								兼1	隔年
		認知行動論演習Ⅱ	1・2前	2			○								兼1	隔年
		家族心理論研究	1・2後	2			○								兼1	
		行動文化論研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年
		行動文化論研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年
		行動文化論演習Ⅰ	1・2後	2			○								兼1	隔年
行動文化論演習Ⅱ	1・2前	2			○								兼1	隔年		
生涯発達論研究Ⅰ	1・2後	2	○										兼1	隔年		
生涯発達論研究Ⅱ	1・2前	2	○										兼1	隔年		
生涯発達論演習Ⅰ	1・2前	2			○								兼1	隔年		
生涯発達論演習Ⅱ	1・2後	2			○								兼1	隔年		
文化人類学研究Ⅰ	1・2後	2	○										兼1	隔年		
文化人類学研究Ⅱ	1・2前	2	○										兼1	隔年		
文化人類学演習Ⅰ	1・2前	2			○								兼1	隔年		
文化人類学演習Ⅱ	1・2後	2			○								兼1	隔年		
比較文化論研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1	隔年		
比較文化論研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年		
比較文化論演習Ⅰ	1・2後	2			○								兼1	隔年		
比較文化論演習Ⅱ	1・2前	2			○								兼1	隔年		
福祉分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2	○										兼1			
教育分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2	○										兼1			
司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	1・2後	2	○										兼1	集中		
産業・労働分野に関する理論と支援の展開	1・2後	2	○										兼1			
心理的アセスメントに関する理論と実践	1・2前	2	○										兼2	オムニバス		

専攻科目	拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	心理支援に関する理論と実践A	1・2前	2	○									兼1		
		心理支援に関する理論と実践B	1・2後		2	○									兼2	オムニバス
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	1・2後	2		○									兼1	
		心の健康教育に関する理論と実践	1・2前	2		○									兼4	オムニバス
		保健医療分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2		○									兼1	
		投映法特論	1・2後		2	○									兼1	集中
		箱庭療法特論	1・2前		2	○									兼1	集中
		現代ジャーナリズム研究	1・2前	2		○									兼1	
		マスコミ研究	1・2前	2		○									兼1	
		ポピュラー文化研究	1・2後	2		○									兼1	
拡充専門科目 (国際・地域共創コース)	映像メディア研究	1・2前	2		○									兼1		
	メディア文化研究	1・2前	2		○									兼1		
	メディア教育論研究	1・2前	2		○									兼1		
	電子メディア論研究	1・2後	2		○									兼1		
	近代日本メディア史研究	1・2後	2		○									兼1		
	映像広告論研究	1・2前	2		○									兼1		
	学習デザイン論研究	1・2前	2		○									兼1		
	情報デザイン研究	1・2後	2		○									兼1		
	コミュニケーションデータ分析研究	1・2後	2		○									兼1		
	コミュニケーション社会学研究	1・2前	2		○									兼1		
	憲法研究 I	1・2後	2		○									兼1		
	憲法研究 II	1・2前	2		○									兼1		
	民法研究 A I	1・2前	2		○									兼1		
	民法研究 A II	1・2後	2		○									兼1		
	民法研究 B I	1・2前	2		○									兼1		
	民法研究 B II	1・2後	2		○									兼1		
	刑法研究 I	1・2前	2		○									兼1		
	刑法研究 II	1・2後	2		○									兼1		
	商法・経済法研究 I	1・2前	2		○									兼1		
	商法・経済法研究 II	1・2後	2		○									兼1		
	労働法研究 I	1・2前	2		○									兼1		
	労働法研究 II	1・2後	2		○									兼1		
	社会保障法研究 I	1・2後	2		○									兼1		
	社会保障法研究 II	1・2前	2		○									兼1		
	行政法研究 I	1・2後	2		○									兼1		
	行政法研究 II	1・2前	2		○									兼1		
	比較法研究 I	1・2後	2		○									兼1		
	比較法研究 II	1・2前	2		○									兼1		
	国際法研究 I	1・2前	2		○									兼1		
	国際法研究 II	1・2後	2		○									兼1		
	行政学研究 I	1・2前	2		○									兼1		
	行政学研究 II	1・2後	2		○									兼1		
	公共政策論研究 I	1・2前	2		○									兼1		
	公共政策論研究 II	1・2後	2		○									兼1		
	公共哲学研究 I	1・2後	2		○									兼1		
	公共哲学研究 II	1・2前	2		○									兼1		
	理論経済学研究 I	1・2前	2		○									兼1		
	理論経済学研究 II	1・2後	2		○									兼1		
	経済統計研究 I	1・2前	2		○									兼1		
	経済統計研究 II	1・2後	2		○									兼1		
経済政策研究 I	1・2前	2		○									兼1			
経済政策研究 II	1・2後	2		○									兼1			
財政学研究 I	1・2前	2		○									兼1			
財政学研究 II	1・2後	2		○									兼1			
金融論研究 I	1・2前	2		○									兼1			
金融論研究 II	1・2後	2		○									兼1			
労働経済論研究 I	1・2前	2		○									兼1			
労働経済論研究 II	1・2後	2		○									兼1			
経営管理論研究 I	1・2前	2		○									兼1			
経営管理論研究 II	1・2後	2		○									兼1			
マーケティング論研究 I	1・2前	2		○									兼1			
マーケティング論研究 II	1・2後	2		○									兼1			
管理会計論研究 I	1・2前	2		○									兼1			

専攻科目	拡充専門科目 (国際・地域共創コース)	応用言語学演習Ⅱ	1・2後	2			○							兼1	隔年	
		言語文法論研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		言語文法論研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		言語文法論演習Ⅰ	1・2前	2			○								兼1	隔年
		言語文法論演習Ⅱ	1・2後	2			○								兼1	隔年
		社会言語学研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		社会言語学研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		社会言語学演習Ⅰ	1・2前	2			○								兼1	隔年
		社会言語学演習Ⅱ	1・2後	2			○								兼1	隔年
		考古学研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		考古学研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		日本考古学研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		日本考古学研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		中国考古文化研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		中国考古文化研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		中国考古学研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		中国考古学研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		日本文化史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		日本文化史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		日本古代中世史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		日本古代中世史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		日本政治史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		日本政治史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		日本近世史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		日本近世史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		日本社会史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		日本社会史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		日本近現代史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		日本近現代史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
		ヨーロッパ政治史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年
		ヨーロッパ政治史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年
ヨーロッパ歴史文化研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年		
ヨーロッパ歴史文化研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年		
ヨーロッパ近現代史研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年		
ヨーロッパ近現代史研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年		
行動機構論研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年		
行動機構論研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年		
行動機構論演習Ⅰ	1・2後	2				○							兼1	隔年		
行動機構論演習Ⅱ	1・2前	2				○							兼1	隔年		
認知行動論研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年		
認知行動論研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年		
認知行動論演習Ⅰ	1・2後	2				○							兼1	隔年		
認知行動論演習Ⅱ	1・2前	2				○							兼1	隔年		
家族心理論研究	1・2後	2				○							兼1	隔年		
行動文化論研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年		
行動文化論研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年		
行動文化論演習Ⅰ	1・2後	2				○							兼1	隔年		
行動文化論演習Ⅱ	1・2前	2				○							兼1	隔年		
生涯発達論研究Ⅰ	1・2後	2		○									兼1	隔年		
生涯発達論研究Ⅱ	1・2前	2		○									兼1	隔年		
生涯発達論演習Ⅰ	1・2前	2				○							兼1	隔年		
生涯発達論演習Ⅱ	1・2後	2				○							兼1	隔年		
文化人類学研究Ⅰ	1・2後	2		○									兼1	隔年		

専攻科目	拡充専門科目 (国際・地域共創コース)	文化人類学研究Ⅱ	1・2前	2	○									兼1	隔年
		文化人類学演習Ⅰ	1・2前	2		○								兼1	隔年
		文化人類学演習Ⅱ	1・2後	2		○								兼1	隔年
		比較文化論研究Ⅰ	1・2前	2	○									兼1	隔年
		比較文化論研究Ⅱ	1・2後	2	○									兼1	隔年
		比較文化論演習Ⅰ	1・2後	2		○								兼1	隔年
		比較文化論演習Ⅱ	1・2前	2		○								兼1	隔年
		福祉分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2	○									兼1	
		教育分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2	○									兼1	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	1・2後	2	○									兼1	集中
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	1・2後	2	○									兼1	
		心理的アセスメントに関する理論と実践	1・2前	2	○									兼2	オムニバス
		心理支援に関する理論と実践A	1・2前	2	○									兼1	
		心理支援に関する理論と実践B	1・2後	2	○	2								兼2	オムニバス
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	1・2後	2	○									兼1	
		心の健康教育に関する理論と実践	1・2前	2	○									兼4	オムニバス
		保健医療分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2	○									兼1	
		投映法特論	1・2後	2	○	2								兼1	集中
		箱庭療法特論	1・2前	2	○	2								兼1	集中
		拡充専門科目 (法学・行政学コース)	現代ジャーナリズム研究	1・2前	2	○									
マスコミ研究	1・2前		2	○										兼1	
ポピュラー文化研究	1・2後		2	○										兼1	
映像メディア研究	1・2前		2	○										兼1	
メディア文化研究	1・2前		2	○										兼1	
メディア教育論研究	1・2前		2	○										兼1	
電子メディア論研究	1・2後		2	○										兼1	
近代日本メディア史研究	1・2後		2	○										兼1	
映像広告論研究	1・2前		2	○										兼1	
学習デザイン論研究	1・2前		2	○										兼1	
情報デザイン研究	1・2後		2	○										兼1	
コミュニケーションデータ分析研究	1・2後		2	○										兼1	
コミュニケーション社会学研究	1・2前		2	○										兼1	
多文化コミュニケーション論研究	1・2後		2	○										兼1	
多文化関係学研究	1・2前		2	○										兼1	
グローバル化と地域開発研究	1・2後		2	○										兼1	
持続可能な開発とSDGs研究	1・2前		2	○										兼1	
社会行動論研究Ⅰ	1・2後		2	○										兼1	隔年
社会行動論研究Ⅱ	1・2前		2	○										兼1	隔年
社会行動論演習Ⅰ	1・2前		2			○								兼1	隔年
社会行動論演習Ⅱ	1・2後		2			○								兼1	隔年
スポーツ社会研究Ⅰ	1・2前		2	○										兼1	
スポーツ社会研究Ⅱ	1・2後		2	○										兼1	
国際政治学研究Ⅰ	1・2前		2	○										兼1	
国際政治学研究Ⅱ	1・2後		2	○										兼1	
地方政治論研究Ⅰ	1・2後		2	○										兼1	
地方政治論研究Ⅱ	1・2前		2	○										兼1	
社会地理学研究Ⅰ	1・2前		2	○										兼1	
社会地理学研究Ⅱ	1・2後		2	○										兼1	
経済地理学研究Ⅰ	1・2後		2	○										兼1	
経済地理学研究Ⅱ	1・2前		2	○										兼1	
地域社会論研究Ⅰ	1・2前		2	○										兼1	
地域社会論研究Ⅱ	1・2後		2	○										兼1	
環境社会学研究Ⅰ	1・2前		2	○										兼1	
環境社会学研究Ⅱ	1・2後		2	○										兼1	
社会事業史研究Ⅰ	1・2前		2	○										兼1	
社会事業史研究Ⅱ	1・2後		2	○										兼1	
社会調査法研究	1・2前		2	○										兼1	
社会意識論研究	1・2後		2	○										兼1	
地誌学研究Ⅰ	1・2後		2	○										兼1	
地誌学研究Ⅱ	1・2前	2	○										兼1		
家族社会学研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1		
家族社会学研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1		
環境政策・経済学研究Ⅰ	1・2前	2	○										兼1		

専攻科目	拡充専門科目 (法学・行政学コース)	行動機構論研究Ⅰ	1・2前	2	○									兼1	隔年		
		行動機構論研究Ⅱ	1・2後	2	○										兼1	隔年	
		行動機構論演習Ⅰ	1・2後	2		○									兼1	隔年	
		行動機構論演習Ⅱ	1・2前	2		○									兼1	隔年	
		認知行動論研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年	
		認知行動論研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年	
		認知行動論演習Ⅰ	1・2後	2			○								兼1	隔年	
		認知行動論演習Ⅱ	1・2前	2			○								兼1	隔年	
		家族心理論研究	1・2後	2			○								兼1		
		行動文化論研究Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	隔年	
		行動文化論研究Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	隔年	
		行動文化論演習Ⅰ	1・2後	2			○								兼1	隔年	
		行動文化論演習Ⅱ	1・2前	2			○								兼1	隔年	
		生涯発達論研究Ⅰ	1・2後	2			○								兼1	隔年	
		生涯発達論研究Ⅱ	1・2前	2			○								兼1	隔年	
		生涯発達論演習Ⅰ	1・2前	2				○							兼1	隔年	
		生涯発達論演習Ⅱ	1・2後	2				○							兼1	隔年	
		文化人類学研究Ⅰ	1・2後	2			○								兼1	隔年	
		文化人類学研究Ⅱ	1・2前	2			○								兼1	隔年	
		文化人類学演習Ⅰ	1・2前	2				○							兼1	隔年	
		文化人類学演習Ⅱ	1・2後	2				○							兼1	隔年	
		比較文化論研究Ⅰ	1・2前	2			○								兼1	隔年	
		比較文化論研究Ⅱ	1・2後	2			○								兼1	隔年	
		比較文化論演習Ⅰ	1・2後	2				○							兼1	隔年	
		比較文化論演習Ⅱ	1・2前	2				○							兼1	隔年	
		福祉分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2			○								兼1		
		教育分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2			○								兼1		
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	1・2後	2			○								兼1	集中	
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	1・2後	2			○								兼1		
		心理的アセスメントに関する理論と実践	1・2前	2			○								兼2	オムニバス	
		心理支援に関する理論と実践A	1・2前	2			○								兼1		
		心理支援に関する理論と実践B	1・2後	2	2		○								兼2	オムニバス	
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	1・2後	2			○								兼1		
		心の健康教育に関する理論と実践	1・2前	2			○								兼4	オムニバス	
		保健医療分野に関する理論と支援の展開	1・2前	2			○								兼1		
		投映法特論	1・2後		2		○								兼1	集中	
		箱庭療法特論	1・2前		2		○								兼1	集中	
		拡充専門科目 (経済学・経営学コース)	現代ジャーナリズム研究	1・2前	2		○									兼1	
			マスコミ研究	1・2前	2		○									兼1	
			ポピュラー文化研究	1・2後	2		○									兼1	
			映像メディア研究	1・2前	2		○									兼1	
メディア文化研究	1・2前		2		○									兼1			
メディア教育論研究	1・2前		2		○									兼1			
電子メディア論研究	1・2後		2		○									兼1			
近代日本メディア史研究	1・2後		2		○									兼1			
映像広告論研究	1・2前		2		○									兼1			
学習デザイン論研究	1・2前		2		○									兼1			
情報デザイン研究	1・2後		2		○									兼1			
コミュニケーションデータ分析研究	1・2後		2		○									兼1			
コミュニケーション社会学研究	1・2前		2		○									兼1			
多文化コミュニケーション論研究	1・2後		2		○									兼1			
多文化関係学研究	1・2前		2		○									兼1			
グローバル化と地域開発研究	1・2後		2		○									兼1			
持続可能な開発とSDGs研究	1・2前		2		○									兼1			
社会行動論研究Ⅰ	1・2後		2		○									兼1	隔年		
社会行動論研究Ⅱ	1・2前		2		○									兼1	隔年		
社会行動論演習Ⅰ	1・2前		2			○								兼1	隔年		
社会行動論演習Ⅱ	1・2後		2			○								兼1	隔年		
スポーツ社会研究Ⅰ	1・2前		2		○									兼1			
スポーツ社会研究Ⅱ	1・2後		2		○									兼1			
国際政治学研究Ⅰ	1・2前		2		○									兼1			
国際政治学研究Ⅱ	1・2後		2		○									兼1			
地方政治論研究Ⅰ	1・2後		2		○									兼1			

専攻科目	拡充専門科目 (経済学・経営学コース)	日本近現代史研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		日本近現代史研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		ヨーロッパ政治史研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		ヨーロッパ政治史研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		ヨーロッパ歴史文化研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		ヨーロッパ歴史文化研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		ヨーロッパ近現代史研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		ヨーロッパ近現代史研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		行動機構論研究Ⅰ	1・2前		2		○			○				兼1	隔年
		行動機構論研究Ⅱ	1・2後		2		○			○				兼1	隔年
		行動機構論演習Ⅰ	1・2後		2					○				兼1	隔年
		行動機構論演習Ⅱ	1・2前		2					○				兼1	隔年
		認知行動論研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		認知行動論研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		認知行動論演習Ⅰ	1・2後		2					○				兼1	隔年
		認知行動論演習Ⅱ	1・2前		2					○				兼1	隔年
		家族心理論研究	1・2後		2					○				兼1	
		行動文化論研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		行動文化論研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		行動文化論演習Ⅰ	1・2後		2					○				兼1	隔年
		行動文化論演習Ⅱ	1・2前		2					○				兼1	隔年
		生涯発達論研究Ⅰ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		生涯発達論研究Ⅱ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		生涯発達論演習Ⅰ	1・2前		2					○				兼1	隔年
		生涯発達論演習Ⅱ	1・2後		2					○				兼1	隔年
		文化人類学研究Ⅰ	1・2後		2		○							兼1	隔年
		文化人類学研究Ⅱ	1・2前		2		○							兼1	隔年
		文化人類学演習Ⅰ	1・2前		2					○				兼1	隔年
		文化人類学演習Ⅱ	1・2後		2					○				兼1	隔年
		比較文化論研究Ⅰ	1・2前		2		○							兼1	隔年
比較文化論研究Ⅱ	1・2後		2		○							兼1	隔年		
比較文化論演習Ⅰ	1・2後		2					○				兼1	隔年		
比較文化論演習Ⅱ	1・2前		2					○				兼1	隔年		
福祉分野に関する理論と支援の展開	1・2前		2		○							兼1			
教育分野に関する理論と支援の展開	1・2前		2		○							兼1			
司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	1・2後		2		○							兼1	集中		
産業・労働分野に関する理論と支援の展開	1・2後		2		○							兼1			
心理的アセスメントに関する理論と実践	1・2前		2		○							兼2	オムニバス		
心理支援に関する理論と実践A	1・2前		2		○							兼1			
心理支援に関する理論と実践B	1・2後		2	2	○							兼2	オムニバス		
家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	1・2後		2		○							兼1			
心の健康教育に関する理論と実践	1・2前		2		○							兼4	オムニバス		
保健医療分野に関する理論と支援の展開	1・2前		2		○							兼1			
投映法特論	1・2後		2	2	○							兼1	集中		
箱庭療法特論	1・2前		2	2	○							兼1	集中		
拡充専門科目 (地域政策研究(社会人コース))	現代ジャーナリズム研究	1・2前		2		○							兼1		
	マスコミ研究	1・2前		2		○							兼1		
	ポピュラー文化研究	1・2後		2		○							兼1		
	映像メディア研究	1・2前		2		○							兼1		
	メディア文化研究	1・2前		2		○							兼1		
	メディア教育論研究	1・2前		2		○							兼1		
	電子メディア論研究	1・2後		2		○							兼1		
	近代日本メディア史研究	1・2後		2		○							兼1		

専攻科目	拡充専門科目 (地域政策研究(社会人)コース)	認知行動論研究Ⅰ	1・2前		2		○								兼1	隔年
		認知行動論研究Ⅱ	1・2後		2		○								兼1	隔年
		認知行動論演習Ⅰ	1・2後		2			○							兼1	隔年
		認知行動論演習Ⅱ	1・2前		2			○							兼1	隔年
		家族心理論研究	1・2後		2				○						兼1	
		行動文化論研究Ⅰ	1・2前		2		○								兼1	隔年
		行動文化論研究Ⅱ	1・2後		2		○								兼1	隔年
		行動文化論演習Ⅰ	1・2後		2				○						兼1	隔年
		行動文化論演習Ⅱ	1・2前		2				○						兼1	隔年
		生涯発達論研究Ⅰ	1・2後		2		○								兼1	隔年
		生涯発達論研究Ⅱ	1・2前		2		○								兼1	隔年
		生涯発達論演習Ⅰ	1・2前		2				○						兼1	隔年
		生涯発達論演習Ⅱ	1・2後		2				○						兼1	隔年
		文化人類学研究Ⅰ	1・2後		2		○								兼1	隔年
		文化人類学研究Ⅱ	1・2前		2		○								兼1	隔年
		文化人類学演習Ⅰ	1・2前		2				○						兼1	隔年
		文化人類学演習Ⅱ	1・2後		2				○						兼1	隔年
		比較文化論研究Ⅰ	1・2前		2		○								兼1	隔年
		比較文化論研究Ⅱ	1・2後		2		○								兼1	隔年
		比較文化論演習Ⅰ	1・2後		2				○						兼1	隔年
		比較文化論演習Ⅱ	1・2前		2				○						兼1	隔年
		福祉分野に関する理論と支援の展開	1・2前		2			○							兼1	
		教育分野に関する理論と支援の展開	1・2前		2			○							兼1	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	1・2後		2			○							兼1	集中
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	1・2後		2			○							兼1	
		心理的アセスメントに関する理論と実践	1・2前		2			○							兼2	オムニバス
		心理支援に関する理論と実践A	1・2前		2			○							兼1	
		心理支援に関する理論と実践B	1・2後		2	2		○							兼2	オムニバス
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	1・2後		2			○							兼1	
		心の健康教育に関する理論と実践	1・2前		2			○							兼4	オムニバス
		保健医療分野に関する理論と支援の展開	1・2前		2			○							兼1	
		投映法特論	1・2後		2	2		○							兼1	集中
		箱庭療法特論	1・2前		2	2		○							兼1	集中
小計(1065科目)		—	0	2108	30		—	0	0	0	0	0	0	兼35	—	
研究指導科目	社会科学研究法	1前	2				○		5							オムニバス
	専門基礎演習	1後	2				○		23	15	2					
	課題研究演習Ⅰ	2前	2				○		23	15	2					
	課題研究演習Ⅱ	2後	2				○		23	15	2					
	政策特定課題研究演習	2前	2				○		1							
	政策プレゼン研究演習	2後	2				○		1							
小計(6科目)		—	12	0	0		—	22	15	2	0	0	0		—	
合計(1205科目)			—	13	2352	32	—	22	15	8	1	0	0	兼78		
学位又は称号		修士(学術)			学位又は学科の分野			法学関係、経済学関係、社会学・社会福祉学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等									
1 専攻の修了には、必修科目の「テクノロジーと人間社会Ⅰ」1単位と研究指導科目8単位を含め30単位以上を修得し最終試験に合格すること。 2 修了要件について (1) Aタイプ(一般専門教育) ○大学院共通科目2単位、研究科共通科目2単位、キャリア支援科目2単位の合計6単位以上を履修する。 ○拡充専門科目は、2~6単位とする。 ○コア専門科目は、10~14単位とする。 ○研究指導科目は、社会科学研究法、専門基礎演習、課題研究演習Ⅰ、課題研究演習Ⅱの8単位とする。 (2) Bタイプ(リカレント専門教育) ○大学院共通科目0~4単位、研究科共通科目2単位の合計2単位以上を履修する。 ○拡充専門科目は、4~8単位とする。 ○コア専門科目は、8~16単位とする。 ○研究指導科目は、社会科学研究法、専門基礎演習、課題研究演習Ⅰ、課題研究演習Ⅱの8単位とする。なお、地域政策(社会人)コースの学生は、課題研究演習Ⅰと課題研究演習Ⅱに代えて、政策特定課題研究演習及び政策プレゼン研究演習を履修する。							1学年の学期区分			2学期						
							1学期の授業期間			15週						
							1時限の授業時間			90分						

(3) Cタイプ(留学生専門教育)

○大学院共通科目2単位、研究科共通科目2単位、キャリア支援科目2～4単位の合計6単位以上を履修する。

*キャリア支援科目の日本語表現法は、自由科目とし、修了要件外とする。

○拡充専門科目は、2～6単位とする。

○コア専門科目は、8～12単位とする。

○研究指導科目は、社会科学研究法、専門基礎演習、課題研究演習Ⅰ、課題研究演習Ⅱの8単位とする。

3 留意事項

○専門基礎科目、社会科学研究法、専門基礎演習、課題研究演習Ⅰ・課題研究演習Ⅱは所属する専攻に開講される科目を履修すること。

○事前の履修指導を経て、他研究科・他大学院において修得した専攻科目の単位を、本研究科の拡充専門科目の単位として認定することができる。

○地域政策研究(社会人)コースにおいては、社会科学専攻内の他コースのコア専門科目を自コースのコア専門科目として振り替えることができる。

○隔年開講の科目のⅠ・Ⅱは履修の段階ではなく、内容の違いであるので、ⅠからでもⅡからでも履修できる。

(注)

1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校(以下「高等専門学校」という)の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行うとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科(学位の種類及び分野の変更等に関する基準(平成十五年文部科学省告示第三十九号)別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。)についても作成すること。

2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行うとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行うとする場合は、この書類を作成する必要はない。

3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。

4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

5 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。

6 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。

(1) 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」を併記すること。

(2) 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。

(3) 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。

基礎となる学部 教育課程等の概要																
(人文社会科学部 現代社会学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
入門科目	大学入門ゼミ	1前	2				○		3	1		1		兼2	オムニバス	
	茨城学	1②③	2			○			3	1				兼6	オムニバス	
	小計（2科目）	-	4	0	0	-			5	2	0	1	0	兼8	-	
共通基礎科目	プラクティカル・イングリッシュ（PE）															
	Integrated English IA	1前		2			○							兼1		
	Integrated English IIA	1前		2			○							兼13		
	Integrated English IIIA	1前		2			○							兼6		
	Integrated English IB	1後		1			○							兼1		
	Integrated English IIB	1後		1			○							兼13		
	Integrated English IIIB	1後		1			○							兼5		
	Advanced English IA	2前		1			○							兼5		
	Advanced English IB	2後		1			○							兼5		
	Advanced English IIA	2・3前		1			○							兼9		
	Advanced English IIB	2後		1			○							兼8		
	Advanced English IIIA	2・3前		1			○							兼9		
	Advanced English IIIB	2後		1			○							兼6		
	Advanced English IIIC	2・3前		1			○			1				兼6		
	情報リテラシー															
	情報リテラシー	1前	2				○			2					兼4	
	心と体の健康															
	身体活動	1前後	1					○		1					兼6	
	身体活動	2前		1				○							兼1	
	健康の科学	1前後		1			○								兼2	
科学の基礎																
統計学入門	1①②		1			○								兼2		
科学入門	1①②		1			○								兼5		
小計（19科目）	-	-	3	20	0	-			3	1	0	0	0	兼48	-	
リベラルアーツ科目	多文化理解															
	異文化コミュニケーション															
	ドイツ語 I	1前		2			○							兼5		
	ドイツ語 II	1後		2			○							兼2		
	フランス語 I	1前		2			○			1				兼1		
	フランス語 II	1後		2			○							兼1		
	中国語 I	1前		2			○							兼5		
	中国語 II	1後		2			○							兼3		
	朝鮮語 I	1前		2			○							兼2		
	朝鮮語 II	1後		2			○							兼1		
	スペイン語 I	1前		2			○							兼1		
	スペイン語 II	1後		2			○							兼1		
	ドイツ語入門	1後		1			○							兼4		
	フランス語入門	1後		1			○							兼2		
	中国語入門	1後		1			○							兼7		
	朝鮮語入門	1後		1			○							兼3		
スペイン語入門	1後		1			○							兼1			
学術日本語 I	1前後		1			○								兼2		

基盤教育科目	リベラルアーツ科目	学術日本語ⅡA	1前後	1			○											兼2			
		学術日本語ⅡB	1前	1			○												兼1		
		学術日本語ⅡC	1後	1			○												兼1		
		人間とコミュニケーション	1③～2④	1			○			1	1								兼9		
		多文化共生	1③～2④	1			○				1								兼4		
		コミュニケーションと芸術文化	1③～2④	1			○												兼2		
		ヒューマニティーズ																			
		思想・文学	1③～2④	1			○												兼10		
		歴史・考古学	1③～2④	1			○												兼7		
		人間科学	1③～2④	1			○												兼11		
		メディア文化	1③～2④	1			○			3									兼2		
		パフォーマンス&アート																			
		スポーツ文化	1③～2④	1				○											兼2		
		音楽文化	1③～2④	1				○											兼3		
		美術文化	1③～2④	1				○											兼4		
		ダンス・演劇文化	1③～2④	1				○											兼2		
		自然と社会の広がり																			
		自然・環境と人間																			
		物質と生命	1③～2④	1				○											兼4		
		技術と社会	1③～2④	1				○											兼11		
		環境と人間	1③～2④	1				○											兼8		
		グローバル化と人間社会																			
		法律・政治	1③～2④	1				○			1								兼3		
		経済・経営	1③～2④	1				○											兼6		
		日本国憲法	2①～2④	1				○											兼4		
		公共社会	1③～2④	1				○		2	1								兼7		
		グローバル・スタディーズ	1③～2④	1				○											兼4		
		キャリアを考える																			
		ライフデザイン																			
		ライフデザイン	3①②	1				○											兼1	オムニバス	
		小計 (39科目)		-	1	48	0		-		6	4	0	0	0				兼133	-	
		全学共通科目	グローバル英語プログラム科目																		
			English for Socializing	2③～3④	1			○												兼2	
Reading & Discussion	2③～3④		1			○												兼4			
Studies in Particular Fields	2③～3④		1			○				1								兼5			
Studying Abroad	2③～3④		1			○												兼1			
Bilingualism	2③～3④		1			○												兼2			
Academic Speaking	2③～3④		1			○												兼3			
TOEIC & TOEFL	2③～3④		1			○												兼3			
Academic Writing	2③～3④		1			○												兼3			
Studies in Contemporary Japan	2③～3④		1			○												兼1			
Presentations in English	2③～3④		1			○												兼3			
日本語教育プログラム科目																					
日本語教育概論	2前		2			○												兼1			
多文化社会と日本語教育	2前		2			○												兼2			
日本語教授法Ⅰ	2後		2			○												兼1			
日本語教授法Ⅱ	3前		2			○												兼1			
日本語教授法演習	3後・4前		2				○											兼4	集中		
日本語教授法演習 (海外)	3後・4前	2				○											兼2	集中			
COC地域志向教育プログラム科目																					
5学部混合地域PBLⅠ	1前	2				○											兼1	集中			
5学部混合地域PBLⅡ	2前	2				○											兼1	集中			

全学 共通科目	5学部混合地域PBL III	1前		2			○							兼2	集中	
	5学部混合地域PBL IV	1前		2			○							兼4	集中	
	地域協創PBL	2前		2			○							兼1	集中	
	A I M Sプログラム科目															
	地域サステナビリティ学概論	2後		1			○							兼2	オムニバス	
	環境共生論	2後		2			○							兼4	オムニバス	
	環境保全型農業論	2後		2			○							兼6	オムニバス	
	フィールド実践演習	2後		1				○						兼1		
	環境変動適応・防災論	2後		2			○							兼3	オムニバス	
	地域環境管理論	2後		2			○							兼1		
	地域サステナビリティ学特別講義Ⅰ	2後		1			○							兼3		
	地域サステナビリティ学特別講義Ⅱ	2後		1			○							兼2		
	地域サステナビリティ学ゼミナール	3後		1				○						兼57		
地域サステナビリティ学ラボワーク	3後		2					○					兼57			
小計 (31科目)	-	0	47	0			-		0	1	0	0	0	兼86	-	
学部 基礎科目	国際学・地理学入門	1前	2				○		2	3					オムニバス	
	社会学・政治学入門	1前	2				○		6	3					オムニバス	
	マスメディア入門	1前	2				○		2					兼1	オムニバス	
	電子メディア入門	1前	2				○		3						オムニバス	
	入門法律学Ⅰ(法学概論)	1前		2			○							兼7	オムニバス	
	入門法律学Ⅱ(法学入門)	1前		2			○							兼5	オムニバス	
	経済学・経営学入門Ⅰ	1前		2			○							兼10	オムニバス	
	経済学・経営学入門Ⅱ	1前		2			○							兼5	オムニバス	
	文芸・思想入門	1前		2			○							兼5	オムニバス	
	総合歴史学入門	1前		2			○							兼4	オムニバス	
	入門人間科学	1前		2			○							兼8	オムニバス	
小計 (11科目)	-	8	14	0			-		13	6	0	0	0	兼45	-	
専 門 科 目	共通 必修 科目 (ゼミナール)															
	学科基礎ゼミナール	1後	1				○		4	1		1		兼2		
	メジャー基礎ゼミナールⅠ	2前	1				○		2	4		1		兼1		
	メジャー基礎ゼミナールⅡ	2後	1				○		7	4		1		兼2		
	メジャー専門ゼミナールⅠ	3前	2				○		15	8				兼2		
	メジャー専門ゼミナールⅡ	3後	2				○		15	8				兼2		
	メジャー専門ゼミナールⅢ	4前	2				○		15	8				兼2		
	メジャー専門ゼミナールⅣ	4後	2				○		15	8				兼2		
小計 (7科目)	-	11	0	0			-		15	8	0	1	0	兼13	-	
メ デ ィ ア 文 化 メ ジ ャ ー 専 門 科 目	メディア・リテラシー	1後		2			○		1							
	情報活用論	1後		2			○		1							
	メディア史Ⅰ	1後		2			○		1							
	放送メディア論	2前		2			○		1							
	ジャーナリズム論	2前		2			○		1							
	プレゼンテーション論	2前		2			○		1							
	電子メディア論	2前		2			○		1							
	コミュニケーションの社会学	2前		2			○		1							
	メディア文化の社会学	2前		2			○		1							
	マンガ文化論	2前		2			○			1						
	地域メディア論	2前		2			○							兼1		
	子供文化論	2後		2			○							兼1		
	情報応用リテラシー	2前		2			○					1				
	情報メディア論	2後		2			○		1							
国際ジャーナリズム論	2後		2			○		1								
映像制作演習Ⅰ	2後		2				○	1								
出版メディア論	2後		2			○							兼1			

メディア文化メジャー 専門科目	若者文化史	2後		2		○			1											
	広告コミュニケーション論	2前		2		○			1											
	ポピュラー文化論	2後		2		○				1										
	メディアと市民社会	2後		2		○														兼1
	ジャーナリズム演習 I	3前		2			○		1											
	映像制作演習 II	3前		2			○		1											
	情報デザイン演習 I	3後		2			○		1											
	メディア文化調査演習 I	3前		2			○		2											
	地域メディア調査演習 I	3前		2			○													兼1
	情報デザイン論 I	3前		2		○			1											
	情報デザイン論 II	3前		2		○			1											
	メディア史 II	3後		2		○			1											
	ジャーナリズム演習 II	3後		2			○		1											
	情報デザイン演習 II	3後		2			○		1											
	メディア文化調査演習 II	3後		2			○		2											オムニバス
	ポピュラーカルチャー視覚表現演習 I	3前		2			○			1										
	ポピュラーカルチャー視覚表現演習 II	3後		2			○			1										
	地域メディア調査演習 II	3後		2			○													兼1
	社会臨床演習	3前		2			○													兼1
	広報論	3前		2		○			1											
若者文化論	3後		2		○			1												
物語の構造を考える	3後		2		○														兼1	
情報メディアと博物館	3後		2		○			3											兼1	
小計 (40科目)	-	0	80	0	-			6	2	0	1	0	兼9	-						
国際・地域共創メジャー 専門科目	国際学概論	1後		2		○			1	3										オムニバス
	人文地理学概論	1後		2		○				1										
	社会学概論	1後		2		○			2	3										オムニバス
	政治学概論 I	1後		2		○			1											兼1
	ユーラシア世界と日本の歴史	1後		1		○														兼3
	近現代の日本と世界	1後		1		○														兼4
	日本思想史入門	1後		1		○														兼1
	社会調査法	2前		2		○				1										
	データ分析法	2休		2		○														兼1
	地理空間情報論	2前		2		○			1											
	国際学調査法	2前		2		○			1	3										オムニバス
	情報応用リテラシー	2前		2		○						1								
	国際協力論	2前		2		○				1										
	異文化コミュニケーション論	2前		2		○				1										
	国際関係論	2後		2		○														兼1
	地誌学概論	2前		2		○			1											
	地域社会概論	2後		2		○				1										
	福祉社会学	2後		2		○			1											
	地域福祉論	2前		2		○				1										
	政治学概論 II	2前		2		○														兼1
公共哲学 I	2前		2		○														兼1	
行政学 I	2前		2		○														兼1	
地域連携論 I	2休		2		○														兼1	
自然地理学 I	2前		2		○														兼1	
日本思想史概論	2前		2		○														兼1	
政治分析法	2後		2		○			2											オムニバス	
情報学	2後		2		○						1									
国際開発学	2後		2		○				1											

専 門 科 目	学 部 共 通 科 目	プロジェクト演習Ⅱ	2後		2			○							兼2	共同	
		社会人入門	2前		2			○			1						オムニバス
		地域PBL演習Ⅰ	3前		2				○							兼4	共同
		地域PBL演習Ⅱ	3後		2				○							兼4	共同
		英語圏の文化と社会Ⅰ	2前		2				○							兼1	
		英語圏の文化と社会Ⅱ	2後		2				○							兼1	
		English Seminar for Intercultural CommunicationⅠ	3前		2				○							兼1	隔年
		English Seminar for Intercultural CommunicationⅡ	3後		2				○							兼1	隔年
		English Seminar for Intercultural CommunicationⅢ	3前		2				○							兼1	隔年
		English Seminar for Intercultural CommunicationⅣ	3後		2				○							兼1	隔年
		Language and Culture in Japan A	3前		2				○							兼1	隔年
		Language and Culture in Japan B	3前		2				○							兼1	隔年
		Language and Culture in Japan C	3前		2				○							兼1	隔年
		Language and Culture in Japan D	3前		2				○							兼1	隔年
		Language and Culture in Japan E	3後		2				○							兼1	隔年
		Language and Culture in Japan F	3後		2				○							兼1	隔年
		Language and Culture in Japan G	3後		2				○							兼1	隔年
		Language and Culture in Japan H	3後		2				○							兼1	隔年
		農学入門	2前		2				○							兼7	
		数的処理	2後		2				○							兼2	
小計(23科目)		-	0	45	0		-			2	1	0	0	0	兼37	-	
卒業研究		4通	6				○			16	8	0	0	0	0		
小計(1科目)		-	6	0	0		-			16	8	0	0	0	0	-	
合計(249科目)		-	33	411	0		-			25	11	0	1	0	兼178	-	
学位又は称号	学士(現代社会学)	学位又は学科の分野		社会学・社会福祉学関係													
卒業要件及び履修方法										授業期間等							
①基盤教育科目26単位、専門科目79単位及び自由履修科目19単位の合計124単位を卒業要件とする。 ②専門科目79単位の内訳は以下のとおり。 ・学部基礎科目12単位(うち自学科開講科目8単位) ・共通必修科目(ゼミナール)11単位 ・学科専門科目50単位(うち自メジャー開講科目38単位。かつ自メジャー、他メジャーを問わずレベル3以上科目14単位) ・卒業研究6単位 ③また、サブメジャープログラムをいずれか一つ履修しなければならない。必要な単位数は以下のとおりであり、サブメジャープログラムのために履修した科目は、①の124単位に含む。 ・各メジャーによるサブメジャープログラム 16単位 ・グローバル英語プログラム 20単位 ・人文社会科学部地域志向教育プログラム 16単位 ・日本語教育プログラム 26単位 ・行政マネジメント研究プログラム 16単位 ④半期履修登録上限(CAP)を原則23単位とし、授業外学修時間の確保を図り、質の高い教育を実現させる。										1学年の学期区分			2期				
										1学期の授業期間			15週				
										1時限の授業時間			90分				

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科(学位の種類及び分野の変更等に関する基準(平成十五年文部科学省告示第三十九号)別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。)についても作成すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 5 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務

演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。

6 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。

(1) 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」を併記すること。

(2) 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。

(3) 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。

基礎となる学部 教育課程等の概要															
(人文社会科学部 法律経済学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
入門科目	大学入門ゼミ	1前	2				○		2	4	2				
	茨城学	1②③	2			○								兼10	
	小計（2科目）	-	4	0	0	-			2	4	2	0	0	兼10	
共通基礎科目	プラクティカル・イングリッシュ（PE）														
	Integrated English I A	1前		2			○							兼1	
	Integrated English II A	1前		2			○							兼13	
	Integrated English III A	1前		2			○							兼6	
	Integrated English I B	1後		1			○							兼1	
	Integrated English II B	1後		1			○							兼13	
	Integrated English III B	1後		1			○							兼5	
	Advanced English I A	2前		1			○							兼5	
	Advanced English I B	2後		1			○							兼5	
	Advanced English II A	2・3前		1			○							兼9	
	Advanced English II B	2後		1			○							兼8	
	Advanced English III A	2・3前		1			○							兼9	
	Advanced English III B	2後		1			○							兼6	
	Advanced English III C	2・3前		1			○							兼7	
	情報リテラシー														
	情報リテラシー	1前	2				○								兼6
	心と体の健康														
	身体活動	1前後	1					○							兼7
	身体活動	2前		1				○							兼1
	健康の科学	1前後		1			○								兼2
科学の基礎															
統計学入門	1①②		1			○								兼2	
科学入門	1①②		1			○								兼5	
小計（19科目）	-		3	20	0	-			0	0	0	0	0	兼52	
リベラルアーツ科目	多文化理解														
	異文化コミュニケーション														
	ドイツ語 I	1前		2			○							兼5	
	ドイツ語 II	1後		2			○							兼2	
	フランス語 I	1前		2			○							兼2	
	フランス語 II	1後		2			○							兼1	
	中国語 I	1前		2			○							兼5	
	中国語 II	1後		2			○							兼3	
	朝鮮語 I	1前		2			○							兼2	
	朝鮮語 II	1後		2			○							兼1	
	スペイン語 I	1前		2			○							兼1	
	スペイン語 II	1後		2			○							兼1	
	ドイツ語入門	1後		1			○							兼4	
	フランス語入門	1後		1			○							兼2	
	中国語入門	1後		1			○							兼7	
	朝鮮語入門	1後		1			○							兼3	
スペイン語入門	1後		1			○							兼1		
学術日本語 I	1前後		1			○								兼2	

基礎 教育 科目	リ ベ ラ ル ア ー ツ 科 目	学術日本語ⅡA	1前後	1		○												兼2		
		学術日本語ⅡB	1前	1		○													兼1	
		学術日本語ⅡC	1後	1		○													兼1	
		人間とコミュニケーション	1③～2④	1		○													兼11	
		多文化共生	1③～2④	1		○													兼5	
		コミュニケーションと芸術文化	1③～2④	1		○													兼2	
		ヒューマニティーズ																		
		思想・文学	1③～2④	1		○													兼10	
		歴史・考古学	1③～2④	1		○													兼7	
		人間科学	1③～2④	1		○													兼11	
		メディア文化	1③～2④	1		○													兼5	
		パフォーマンス&アート																		
		スポーツ文化	1③～ 2④	1		○													兼2	
		音楽文化	1③～2④	1		○													兼3	
		美術文化	1③～2④	1		○													兼4	
		ダンス・演劇文化	1③～2④	1		○													兼2	
		自然と社会の広がり																		
		自然・環境と人間																		
		物質と生命	1③～2④	1		○													兼4	
		技術と社会	1③～2④	1		○													兼11	
		環境と人間	1③～2④	1		○													兼8	
		グローバル化と人間社会																		
		法律・政治	1③～2④	1		○						3							兼1	
		経済・経営	1③～2④	1		○					3	2	1							
		公共社会	1③～2④	1		○					1								兼9	
		グローバル・スタディーズ	1③～2④	1		○													兼4	
キャリアを考える																				
ライフデザイン																				
ライフデザイン	3①②	1		○													兼1	オムニバス		
小計 (38科目)	-	1	47	0		-			4	5	1	0	0				兼133	-		
全学 共通 科目	グ ロ ー バ ル 英 語 プ ロ グ ラ ム 科 目	English for Socializing	2③～3④	1		○												兼2		
		Reading & Discussion	2③～3④	1		○												兼4		
		Studies in Particular Fields	2③～3④	1		○												兼6		
		Studying Abroad	2③～3④	1		○												兼1		
		Bilingualism	2③～3④	1		○												兼2		
		Academic Speaking	2③～3④	1		○												兼3		
		TOEIC & TOEFL	2③～3④	1		○												兼3		
		Academic Writing	2③～3④	1		○												兼3		
		Studies in Contemporary Japan	2③～3④	1		○												兼1		
		Presentations in English	2③～3④	1		○												兼3		
		日本語教育プログラム科目																		
		日本語教育概論	2前	2		○													兼1	
		多文化社会と日本語教育	2前	2		○													兼2	
		日本語教授法Ⅰ	2後	2		○													兼1	
		日本語教授法Ⅱ	3前	2		○													兼1	
日本語教授法演習	3後・4前	2		○													兼4	集中		
日本語教授法演習 (海外)	3後・4前	2		○													兼2	集中		
COC地域志向教育プログラム科目																				
5学部混合地域PBLⅠ	1前	2		○													兼1	集中		
5学部混合地域PBLⅡ	2前	2		○													兼1	集中		
5学部混合地域PBLⅢ	1前	2		○					1								兼1	集中		

全学共通科目	5学部混合地域PBL IV	1前		2			○							兼4	集中
	地域協創PBL	2前		2			○							兼3	集中
	A I M Sプログラム科目														
	地域サステナビリティ学概論	2後		1			○							兼2	オムニバス
	環境共生論	2後		2			○							兼4	オムニバス
	環境保全型農業論	2後		2			○							兼6	オムニバス
	フィールド実践演習	2後		1				○						兼1	
	環境変動適応・防災論	2後		2			○							兼3	オムニバス
	地域環境管理論	2後		2			○							兼1	
	地域サステナビリティ学特別講義 I	2後		1			○							兼3	
	地域サステナビリティ学特別講義 II	2後		1			○							兼2	
	地域サステナビリティ学ゼミナール	3後		1				○						兼57	
地域サステナビリティ学ラボワーク	3後		2					○					兼57		
小計 (31科目)	-	0	47	0			-		1	0	0	0	0	兼86	-
学部基礎科目	国際学・地理学入門	1前		2			○							兼5	オムニバス
	社会学・政治学入門	1前		2			○							兼9	オムニバス
	マスメディア入門	1前		2			○							兼3	オムニバス
	電子メディア入門	1前		2			○							兼3	オムニバス
	入門法律学 I (法学概論)	1前	2				○		2	3	2				オムニバス
	入門法律学 II (法学入門)	1前	2				○		2	3					オムニバス
	経済学・経営学入門 I	1前	2				○		5	3	2				オムニバス
	経済学・経営学入門 II	1前	2				○		4	1					オムニバス
	文芸・思想入門	1前		2			○							兼5	オムニバス
	総合歴史学入門	1前		2			○							兼4	オムニバス
	入門人間科学	1前		2			○							兼8	オムニバス
	小計 (11科目)	-	8	14	0			-	9	9	4	0	0	兼37	-
共通必修科目 (ゼミナール)	学科基礎ゼミナール	1後	1				○		2	4	2				
	メジャー基礎ゼミナール I	2前	1				○		4	4	1				
	メジャー基礎ゼミナール II	2後	1				○		5	4	1				
	メジャー専門ゼミナール I	3前	2				○		9	9	4				
	メジャー専門ゼミナール II	3後	2				○		9	9	4				
	メジャー専門ゼミナール III	4前	2				○		9	9	4				
	メジャー専門ゼミナール IV	4後	2				○		9	9	4				
	小計 (7科目)	-	11	0	0			-	9	9	4	0	0	0	-
法学メジャー専門科目	民法概論	1後		2			○			1					
	政治学概論 I	1後		2			○		1					兼1	
	日本国憲法概論	1後		2			○							兼1	
	法学概論	1後		1			○			1	2				オムニバス
	司法制度論	2前		2			○		2	4	2			兼1	オムニバス
	政治学概論 II	2前		2			○		1						
	憲法 I	2前		2			○				1				
	行政法 I	2前		2			○			1					
	財産法 I	2前		2			○							兼1	
	家族法 I	2前		2			○			1					
	刑法 I	2前		2			○			1					
	行政学 I	2前		2			○			1					
	哲学概説 I	2前		1			○							兼1	
	哲学概説 II	2前		1			○							兼1	
	公共哲学 I	2前		2			○			1					
	憲法 II	2後		2			○				1				隔年
行政法 II	2後		2			○			1					隔年	
財産法 II	2後		2			○							兼1		

専 門 科 目	学 部 共 通 科 目	English Seminar for Intercultural Communication III	3前		2		○								兼1	隔年
		English Seminar for Intercultural Communication IV	3後		2		○								兼1	隔年
		Language and Culture in Japan A	3前		2		○								兼1	隔年
		Language and Culture in Japan B	3前		2		○								兼1	隔年
		Language and Culture in Japan C	3前		2		○								兼1	隔年
		Language and Culture in Japan D	3前		2		○								兼1	隔年
		Language and Culture in Japan E	3後		2		○								兼1	隔年
		Language and Culture in Japan F	3後		2		○								兼1	隔年
		Language and Culture in Japan G	3後		2		○								兼1	隔年
		Language and Culture in Japan H	3後		2		○								兼1	隔年
		農学入門	2前		2		○								兼7	
		数的処理	2後		2		○								兼2	
		小計 (23科目)		-	0	45	0	-			4	0	0	0	0	0
卒業研究		4通	6			○			9	9	4	0	0	0		
小計 (1科目)		-	6	0	0	-			9	9	4	0	0	0		-
合計 (241科目)		-	33	387	0	-			16	18	7	0	0	0	兼170	-
学位又は称号		学士 (社会科学)			学位又は学科の分野			経済学関係								
卒業要件及び履修方法								授業期間等								
<p>①基盤教育科目26単位、専門科目79単位及び自由履修科目19単位の合計124単位を卒業要件とする。</p> <p>②専門科目79単位の内訳は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部基礎科目12単位 (うち自学科開講科目8単位) ・共通必修科目 (ゼミナール) 11単位 ・学科専門科目50単位 (うち自メジャー開講科目38単位。かつ自メジャー、他メジャーを問わずレベル3以上科目14単位) ・卒業研究6単位 <p>③また、サブメジャープログラムをいずれか一つ履修しなければならない。必要な単位数は以下のとおりであり、サブメジャープログラムのために履修した科目は、①の124単位に含む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各メジャーによるサブメジャープログラム 16単位 ・グローバル英語プログラム 20単位 ・人文社会科学部地域志向教育プログラム 16単位 ・日本語教育プログラム 26単位 ・行政マネジメント研究プログラム 16単位 <p>④半期履修登録上限 (CAP) を原則23 単位とし、授業外学修時間の確保を図り、質の高い教育を実現させる。</p>								1 学年の学期区分				2 期				
								1 学期の授業期間				1 5 週				
								1 時限の授業時間				9 0 分				

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科 (学位の種類及び分野の変更等に関する基準 (平成十五年文部科学省告示第三十九号) 別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。) についても作成すること。
- 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
 - (1) 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」を併記すること。
 - (2) 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
 - (3) 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。

基礎となる学部 教育課程等の概要																	
(人文社会科学部 人間文化学科)																	
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
入門科目	大学入門ゼミ	1前	2				○		4	3						オムニバス	
	茨城学	1②③	2				○								兼10	オムニバス	
	小計（2科目）	-	4	0	0		-		4	3	0	0	0	兼10	-		
共通基礎科目	プラクティカル・イングリッシュ (PE)																
	Integrated English I A	1前		2				○								兼1	
	Integrated English II A	1前		2				○								兼13	
	Integrated English III A	1前		2				○								兼6	
	Integrated English I B	1後		1				○								兼1	
	Integrated English II B	1後		1				○								兼13	
	Integrated English III B	1後		1				○								兼5	
	Advanced English I A	2前		1				○								兼5	
	Advanced English I B	2後		1				○								兼5	
	Advanced English II A	2・3前		1				○								兼9	
	Advanced English II B	2後		1				○								兼8	
	Advanced English III A	2・3前		1				○		1						兼8	
	Advanced English III B	2後		1				○		1						兼5	
	Advanced English III C	2・3前		1				○		1						兼6	
	情報リテラシー																
	情報リテラシー	1前	2					○									兼6
	心と体の健康																
	身体活動	1前後	1														兼7
	身体活動	2前		1													兼1
健康の科学	1前後		1				○									兼2	
科学の基礎																	
統計学入門	1①②		1				○									兼2	
科学入門	1①②		1				○									兼5	
小計（19科目）	-		3	20	0		-		2	0	0	0	0	兼50	-		
リベラルアーツ科目	多文化理解																
	異文化コミュニケーション																
	ドイツ語 I	1前		2				○		1						兼4	
	ドイツ語 II	1後		2				○		1						兼1	
	フランス語 I	1前		2				○		1						兼1	
	フランス語 II	1後		2				○			1						
	中国語 I	1前		2				○								兼5	
	中国語 II	1後		2				○		1						兼2	
	朝鮮語 I	1前		2				○								兼2	
	朝鮮語 II	1後		2				○								兼1	
	スペイン語 I	1前		2				○								兼1	
	スペイン語 II	1後		2				○								兼1	
	ドイツ語入門	1後		1				○								兼4	
	フランス語入門	1後		1				○								兼2	
	中国語入門	1後		1				○		1						兼6	
朝鮮語入門	1後		1				○								兼3		
スペイン語入門	1後		1				○								兼1		
学術日本語 I	1前後		1				○								兼2		

基盤教育科目	リベラルアーツ科目	学術日本語ⅡA	1前後	1			○								兼2			
		学術日本語ⅡB	1前	1			○									兼1		
		学術日本語ⅡC	1後	1			○									兼1		
		人間とコミュニケーション	1③～2④	1			○			1						兼10		
		多文化共生	1③～2④	1			○		2	1						兼2		
		コミュニケーションと芸術文化	1③～2④	1			○		1							兼1		
		ヒューマニティーズ																
		思想・文学	1③～2④	1			○		6							兼4		
		歴史・考古学	1③～2④	1			○		2	2						兼3		
		人間科学	1③～2④	1			○		3	3						兼5		
		メディア文化	1③～2④	1			○									兼5		
		パフォーマンス&アート																
		スポーツ文化	1③～2④	1			○									兼2		
		音楽文化	1③～2④	1			○									兼3		
		美術文化	1③～2④	1			○									兼4		
		ダンス・演劇文化	1③～2④	1			○									兼2		
		自然と社会の広がり																
		自然・環境と人間																
		物質と生命	1③～2④	1			○									兼4		
		技術と社会	1③～2④	1			○									兼11		
		環境と人間	1③～2④	1			○									兼8		
		グローバル化と人間社会																
		法律・政治	1③～2④	1			○									兼4		
		経済・経営	1③～2④	1			○									兼6		
		日本国憲法	2①～2④	1			○									兼4		
		公共社会	1③～2④	1			○									兼10		
		グローバル・スタディーズ	1③～2④	1			○									兼4		
		キャリアを考える																
		ライフデザイン																
		ライフデザイン	3①②	1			○									兼1	オムニバス	
		小計 (39科目)	-	1	48	0		-		13	7	0	0	0	0	兼123	-	
		全学共通科目	グローバル英語プログラム科目															
			English for Socializing	2③～3④	1			○									兼2	
			Reading & Discussion	2③～3④	1			○		2						兼2		
			Studies in Particular Fields	2③～3④	1			○		1	1					兼4		
			Studying Abroad	2③～3④	1			○								兼1		
			Bilingualism	2③～3④	1			○								兼2		
			Academic Speaking	2③～3④	1			○		1						兼3		
			TOEIC & TOEFL	2③～3④	1			○								兼3		
Academic Writing	2③～3④		1			○								兼3				
Studies in Contemporary Japan	2③～3④		1			○								兼1				
Presentations in English	2③～3④		1			○		1						兼2				
日本語教育プログラム科目																		
日本語教育概論	2前		2			○									兼1			
多文化社会と日本語教育	2前		2			○									兼2			
日本語教授法Ⅰ	2後		2			○									兼1			
日本語教授法Ⅱ	3前	2			○									兼1				
日本語教授法演習	3後・4前	2			○									兼4	集中			
日本語教授法演習 (海外)	3後・4前	2			○									兼2	集中			
COO地域志向教育プログラム科目																		
5学部混合地域PBLⅠ	1前	2			○									兼1	集中			
5学部混合地域PBLⅡ	2前	2			○									兼1	集中			

全学 共通 科目	5学部混合地域PBL III	1前		2			○							兼2	集中	
	5学部混合地域PBL IV	1前		2			○							兼4	集中	
	地域協創PBL	2前		2			○							兼1	集中	
	AIMSプログラム科目															
	地域サステナビリティ学概論	2後		1			○							兼2	オムニバス	
	環境共生論	2後		2			○							兼4	オムニバス	
	環境保全型農業論	2後		2			○							兼6	オムニバス	
	フィールド実践演習	2後		1				○						兼1		
	環境変動適応・防災論	2後		2			○							兼3	オムニバス	
	地域環境管理論	2後		2			○							兼1		
	地域サステナビリティ学特別講義Ⅰ	2後		1			○							兼3		
	地域サステナビリティ学特別講義Ⅱ	2後		1			○							兼2		
	地域サステナビリティ学ゼミナール	3後		1				○						兼57		
地域サステナビリティ学ラボワーク	3後		2					○					兼57			
小計(31科目)	-	0	47	0			-		3	0	1	0	0	兼83	-	
学部 基礎 科目	国際学・地理学入門	1前		2			○							兼5	オムニバス	
	社会学・政治学入門	1前		2			○							兼9	オムニバス	
	マスメディア入門	1前		2			○							兼3	オムニバス	
	電子メディア入門	1前		2			○							兼3	オムニバス	
	入門法律学Ⅰ(法学概論)	1前		2			○							兼7	オムニバス	
	入門法律学Ⅱ(法学入門)	1前		2			○							兼5	オムニバス	
	経済学・経営学入門Ⅰ	1前		2			○							兼10	オムニバス	
	経済学・経営学入門Ⅱ	1前		2			○							兼5	オムニバス	
	文芸・思想入門	1前	2				○		3	2						オムニバス
	総合歴史学入門	1前	2				○		4							オムニバス
	入門人間科学	1前	2				○		3	3					兼2	オムニバス
	小計(11科目)	-	6	16	0			-	10	5	0	0	0	兼49	-	
共通 必修 科目 (ゼミナール)	学科基礎ゼミナール	1後	1				○		4	3						
	メジャー基礎ゼミナール	2前	2				○		12	4						
	メジャー専門ゼミナールⅠ	3前	2				○		24	8	1			兼4		
	メジャー専門ゼミナールⅡ	3後	2				○		24	8	1			兼4		
	メジャー専門ゼミナールⅢ	4前	2				○		24	8	1			兼4		
	メジャー専門ゼミナールⅣ	4後	2				○		24	8	1			兼4		
	小計(6科目)	-	11	0	0			-	24	8	1	0	0	兼4	-	
専 門 科 目	文 芸 ・ 思 想 メ ジ ャ ー 専 門 科 目	論理的思考入門	1後		2		○			1						
		日本思想史入門	1後		1		○		1							
		中国思想史入門	1後		1		○		1							
		日本古典文学概論	1後		1		○		1							
		日本近代文学概論	1後		1		○		1							
		国語学概論	1後		2		○		1							
		社会言語学入門	1後		1		○		1							
		英文法基礎	1後		2		○		1							
		英米文化入門	1後		2		○		2						オムニバス	
		英語音声コミュニケーション技法	1後		1		○		1							
		英語学概論	1後		2		○		1							
		英語コミュニケーション入門	1後		1		○		1							
		英米文学概論	1後		2		○		2						オムニバス	
		中国文学概論	1後		1		○		1							
		ドイツ文学概論	1後		1		○		1							
フランス文化概論	1後		1		○		1	1								
美術史入門	1後		1		○		1									
応用言語学入門	1後		1		○		1									

専 門 科 目	心 理 ・ 人 間 科 学 メ ジ ャ ー 専 門 科 目	心理学基礎論Ⅰ（心理学概論）	1後		2		○			3	2							オムニバス		
		心理学基礎論Ⅱ（臨床心理学概論）	1後		2		○											兼4	オムニバス	
		文化人類学基礎論	1後		1		○				1	1						兼1	オムニバス	
		社会学基礎論	1後		1		○													
		研究法演習Ⅰ	2前		2			○			2	2							オムニバス	
		研究法演習Ⅱ	2前		2				○		2	2							オムニバス	
		認知心理論Ⅰ	2前		2			○					1							
		感情心理論Ⅰ	2前		2			○			1									
		行動文化論Ⅱ	2前		2			○			1									隔年
		生涯発達論Ⅱ	2前		2			○					1							隔年
		心理臨床論Ⅰ	2前		2			○			1									隔年
		カウンセリング心理学論	2前		2			○											兼1	
		比較文明論	2前		2			○			1									
		研究法演習Ⅲ	2後		2				○		3	2								オムニバス
		研究法演習Ⅳ	2後		2					○	3	2								オムニバス
		心理統計Ⅰ	2後		2				○		1									隔年
		心理統計Ⅱ	2後		2				○				1							隔年
		行動文化論Ⅰ	2後		2				○		1									隔年
		生涯発達論Ⅰ	2後		2				○				1							隔年
		心理臨床論Ⅱ	2後		2				○		1									隔年
		比較文化論	2後		2				○				1							隔年
		民俗学	2後		2				○				1							隔年
		社会行動論Ⅰ	2後		2				○										兼1	
		研究法演習Ⅴ	3前		2					○	1	1								
		研究法演習Ⅵ	3前		2					○	1	1								
		行動文化論演習Ⅱ	3前		2					○	1									隔年
		生涯発達論演習Ⅱ	3前		2					○			1							隔年
		心理臨床論演習Ⅰ	3前		2					○	1									隔年
		比較文明論演習Ⅱ	3前		2					○	1									隔年
		比較文化論演習Ⅱ	3前		2					○			1							隔年
		認知心理論Ⅱ	3後		2				○				1							
		感情心理論Ⅱ	3後		2				○		1									
		行動文化論演習Ⅰ	3後		2					○	1									隔年
		生涯発達論演習Ⅰ	3後		2					○			1							隔年
		心理臨床論演習Ⅱ	3後		2					○									兼1	隔年
		心理査定論	3後		2				○										兼3	オムニバス
		比較文明論演習Ⅰ	3後		2					○	1									隔年
		比較文化論演習Ⅰ	3前		2					○			1							隔年
		公認心理師の職責	3後		2				○										兼4	オムニバス
		学習・言語心理学	1後		2				○										兼1	
		神経・生理心理学	1後		2				○										兼1	集中
		障害者・障害児心理学	1前		2				○										兼1	集中
		司法・犯罪心理学	3後		2				○										兼1	集中
		産業・組織心理学	1後		2				○										兼1	集中
		人体の構造と機能及び疾病	1後		2				○										兼1	集中
		精神疾患とその治療	1前		2				○										兼1	
		関係行政論	3後		2				○										兼4	オムニバス
		心理演習	2後		2					○			1							
		心理実習Ⅰ	2前		1						○		1							集中
		心理実習Ⅱ	3後		1						○		1							集中
		心理実習Ⅲ	3後		1						○		1							集中
小計（51科目）	-	0	74	23	-				4	3	0	0	0	0	0	0	兼26	-		

専 門 科 目	学 部 共 通 科 目	インターンシップA	2前		1		○			1	1						集中	
		インターンシップB	2前		2		○			1	1						集中	
		プロジェクト演習 I	2前		2			○		1	1						共同	
		プロジェクト演習 II	2後		2			○		1	1						共同	
		社会人入門	2前		2			○							兼1		オムニバス	
		地域PBL演習 I	3前		2				○	2	1				兼1		共同	
		地域PBL演習 II	3後		2				○	2	1				兼1		共同	
		英語圏の文化と社会 I	2前		2				○						兼1			
		英語圏の文化と社会 II	2後		2				○						兼1			
		English Seminar for Intercultural Communication I	3前		2				○						兼1			隔年
		English Seminar for Intercultural Communication II	3後		2				○						兼1			隔年
		English Seminar for Intercultural Communication III	3前		2				○						兼1			隔年
		English Seminar for Intercultural Communication IV	3後		2				○						兼1			隔年
		Language and Culture in Japan A	3前		2				○						兼1			隔年
		Language and Culture in Japan B	3前		2				○						兼1			隔年
		Language and Culture in Japan C	3前		2				○						兼1			隔年
		Language and Culture in Japan D	3前		2				○						兼1			隔年
		Language and Culture in Japan E	3後		2				○						兼1			隔年
		Language and Culture in Japan F	3後		2				○						兼1			隔年
		Language and Culture in Japan G	3後		2				○						兼1			隔年
		Language and Culture in Japan H	3後		2				○						兼1			隔年
		農学入門	2前		2				○						兼7			
		教的処理	2後		2				○						兼2			
小計 (23科目)	-	0	45	0			-		8	6	0	0	0	兼26		-		
学 芸 員	生涯学習概論	2休			2		○							兼1				
	博物館実習 I	3前			2			○						兼2				
	博物館実習 II	4休			1			○			1							
	小計 (3科目)	-	0	0	5		-		0	1	0	0	0	兼3		-		
卒業研究	4通	6					○	24	8	1	0	0	0					
小計 (1科目)	-	6	0	0		-		24	8	1	0	0	0		-			
合計 (409科目)			-	31	675	28	-		63	26	2	0	0	兼149		-		
学位又は称号		学士 (人文科学)			学位又は学科の分野				文学関係									
卒業要件及び履修方法									授業期間等									
<p>① 基盤教育科目26単位、専門科目77単位及び自由履修科目21単位の合計124単位を卒業要件とする。</p> <p>② 専門科目77単位の内訳は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部基礎科目10単位 (うち自学科開講科目6単位) ・共通必修科目 (ゼミナール) 11単位 ・学科専門科目50単位 (うち自メジャー開講科目38単位。かつ自メジャー、他メジャーを問わずレベル3以上科目14単位) ・卒業研究6単位 <p>③ また、サブメジャープログラムをいずれか一つ履修しなければならない。必要な単位数は以下のとおりであり、サブメジャープログラムのために履修した科目は、①の124単位に含む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各メジャーによるサブメジャープログラム 16単位 ・グローバル英語プログラム 20単位 ・人文社会科学部地域志向教育プログラム 16単位 ・日本語教育プログラム 26単位 ・行政マネジメント研究プログラム 16単位 <p>④ 半期履修登録上限 (CAP) を原則23 単位とし、授業外学修時間の確保を図り、質の高い教育を実現させる。</p>									1 学年の学期区分				2 期					
									1 学期の授業期間				1 5 週					
									1 時限の授業時間				9 0 分					

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科 (学位の種類及び分野の変更等に関する基準 (平成十五年文部科学省告示第三十九号) 別表第一備考又は別表第二備考)

考に係るものを含む。)についても作成すること。

- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 5 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 6 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
 - (1) 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」を併記すること。
 - (2) 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
 - (3) 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。

授 業 科 目 の 概 要			
(人文社会科学研究科 社会科学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院 共通科目	アカデミックプレゼンテーション	学会等において効果的に英語で研究発表を行う技能を習得するため、まず、良いプレゼンテーションとはどのようなものかについて概観する。また、発表者の主張を説得力を持って伝えるためのプレゼンテーション用の資料（パワーポイント資料もしくはポスター）の作成手法、および、必要となる適切な英語表現等を学修する。履修者は実際に授業内でプレゼンテーションを行う。	
	アカデミックディスカッション	学会等において英語を用いて研究発表や質疑応答を行う技術を習得するため、プレゼンテーション用の資料（パワーポイント資料もしくはポスター）作成手法および必要とされる語彙や表現を学修する。また、必要に応じて学術雑誌掲載論文のコーパスを調査するなどして（AntCorGenやAntConcを利用）、用語やフレーズの使用法に留意した用例集を作成し、自分の専門分野の英語表現を習得する。履修者は実際に授業内でプレゼンテーションおよび質疑応答を行う。	
	国際コミュニケーション基礎A	企業や研究機関への就職並びに研究者としての役割を考える上で、①専門分野に関連するプレゼンテーションの内容を聴き取る、②論文の内容を読み取る、③プレゼンテーションや論文で知り得た情報をまとめる、④それを人前で発表するといった活動は必須である。本授業では、上記の学術活動を英語でも遂行することができる力を身につけるために、その第一段階として、基礎的な英語力の育成を図る。具体的には、科学技術系のトピックに特化した教材を活用し、既習の文法や語彙を振り返りながら、主に聴く力・読む力の伸長を目指す。	
	国際コミュニケーション基礎B	企業や研究機関への就職並びに研究者としての役割を考える上で、①専門分野に関連するプレゼンテーションの内容を聴き取る、②論文の内容を読み取る、③プレゼンテーションや論文で知り得た情報をまとめる、④それを人前で発表するといった活動は必須である。本授業では、上記の学術活動を英語でも遂行することができる力を身につけるために、その第一段階として、基礎的な英語力の育成を図る。具体的には、科学技術系のトピックに特化した教材を活用し、既習の文法や語彙を振り返りながら、主に聴く力・読む力の伸長を目指す。	
	実践国際コミュニケーションA	企業や研究機関への就職並びに研究者としての役割を考える上で、①専門分野に関連するプレゼンテーションの内容を聴き取る、②論文の内容を読み取る、③プレゼンテーションや論文で知り得た情報をまとめる、④それを人前で発表するといった活動は必須である。本授業では、教材として主にTED Talksを活用し、上記の学術活動を英語でも遂行することができる力を身につけることを目標とする。	
	実践国際コミュニケーションB	企業や研究機関への就職並びに研究者としての役割を考える上で、①専門分野に関連するプレゼンテーションの内容を聴き取る、②論文の内容を読み取る、③プレゼンテーションや論文で知り得た情報をまとめる、④それを人前で発表するといった活動は必須である。本授業では、教材として主にTED Talksを活用し、上記の学術活動を英語でも遂行することができる力を身につけることを目標とする。	
	科学と倫理	今日、科学技術に対する社会からの大きな期待を背景に、巨額な公的資金が科学研究に投入され、それに伴い科学技術者の社会的責任が大きく問われている。一方、科学技術の導入が社会と様々な軋轢を引き起こすとともに、科学技術者の不正も数多く報告されている。講義では、社会のための科学の視点から求められる倫理観のある新しい科学技術者像を描く。合わせて、科学事件や研究不正にどのように対応すべきかを学ぶ。	

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;"> 共通科目 大学院 共通科目 </p>	<p>学術情報リテラシー</p>	<p>いつでも・どこでも・誰とでも・何とでもつながるユビキタス社会、センサやコンピュータなどがユーザを感知理解して自律的に働きかけるようなアンビエント社会の到来が予想される。通信ネットワーク技術は、来るべき情報化社会の基幹技術である。本授業では、ネットワーク技術に着目し、その利用法を理解し、情報倫理や法律などを通して将来の情報化社会を考える。</p>	
	<p>環境情報センシング特論</p>	<p>水、大気などに関する環境情報を対象とした計測、評価について学習する。特に簡易型のセンサシステムを構築し、気圧、気温、二酸化炭素等の物理量の計測を題材として、環境情報計測の基礎と応用に関して概観する。Arduinoのようなマイクロコントローラの使用手法、プログラミング言語Pythonの基礎についても学習する。</p>	
	<p>原子科学と倫理</p>	<p>本来社会に繁栄・利便をもたらすべき原子科学が、逆に社会の安全・安心の脅威となる場合、適切な情報の公開が即座に求められる。その後の倫理的な判断の検証が行われる際の視点の一つが危機管理であり、具体的事例より携わる技術者・科学者及びその組織の倫理を知る。</p> <p>(オムニバス形式/全8回) (77 関東 康祐/1回) まとめ (115 中江 延男/1回) 原子科学の発展と科学者の倫理 (116 望月 弘保/1回) 原子力発電所の炉心溶融事故と公衆への影響 (117 大場 恭子/2回) 組織における倫理的意思の形成、技術者の倫理とレジリエンスエンジニアリング (118 藤井 芳昭/1回) 加速器施設における安全文化 (122 虎田 真一郎/1回) 原子科学の利用と倫理の課題 (核廃棄物処理) (123 菊地 賢司/1回) 放射性物質の取扱いと危機管理</p>	<p>オムニバス</p>
	<p>知的所有権特論</p>	<p>知的所有権 (知的財産権とも言う。) は、人間の知的活動にともなう創作を保護する権利の総称である。本講では知的財産権に関する主要な法律・制度を概説する。特に、技術保護の中心的役割を担う特許法については、研究者・技術者として知っておくべき事項を掘り下げて解説する。</p>	
	<p>バイオテクノロジーと社会</p>	<p>バイオテクノロジーは、食料、医療、環境、エネルギーなど様々な分野へ応用されている。本講義では、遺伝子研究を中心に技術的側面からその応用、そして、画期的技術ゆえに生まれる一般市民・消費者の不安と、これらに対する規制・政策について社会科学的側面からも考える。更に、共通科目として、生物系以外の大学院生でも理解できる内容を目指す。</p> <p>(オムニバス形式/全8回) (89 安西 弘行/4回) バイオテクノロジーの基礎、生命倫理、バイオテクノロジー技術のエネルギー、工学分野への応用 (112 古谷 綾子/2回) バイオテクノロジー技術の農業、環境分野への応用 (121 大島 正弘/2回) 日本及び世界の政策動向</p>	<p>オムニバス</p>

<p style="text-align: center;">大学院 共通科目</p> <p style="text-align: center;">共通科目</p>	<p>持続社会システム論 I</p>	<p>サステイナビリティ（持続可能性）の視点から眺めた場合、現在の社会システムは何処が持続不可能なのか、それはどのような原因とメカニズムで発生しているのか、持続可能な社会を構築するための条件は何か、具体的にはどのような新しい社会システムが創造されようとしているのか、などについて解説する。</p> <p>（オムニバス形式/全8回） （99 田村 誠/4回） サステイナビリティと社会システム、気候変動における経済活動と環境保全、環境政策、持続可能な社会システムについて （17 蓮井 誠一郎/4回） 社会システムと構造的暴力、構造的暴力としての開発、持続可能な社会システムについて</p>	<p>オムニバス</p>
	<p>持続社会システム論 II</p>	<p>サステイナビリティの実現に向けた諸課題をローカルとグローバルの双方の視点から考察する。具体的な事例を提示しながら、現代の社会システムが抱える諸課題について整理し、サステイナビリティの実現に向けた将来の社会システムを展望する。</p> <p>（オムニバス形式/全8回） （104 内田 晋/4回） 現代社会の持続不可能性と社会病理、持続社会の思想的潮流、持続可能なまちづくりの潮流、総括 （86 黒田 久雄/1回） 自然共生社会の潮流 （87 伊丹 一浩/1回） 持続可能な地域開発 （111 長澤 淳/1回） 資源・エネルギー・環境問題 （105 北嶋 康樹/1回） 生物種多様性・文化多様性の喪失</p>	<p>オムニバス</p>
	<p>地域サステイナビリティ農学概論</p>	<p>農学の歴史を振り返りながら、農業と科学技術との相互関係を整理して、農学の適応科学的側面を考える。また、国連ミレニアム生態系評価での、人類の地球規模の環境変化の影響による生物多様性の減少が、きれいな水の供給や一次生産といった生態系サービスの劣化を招くとの警告を分析し、土壌のもつ生態系サービスとそれを失う生態リスクの評価について講義する。</p> <p>（オムニバス形式/全8回） （88 小松崎 将一/4回） 地域サステイナビリティとは何か、土壌の生態系サービス、土壌生態系の生物多様性と機能、総合討論 （82 成澤 才彦/4回） 農地生態系と物質循環、アグロエコロジー、国連ミレニアム生態系評価の概要、総合討論</p>	<p>オムニバス</p>
	<p>地球環境システム論 I</p>	<p>地球規模のサステイナビリティ（持続性）を理解する基礎として、地球環境システムの中で大気、海洋、気候システムを対象にして、その概要と温暖化をはじめとする地球規模の問題とその解決策について講義する。この授業では、大気、海洋システムの概要を理解し、気候変動の要因と実態、影響予測について理解し、さらに、温暖化問題の解決策について、科学的な基礎に基づいて考えることができるようになることを目標とする。関連科目は、地球システム論 II。</p> <p>（オムニバス形式/全8回） （80 横木 裕宗/4回） サステイナビリティと21世紀の課題、気候変動の影響予測、対策、温暖化をめぐる国際的な研究と政策 （74 北 和之/4回） 大気システム、気候システム、気候変動の要、人間活動と気候変動</p>	<p>オムニバス</p>

大学院 共通科目 共通科目	地球環境システム論Ⅱ	<p>地圏と生物圏の自然環境に対する人間活動の影響について概観し、環境の保全や生態系の持続的利用の可能性と方策について、いくつかの事例を紹介して考察する。この授業では、地圏と生物圏の成り立ちの概略を理解し、自然環境の持続性と人間活動の影響の関係を事実に基づいて考えることができるようになることを目標とする。</p> <p>(オムニバス形式/全8回) (75 岡田 誠/4回) 天然資源の成因と形成過程1、2、天然資源の利用と環境問題1、2 (124 山村 靖夫/4回) 生物圏のバイオームの成り立ち、生物多様性、生物の絶滅の危機と保全、生態系サービスと持続可能な利用、地球環境変化と生態系への影響</p>	オムニバス
	人間システム基礎論Ⅰ	<p>サステイナビリティ学の中の特に人間システムの部分に焦点を当て、その基本的な理解を促す講義を行う。経済学・社会学・文化人類学・民俗学・社会心理学等がどのように「人間」を捉えるかを例示し、自然科学とは異なる発想と方法論をとる人間科学について理解を深める。そして、人間科学が自分の専門にどう結びついているかを考える。サステイナビリティ学に関する教育の在り方や対話の重要性についても言及する。</p> <p>(オムニバス形式/全8回) (4 伊藤 哲司/2回) オリエンテーション、社会心理学から見た人間システム (95 塚原 伸治/2回) 文化人類学から見た人間システム、民俗学から見た人間システム (31 富江 直子/1回) 社会学から見た人間システム (30 寺地 幹人/1回) 社会学および社会調査から見た人間システム (32 長田 華子/1回) 経済学から見た人間システム (4 伊藤哲司、95 塚原伸治、31 富江直子、30 寺地幹人、32 長田華子/1回) (共同) 最終回に全教員が参加し、ディスカッションを行う</p>	オムニバス 共同 (一部)
	人間システム基礎論Ⅱ	<p>「人間が生き延びる」という視点から人間をシステムの的にとらえることを試みる。第1回ではサステイナビリティ学における人間の位置を確認し、第2回以降、つながりの中にある人間が生き延びることに関わる考え方、行動の仕方について、公衆衛生学、心理学、情報科学、環境科学などの観点から探っていく。最終回は、これから人間が生き延びるための方策について総合討論する。</p> <p>(オムニバス形式/全8回) (73 上地 勝/3回) ガイダンス、人間システムと健康、公害と公衆衛生 (100 関 友作/2回) 震災とインターネット、持続可能な通信ネットワーク (72 阿部 信一郎/2回) 自然と人間社会、自然との共生 (73 上地勝、100 関友作、72 阿部信一郎/1回) (共同) 最終回に全教員で総合討論を実施する。</p>	オムニバス 共同 (一部)

<p style="text-align: center;">大学院 共通科目</p>	<p>Science of Food ～ Function, Processing, Safety～ (食品の科学 ～機能、加工、安全～)</p>	<p>ガイダンスにおいて食品素材として大豆をとりあげ、その特徴とそれを用いた日本の大豆加工食品を紹介した後に、副題に従って様々な食品の機能、食品の加工、食品の安全について専門家の立場から解説する。</p> <p>(オムニバス形式/全8回) (81 白岩 雅和/1回) 食料資源としての大豆と日本の大豆食品 (85 上妻 由章/1回) 食品の機能と機能性食品 (102 豊田 淳/1回) 食品と脳機能 (83 長南 茂/1回) 微生物と発酵食品 (84 宮口 右二/1回) 生活の中の畜産製品 (103 中村 彰宏/1回) 加工食品の品質評価 (106 鈴木 穂高/1回) 食品中の病原菌と毒 (107 鎗田 孝/1回) 食品安全と検査</p>	オムニバス
	<p>テクノロジーと人間社会 I</p>	<p>「科学技術の飛躍的な発展、それに伴う社会の変化への適用力を高めるため、AIを含む科学技術が人間の身体や心理、文化、社会にどのように影響を与えるのかについて、人文科学及び社会科学の多様な観点からの知識を深め、予測が困難な将来社会に各自がどのようなスタンスで望むのかを確立する一助とする。大学院専門委員が取りまとめ担当となり、研究科内の複数の教員によるオムニバス形式にて開講する。</p> <p>(オムニバス形式/全8回) (12 菅谷 克行/ 1回) オリエンテーション：テクノロジーの進展をどのように理解したらよいか (64 西山 國雄/2回) テクノロジーは文化・芸術といった人間の創造的活動を超えるのか テクノロジーの進展は哲学や倫理からどのように捉えられるのか (13 鈴木 栄幸/2回) テクノロジーの進展は地域の社会・組織にいかなる影響を与えるのか テクノロジーは人間の知を超えるのか (5 井上 拓也/2回) テクノロジーをめぐる法制度はいかにあるべきか テクノロジーの進展する社会で政治はどう変わるのか (2 田中 泉/1回) まとめ：テクノロジーの進展する社会に「あなた」はいかにかわるのか</p>	オムニバス
	<p>テクノロジーと人間社会 II</p>	<p>科学の発展に伴う急速な社会変化への適応力を高めるため、科学・技術が人間、文化、社会に及ぼし得る影響について多角的に探究することを目的とする。特に、Society5.0、AI、IoT、ビッグデータなど、世界情勢をめぐるテーマをキーワードとし、テクノロジーと社会をめぐる諸テーマについて、講義と議論を通じて興味関心を高めるとともに理解深化を目指し、多様化する社会におけるコミュニケーション能力を身につける。</p>	
	<p>専門基礎科目</p>	<p>修士論文の基礎となる各自の研究テーマについて、指導教員による指導を通じて固める。修士論文の執筆テーマをもとにした、学生の発表に基づき、授業担当者との討議を行う。研究テーマを深化させながら、研究計画、研究方法等を授業担当者から指導・助言受けながら進める。</p>	
<p style="text-align: center;">共通科目</p>	<p style="text-align: center;">研究科 共通科目</p>		

共通科目	研究科共通科目	持続可能なコミュニティ・デザイン論	「地域志向教育科目」。「多様化するコミュニティ（共同体）の持続的発展」を共通のテーマにして、諸分野の理論と地域における具体的な事例を学習していく。これにより、行政（公共セクター）と市場（民間セクター）の限界を補完する社会セクター（コミュニティ）の存在意義を理解し、その再構築に必要な実際的な知識を習得する。現任者など、外部講師による回もあり、社会人としての姿勢も身につける。	
	キャリア支援科目	英語講読I	英文を批判的に読む訓練を行う。対象とするテキストの英文の構造に着目し、各パラグラフの内容と各パラグラフの関係性を理解し、議論の展開を分析する作業を通して、英文の読解力、ならびに英文の内容を自分の言葉で要約する力を涵養する。あわせて、世界の俯瞰的理解及び国際的コミュニケーション能力を養成する。授業では、担当者が英文のレジюмеを作成し、英文の構造と議論の内容の分析を発表する。その後、受講者全員で意見交換を行う。	隔年
		英語講読II	英語の文章を文章の構造を捉えながら読む訓練。現代英語のさまざまなジャンルのテキストを用いて、英語の文章をパラグラフの構造とパラグラフ間の構造に着目しながら構造的に読む訓練を行う。材料は、さまざまなジャンルの最新の雑誌記事にもとめ、受講者が記事の内容を構造にもとづき要約し、その要約に担当者がコメントを加える形で授業を進める。冊子体の英英辞典必携。英和辞典、電子辞書、ともに使用不可。	隔年
		英文修辞法I	英語で学術論文を執筆する能力を養う。既存の学術論文をサンプルとして参照しながら、毎回のテーマに沿って英語論文の構造と表現および論文の準備から完成までの手順について学んでいくことで、世界の俯瞰的理解及び国際的コミュニケーション能力を養成する。受講者は中間レポートを作成し、互いにピアレビューをしたのち、それに基づいてリライトを行い、学期末には10枚程度の英語論文を完成させる。	隔年
		英文修辞法II	英語学術論文執筆の訓練を行う。学術論文に適した英語表現とパラグラフ構成の方法、論理的な議論の手法を涵養する。まず、学術論文執筆に必要な基本事項（英語学術論文特有の表現、パラグラフの構成、引用方法、体裁）を理解したうえで、各受講者はトピックを選択し、先行研究論文の分析を行い、自分の意見を効果的に主張することを学ぶことで世界の俯瞰的理解及び国際的コミュニケーション能力を養う。また、段階的に草稿を執筆し、提出することが求められる。	隔年
		英語音声表現演習I	現代英語の抑揚の実践的訓練。英語の音声コミュニケーションにおいて、もっとも重要な働きをする抑揚の訓練を行い、最終的に英語で原稿をもとにスピーチの訓練をすることを目的とする。前半では、英語の抑揚の訓練を行い、文末の上げ下げと連動している感情を理解し、音声表現力の基礎を養成する。後半は、前半の基礎を基盤に、スピーチ原稿を作成し、その原稿を自然な抑揚をつけて表現する訓練を行うことにより、世界の俯瞰的理解を深めつつ、多様化する社会におけるコミュニケーション能力を養う。	隔年
		英語音声表現演習II	英語による研究発表に向けた訓練を行う。前半では、音声表現の基礎となる英語の発音を学ぶ。また任意のテキストについての口頭での要約・紹介とそれに対する質疑応答という形で英語音声表現の訓練を行う。後半では、研究発表についての基礎を学んだのち、受講者による発表とそれに対する質疑応答の訓練を行うことにより、世界の俯瞰的理解を深めつつ、多様化する社会におけるコミュニケーション能力を養う。	隔年
		日本語表現法	日本語によるレポート・論文の表現力の育成をはかる。学術論文のタイプや構想の仕方を学び、論理的な文章例読解等を通して、文章の展開方法を意識した作文練習を数回課すことにより、多様化する社会におけるコミュニケーション能力を養い、社会人としての姿勢を身につける。専門分野のレポートを作成する。	共同

共通科目	キャリア支援科目	インターンシップ	主として茨城県内の民間企業や官公庁などの公的機関において、夏季休暇を中心に「2週間（実質10日間程度）」、研修指導者のもとで、就業・実務体験を行うことにより、多様化する社会におけるコミュニケーション能力、そして社会人としての姿勢を身につける。さらに、地域における民間企業や公的機関における現実的課題についての認識を深め、かつ課題解決の能力を習得することを目的とする。実務の中で用いられる知識や技術の一端に触れることにより、自己の就業の指針に活用するとともに、自らの職業適性や将来の職業選択について深く考える。	
		実践的キャリアデザイン論	大学院終了後の「キャリア」をどう作るのか。大学院修了後の希望の「キャリア」を考え、その「キャリア」を実現するために、どのようなステップで考え、活動するのかを考察する授業である。授業はアクティブラーニング型にて行い、「キャリア」について、自己分析や職業理解を通して、社会人としての姿勢を身につける。また、昨今の雇用情勢などについて理解を深めることにより、茨城県内あるいは県外の地域における活性化について目を向ける。	
		高度情報処理	研究発表及び実社会でのプレゼンテーションにおいて、情報を他者に伝達するとき、様々な情報を整理・活用して、的確に伝えることが重要な課題となる。本講義では「伝える」ことを念頭に置き、コンピューターを用いて、(1)論文・報告書作成術、(2)表計算でのデータ解析とグラフ表現、(3)プレゼン資料作成のスキル習得を中心として学修を進める。	
専攻科目	コア専門科目（メディア・情報社会コース）	現代ジャーナリズム研究	ネットを通じて知る機会が増えたとはいえ、信頼性の高さで群を抜くのは新聞、放送で、内外の情報、社会の主要な動きを知るには欠かせない。では、依って立つ、その核心ともいえるジャーナリズムとは一体何なのか。どのような形で情報が収集され、我々に届けられるのか。なぜ、信頼性が高いのか。その論理、倫理は。先般の米大統領選、仏大統領選で話題になった蔓延するフェイクニュースについて考察し、メディアリテラシーの体得に努力する。その後、ジャーナリズムのあり方や役割などを学ぶ。	
		マスコミ研究	現代社会の中で、マスコミ・メディアは、どういった役割を果たしているのだろうか。企業のみならず政府、地方公共団体、さまざまな組織にとってメディア戦略は、その将来を決するような重大な役割を担っているともいえる。現代社会を生き抜く際に必ずかかわってくるメディアについての理解を深めることはかなり大きな意味を持つ。マスコミ関係の書籍の購読を通じてメディアへの理解を深める。	
		ポピュラー文化研究	ポピュラー文化はどのように形成されてきたのか、雑誌などの出版物を通して、それぞれの時代のポピュラー文化について考察する。とくに、少女文化の形成に注目する。明治以降から現在までの少女文化を範囲とし、文献を購読発表し、それについてディスカッションを行う。	
		映像メディア研究	発想するから始まり多くの人の前で上映するまでの一連の映像制作の作業を通し、映像作品の制作と表現の基礎を学ぶ。特に「企画」し「具体化」し、伝える工夫を凝らす「構成」力を養うことに重点を置く。「映像」というメディアを通して、ものの見方、考え方を養い、他でも応用できるリテラシー力を身につける。	
		メディア文化研究	メディアとは何かを考えると、情報伝達の側面としてみるだけでは不十分なことに気づかされる。活字が主張し、映像が魅了するように、印刷技術の登場、ラジオ、テレビ、インターネットといったメディアの技術革新は人々に働きかけ、身体や精神、思想を組み替えてきた。様々なメディア装置（印刷技術、ラジオ、テレビ、映画、インターネット、SNS）の成り立ちを概観しながら、そのメディアがつくりだした「文化」を考える。	

専攻科目 コア専門科目（メディア・情報社会コース）	メディア教育論研究	現代社会におけるメディア教育について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。日々変化を続けているメディア・テクノロジーを教育や学びの諸場面にどのように活用していくべきなのか、それによって教授者と学習者の位置づけや役割はどのように変化するのか、近未来の教育・学習スタイルはどのようなものになると考えられるのか等、複数の視点からメディア教育の現状と将来像について考察する。特に近年急速に普及したスマートフォン・タブレット型端末や電子テキストを活用した教育の方法やその課題・可能性を中心的な題材・事例として、文献講読と議論により理解を深める。	
	電子メディア論研究	現代社会における電子メディア活用の諸場面について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。インターネットに関連する電子メディア・テクノロジーの歴史・背景や、社会への影響力、メディア特性などについて、資料・文献講読やディスカッションを通じて理解深化を目指す。さらに、情報・コンテンツの共有・共感・認知、コミュニケーション、情報の保護や権利などの観点からも考察を加え、高度情報化社会の諸問題について議論・考察する。	
	近代日本メディア史研究	近代日本における新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどマスメディアの歴史について考える授業。各時代のマス・コミュニケーションがどのようなものであったかを、できるだけ現物資料を用いて考察していく。マス・コミュニケーションの原理を歴史的な比較を通じて理解し、それによって現在のマスメディアに対する批判的視点を手に入れることを目標とする。授業は教員による講義形式を基本とするが、適宜、受講者どうし、および受講者と教員によるディスカッションを交えつつ進める。	
	映像広告論研究	日本におけるテレビコマーシャルの歴史（1950年代から1990年代）を映像資料・文献資料に基づいて解説する。また、映像資料および放送関係の文献資料についてその性質を理解し、扱いに習熟する。授業は教員による講義と、受講者どうしおよび受講者と教員によるディスカッションを適宜組み合わせで行う。	
	学習デザイン論研究	学習科学や認知科学の視点から人がどのように学習するのかについて理解し、学習を支援し促すための道具や物理的環境、人間関係をどのように設計したらよいかについて考える。学習に関わる理論としては状況的学習、学習環境設計に関しては活動理論、デザイン実験アプローチ等を取り上げる。授業は、講義、文献購読、デザイン実習により進める。	
	情報デザイン研究	我々は日々の生活の中で自分達の生きる現実をデザインしつづけている。そのデザイン活動が、どのような道具を用いて、どんな風に行われているのかについて、人工物による媒介、実践コミュニティへの参画といった社会構成主義的な視点から考える。また、人と人、人と機械のコミュニケーションの成り立ちをインタラクションとヒューマンインタフェースの視点から考え、その支援方法について議論する。文献講読とプロジェクト型活動により授業を進める。	
	コミュニケーションデータ分析研究	コミュニケーションに関する社会学的なデータ分析の方法を学び実証研究の具体例に触れることで、社会調査の方法論やデータ分析の手法を身につけるとともに、先行研究にあらわれたデータの分析・解釈について適切に評価・判断できるようになることを目指す。	

専攻科目	コア専門科目 情報社会コース (メディア)	コミュニケーション社会学研究	現代社会における人々の日常的なコミュニケーションの特質や問題点を社会学的な視点や方法論から理解するために、当該領域の主要な先行研究やデータなどの資料を読み、それについて履修者がレポートし、参加者全員で質疑応答を行う。	
	コア専門科目 (国際・地域共創コース)	多文化コミュニケーション論研究	多文化コミュニケーションの基礎理論を概観した上で、現存する具体的諸問題を把握し、クリティカルに議論していく。さらに、多様な背景をもつ人々が相互に理解し共に生きていくために、人と人、人と地域社会がどのように関わっていけばよいのか、その要因とこれからの課題を文献と映像から捉えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)多文化コミュニケーションに関する基礎理論を理解し、視野を広げることができる。 (2)多文化コミュニケーションに関する様々な具体的問題をクリティカルに議論することができる。	
		多文化関係学研究	多文化共生に関する基礎理論を概観した上で、国際社会と日本の関わり、日本の「内なる国際化」の現状と課題を中心に検討していく。それらを踏まえた上で、地域の多文化共生実現に向けて実行可能な取り組みを具体的に考えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)異文化間教育／多文化教育に関連する具体的事例、課題について理解することができる。 (2)多文化共生社会の実現に向けて、現在および将来的に自分ができることを具体的に考えることができる。	
		グローバル化と地域開発研究	グローバル化と地域開発について、人の移動（移民・難民等）や財・サービス・資金等の移動に着目し、国際交流・地域間交流をふまえて、地球規模課題と地域課題との関係について多角的に分析する。また、グローバル化する地域社会の持続可能な開発にむけて、多層性・多様性に注目し、理論的・実践的に研究する。	
		持続可能な開発とSDGs研究	国際社会全体が取り組む国連総会で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」およびこれに含まれるSDGs（持続可能な開発目標）を軸に、「誰一人取り残さない」共生社会に向けた現状と課題についてグローバル＋ローカルに、国際開発・国際協力、国内政策およびこれらの関連に着目し、事例等も踏まえて理論的・実践的に研究する。持続可能な開発・SDGsの3本柱である経済・社会・環境の調和のとれた持続可能性にかんがみ、行政・企業・市民社会等ステークホルダーの役割とパートナーシップについて検討する。	
		社会行動論研究Ⅰ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から世界を見渡し地域に根ざしたフィールドワークを用いた研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。フィールドワーク論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年
		社会行動論研究Ⅱ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から俯瞰的な視野と地域への足場を基本とするエスノグラフィックな研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。エスノグラフィック論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年

専攻科目	コア専門科目 (国際・地域共創コース)	社会行動論演習Ⅰ	日本だけでなくアジア（韓国・中国・台湾・ベトナムなど）で行われている質的研究に触れ、自身の研究を捉え直すことができる。異なる文化の研究とコミュニケーションを一社会人として図ることができる。テキストの他に質的研究の学術論文を読み込み、その問題の立て方、方法論の選択、結果から考察への展開を読み解く。	隔年
		社会行動論演習Ⅱ	映画を媒介とした対話、すなわち円卓シネマという実践・方法を、他の場面で応用し展開できるようになる。実際に日本以外も含めた世界の映画を取り上げ、それをめぐる対話を重ねる試みを行い、そこで紡ぎだされる事柄を質的に捉え分析する試みを一社会人として行えるようにする。	隔年
		スポーツ社会研究Ⅰ	スポーツが地域社会に果たす機能や役割について理解を深めたいうえで、海外の文化・歴史や教育制度との比較を通じて、現在日本で生じているスポーツ活動にかかる諸問題や課題について考察する。具体的には、運動部活動と地域クラブの連携、プロスポーツの地域共創への影響、スポーツとメディアの関係等であり、職場におけるコミュニケーション促進に寄与する。	
		スポーツ社会研究Ⅱ	世界的にスポーツ指導の現場では、発育発達段階に応じたアスリートセンタードの理念に基づいたコーチングが推奨されている。コーチングはスポーツの場面ばかりではなくあらゆる組織で注目されており、21世紀型能力の育成には欠かせない。事例等を交えながらチームづくりと組織づくりについて考察し、職場におけるプロジェクト運営に寄与する。	
		国際政治学研究Ⅰ	本講義では、受講者が、伝統的な安全保障概念とその国際政治上の問題について理解することを目標とする。なぜ、一見して非合理的な戦争という政策がたびたび選択され、そのための準備に莫大な資源が投入されるのか、またなぜ軍縮が難しいのか。そこで実現する「平和」のために安全保障論が何を論じてきたのかを理解できるようにする。 本講義では国際政治学における支配的なパラダイムのひとつである安全保障(security)の問題について検討する。現在の安全保障は、人間安全保障に代表されるように、政治から環境や気候変動、経済やエネルギーなど、概念を多様化・拡大化させている。その一方で、伝統的な安全保障概念を維持するべきという意見も根強い。このような転換期にある安全保障パラダイムについて、根本から再検討を試みる。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。	
		国際政治学研究Ⅱ	本講義では受講者は授業でとりあげた国際政治のもっとも現在のなトピックである開発(development)について、その基礎的な知識を得るだけでなく、自らの専門的な見地から課題や問題点を見つけ、それらにたいして、一定の解決案を提示できるようになることが求められる。 本講義では国際政治学におけるもっとも重要なパラダイムである開発と安全保障の中から、開発をとりあげる。前期の安全保障についての議論とその成果もふまえて、開発についての検討を中心に平和学の視覚からも探求を深める。とくに、現在の地球環境問題を巡る国際政治の転換期において、それらのパラダイムがどのような変容をとげつつあるかに着目して議論を進める。また、開発と安全保障の概念的な共通点にも注目して、現代世界におけるパラダイムの本質についての考察を深める。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。	

専攻科目	コア専門科目（国際・地域共創コース）	地方政治論研究 I	地方政治をめぐる先行研究の流れを把握し、最新の研究成果について理解する。地方政治および地方自治研究の系譜について確認し、最新の研究成果と研究手法について検討する。また政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。地方議会および地方政党組織の実態について検証し、中央政治とのリンケージについても考察する。	
		地方政治論研究 II	地方政治研究の最近の動向を追う。また、政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。また最新の研究はどのような方法を用いているのかについても検討する。	
		社会地理学研究 I	人間と空間・環境との関係を考察する人文地理学の考え方と理論について学んだ上で、とくに都市に焦点をあてた「都市地理学」の分野について講義を行う。 世界には民族、社会階層、ジェンダーなど多様な人びとが共存し、最新技術や文化・情報が集約する一方で、スラム地域を内包する都市は、現代社会の諸問題が凝縮している。都市の形成・発展・衰退・再生の過程および社会空間構造を把握した上で、社会問題解決に向けてどのような方法があるか理論的に学ぶと共に自ら実践する方法を共に考える。	
		社会地理学研究 II	世界および日本における諸地域の社会構造と空間との関係について学ぶ。社会的な差異や格差がどのように空間的に反映されるのかについて、文献輪読を通じて社会地理学的な理論を学んだ上で、環境、文化、宗教、人種・民族、社会制度、政治経済体制など様々な社会的要因がもたらす地域的差異について事例を挙げて考察する。そうした格差や差異がローカルな要因のみでなくグローバルな要因からも分析していく方法を習得する。授業では、該当地域を巡検することを通じて、その差異がいかに空間的に反映されているかを観察し問題を把握する。	
		経済地理学研究 I	現代における社会・経済構造の変容がもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方の都市・農村地域において深刻化しているフードデザート（食の砂漠）問題を中心に挙げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。問題を客観的に分析するために、地域統計を用いた地域分析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
		経済地理学研究 II	経済地理学に関わる都市・地域問題、特に地域の人口減少問題や地域活性化について、その現代における社会・経済構造の変容がもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方において深刻化している人口減少問題や地域活性化に向けた課題を中心に挙げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。特に、空間データや統計データを用いたGIS（地理情報システム）による空間解析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
		地域社会論研究 I	台湾史に関する基礎的文献を輪読しながら、台湾の地域社会の成り立ちを移民社会、植民地化、脱植民地化といったキーワードから理解する。また、台湾という地域の研究において何が問題となってきたのか、また台湾がどのような地域としてとらえられてきたのかを理解する。	

専攻科目 コア専門科目 (国際・地域共創コース)	地域社会論研究Ⅱ	台湾の政治社会に関する基礎文献を輪読しながら、ローカルレジームがどのように形成され、また民主化、台湾化以後どのように変容しているのかを考察する。	
	環境社会学研究Ⅰ	持続可能な社会の構築のための環境ガバナンスの在り方、環境ガバナンスを支える民主主義の在り方などについて、海外の事例を含め議論の背景、専門家の役割、シティズンシップ論の観点から考察する。	
	環境社会学研究Ⅱ	環境リスク社会と言われる現在、国内・海外において環境運動がどのように進展し、政策的にどのような応答があったのかを考察する。リスクと社会的不平等について、国際的な視点をもちつつ社会構造的に考察する。	
	社会事業史研究Ⅰ	日本の近代を中心に、社会事業の歴史を歴史社会学の方法と視点で学ぶ。まず歴史社会学的研究の方法を、テキストや先行研究を通じて学ぶ。これを踏まえて、貧困と生存権をめぐる思想、理論、および実践を、近代化・現代化の過程のなかに位置づけて考察する。前近代の社会における救済と相互扶助、近代化の過程で形成されていった公的な救済制度、戦争と社会福祉、第二次世界大戦後の改革などが主な論点となる。	
	社会事業史研究Ⅱ	社会事業史研究の基礎として、「シティズンシップ」「生存権」「福祉国家」「貧困」の概念と学説を学び、公的扶助の歴史の概要を理解する。これらを踏まえて、イギリスの救済制度、福祉国家、および民間の慈善事業の歴史を学び、日本の社会事業史と比較しながら、貧困をめぐるさまざまな思想と実践を知る。そして、国家、市民社会、共同体と個人との関係に関わるテーマを、歴史社会学の視点から考察する。	
	社会調査法研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査の基本的な考え方や調査技法の本質的特徴について理解するために、テキスト購読を行う。(2)各履修者の研究について検討するとともに、それを素材にして研究法や方法論に関わる議論を行う。	
	社会意識論研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査に関する基礎的な知識を身につけ、社会意識の調査・研究を必要な際に行えるよう、基礎固めをする。(2)社会科学の研究に必要な社会調査データの扱い方を社会意識論研究を参照しつつ身につける。	
	地誌学研究Ⅰ	地誌学は特定の地域における自然環境や社会・経済環境、および歴史・文化環境の総合的な分析であり、近年求められている「総合性」をもつ学問である。本講義では、いま一度、「総合性」をもつ学問としての地誌学を整理する。さらに地域スケールの異なる事例研究を設定し、地誌学的な分析によって地域の性格を解明することで、地誌学の基本的な考え方や方法論を学ぶ。	
	地誌学研究Ⅱ	本講義は、人間の経済活動のなかで、観光や余暇活動をはじめとしたツーリズムの現象を取り上げ、それらを地域活性化に関係させながら、地誌学の立場から検討する。具体的には、ツーリズムや地域活性化に加えてポスト生産主義をキーワードとし、世界中でみられるようになったポスト生産主義的な観点からのツーリズムを媒介とした地域活性化の仕組みとについて検討する。	
	家族社会学研究Ⅰ	ジェンダー論を軸にして家族社会学分野の研究と地域社会学分野の研究を架橋する作業を行う。具体的には、ネットワーク論、社会関係資本論などの研究動向をふまえつつ、震災・原発事故の事例研究を通じて家族社会学と地域社会学の融合的アプローチを学ぶ。	
家族社会学研究Ⅱ	少子化対策や高齢社会対応と関連して展開されている日本の男女共同参画政策について、家族社会学や地域社会学分野の先行研究をふまえて批判的に考察を加える。具体的には、少子化対策についての先行研究をふまえて、日本、EU諸国、国連等のジェンダー政策、家族政策、人口政策の事例を検討する。		

専攻科目	コア専門科目（国際・地域共創コース）	環境政策・経済学研究I	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の回数にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 学生にはIPCC(気候変動に関する政府間パネル)報告書の輪読、適応情報プラットフォーム(http://www.adaptation-platform.nies.go.jp)等の情報整理を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
		環境政策・経済学研究II	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の回数にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 気候変動、エネルギーに関する論文輪読、データ解析を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
		憲法研究 I	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討する。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。	
		憲法研究 II	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討を行う。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。	
		民法研究A I	各受講者が民法を中心に、家族法の問題についてそれぞれテーマを設定し、毎回調査報告を行ってもらおう。本授業では、民法の成立過程および法改正を中心に調査報告してもらおう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらおう。	
		民法研究A II	各受講者が民法を中心とした家族法に関する問題についてそれぞれテーマを設定し、そのテーマについて諸外国の法制度について調査し、比較法的考察を行ってもらおう。受講者には、毎回調査報告を行ってもらおう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらおう。	
		民法研究B I	民法（物権法）の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法（物権法）という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、所有権、抵当権、区分建物所有、登記制度、担保制度。	
		民法研究B II	民法（債権法）の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法（債権法）という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、契約、債務不履行、売買、賃貸借、金銭消費貸借、連帯債務、保証制度。	
	刑法研究 I	刑法について研究する。いわゆる刑法総論および刑法各論といった実体刑法を対象とする。もちろん、刑法典以外の様々な特別法も検討対象に含まれる。 学部教育における実体刑法に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。		

専攻科目 コア専門科目 (法学・行政学コース)	刑法研究Ⅱ	実体刑法以外の刑事法の諸分野について研究する。刑法総論各論以外の、刑事訴訟法や刑事政策学を対象とするが、憲法等の関連分野も視野に入れて検討する。 学部教育における刑事訴訟法等に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。	
	商法・経済法研究Ⅰ	商法および会社法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたい。特に、株式会社をめぐる現代的な課題について学ぶ。具体的には株式会社に関する定めを整理し、現行制度の問題点の所在を確認し、崩壊背の方向性について考える素養を身につけることを目的とする。	
	商法・経済法研究Ⅱ	経済法および知的財産法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたい。わが国の法令の特徴及び独禁法・知的財産法の世界潮流を把握するために米国・欧州共同体の法令をも検討対象とする。経済法および知的財産法の領域における国内外の日々の事件について自ら分析・評価できようになることを目標とする。	
	労働法研究Ⅰ	国際化、多様化が進み社会が大きく変化中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働者及び使用者の概念、採用内定、試用期間、公務員の労働基本権、職場における男女の平等、就業規則による労働条件決定と変更、賃金、労働時間。	
	労働法研究Ⅱ	国際化、多様化が進み社会が大きく変化中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働災害・通勤災害、昇格及び降格、配転、出向、転籍、解雇、有期契約労働、パートタイム労働、労働者派遣。	
	社会保障法研究Ⅰ	社会保障法分野の内、授業の前半は医療保険を、後半は年金保険を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会保険（医療保険・年金保険）法制度を理解する。また、社会保険（医療保険・年金保険）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会保険（医療保険・年金保険）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	
	社会保障法研究Ⅱ	社会保障法分野の内、授業の前半は社会福祉を、後半は生活保護を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会福祉・公的扶助（生活保護）法制度を理解する。また、社会福祉・公的扶助（生活保護）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会福祉・公的扶助（生活保護）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	

専攻科目	コア専門科目（法学・行政学コース）	行政法研究Ⅰ	行政法研究Ⅰの授業では、行政法の基本理論について学びながら、社会問題に対する洞察を深めていくことにする。行政の主要領域である、社会保障行政、教育行政等をテーマとして、それぞれの公共政策上の問題を、行政法的な視点から検討を行っていくこととする。	
		行政法研究Ⅱ	行政法研究Ⅱの授業では、国・公共団体と国民・住民との間で法的紛争が生じた場合の行政法学上の諸問題について、分析、検討を行うこととする。行政不服審査の案件となっている事例や裁判例を素材として扱う予定である。	
		比較法研究Ⅰ	1. 比較法の研究領域がミクロとマクロの二つの領域からなり、それぞれに固有な研究方法を学ぶ。 2. 明治期のわが国の法制度に大きな影響を与えたドイツ法が、ローマ法や自然法とどのような関係をもって生成し、その固有な発達を遂げたかを、歴史的な観点をもとに考察する。	
		比較法研究Ⅱ	1. わが国の法制度に大きな影響を与えた英米法と大陸法を歴史的な観点から考察する。 2. イギリス法、アメリカ法、フランスの特色を、歴史、法の様式、特色ある法制度などの観点から明確にする。	
		国際法研究Ⅰ	特定の人権問題について、日本の裁判例とヨーロッパ人権裁判所の裁判例を比較し、国際人権法の観点からみた日本の課題について考える。具体的には、ヨーロッパ人権条約及び裁判所の仕組み等について概観した上で、拷問の禁止をはじめ、ノン・ルフールマンの原則と犯罪人引渡しや退去強制、被拘禁者の処遇、性暴力からの保護など、さまざまな人権問題について判例を通して検討する。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、日本の判例およびヨーロッパ人権裁判所の判例について調査し、比較できるようにすることを目指す。	
		国際法研究Ⅱ	国際人権法を実施するための国内的・国際的な人権保障システムの現状を確認し、課題について検討する。具体的には、国際人権法における国内の実施及び国際の実施のためのさまざまな制度を概観した上で、人権条約の報告制度とその課題、個人通報制度と調査制度、国連の人権活動、そして、人権の地域的保障について学ぶ。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、国内的・国際的な人権保障システムについて理解し、課題について検討できるようにすることを目指す。	
		行政学研究Ⅰ	本科目では、行政学理論と行政研究の方法論について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	
		行政学研究Ⅱ	本科目では、行政研究の方法論と行政の実態について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	

専攻科目	コア専門科目（法学・行政学コース）	公共政策論研究 I	公共政策は、公共財の供給、公共利益・公益（不特定多数の人々の利益）の実現、公共サービスの提供、公的問題の解決などを目的とする。その担い手は、「新しい公共」が喧伝される今日、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、新公共管理論（NPM）の考え方を批判的に検討しつつ、公共政策を3つのセクターの組織の視点、とくにそれらが構成員に提供する選択的誘因の点からも考えたい。	
		公共政策論研究 II	「新しい公共」が喧伝される今日、公共政策の担い手は、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、3つのセクターの中でもとくにサードセクターに着目し、日本の様々なNGO/NPO、具体的には非営利法人を、法人の設立と税制上の優遇措置の点から検討していく。	
		公共哲学研究 I	公共哲学の中心潮流およびアプローチについて概観する。前半では、現代の公共哲学、政治哲学の復活に寄与した20世紀の代表的な政治哲学者を取り上げた後、後半では、現在の主要な潮流および論点を概観する。	
		公共哲学研究 II	古典的な文献の読解を通じ、西洋を中心とした公共哲学・政治哲学に対して、歴史的な理解を得るとともに、これら古典が現代の理論研究に対してどのような貢献を加えているかを学ぶ。	
	コア専門科目（経済学・経営学コース）	理論経済学研究 I	マクロ経済学、短期モデル、新しいケインジアン、財政政策、金融政策 経済成長など、標準的なマクロ経済学の理論について講義を行い、マクロ経済学の標準的なモデルについて理解する。	
		理論経済学研究 II	ゲーム理論について、主に、Nash均衡解、協力ゲーム、非協力ゲームなど、ミクロ経済学の標準的なツールとしてのゲーム理論について学び、ゲーム理論の基本的な考え方を身につけ、Nash均衡解などの概念を利用できるようにする。	
		経済統計研究 I	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には、国民経済計算体系（SNA）と産業連関表の基本構造を理解した上で、地域経済分析システム（RESAS）を用いた地域経済構造分析や、市町村レベルの産業連関表を作成して経済効果の試算を行う。	
		経済統計研究 II	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には確率・統計学の基本知識、手法を復習した上で、EXCELやgretl等の計量経済分析ソフトを用いて回帰分析を中心とした計量経済学的実証分析ができるようになることが目的である。	
		経済政策研究 I	現代日本の経済政策について幅広く学ぶ。受講者には、課題文献のレジュメ作成だけではなく、関連する政策問題に関するレポート報告を求める。主目標は、①日本の経済政策の概要を知ること。②日本の経済政策の現代的な課題について、経済学的に考えることができることの2点。	
		経済政策研究 II	政策評価・行政評価の理念と方法を学ぶ。自治体評価、中央政府の政策評価、非営利民間組織の社会的インパクト評価等において、信頼できるデータやエビデンスに基づいてバイアスの小さい評価を実践するための基礎的方法論の習得を目指す。	

専攻科目 コア専門科目（経済学・経営学コース）	財政学研究 I	現代財政について、制度・歴史・国際比較などの手法による幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題について考察する。 本演習では、とりわけ税制改革をめぐる各国の国際的動向について講義し、国内外の事例についてディスカッション・発表を行うものとする。	
	財政学研究 II	現代財政について、制度・歴史・国際比較など手法も用いた幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題を考察する。 本演習ではとりわけ、予算・社会保障に関する国際的動向を重視した講義を行い、それらを踏まえ国内外の事例についてのディスカッション・発表を行う。	
	金融論研究 I	金融論の基礎知識の理解に主眼を置きながら、併せて学んだ知識をベースに時事問題にも関心を持ち、自分なりに考える力を身につける。講義では、レジュメの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。主な講義内容は以下である。通貨の機能、金融機関の種類と機能、茨城県の金融マップ、フィンテック、資産の証券化、資金循環勘定、金融政策、金融行政、プルーデンス政策。	
	金融論研究 II	金融論の知識をベースに、具体的な問題を、グローバルに、日米比較をしながら考えていく。講義では、テキストの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。講義内容は以下である。これからの金融機関に求められるものは何か～協働・協創のエコシステムの世界で。地元資本が支えるアメリカ経済～「メインストリート」金融の強みに学ぶ。地域の疲弊を転換させる地域金融を目指して～日々の取り組みに息吹を吹き込む。	
	労働経済論研究 I	働き方改革と女性活躍推進をテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に取り扱う。	
	労働経済論研究 II	日本社会に生じているワーク・ライフ・バランスをテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に取り扱う。	
	経営管理論研究 I	本講義では、修士レベルの組織行動論（organizational behavior）に関する基礎的な概念や理論を学習することを目的とする。企業・組織内の個人や集団を対象とし、心理学や意思決定論、社会学の知見を援用しながら、日本語および英語の文献を輪読する。具体的なトピックとして、パーソナリティ、態度、感情、認知、信頼、リーダーシップなどが挙げられる。報告者の発表を土台とし、受講者間の議論を深めることで、新たな視点への気づきや修士論文のテーマ策定に役立てる。	
	経営管理論研究 II	本講義では、経営管理論 I を踏まえ、組織行動論に関する研究論文や文献（主に英語）を輪読し、より専門的な知識や研究手法の理解、論文執筆の基礎を学ぶことを目的とする。本講義では、専門的な知識の習得のみならず、当該論文ではどのように研究をデザインし、どのような手法を使って実証しているのかを理解することで、自分自身が研究を実施するための手法を考える基盤を作る。最終的には、自分自身で組織行動に関する研究の問いを導出し、問いに対してどのような研究デザインを行うかを考え、修士論文執筆に活かせるようにする。	

専攻科目 コア専門科目 (経済学・経営学コース)	マーケティング論研究 I	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学とって過言ではない。その知見は企業経営への影響を強める一方、近年は顧客との新たな関係が注目され、互いの影響力をどう捉えるかが重要になっている。そこで過去のマーケティング研究から近年の動向までを概観し、マーケティングの未来を展望する。	
	マーケティング論研究 II	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学とって過言ではない。本講座はマーケティング論研究 I で概観した学術的な傾向を踏まえ、それらがもたらす新たな視点とはどのようなものかについて、さらなる検討を進めていく。とりわけ、主体間の構造という視点から関係を捉え、影響や効果からマーケティング活動の体系を展望する。	
	管理会計論研究 I	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。I では、マネジメント・コントロールの基本概念と責任センターを中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書の学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
	管理会計論研究 II	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。II では、戦略策定、予算編成、業績評価を中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書の学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
	監査論研究 I	財務諸表監査について研究する。 株式会社の利害保持者に開示される財務諸表の適正性を保証するのが財務諸表監査である。財務諸表の適正性を保証する財務諸表監査の基本的な仕組みを考察し、利害保持者の利害がいかんして調整されるのかを研究する。	
	監査論研究 II	財務諸表監査制度と監査手続について研究する。 我が国における財務諸表監査制度である、金融商品取引法監査と会社法に基づく監査とそれぞれに基づく具体的は監査手続について研究する。	
	経営戦略論研究 I	本講義の目的は、(1)経営戦略論の基本的知識を習得し、(2)経営戦略の考え方を身につけて企業経営を研究できるようになることにある。 そのために、本講義では、経営戦略論の基本的な知識を習得するため、多様なトピックに触れた経営戦略論の教科書を輪読し、背後にある考え方を身につけるために、内容についての議論を行う。	
	経営戦略論研究 II	本講義の目的は、経営戦略論の古典を取り上げることで、研究における議論の進め方を習得することにある。 そのために、本講義では経営戦略論の古典を輪読する。内容の理解とともに、とりわけ優れた古典の輪読を通じて、(1)分析のフレームワークや(2)研究の論理的な構成についても議論を行う。	
	アジア経済論研究 I	本講義の内容は、2008年のグローバル金融危機以降のアジア経済の「躍進」を消費という切り口から考えるものである。本講義の到達目標は(1) 2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、(2) 各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、(3) 自己の研究課題を設定する、の3点である。授業は初回のオリエンテーションと第15回のまとめを除き、テキストとして指定した『アジアの消費—明日の市場を探る』、大木博巳編著、ジェトロを輪読し、受講生とともに議論するという形式で進める。	

コア専門科目 (経済学・経営学コース)	アジア経済論研究Ⅱ	2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を「消費」という切り口から考える。教科書を用いた輪読形式で授業を進める。2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、自己の研究課題を設定することを講義の主眼とする。	
	日本経済史研究Ⅰ	日本経済史でこれまでに明らかにされてきた知識・知見や、これまでの研究史について理解を深める。そのために、日本経済史の通史を輪読(受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論)する。	
	日本経済史研究Ⅱ	日本経済史研究の方法論と資料論に関する知識を身に付ける。そのために、日本経済史研究の方法論と資料論に関する文献を輪読(受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論)する。	
コア専門科目 (地域政策研究(社会人)コース)	特定テーマ演習	「地方創生」「中心市街地活性化」「地域資源活用」「農商工連携」「観光入込客数増大」など、地域経済の振興や発展を考えるためには、さまざまな視点による検討が不可欠である。そこで本講座では、テーマに沿った講師による実践的な課題の検討を進めていく。幅広い議論を通じて未来を展望するとともに、問題解決に必要な視点の考察を通じて、応用的な思考能力を身につける。授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	
	地域資源活用研究法	茨城県下の市町村から特定の研究対象を選定し、その地域の課題の解決に向けた調査・研究を行う。地域連携や地域貢献を特色とする本演習は、地域に根差した調査・研究を重視する。調査の成果はレポート等にまとめるとともに、学内あるいは現地で報告会を行う。授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	
	地域連携創生研究演習	既存資料の収集・分析と行政計画のレビューをふまえ、地域の多様なステークホルダーからのヒアリングを行い地域課題等を明確にし、その解決に向けて地域資源を活用した地域創生に資する条例等の政策形成をめざし研究を行う。その上で、自治体、民間企業、NPO法人等の多様な主体が参加するワークショップでの議論を通じ、多面的に解決策を検討する。	
拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	多文化コミュニケーション論研究	多文化コミュニケーションの基礎理論を概観した上で、現存する具体的諸問題を把握し、クリティカルに議論していく。さらに、多様な背景をもつ人々が相互に理解し共に生きていくために、人と人、人と地域社会がどのように関わっていけばよいのか、その要因とこれからの課題を文献と映像から捉えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)多文化コミュニケーションに関する基礎理論を理解し、視野を広げることができる。 (2)多文化コミュニケーションに関する様々な具体的問題をクリティカルに議論することができる。	
	多文化関係学研究	多文化共生に関する基礎理論を概観した上で、国際社会と日本の関わり、日本の「内なる国際化」の現状と課題を中心に検討していく。それらを踏まえた上で、地域の多文化共生実現に向けて実行可能な取り組みを具体的に考えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)異文化間教育/多文化教育に関連する具体的事例、課題について理解することができる。 (2)多文化共生社会の実現に向けて、現在および将来的に自分ができることを具体的に考えることができる。	
	グローバル化と地域開発研究	グローバル化と地域開発について、人の移動(移民・難民等)や財・サービス・資金等の移動に着目し、国際交流・地域間交流をふまえて、地球規模課題と地域課題との関係について多角的に分析する。また、グローバル化する地域社会の持続可能な開発にむけて、多層性・多様性に注目し、理論的・実践的に研究する。	

専攻科目 拡充専門科目（メディア・情報社会コース）	持続可能な開発とSDGs研究	国際社会全体が取り組む国連総会で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」およびこれに含まれるSDGs（持続可能な開発目標）を軸に、「誰一人取り残さない」共生社会に向けた現状と課題についてグローバル＋ローカルに、国際開発・国際協力、国内政策およびこれらの関連に着目し、事例等も踏まえて理論的・実践的に研究する。持続可能な開発・SDGsの3本柱である経済・社会・環境の調和のとれた持続可能性にかんがみ、行政・企業・市民社会等ステークホルダーの役割とパートナーシップについて検討する。	
	社会行動論研究Ⅰ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から世界を見渡し地域に根ざしたフィールドワークを用いた研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。フィールドワーク論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年
	社会行動論研究Ⅱ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から俯瞰的な視野と地域への足場を基本とするエスノグラフィックな研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。エスノグラフィック論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年
	社会行動論演習Ⅰ	日本だけでなくアジア（韓国・中国・台湾・ベトナムなど）で行われている質的研究に触れ、自身の研究を捉え直すことができる。異なる文化の研究とコミュニケーションを一社会人として図ることができる。テキストの他に質的研究の学術論文を読み込み、その問題の立て方、方法論の選択、結果から考察への展開を読み解く。	隔年
	社会行動論演習Ⅱ	映画を媒介とした対話、すなわち円卓シネマという実践・方法を、他の場面で応用し展開できるようになる。実際に日本以外も含めた世界の映画を取り上げ、それをめぐる対話を重ねる試みを行い、そこで紡ぎだされる事柄を質的に捉え分析する試みを一社会人として行えるようにする。	隔年
	スポーツ社会研究Ⅰ	スポーツが地域社会に果たす機能や役割について理解を深めたいうえで、海外の文化・歴史や教育制度との比較を通じて、現在日本で生じているスポーツ活動にかかる諸問題や課題について考察する。具体的には、運動部活動と地域クラブの連携、プロスポーツの地域共創への影響、スポーツとメディアの関係等であり、職場におけるコミュニケーション促進に寄与する。	
	スポーツ社会研究Ⅱ	世界的にスポーツ指導の現場では、発育発達段階に応じたアスリートセンタードの理念に基づいたコーチングが推奨されている。コーチングはスポーツの場面ばかりではなくあらゆる組織で注目されており、21世紀型能力の育成には欠かせない。事例等を交えながらチームづくりと組織づくりについて考察し、職場におけるプロジェクト運営に寄与する。	

専攻科目 拡充専門科目（メディア・情報社会コース）	国際政治学研究Ⅰ	<p>本講義では、受講者が、伝統的な安全保障概念とその国際政治学上の問題について理解することを目標とする。なぜ、一見して非合理的な戦争という政策がたびたび選択され、そのための準備に莫大な資源が投入されるのか、またなぜ軍縮が難しいのか。そこで実現する「平和」のために安全保障論が何を論じてきたのかを理解できるようにする。</p> <p>本講義では国際政治学における支配的なパラダイムのひとつである安全保障(security)の問題について検討する。現在の安全保障は、人間安全保障に代表されるように、政治から環境や気候変動、経済やエネルギーなど、概念を多様化・拡大化させている。その一方で、伝統的な安全保障概念を維持すべきという意見も根強い。このような転換期にある安全保障パラダイムについて、根本から再検討を試みる。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。</p>	
	国際政治学研究Ⅱ	<p>本講義では受講者は授業でとりあげた国際政治のもっとも現在のトピックである開発(development)について、その基礎的な知識を得るだけでなく、自らの専門的な見地から課題や問題点を見つけ、それらにたいして、一定の解決案を提示できるようになることが求められる。</p> <p>本講義では国際政治学におけるもっとも重要なパラダイムである開発と安全保障の中から、開発をとりあげる。前期の安全保障についての議論とその成果もふまえて、開発についての検討を中心に平和学の視覚からも探求を深める。とくに、現在の地球環境問題を巡る国際政治の転換期において、それらのパラダイムがどのような変容をとげつつあるかに着目して議論を進める。また、開発と安全保障の概念的な共通点にも注目して、現代世界におけるパラダイムの本質についての考察を深める。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。</p>	
	地方政治論研究Ⅰ	<p>地方政治をめぐる先行研究の流れを把握し、最新の研究成果について理解する。地方政治および地方自治研究の系譜について確認し、最新の研究成果と研究手法について検討する。また政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。地方議会および地方政党組織の実態について検証し、中央政治とのリンケージについても考察する。</p>	
	地方政治論研究Ⅱ	<p>地方政治研究の最近の動向を追う。また、政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。また最新の研究はどのような方法を用いているのかについても検討する。</p>	
	社会地理学研究Ⅰ	<p>人間と空間・環境との関係を考察する人文地理学の考え方と理論について学んだ上で、とくに都市に焦点をあてた「都市地理学」の分野について講義を行う。</p> <p>世界には民族、社会階層、ジェンダーなど多様な人びとが共存し、最新技術や文化・情報が集約する一方で、スラム地域を内包する都市は、現代社会の諸問題が凝縮している。都市の形成・発展・衰退・再生の過程および社会空間構造を把握した上で、社会問題解決に向けてどのような方法があるか理論的に学ぶと共に自ら実践する方法を共に考える。</p>	
	社会地理学研究Ⅱ	<p>世界および日本における諸地域の社会構造と空間との関係について学ぶ。社会的な差異や格差がどのように空間的に反映されるのかについて、文献輪読を通じて社会地理学的な理論を学んだ上で、環境、文化、宗教、人種・民族、社会制度、政治経済体制など様々な社会的要因がもたらす地域的差異について事例を挙げて考察する。そうした格差や差異がローカルな要因のみでなくグローバルな要因からも分析していく方法を習得する。授業では、該当地域を巡検することを通じて、その差異がいかに空間的に反映されているかを観察し問題を把握する。</p>	

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	経済地理学研究 I	現代における社会・経済構造の変容をもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方の都市・農村地域において深刻化しているフードデザート(食の砂漠)問題を中心に取り上げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。問題を客観的に分析するために、地域統計を用いた地域分析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
	経済地理学研究 II	経済地理学に関わる都市・地域問題、特に地域の人口減少問題や地域活性化について、その現代における社会・経済構造の変容をもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方において深刻化している人口減少問題や地域活性化に向けた課題を中心に取り上げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。特に、空間データや統計データを用いたGIS(地理情報システム)による空間解析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
	地域社会論研究 I	台湾史に関する基礎的文献を輪読しながら、台湾の地域社会の成り立ちを移民社会、植民地化、脱植民地化といったキーワードから理解する。また、台湾という地域の研究において何が問題となってきたのか、また台湾がどのような地域としてとらえられてきたのかを理解する。	
	地域社会論研究 II	台湾の政治社会に関する基礎文献を輪読しながら、ローカルレジームがどのように形成され、また民主化、台湾化以後どのように変容しているのかを考察する。	
	環境社会学研究 I	持続可能な社会の構築のための環境ガバナンスの在り方、環境ガバナンスを支える民主主義の在り方などについて、海外の事例を含め議論の背景、専門家の役割、シティズンシップ論の観点から考察する。	
	環境社会学研究 II	環境リスク社会と言われる現在、国内・海外において環境運動がどのように進展し、政策的にどのような応答があったのかを考察する。リスクと社会的な不平等について、国際的な視点をもちつつ社会構造的に考察する。	
	社会事業史研究 I	日本の近代を中心に、社会事業の歴史を歴史社会学の方法と視点で学ぶ。まず歴史社会学的研究の方法を、テキストや先行研究を通じて学ぶ。これを踏まえて、貧困と生存権をめぐる思想、理論、および実践を、近代化・現代化の過程のなかに位置づけて考察する。前近代の社会における救済と相互扶助、近代化の過程で形成されていった公的な救済制度、戦争と社会福祉、第二次世界大戦後の改革などが主な論点となる。	
	社会事業史研究 II	社会事業史研究の基礎として、「シティズンシップ」「生存権」「福祉国家」「貧困」の概念と学説を学び、公的扶助の歴史の概要を理解する。これらを踏まえて、イギリスの救貧制度、福祉国家、および民間の慈善事業の歴史を学び、日本の社会事業史と比較しながら、貧困をめぐるさまざまな思想と実践を知る。そして、国家、市民社会、共同体と個人との関係に関わるテーマを、歴史社会学の視点から考察する。	
	社会調査法研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査の基本的な考え方や調査技法の本質的特徴について理解するために、テキスト購読を行う。(2)各履修者の研究について検討するとともに、それを素材にして研究法や方法論に関わる議論を行う。	

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	社会意識論研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査に関する基礎的な知識を身につけ、社会意識の調査・研究を必要な際に行えるよう、基礎固めをする。(2)社会科学の研究に必要な社会調査データの扱い方を社会意識論研究を参照しつつ身につける。	
	地誌学研究 I	地誌学は特定の地域における自然環境や社会・経済環境、および歴史・文化環境の総合的な分析であり、近年求められている「総合性」をもつ学問である。本講義では、いま一度、「総合性」をもつ学問としての地誌学を整理する。さらに地域スケールの異なる事例研究を設定し、地誌学的な分析によって地域の性格を解明することで、地誌学の基本的な考え方と方法論を学ぶ。	
	地誌学研究 II	本講義は、人間の経済活動のなかで、観光や余暇活動をはじめとしたツーリズムの現象を取り上げ、それらを地域活性化に関係させながら、地誌学の立場から検討する。具体的には、ツーリズムや地域活性化に加えてポスト生産主義をキーワードとし、世界中でみられるようになったポスト生産主義的な観点からのツーリズムを媒介とした地域活性化の仕組みとについて検討する。	
	家族社会学研究 I	ジェンダー論を軸にして家族社会学分野の研究と地域社会学分野の研究を架橋する作業を行う。具体的には、ネットワーク論、社会関係資本論などの研究動向をふまえつつ、震災・原発事故の事例研究を通じて家族社会学と地域社会学の融合的アプローチを学ぶ。	
	家族社会学研究 II	少子化対策や高齢社会対応と関連して展開されている日本の男女共同参画政策について、家族社会学や地域社会学分野の先行研究をふまえて批判的に考察を加える。具体的には、少子化対策についての先行研究をふまえて、日本、EU諸国、国連等のジェンダー政策、家族政策、人口政策の事例を検討する。	
	環境政策・経済学研究 I	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の数回にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 学生にはIPCC(気候変動に関する政府間パネル)報告書の輪読、適応情報プラットフォーム(http://www.adaptation-platform.nies.go.jp)等の情報整理を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
	環境政策・経済学研究 II	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の数回にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 気候変動、エネルギーに関する論文輪読、データ解析を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
	憲法研究 I	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討する。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。	
	憲法研究 II	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討を行う。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。	
	民法研究 A I	各受講者が民法を中心に、家族法の問題についてそれぞれテーマを設定し、毎回調査報告を行ってもらおう。本授業では、民法の成立過程および法改正を中心に調査報告してもらおう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらおう。	

専攻科目	拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	民法研究A II	各受講者が民法を中心とした家族法に関する問題についてそれぞれテーマを設定し、そのテーマについて諸外国の法制度について調査し、比較法的考察を行ってもらおう。受講者には、毎回調査報告を行ってもらおう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらおう。	
		民法研究B I	民法（物権法）の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法（物権法）という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、所有権、抵当権、区分建物所有、登記制度、担保制度。	
		民法研究B II	民法（債権法）の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法（債権法）という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、契約、債務不履行、売買、賃貸借、金銭消費貸借、連帯債務、保証制度。	
		刑法研究 I	刑法について研究する。いわゆる刑法総論および刑法各論といった実体刑法を対象とする。もちろん、刑法典以外の様々な特別法も検討対象に含まれる。 学部教育における実体刑法に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。	
		刑法研究 II	実体刑法以外の刑事法の諸分野について研究する。刑法総論各論以外の、刑事訴訟法や刑事政策学を対象とするが、憲法等の関連分野も視野に入れて検討する。 学部教育における刑事訴訟法等に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。	
		商法・経済法研究 I	商法および会社法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたい。特に、株式会社をめぐる現代的な課題について学ぶ。具体的には株式会社に関する定めを概要を理解し、現行制度の問題点の所在を確認し、崩壊背の方向性について考える素養を身につけることを目的とする。	
		商法・経済法研究 II	経済法および知的財産法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたい。わが国の法令の特徴及び独禁法・知的財産法の世界的潮流を把握するために米国・欧州共同体の法令をも検討対象とする。経済法および知的財産法の領域における国内外の日々の事件について自ら分析・評価できようになることを目標とする。	

専攻科目	拡充専門科目（メディア・情報社会コース）	労働法研究 I	国際化、多様化が進み社会が大きく変化する中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働者及び使用者の概念、採用内定、試用期間、公務員の労働基本権、職場における男女の平等、就業規則による労働条件決定と変更、賃金、労働時間。	
		労働法研究 II	国際化、多様化が進み社会が大きく変化する中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働災害・通勤災害、昇格及び降格、配転、出向、転籍、解雇、有期契約労働、パートタイム労働、労働者派遣。	
		社会保障法研究 I	社会保障法分野の内、授業の前半は医療保険を、後半は年金保険を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会保険（医療保険・年金保険）法制度を理解する。また、社会保険（医療保険・年金保険）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会保険（医療保険・年金保険）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	
		社会保障法研究 II	社会保障法分野の内、授業の前半は社会福祉を、後半は生活保護を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会福祉・公的扶助（生活保護）法制度を理解する。また、社会福祉・公的扶助（生活保護）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会福祉・公的扶助（生活保護）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	
		行政法研究 I	行政法研究 I の授業では、行政法の基本理論について学びながら、社会問題に対する洞察を深めていくことにする。行政の主要領域である、社会保障行政、教育行政等をテーマとして、それぞれの公共政策上の問題を、行政法的な視点から検討を行っていくこととする。	
		行政法研究 II	行政法研究 II の授業では、国・公共団体と国民・住民との間で法的紛争が生じた場合の行政法学上の諸問題について、分析、検討を行うこととする。行政不服審査の案件となっている事例や裁判例を素材として扱う予定である。	
		比較法研究 I	1. 比較法の研究領域がミクロとマクロの二つの領域からなり、それぞれに固有な研究方法を学ぶ。 2. 明治期のわが国の法制度に大きな影響を与えたドイツ法が、ローマ法や自然法とどのような関係をもって生成し、その固有な発達を遂げたかを、歴史的な観点をもとに考察する。	
		比較法研究 II	1. わが国の法制度に大きな影響を与えた英米法と大陸法を歴史的な観点から考察する。 2. イギリス法、アメリカ法、フランスの特色を、歴史、法の様式、特色ある法制度などの観点から明確にする。	

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	国際法研究I	特定の人権問題について、日本の裁判例とヨーロッパ人権裁判所の裁判例を比較し、国際人権法の観点からみた日本の課題について考える。具体的には、ヨーロッパ人権条約及び裁判所の仕組み等について概観した上で、拷問の禁止をはじめ、ノン・ルフールマンの原則と犯罪人引渡しや退去強制、被拘禁者の処遇、性暴力からの保護など、さまざまな人権問題について判例を通して検討する。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、日本の判例およびヨーロッパ人権裁判所の判例について調査し、比較できるようにすることを目指す。	
	国際法研究II	国際人権法を実施するための国内的・国際的な人権保障システムの現状を確認し、課題について検討する。具体的には、国際人権法における国内の実施及び国際的実施のためのさまざまな制度を概観した上で、人権条約の報告制度とその課題、個人通報制度と調査制度、国連の人権活動、そして、人権の地域的保障について学ぶ。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、国内的・国際的な人権保障システムについて理解し、課題について検討できるようにすることを目指す。	
	行政学研究 I	本科目では、行政学理論と行政研究の方法論について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	
	行政学研究 II	本科目では、行政研究の方法論と行政の実態について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	
	公共政策論研究 I	公共政策は、公共財の供給、公共利益・公益（不特定多数の人々の利益）の実現、公共サービスの提供、公的問題の解決などを目的とする。その担い手は、「新しい公共」が喧伝される今日、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、新公共管理論（NPM）の考え方を批判的に検討しつつ、公共政策を3つのセクターの組織の視点、とくにそれらが構成員に提供する選択的誘因の点からも考えたい。	
	公共政策論研究 II	「新しい公共」が喧伝される今日、公共政策の担い手は、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、3つのセクターの中でもとくにサードセクターに着目し、日本の様々なNGO/NPO、具体的には非営利法人を、法人の設立と税制上の優遇措置の点から検討していく。	
	公共哲学研究 I	公共哲学の中心な潮流およびアプローチについて概観する。前半では、現代の公共哲学、政治哲学の復活に寄与した20世紀の代表的な政治哲学者を取り上げた後、後半では、現在の主要な潮流および論点を概観する。	
	公共哲学研究 II	古典的な文献の読解を通じ、西洋を中心とした公共哲学・政治哲学に対して、歴史的な理解を得るとともに、これら古典が現代の理論研究に対してどのような貢献を加えているかを学ぶ。	

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	理論経済学研究 I	マクロ経済学、短期モデル、新しいケインジアン、財政政策、金融政策 経済成長など、標準的なマクロ経済学の理論について講義を行い、マクロ経済学の標準的なモデルについて理解する。	
	理論経済学研究 II	ゲーム理論について、主に、Nash均衡解、協力ゲーム、非協力ゲームなど、ミクロ経済学の標準的なツールとしてのゲーム理論について学び、ゲーム理論の基本的な考え方を身につけ、Nash均衡解などの概念を利用できるようにする。	
	経済統計研究 I	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には、国民経済計算体型 (SNA) と産業連関表の基本構造を理解した上で、地域経済分析システム (RESAS) を用いた地域経済構造分析や、市町村レベルの産業連関表を作成して経済効果の試算を行う。	
	経済統計研究 II	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には確率・統計学の基本知識、手法を復習した上で、EXCELやgretl等の計量経済分析ソフトを用いて回帰分析を中心とした計量経済学的実証分析ができるようになることが目的である。	
	経済政策研究 I	現代日本の経済政策について幅広く学ぶ。受講者には、課題文献のレジュメ作成だけではなく、関連する政策問題に関するレポート報告を求める。主目標は、①日本の経済政策の概要を知ること。②日本の経済政策の現代的な課題について、経済学的に考えることができることの2点。	
	経済政策研究 II	政策評価・行政評価の理念と方法を学ぶ。自治体評価、中央政府の政策評価、非営利民間組織の社会的インパクト評価等において、信頼できるデータやエビデンスに基づいてバイアスの小さい評価を実践するための基礎的方法論の習得を目指す。	
	財政学研究 I	現代財政について、制度・歴史・国際比較などの手法による幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題について考察する。 本演習では、とりわけ税制改革をめぐる各国の国際的動向について講義し、国内外の事例についてディスカッション・発表を行うものとする。	
	財政学研究 II	現代財政について、制度・歴史・国際比較など手法も用いた幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題を考察する。 本演習ではとりわけ、予算・社会保障に関する国際的動向を重視した講義を行い、それらを踏まえ国内外の事例についてのディスカッション・発表を行う。	
	金融論研究 I	金融論の基礎知識の理解に主眼を置きながら、併せて学んだ知識をベースに時事問題にも関心を持ち、自分なりに考える力を身につける。講義では、レジュメの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。主な講義内容は以下である。通貨の機能、金融機関の種類と機能、茨城県の金融マップ、フィンテック、資産の証券化、資金循環勘定、金融政策、金融行政、プルーデンス政策。	
	金融論研究 II	金融論の知識をベースに、具体的な問題を、グローバルに、日米比較をしながら考えていく。講義では、テキストの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。講義内容は以下である。これからの金融機関に求められるものは何か～協働・協創のエコシステムの世界で。地元資本が支えるアメリカ経済～「メインストリート」金融の強みに学ぶ。地域の疲弊を転換させる地域金融を目指して～日々の取り組みに息吹を吹き込む。	

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	労働経済論研究 I	働き方改革と女性活躍推進をテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に取り扱う。	
	労働経済論研究 II	日本社会に生じているワーク・ライフ・バランスをテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に取り扱う。	
	経営管理論研究 I	本講義では、修士レベルの組織行動論 (organizational behavior) に関する基礎的な概念や理論を学習することを目的とする。企業・組織内の個人や集団を対象とし、心理学や意思決定論、社会学の知見を援用しながら、日本語および英語の文献を輪読する。具体的なトピックとして、パーソナリティ、態度、感情、認知、信頼、リーダーシップなどが挙げられる。報告者の発表を土台とし、受講者間の議論を深めることで、新たな視点への気づきや修士論文のテーマ策定に役立てる。	
	経営管理論研究 II	本講義では、経営管理論 I を踏まえ、組織行動論に関する研究論文や文献 (主に英語) を輪読し、より専門的な知識や研究手法の理解、論文執筆の基礎を学ぶことを目的とする。本講義では、専門的な知識の習得のみならず、当該論文ではどのように研究をデザインし、どのような手法を使って実証しているのかを理解することで、自分自身が研究を実施するための手法を考える基盤を作る。最終的には、自分自身で組織行動に関する研究の問いを導出し、問いに対してどのような研究デザインを行うかを考え、修士論文執筆に活かせるようにする。	
	マーケティング論研究 I	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学とって過言ではない。その知見は企業経営への影響を強める一方、近年は顧客との新たな関係が注目され、互いの影響力をどう捉えるかが重要になっている。そこで過去のマーケティング研究から近年の動向までを概観し、マーケティングの未来を展望する。	
	マーケティング論研究 II	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学とって過言ではない。本講座はマーケティング論研究 I で概観した学術的な傾向を踏まえ、それらがもたらす新たな視点とはどのようなものかについて、さらなる検討を進めていく。とりわけ、主体間の構造という視点から関係を捉え、影響や効果からマーケティング活動の体系を展望する。	
	管理会計論研究 I	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。I では、マネジメント・コントロールの基本概念と責任センターを中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書の学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
	管理会計論研究 II	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。II では、戦略策定、予算編成、業績評価を中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書の学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
	監査論研究 I	財務諸表監査について研究する。 株式会社の利害保持者に開示される財務諸表の適正性を保証するのが財務諸表監査である。財務諸表の適正性を保証する財務諸表監査の基本的な仕組みを考察し、利害保持者の利害がいかんして調整されるのかを研究する。	

専攻科目 拡充専門科目（メディア・情報社会コース）	監査論研究Ⅱ	財務諸表監査制度と監査手続について研究する。 我が国における財務諸表監査制度である、金融商品取引法監査と会社法に基づく監査とそれぞれに基づく具体的は監査手続について研究する。	
	経営戦略論研究Ⅰ	本講義の目的は、(1)経営戦略論の基本的知識を習得し、(2)経営戦略の考え方を身につけて企業経営を研究できるようになることにある。 そのために、本講義では、経営戦略論の基本的な知識を習得するため、多様なトピックに触れた経営戦略論の教科書を輪読し、背後にある考え方を身につけるために、内容についての議論を行う。	
	経営戦略論研究Ⅱ	本講義の目的は、経営戦略論の古典を取り上げることで、研究における議論の進め方を習得することにある。 そのために、本講義では経営戦略論の古典を輪読する。内容の理解とともに、とりわけ優れた古典の輪読を通じて、(1)分析のフレームワークや(2)研究の論理的な構成についても議論を行う。	
	アジア経済論研究Ⅰ	本講義の内容は、2008年のグローバル金融危機以降のアジア経済の「躍進」を消費という切り口から考えるものである。本講義の到達目標は(1) 2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、(2) 各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、(3) 自己の研究課題を設定する、の3点である。授業は初回のオリエンテーションと第15回のまとめを除き、テキストとして指定した『アジアの消費—明日の市場を探る』、大木博巳編著、ジエトロを輪読し、受講生とともに議論するという形式で進める。	
	アジア経済論研究Ⅱ	2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を「消費」という切り口から考える。教科書を用いた輪読形式で授業を進める。2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、自己の研究課題を設定することを講義の主眼とする。	
	日本経済史研究Ⅰ	日本経済史でこれまでに明らかにされてきた知識・知見や、これまでの研究史について理解を深める。そのために、日本経済史の通史を輪読（受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論）する。	
	日本経済史研究Ⅱ	日本経済史研究の方法論と資料論に関する知識を身に付ける。そのために、日本経済史研究の方法論と資料論に関する文献を輪読（受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論）する。	
	特定テーマ演習	「地方創生」「中心市街地活性化」「地域資源活用」「農商工連携」「観光入込客数増大」など、地域経済の振興や発展を考えるためには、さまざまな視点による検討が不可欠である。そこで本講座では、テーマに沿った講師による実践的な課題の検討を進めていく。幅広い議論を通じて未来を展望するとともに、問題解決に必要な視点の考察を通じて、応用的な思考能力を身につける。 授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	
	地域資源活用研究法	茨城県下の市町村から特定の研究対象を選定し、その地域の課題の解決に向けた調査・研究を行う。地域連携や地域貢献を特色とする本演習は、地域に根差した調査・研究を重視する。調査の成果はレポート等にまとめるとともに、学内あるいは現地で報告会を行う。 授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	

専攻科目 （メディア・情報社会コース）	拡充専門科目	地域連携創生研究演習	既存資料の収集・分析と行政計画のレビューをふまえ、地域の多様なステークホルダーからのヒアリングを行い地域課題等を明確にし、その解決に向けて地域資源を活用した地域創生に資する条例等の政策形成をめざし研究を行う。その上で、自治体、民間企業、NPO法人等の多様な主体が参加するワークショップでの議論を通じ、多面的に解決策を検討する。	
		日本思想史研究Ⅰ	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは伊勢神道関係資料。	隔年
		日本思想史研究Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは両部神道関係資料。	隔年
		日本思想史演習Ⅰ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは伊藤聡『神道の中世—伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀』	隔年
		日本思想史演習Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは佐藤弘夫『アマテラスの変貌』	隔年
		実践哲学研究Ⅰ	この授業では、規範倫理学の基本的な考え方について学び、そのうえで規範倫理学の様々な立場の特徴などについての理解を深める。具体的には、義務論、帰結主義、徳倫理学などについての検討を行う。	隔年
		実践哲学研究Ⅱ	この授業では、西洋実践哲学における重要概念である自律を取り上げ、この概念に関わる諸理論についての理解を深める。具体的には、カント倫理学における自律、個人の自律、関係の中に位置づけられた自律、応用倫理学における自律などについての検討を行う。	隔年
		実践哲学演習Ⅰ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『道徳形而上学の基礎づけ』を取り上げ、輪読する。授業は演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、善意志、定言命法、普遍化可能性、目的自体、自律などについての検討を行う。	隔年
		実践哲学演習Ⅱ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『実践理性批判』を取り上げ、輪読する。授業は基本的には演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、道徳と自由、道徳と幸福、善と悪、道徳感情などについての検討を行う。	隔年
		日本古典・近代語研究Ⅰ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された蘭日辞典（『波留麻和解』『訳鍵』『ドゥーフ・ハルマ』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』）や英和辞典（『英和对訳袖珍辞書』）等について概説し、近世・近代翻訳語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
		日本古典・近代語研究Ⅱ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された国語辞書類（『東雅』『大和本草』『本草綱目啓蒙』『和漢三才図会』『片言』『物類称呼』『和訓栞』『雅言集覧』『俚諺集覧』等）について概説し、近世語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
		日本古典・近代語演習Ⅰ	江戸時代の主要な蘭日辞典である『波留麻和解』『訳鍵』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』の電子テキストを用いて、近世日本の漢字字体や漢字表記語の運用実態について調査する。その際、まず単漢字での用字法の分析を行った後に、熟語についての調査を行う。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	日本古典・近代語演習Ⅱ	蘭学学習法について書かれた大槻玄沢『蘭学階梯』(天明三1783年成、天明八1788年刊)を読み、江戸で本格的な蘭学が始められた頃の社会的・学問的状況について調査する。注釈書も参照するが、原文での読解能力の修得を目標の一つとするので、授業では基本的に原文で読み進める。	隔年
	日本古典文学研究Ⅰ	日本古典文学の作品(主に韻文)の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学研究Ⅱ	日本古典文学の作品(主に韻文)の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『新古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学演習Ⅰ	日本古典文学の作品(主に散文)の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻四を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学演習Ⅱ	日本古典文学の作品(主に散文)の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻五を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本近代文学研究Ⅰ	戦前を代表する大衆作家(夢野久作)の作品を網羅的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報(隣接領域におけるサブテキスト等)にあたり、正確な読解を心懸ける。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにも自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
	日本近代文学研究Ⅱ	戦前日本を代表する探偵小説の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報(隣接領域におけるサブテキスト等)にあたり、新しい読解の方法を模索する。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養う。	隔年
	日本近代文学演習Ⅰ	久生十蘭の敗戦後作品を構造的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報(隣接領域におけるサブテキスト等)にあたり、新しい読解の地平を模索する。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにも自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
	日本近代文学演習Ⅱ	戦後を代表する文学表現者の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報(隣接領域におけるサブテキスト等)にあたり、新しい読解の方法を模索する。	隔年
	中国思想史研究Ⅰ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また中国最後の王朝である、清朝の真面目を理解させる。	隔年

専攻科目 （メディア・情報社会コース）	拡充専門科目	中国思想史研究Ⅱ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また近代化と伝統のはざままで揺れる、清末から民国初期の社会・歴史状況を考察していく。	隔年
		中国思想史演習Ⅰ	経書成立を知るための入門書といえる、馬宗霍・馬巨『経学通論』（中華書局、2011年）を選読して、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法を会得する。さらに儒教思想の歴史であるいわゆる「経学史」の根底を理解させる。	隔年
		中国思想史演習Ⅱ	江セン『新体経学講義（点校本）』（華東師範大学出版社、2014年）を精読し、漢文読解に必要な知識と方法を具体的に学び、さらに儒教史研究の歴史を深く知ることによって、中国古典学の基礎部分を修得する。	隔年
		中国近現代文学研究Ⅰ	「中国女性作家」研究。中国文学（および中国語で書かれた文学）の女性作家の作品と、研究論文の講読をとおして、中国文学史における女性作家の創作とその位置を研究し、中国文学史を再考する。	隔年
		中国近現代文学研究Ⅱ	中国・香港「モダニズム文学（実験文学）」研究。中国・香港の作家の「モダニズム文学（実験文学）」の作品と、研究論文の講読をとおして、世界文学と香港文学、中国文学の関係や、世界文学史における中国・香港文学の位置付けを考察する。	隔年
		中国近現代文学演習Ⅰ	「中国1930年代作家研究」。中国で1930年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1930年代の文学状況を検証していく。	隔年
		中国近現代文学演習Ⅱ	「中国1980年代作家研究」。中国で1980年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1980年代の文学状況を検証していく。	隔年
		フランス文学研究Ⅰ	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学研究Ⅱ	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学研究Ⅰ」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学演習Ⅰ	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学演習Ⅱ	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学演習Ⅰ」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		美術史学研究Ⅰ	美術史学の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに方法論の発展の歴史と最新の方法論について学ぶ。また、欧米諸国と日本の美術史制度とその歴史を比較しながら学び、今日的な問題と課題について具体例を取り扱いながら検討する。	隔年
		美術史学研究Ⅱ	主に学会誌や専門雑誌に掲載された美術史研究論文を読み、内容を検討するとともに、その分析方法を整理する。伝統的な方法論やクライテリアを知るとともに、今日注目されている新しい研究の方法を吸収し、独自の研究に応用する訓練をする。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	フランス美術史研究Ⅰ	フランス美術の歴史の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに中世、17世紀、19世紀、20世紀の歴史編纂の歴史と方法論について学ぶ。具体的には、欧文（とくにフランス語と英語）の必須文献と最新の優れた論文を講読・分析し、批判的検討をするとともに、新知見の構築をめざす。	隔年
	フランス美術史研究Ⅱ	フランス美術史の動向と美術史研究の成果を理解する。欧文（とくにフランス語と英語）文献の購読などを通して、フランス美術史の基本的な方法論を修得するとともに、新しい研究方法にも通じ、各自の研究に応用する。	隔年
	英語学研究Ⅰ	生成文法の言語観を前提として、現代英語の文法現象のうち、文法の部門間の接点（インターフェイス）において生じていると考えられる現象を取り上げ、文法の部門間の関係がどうあるべきか先行研究を渉猟したうえで担当者の管見を披露する。今まで重点的に研究されてきた統語論と意味論の接点の現象に加え、統語論と音韻論の接点の現象と意味論と音韻論の接点の現象を扱い、文法理論のあるべき姿の可能性を提示する。	隔年
	英語学研究Ⅱ	英語の通時変化に関する担当者の管見を、主として生成文法的な理論基盤をもとにして提示する。具体的には、英語の通時変化の大きな流れを前提として概観したあと、英語史上生じた音韻変化、統語変化、意味変化から具体的な変化の一つを選び、言語変化を記述しその記述結果を理論的視点から解釈する。そのうえで、提示した解釈の英語の歴史変化への意味合いについて議論する。	隔年
	英語学演習Ⅰ	英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の統語構造と意味構造に関連する論文を扱う。	
	英語学演習Ⅱ	英語学演習Ⅰと同様に、英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の音韻論と形態論に関連する論文を扱う。	
	イギリス文学研究Ⅰ	20世紀の各文学理論の基本的な理念と、理論体系の歴史的発展を理解したうえで、批評論文の英語表現を正確に読み取る方法と文学作品の研究手法を学ぶ。具体的には文学理論の代表的な論文と個別文学作品の批評論文を精読し、その英語表現の理解を深め、批評の手法と視点を分析・検討し、個別作品研究への援用の方法を探求する。	隔年
	イギリス文学研究Ⅱ	20世紀末から21世紀に発表された最先端の文学批評の理解を深め、批評論文の難解な英語表現の読解方法を学ぶ。具体的には、ジェンダーから宗教に至る幅広いテーマをめぐる最先端の批評論文を精読し、英語表現を理解したうえで、近年の文学批評の動向を把握し、個別作品の批判的読解方法を学び、新たな論点と分析方法を探求する。	隔年
	イギリス文学演習Ⅰ	近代初期から現代にいたるイギリス文学の詩、戯曲、小説の代表的な作品を読解し、各作家の語りの特徴の分析方法と個別作品の英語表現の読解力を涵養する。具体的には、各時代の各ジャンルの代表的文学作品の一部を精読し、語りにおける英語表現の特徴と表象の諸要素を分析する方法を学び、作家・作品への理解を深める。	
	イギリス文学演習Ⅱ	近代から現代にいたるイギリス文学の散文を中心に、比較的マイナーなサブジャンル作品を精読し、多様な英語表現の読解力を涵養する。具体的には、対象作品の精読を行い、各書き手の語りの手法と英語表現の分析方法を学ぶ。特に、近代以降の「自己」の表象と一人称の語りの様相の関係を分析したうえで、各時代のイデオロギーと修辭的表現の諸要素の相関関係への理解を深める。	

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	アメリカ文学研究 I	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年
	アメリカ文学研究 II	19世紀末から現代までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年
	アメリカ文学演習 I	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
	アメリカ文学演習 II	19世紀末から現代までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
	応用言語学研究 I	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」と「転移」に関する文献を購読し、これまでの研究の歴史を概観する。そのうえで近年の言語間の影響と過去の転移研究との違いを正確に理解する。そのために、文献内容の理解を高めるための課題(study questions)に取り組み、その成果を発表し、討議する。さらに、受講者の第二言語習得の経験及び内省に基づき、受講者の母語が第二言語習得に与えた影響について、特定の語彙、文法項目を例にとり、発表、議論する。	隔年
	応用言語学研究 II	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、「言語間の距離」、「個人差」に関する文献を精読し、言語間の距離と言語間の影響、および学習者の個人差と言語間の影響について深く考察する。そのうえで、言語間の影響に関する主要な研究論文を精読し、日本語のどのような語彙及び文法項目が学習言語(主に英語)の習得にどのような影響を与える可能性があるのかを発表資料に基づき発表し、受講者全員で議論する。	隔年
	応用言語学演習 I	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、動詞の項構造情報、受動態、関係節などについて日本語が英語学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年
	応用言語学演習 II	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、可算・不可算名詞、定表現、時制、空間表現などについて日本語が英語の学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	言語文法論研究Ⅰ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。イギリスの記述文法の伝統の中で書かれた研究を読む。動詞と助動詞、代名詞と数詞、形容詞と副詞、削除、情報構造、テキスト言語学などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論研究Ⅱ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。記述を中心としながらも、理論的側面も取り入れた研究を読む。否定、発話行為、付加詞、非境界性、比較、指示詞、照応形、形態論などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅰ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。主要部と補部、各フレーズの特徴、節の種類と特徴、修飾や程度の表現などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅱ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。語、句、機能範疇、疑問文、関係節、他動性、主要部移動などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	社会言語学研究Ⅰ	社会言語学の研究において注目されてきた「属性」のうち、性差・年齢差、集団語に注目して、これらに関する先行研究をテキストとして講義を進める。日本語の変種と性差・年齢差との関係とその特徴を多角的に説明、あるいは、集団語として主に若者語に関する研究を取り上げ、言語変化のプロセスや若者語の機能等について説明する。	隔年
	社会言語学研究Ⅱ	「言語生活」「言語意識」に関する先行研究をテキストとして講義を進める。言語生活では、メディア接触と言語変種、共通語と方言の併用、日本語非母語話者の日本語使用等の観点から説明する。言語意識では、言語行動への評価、方言意識、アイデンティティー等に注目しながら説明する。	隔年
	社会言語学演習Ⅰ	性差・年齢差、集団語といった属性に注目して、これらに関するテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	社会言語学演習Ⅱ	言語生活の変化や言語意識に注目して、これらに関するテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	考古学研究Ⅰ	考古学研究の基本文献について、特に理論考古学に関する論文を批判的に解説する。テキストはチャイルド、ピンフォード、ホッダー、レンフルーらの著作、またはこれらに関連する論文から、受講生の関心を考慮して選択する。原則として原文を用いて理論の理解を深め、受講生自身の研究成果と併せて検討することを通じて、考古学からの歴史的思考力を鍛える。	隔年
	考古学研究Ⅱ	比較考古学の研究方法を解説し、具体的な考古資料に即して研究を実践指導する。比較考古学（この授業では民族考古学的方法・土俗考古学的方法を含む）のもつダイナミズムを理解するために、まず具体的研究例を学び、受講者毎に設定する課題に対し、実際の作業を通じて議論し、歴史と文化を描き出す際の理論的な問題点もあぶり出す。	隔年

専攻科目 （メディア・情報社会コース）	拡充専門科目	日本考古学研究Ⅰ	日本考古学研究の進め方、論文の書き方について訓練する。複数のオピニオン・リーダーによる研究文献を購読し、比較・検討することにより、日本考古学の現在の水準と問題点を探る。その上で、自分自身の研究を日本考古学の課題や歴史的課題と照合し討論する。テキスト及び課題は受講生の関心を考慮する。	隔年
		日本考古学研究Ⅱ	日本考古学の研究の流れを、具体的な考古資料に即して指導する。調査計画の策定から始め、最終的には自身の成果をまとめることを目標として、事実記載及び考古学的評価を含む短編の報告（調査報告、資料紹介または地域の文化財保護計画）の作成に取り組む。資料や課題は受講生の関心を考慮する。	隔年
		中国考古文化研究Ⅰ	甲骨文字の誕生から現在までの研究史について理解を深める。併せて考古資料、文献資料、出土文献資料それぞれの特性について学び、理解する。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
		中国考古文化研究Ⅱ	甲骨文字研究の全体像について理解を深め、特に書体研究とISO/IEC10646への登録問題を通して、アカデミックな研究成果と実務規格との兼ね合いについて理解を深める。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
		中国考古学研究Ⅰ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。加えて、清末以降の日中関係史について、中国考古学史を軸に学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
		中国考古学研究Ⅱ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。特に新石器時代末～二里頭期の状況を継続と断絶という観点から学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
		日本文化史研究Ⅰ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に国家権力（朝廷や幕府、宗教権門）との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
		日本文化史研究Ⅱ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に地域権力（在地領主や地方寺社）との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
		日本古代中世史研究Ⅰ	日本の古代の歴史を茨城（常陸・北下総）の事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。日本文化史に関する研究姿勢、研究能力を、より高めることができる。	隔年
		日本古代中世史研究Ⅱ	日本古代中世史に関する研究成果を教員・学生が提示し、議論を通じて、ブラッシュアップする。日本の中世の歴史を事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。	隔年
		日本政治史研究Ⅰ	近世の政治史について論じた基本文献と、武士社会の権力と伝統の内実を記録した史料を読み、近世社会の政治的特質について学ぶ。具体的には、前半は尾藤正英『江戸時代とはなにか』を輪読し、後半は水戸藩の政治に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
		日本政治史研究Ⅱ	近世の国際政治史を論じた研究文献と、近世人の海域世界との接触について記録した史料を読み、東アジアという視野のもとで近世日本の特質について考える。具体的には、前半は山口啓二『鎖国と開国』を輪読し、後半は東アジア海域で活動した人びとに関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年

専攻科目 （メディア・情報社会コース）	拡充専門科目	日本近世史研究Ⅰ	近世の百姓や町人について論じた基本文献と、庶民の視点で近世の風景を記録した史料を読み、近世の民間社会の実態について学ぶ。具体的には、前半は深谷克己『百姓成立』を輪読し、後半は市井でやり取りされた情報や伝承に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
		日本近世史研究Ⅱ	近世人の生命維持について論じた研究文献と、自然環境に適応した人びとの営みを記録した史料を読み、「生きる」という視点で近世社会の特質について考える。具体的には、前半は塚本学『生きることの近世史』を輪読し、後半は飢饉や自然災害に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
		日本社会史研究Ⅰ	近代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に19世紀後半から20世紀前半にかけての史料の輪読を進めることで、近代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
		日本社会史研究Ⅱ	現代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に20世紀前半から2中頃にかけての史料の輪読を進めることで、現代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
		日本近現代史研究Ⅰ	日本近代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に19世紀後半から20世紀前半の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、近代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
		日本近現代史研究Ⅱ	日本現代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に20世紀前半から中頃の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、現代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅰ	17世紀における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としてはジュンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定朔漠方略』や満洲語の一次史料である『康熙朝満文硃批奏摺』に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅱ	18世紀前半における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としては、ジュンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定準噶爾方略』や満洲語の一次史料である『雍正朝満文硃批奏摺』・『準噶爾使者档』、さらにはジュンガルを訪れたロシア使節の記録等に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅰ	清朝の八旗制度と中央ユーラシア周辺社会（ハルハ、ジュンガル、ホシュート、チベット等）に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅱ	近世東部ユーラシア世界（清朝、ロシアおよび日本）の歴史（関係史）及び社会に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	アジア歴史文化研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年
	アジア歴史社会研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年
	アジア歴史社会研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年
	ヨーロッパ社会史研究Ⅰ	ドイツの戦後社会における歩みを検討していく。その際に、1) ヨーロッパを中心とした国際関係をめぐる歴史、2) ドイツの国内政治史、3) 市民社会の構造的変化・家族やジェンダー問題、メディアや消費生活のあり方といった社会史という3つの軸を中心に分析する。	隔年
	ヨーロッパ社会史研究Ⅱ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
	ヨーロッパ政治史研究Ⅰ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、経済的・政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
	ヨーロッパ政治史研究Ⅱ	ヨーロッパの20世紀史を論じた最新の研究をとりあげ、基本知識を確認するとともに、テキストを読み込んでいく。具体的には、二度の世界大戦とヨーロッパの国民国家体系が引き起こした問題、さらには社会主義(東西冷戦)などが主題となる。参加学生からの積極的な発言も求める。	隔年
	ヨーロッパ歴史文化研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパの歴史文化、とりわけ英仏独以外の近現代史に関する近年の重要な研究を紹介したうえで、受講生の関心に沿った研究報告(プレゼン)を課す。これによって、修論執筆に必要な文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
	ヨーロッパ歴史文化研究Ⅱ	本講義においては、近現代史を中心とするヨーロッパの歴史文化に関する研究に取り組むことで、国民史に基づく一国史観を相対化し、過去と未来をつなぐ歴史的視野を養う。以上を通して、修論執筆に必要な史料・文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
	ヨーロッパ近現代史研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する最新の研究に触れたうえで、その研究史的意義、多文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年
ヨーロッパ近現代史研究Ⅱ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する古典的な研究に対してもその射程を広げ、その研究史的意義およびヨーロッパの歴史文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	行動機構論研究 I	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究 II を履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年
	行動機構論研究 II	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究 I を履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年
	行動機構論演習 I	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康に関連した心理学の諸理論、例えば心理学的ストレス理論、ソーシャルサポート、健康信念モデル、計画的行動理論、セルフエフィカシー、自己決定理論などについて理解を深める。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	行動機構論演習 II	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康増進に焦点を当て、介護ストレス、介護予防、健康行動、テクノロジーへの適応などの問題について、現場の課題と実践のあり方について考察する。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	認知行動論研究 I	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究方法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解を通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究方法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論研究 II	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究方法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究方法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論演習 I	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究方法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解を通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	認知行動論演習Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究方法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年
	家族心理論研究	家族をめぐる歴史や定義について理解を深めながら、主として離婚・再婚、そして子どもの養育課題といった現代の家族における諸問題について検討する。また、生涯発達の視点も含めながら、家族のライフサイクルについて多面的に検討する。	隔年
	行動文化論研究Ⅰ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅰ(「現代の事例」に学ぶ)。現代の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげる研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
	行動文化論研究Ⅱ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅱ(「過去の事例」に学ぶ)。過去の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげる研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
	行動文化論演習Ⅰ	社会心理学および関連分野の「古典的文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
	行動文化論演習Ⅱ	社会心理学および関連分野の「最近の文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
	生涯発達論研究Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に注目した知性、情動、身体、自他関係などの形成について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
	生涯発達論研究Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に注目して、出来ることが当たり前ではないことから人間の生涯にわたる発達について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
	生涯発達論演習Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に関する個別具体の課題について掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
	生涯発達論演習Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に関する個別具体のテーマについて掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年

専攻科目 拡充専門科目（メディア・情報社会コース）	文化人類学研究Ⅰ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。	隔年
	文化人類学研究Ⅱ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。アメリカの英文専門書の読解能力を高め、マヤ文明の特徴、旧世界の四大文明との共通性を理解できるようになることを目指す。	隔年
	文化人類学演習Ⅰ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。	隔年
	文化人類学演習Ⅱ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。学術雑誌論文の批判的読解を通じて、先スペイン期のメソアメリカ諸文明を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。	隔年
	比較文化論研究Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。具体的には特に、「集団」「伝統」「儀礼」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
	比較文化論研究Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、マルチサイテッド・エスノグラフィ、オートエスノグラフィ（自己エスノグラフィ）など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
	比較文化論演習Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。特に、広義の「語り」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
	比較文化論演習Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、組織エスノグラフィ、オートエスノグラフィ（自己エスノグラフィ）など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
	福祉分野に関する理論と支援の展開	社会福祉の基本的な理念や機能・役割について理解を深めたうえで、特に、障害者（児）に関連した福祉現場において生じる、心理社会的な課題及び必要な支援について学ぶ。具体的には、身体障害者（児）、知的障害者（児）、発達障害者（児）、精神障害者に関する法・制度について学び、地域における支援の実際や今後の課題について、事例等を交えながら検討する。	

専攻科目	拡充専門科目 (メディア・情報社会コース)	教育分野に関する理論と支援の展開	地域社会における学校、いじめ、不登校、発達障害、児童虐待、アセスメント、コンサルテーション、心理教育をキーワードとし、スクールカウンセラーとして働くための基礎知識を身につける。また、教育分野における支援のあり方を通して、社会人としての姿勢を身につける。	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	司法・犯罪分野に関わる心理専門職の実践について学ぶ。具体的には、少年審判手続及び関係機関の連携について学ぶと同時に、非行メカニズムの理解、少年への支援・働きかけについて学習する。また、家事事件等に関する基礎知識及び家庭内紛争の解決に向けた専門職の実践について学ぶことにより、社会人としての姿勢を身につける。	
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	地域における産業・労働分野における支援に焦点を当てて、その理論と具体的実践について学ぶ。具体的には、組織の特徴、組織運営の実際、制度と法規、産業ストレスの実際、健康保持増進のための指針、障害者への就労支援、自殺予防と危機対応等について学ぶ。	
		心理的アセスメントに関する理論と実践	将来、社会人として、心理臨床家の仕事を行う際に必要な臨床心理査定（アセスメント）について理論と施行法を教授する。実物の検査用紙や器具を用い、演習を通して心理査定の実践を学ぶ。 (オムニバス／全15回) (90 金丸 隆太／8回) 代表的な知能検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 描画法、質問紙法から代表的な心理検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。	オムニバス
		心理支援に関する理論と実践A	ロジャーズ、C.、来談者中心療法、カウンセリング、プレイセラピーをキーワードとし、ロジャーズ、C.の来談者中心療法についてその主要論文とそれに関連する文献を読みながら討論を行い、理解を深める。	
		心理支援に関する理論と実践B	公認心理師として、地域社会において活動を行っていく上での基礎的な考え方、倫理的問題や治療構造等、心理面接を行う上での基本について、講義や事例検討を通して実践的に学ぶ。 (オムニバス／全15回) (108 大島 聖美／8回) 大学院でどのように学んでいくのか、倫理的問題や治療構造等、言語面接を行う上での基本について学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 事例論文や各自が実習で担当している事例報告を材料に、主に演習形式によって、心理療法の実践に生じる諸問題や展開の在り様について理解と対応の可能性を検討する。	オムニバス
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	家族、コミュニティ、関係行政論をキーワードとし、家族やコミュニティに焦点を当てた心理支援の理論と方法について学ぶ。さらに、これらの心理支援の背後にある法律や制度についても学ぶ。	

専攻科目	拡充専門科目（メディア・情報社会コース）	心の健康教育に関する理論と実践	<p>心理専門職者に必要な心の健康に関する諸理論を学ぶ。具体的には地域保健活動における予防の概念、ストレス理論、自殺予防と危機対応、心の成長モデル、表現活動と健康等について実践を交えながら学ぶ。</p> <p>（オムニバス／全15回）</p> <p>（90 金丸 隆太／4回） ガイダンス、心の成長モデルに関する回を担当する。</p> <p>（108 大島 聖美／4回） ストレスマネジメントおよびアサーショントレーニングについて、基礎的な知識と心理教育の実際について学ぶ。</p> <p>（110 地井 和也／3回） 「睡眠の問題」、「自傷行為・自殺の問題」、「死と喪の作業」をテーマとして基礎的知識と問題の予防に関する諸理論および心理教育の実践方法について学ぶ。</p> <p>（55 正保 春彦／4回） 集団活動における心の教育の実践方法について学ぶ。また、まとめの回を担当する。</p>	オムニバス
		保健医療分野に関する理論と支援の展開	<p>精神医学の基礎と、統合失調症、気分障害をはじめとする代表的な精神疾患について学び、さらに、精神疾患の治療の基礎を学ぶ。精神医学の最近のトピックについて学ぶことにより、社会人としての心理専門職に必要な精神医学的見地を身につける。</p>	
		投映法特論	<p>ロールシャッハ・テスト（エクスナー法）の歴史・実施手順・コーディング・解釈について学び、被検者の心理的体験を理解し、自分自身で検査結果の整理を行うことができることをめざす。心理専門職者として、本テストを臨床現場で活用するための基本を習得する。</p>	
		箱庭療法特論	<p>箱庭療法の理論に関する講義と箱庭制作体験を通して箱庭療法の実践について学習する。具体的には、箱庭制作・見守り体験、事例検討を通して箱庭療法の実践の基礎を身につける。</p>	
		現代ジャーナリズム研究	<p>ネットを通じて知る機会が増えたとはいえ、信頼性の高さで群を抜くのは新聞、放送で、内外の情報、社会の主要な動きを知るのには欠かせない。では、依って立つ、その核心ともいえるジャーナリズムとは一体何なのか。どのような形で情報が収集され、我々に届けられるのか。なぜ、信頼性が高いのか。その論理、倫理は。先般の米大統領選、仏大統領選で話題になった蔓延するフェイクニュースについて考察し、メディアリテラシーの体得に努力する。その後、ジャーナリズムのあり方や役割などを学ぶ。</p>	
拡充専門科目（国際・地域共創コース）	マスコミ研究	<p>現代社会の中で、マスコミ・メディアは、どういった役割を果たしているのだろうか。企業のみならず政府、地方公共団体、さまざまな組織にとってメディア戦略は、その将来を決するような重大な役割を担っているともいえる。現代社会を生き抜く際に必ずかかわってくるメディアについての理解を深めることはかなり大きな意味を持つ。マスコミ関係の書籍の購読を通じてメディアへの理解を深める。</p>		
	ポピュラー文化研究	<p>ポピュラー文化はどのように形成されてきたのか、雑誌などの出版物を通して、それぞれの時代のポピュラー文化について考察する。とくに、少女文化の形成に注目する。明治以降から現在までの少女文化を範囲とし、文献を購読発表し、それについてディスカッションを行う。</p>		

専攻科目 （国際・地域共創コース） 拡充専門科目	映像メディア研究	発想するから始まり多くの人の前で上映するまでの一連の映像制作の作業を通し、映像作品の制作と表現の基礎を学ぶ。特に「企画」し「具体化」し、伝える工夫を凝らす「構成」力を養うことに重点を置く。「映像」というメディアを通して、ものの見方、考え方を養い、他でも応用できるリテラシー力を身につける。	
	メディア文化研究	メディアとは何かを考えると、情報伝達の側面としてみるだけでは不十分なことに気づかされる。活字が主張し、映像が魅了するように、印刷技術の登場、ラジオ、テレビ、インターネットといったメディアの技術革新は人々に働きかけ、身体や精神、思想を組み替えてきた。様々なメディア装置（印刷技術、ラジオ、テレビ、映画、インターネット、SNS）の成り立ちを概観しながら、そのメディアがつくりだした「文化」を考える。	
	メディア教育論研究	現代社会におけるメディア教育について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。日々変化を続けているメディア・テクノロジーを教育や学びの諸場面にどのように活用していくべきなのか、それによって教授者と学習者の位置づけや役割はどのように変化するのか、近未来の教育・学習スタイルはどのようなものになると考えられるのか等、複数の視点からメディア教育の現状と将来像について考察する。特に近年急速に普及したスマートフォン・タブレット型端末や電子テキストを活用した教育の方法やその課題・可能性を中心的な題材・事例として、文献講読と議論により理解を深める。	
	電子メディア論研究	現代社会における電子メディア活用の諸場面について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。インターネットに関連する電子メディア・テクノロジーの歴史・背景や、社会への影響力、メディア特性などについて、資料・文献講読やディスカッションを通じて理解深化を目指す。さらに、情報・コンテンツの共有・共感・認知、コミュニケーション、情報の保護や権利などの観点からも考察を加え、高度情報化社会の諸問題について議論・考察する。	
	近代日本メディア史研究	近代日本における新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどマスメディアの歴史について考える授業。各時代のマス・コミュニケーションがどのようなものであったかを、できるだけ現物資料を用いて考察していく。マス・コミュニケーションの原理を歴史的な比較を通じて理解し、それによって現在のマスメディアに対する批判的視点を手に入れることを目標とする。授業は教員による講義形式を基本とするが、適宜、受講者どうし、および受講者と教員によるディスカッションを交えつつ進める。	
	映像広告論研究	日本におけるテレビコマーシャルの歴史（1950年代から1990年代）を映像資料・文献資料に基づいて解説する。また、映像資料および放送関係の文献資料についてその性質を理解し、扱いに習熟する。授業は教員による講義と、受講者どうしおよび受講者と教員によるディスカッションを適宜組み合わせで行う。	
	学習デザイン論研究	学習科学や認知科学の視点から人がどのように学習するのかについて理解し、学習を支援し促すための道具や物理的環境、人間関係をどのように設計したらよいかについて考える。学習に関わる理論としては状況的学習、学習環境設計に関しては活動理論、デザイン実験アプローチ等を取り上げる。授業は、講義、文献購読、デザイン実習により進める。	
	情報デザイン研究	我々は日々の生活の中で自分達の生きる現実をデザインしつづけている。そのデザイン活動が、どのような道具を用いて、どんな風に行われているのかについて、人工物による媒介、実践コミュニティへの参画といった社会構成主義的な視点から考える。また、人と人、人と機械のコミュニケーションの成り立ちをインタラクションとヒューマンインタフェースの視点から考え、その支援方法について議論する。文献講読とプロジェクト型活動により授業を進める。	

専攻科目 拡充専門科目（国際・地域共創コース）	コミュニケーションデータ分析研究	コミュニケーションに関する社会的なデータ分析の方法を学び実証研究の具体例に触れることで、社会調査の方法論やデータ分析の手法を身につけるとともに、先行研究にあらわれたデータの分析・解釈について適切に評価・判断できるようになることを目指す。	
	コミュニケーション社会学研究	現代社会における人々の日常的なコミュニケーションの特質や問題を社会的な視点や方法論から理解するために、当該領域の主要な先行研究やデータなどの資料を読み、それについて履修者がレポートし、参加者全員で質疑応答を行う。	
	憲法研究 I	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討する。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。	
	憲法研究 II	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討を行う。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。	
	民法研究A I	各受講者が民法を中心に、家族法の問題についてそれぞれテーマを設定し、毎回調査報告を行ってもらおう。本授業では、民法の成立過程および法改正を中心に調査報告してもらおう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらおう。	
	民法研究A II	各受講者が民法を中心とした家族法に関する問題についてそれぞれテーマを設定し、そのテーマについて諸外国の法制度について調査し、比較法的考察を行ってもらおう。受講者には、毎回調査報告を行ってもらおう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらおう。	
	民法研究B I	民法（物権法）の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法（物権法）という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、所有権、抵当権、区分建物所有、登記制度、担保制度。	
	民法研究B II	民法（債権法）の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法（債権法）という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、契約、債務不履行、売買、賃貸借、金銭消費貸借、連帯債務、保証制度。	
	刑法研究 I	刑法について研究する。いわゆる刑法総論および刑法各論といった実体刑法を対象とする。もちろん、刑法典以外の様々な特別法も検討対象に含まれる。 学部教育における実体刑法に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。	

専攻科目 拡充専門科目（国際・地域共創コース）	刑法研究Ⅱ	実体刑法以外の刑事法の諸分野について研究する。刑法総論各論以外の、刑事訴訟法や刑事政策学を対象とするが、憲法等の関連分野も視野に入れて検討する。 学部教育における刑事訴訟法等に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。	
	商法・経済法研究Ⅰ	商法および会社法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたいうで、特に、株式会社をめぐる現代的な課題について学ぶ。具体的には株式会社に関する定めを概要を理解し、現行制度の問題点の所在を確認し、崩壊背の方向性について考える素養を身につけることを目的とする。	
	商法・経済法研究Ⅱ	経済法および知的財産法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたいうで、わが国の法令の特徴及び独禁法・知的財産法の世界潮流を把握するために米国・欧州共同体の法令をも検討対象とする。経済法および知的財産法の領域における国内外の日々の事件について自ら分析・評価できようになることを目標とする。	
	労働法研究Ⅰ	国際化、多様化が進み社会が大きく変化する中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働者及び使用者の概念、採用内定、試用期間、公務員の労働基本権、職場における男女の平等、就業規則による労働条件決定と変更、賃金、労働時間。	
	労働法研究Ⅱ	国際化、多様化が進み社会が大きく変化する中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働災害・通勤災害、昇格及び降格、配転、出向、転籍、解雇、有期契約労働、パートタイム労働、労働者派遣。	
	社会保障法研究Ⅰ	社会保障法分野の内、授業の前半は医療保険を、後半は年金保険を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会保険（医療保険・年金保険）法制度を理解する。また、社会保険（医療保険・年金保険）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会保険（医療保険・年金保険）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	
	社会保障法研究Ⅱ	社会保障法分野の内、授業の前半は社会福祉を、後半は生活保護を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会福祉・公的扶助（生活保護）法制度を理解する。また、社会福祉・公的扶助（生活保護）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会福祉・公的扶助（生活保護）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	

専攻科目	拡充専門科目（国際・地域共創コース）	行政法研究Ⅰ	行政法研究Ⅰの授業では、行政法の基本理論について学びながら、社会問題に対する洞察を深めていくことにする。行政の主要領域である、社会保障行政、教育行政等をテーマとして、それぞれの公共政策上の問題を、行政法的な視点から検討を行っていくこととする。	
		行政法研究Ⅱ	行政法研究Ⅱの授業では、国・公共団体と国民・住民との間で法的紛争が生じた場合の行政法学上の諸問題について、分析、検討を行うこととする。行政不服審査の案件となっている事例や裁判例を素材として扱う予定である。	
		比較法研究Ⅰ	1. 比較法の研究領域がミクロとマクロの二つの領域からなり、それぞれに固有な研究方法を学ぶ。 2. 明治期のわが国の法制度に大きな影響を与えたドイツ法が、ローマ法や自然法とどのような関係をもって生成し、その固有な発達を遂げたかを、歴史的な観点をもとに考察する。	
		比較法研究Ⅱ	1. わが国の法制度に大きな影響を与えた英米法と大陸法を歴史的な観点から考察する。 2. イギリス法、アメリカ法、フランスの特色を、歴史、法の様式、特色ある法制度などの観点から明確にする。	
		国際法研究Ⅰ	特定の人権問題について、日本の裁判例とヨーロッパ人権裁判所の裁判例を比較し、国際人権法の観点からみた日本の課題について考える。具体的には、ヨーロッパ人権条約及び裁判所の仕組み等について概観した上で、拷問の禁止をはじめ、ノン・ルフールマンの原則と犯罪人引渡しや退去強制、被拘禁者の処遇、性暴力からの保護など、さまざまな人権問題について判例を通して検討する。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、日本の判例およびヨーロッパ人権裁判所の判例について調査し、比較できるようにすることを目指す。	
		国際法研究Ⅱ	国際人権法を実施するための国内的・国際的な人権保障システムの現状を確認し、課題について検討する。具体的には、国際人権法における国内の実施及び国際の実施のためのさまざまな制度を概観した上で、人権条約の報告制度とその課題、個人通報制度と調査制度、国連の人権活動、そして、人権の地域的保障について学ぶ。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、国内的・国際的な人権保障システムについて理解し、課題について検討できるようにすることを目指す。	
		行政学研究Ⅰ	本科目では、行政学理論と行政研究の方法論について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	
		行政学研究Ⅱ	本科目では、行政研究の方法論と行政の実態について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	

専攻科目 （国際・地域共創コース）	拡充専門科目	公共政策論研究 I	公共政策は、公共財の供給、公共利益・公益（不特定多数の人々の利益）の実現、公共サービスの提供、公的問題の解決などを目的とする。その担い手は、「新しい公共」が喧伝される今日、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、新公共管理論（NPM）の考え方を批判的に検討しつつ、公共政策を3つのセクターの組織の視点、とくにそれらが構成員に提供する選択的誘因の点からも考えたい。	
		公共政策論研究 II	「新しい公共」が喧伝される今日、公共政策の担い手は、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、3つのセクターの中でもとくにサードセクターに着目し、日本の様々なNGO/NPO、具体的には非営利法人を、法人の設立と税制上の優遇措置の点から検討していく。	
		公共哲学研究 I	公共哲学の中心潮流およびアプローチについて概観する。前半では、現代の公共哲学、政治哲学の復活に寄与した20世紀の代表的な政治哲学者を取り上げた後、後半では、現在の主要な潮流および論点を概観する。	
		公共哲学研究 II	古典的な文献の読解を通じ、西洋を中心とした公共哲学・政治哲学に対して、歴史的な理解を得るとともに、これら古典が現代の理論研究に対してどのような貢献を加えているかを学ぶ。	
		理論経済学研究 I	マクロ経済学、短期モデル、新しいケインジアン、財政政策、金融政策 経済成長など、標準的なマクロ経済学の理論について講義を行い、マクロ経済学の標準的なモデルについて理解する。	
		理論経済学研究 II	ゲーム理論について、主に、Nash均衡解、協力ゲーム、非協力ゲームなど、ミクロ経済学の標準的なツールとしてのゲーム理論について学び、ゲーム理論の基本的な考え方を身につけ、Nash均衡解などの概念を利用できるようにする。	
		経済統計研究 I	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には、国民経済計算体系（SNA）と産業連関表の基本構造を理解した上で、地域経済分析システム（RESAS）を用いた地域経済構造分析や、市町村レベルの産業連関表を作成して経済効果の試算を行う。	
		経済統計研究 II	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には確率・統計学の基本知識、手法を復習した上で、EXCELやgretl等の計量経済分析ソフトを用いて回帰分析を中心とした計量経済学的実証分析ができるようになることが目的である。	
		経済政策研究 I	現代日本の経済政策について幅広く学ぶ。受講者には、課題文献のレジュメ作成だけでなく、関連する政策問題に関するレポート報告を求める。主目標は、①日本の経済政策の概要を知ること。②日本の経済政策の現代的な課題について、経済学的に考えることができることの2点。	
		経済政策研究 II	政策評価・行政評価の理念と方法を学ぶ。自治体評価、中央政府の政策評価、非営利民間組織の社会的インパクト評価等において、信頼できるデータやエビデンスに基づいてバイアスの小さい評価を実践するための基礎的方法論の習得を目指す。	

専攻科目 拡充専門科目（国際・地域共創コース）	財政学研究Ⅰ	現代財政について、制度・歴史・国際比較などの手法による幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題について考察する。 本演習では、とりわけ税制改革をめぐる各国の国際的動向について講義し、国内外の事例についてディスカッション・発表を行うものとする。	
	財政学研究Ⅱ	現代財政について、制度・歴史・国際比較など手法も用いた幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題を考察する。 本演習ではとりわけ、予算・社会保障に関する国際的動向を重視した講義を行い、それらを踏まえ国内外の事例についてのディスカッション・発表を行う。	
	金融論研究Ⅰ	金融論の基礎知識の理解に主眼を置きながら、併せて学んだ知識をベースに時事問題にも関心を持ち、自分なりに考える力を身につける。講義では、レジュメの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。主な講義内容は以下である。通貨の機能、金融機関の種類と機能、茨城県の金融マップ、フィンテック、資産の証券化、資金循環勘定、金融政策、金融行政、プルーデンス政策。	
	金融論研究Ⅱ	金融論の知識をベースに、具体的な問題を、グローバルに、日米比較をしながら考えていく。講義では、テキストの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。講義内容は以下である。これからの金融機関に求められるものは何か～協働・協創のエコシステムの世界で。地元資本が支えるアメリカ経済～「メインストリート」金融の強みに学ぶ。地域の疲弊を転換させる地域金融を目指して～日々の取り組みに息吹を吹き込む。	
	労働経済論研究Ⅰ	働き方改革と女性活躍推進をテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に扱う。	
	労働経済論研究Ⅱ	日本社会に生じているワーク・ライフ・バランスをテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に扱う。	
	経営管理論研究Ⅰ	本講義では、修士レベルの組織行動論（organizational behavior）に関する基礎的な概念や理論を学習することを目的とする。企業・組織内の個人や集団を対象とし、心理学や意思決定論、社会学の知見を援用しながら、日本語および英語の文献を輪読する。具体的なトピックとして、パーソナリティ、態度、感情、認知、信頼、リーダーシップなどが挙げられる。報告者の発表を土台とし、受講者間の議論を深めることで、新たな視点への気づきや修士論文のテーマ策定に役立てる。	
	経営管理論研究Ⅱ	本講義では、経営管理論Ⅰを踏まえ、組織行動論に関する研究論文や文献（主に英語）を輪読し、より専門的な知識や研究手法の理解、論文執筆の基礎を学ぶことを目的とする。本講義では、専門的な知識の習得のみならず、当該論文ではどのように研究をデザインし、どのような手法を使って実証しているのかを理解することで、自分自身が研究を実施するための手法を考える基盤を作る。最終的には、自分自身で組織行動に関する研究の問いを導出し、問いに対してどのような研究デザインを行うかを考え、修士論文執筆に活かせるようにする。	

専攻科目 （国際・地域共創コース）	拡充専門科目	マーケティング論研究 I	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学とって過言ではない。その知見は企業経営への影響を強める一方、近年は顧客との新たな関係が注目され、互いの影響力をどう捉えるかが重要になっている。そこで過去のマーケティング研究から近年の動向までを概観し、マーケティングの未来を展望する。	
		マーケティング論研究 II	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学とって過言ではない。本講座はマーケティング論研究 I で概観した学術的な傾向を踏まえ、それらがもたらす新たな視点とはどのようなものかについて、さらなる検討を進めていく。とりわけ、主体間の構造という視点から関係を捉え、影響や効果からマーケティング活動の体系を展望する。	
		管理会計論研究 I	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。I では、マネジメント・コントロールの基本概念と責任センターを中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書の学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
		管理会計論研究 II	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。II では、戦略策定、予算編成、業績評価を中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書の学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
		監査論研究 I	財務諸表監査について研究する。 株式会社の利害保持者に開示される財務諸表の適正性を保証するのが財務諸表監査である。財務諸表の適正性を保証する財務諸表監査の基本的な仕組みを考察し、利害保持者の利害がいかんして調整されるのかを研究する。	
		監査論研究 II	財務諸表監査制度と監査手続について研究する。 我が国における財務諸表監査制度である、金融商品取引法監査と会社法に基づく監査とそれぞれに基づく具体的は監査手続について研究する。	
		経営戦略論研究 I	本講義の目的は、(1)経営戦略論の基本的知識を習得し、(2)経営戦略の考え方を身につけて企業経営を研究できるようになることにある。 そのために、本講義では、経営戦略論の基本的な知識を習得するため、多様なトピックに触れた経営戦略論の教科書を輪読し、背後にある考え方を身につけるために、内容についての議論を行う。	
		経営戦略論研究 II	本講義の目的は、経営戦略論の古典を取り上げることで、研究における議論の進め方を習得することにある。 そのために、本講義では経営戦略論の古典を輪読する。内容の理解とともに、とりわけ優れた古典の輪読を通じて、(1)分析のフレームワークや(2)研究の論理的な構成についても議論を行う。	
アジア経済論研究 I	本講義の内容は、2008年のグローバル金融危機以降のアジア経済の「躍進」を消費という切り口から考えるものである。本講義の到達目標は(1) 2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、(2) 各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、(3) 自己の研究課題を設定する、の3点である。授業は初回のオリエンテーションと第15回のまとめを除き、テキストとして指定した『アジアの消費—明日の市場を探る』、大木博巳編著、ジェトロを輪読し、受講生とともに議論するという形式で進める。			

専攻科目 （国際・地域共創コース） 拡充専門科目	アジア経済論研究Ⅱ	2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を「消費」という切り口から考える。教科書を用いた輪読形式で授業を進める。2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、自己の研究課題を設定することを講義の主眼とする。	
	日本経済史研究Ⅰ	日本経済史でこれまでに明らかにされてきた知識・知見や、これまでの研究史について理解を深める。そのために、日本経済史の通史を輪読（受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論）する。	
	日本経済史研究Ⅱ	日本経済史研究の方法論と資料論に関する知識を身に付ける。そのために、日本経済史研究の方法論と資料論に関する文献を輪読（受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論）する。	
	特定テーマ演習	「地方創生」「中心市街地活性化」「地域資源活用」「農商工連携」「観光入込客数増大」など、地域経済の振興や発展を考えるためには、さまざまな視点による検討が不可欠である。そこで本講座では、テーマに沿った講師による実践的な課題の検討を進めていく。幅広い議論を通じて未来を展望するとともに、問題解決に必要な視点の考察を通じて、応用的な思考能力を身につける。授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	
	地域資源活用研究法	茨城県下の市町村から特定の研究対象を選定し、その地域の課題の解決に向けた調査・研究を行う。地域連携や地域貢献を特色とする本演習は、地域に根差した調査・研究を重視する。調査の成果はレポート等にとともに、学内あるいは現地で報告会を行う。授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	
	地域連携創生研究演習	既存資料の収集・分析と行政計画のレビューをふまえ、地域の多様なステークホルダーからのヒアリングを行い地域課題等を明確にし、その解決に向けて地域資源を活用した地域創生に資する条例等の政策形成をめざし研究を行う。その上で、自治体、民間企業、NPO法人等の多様な主体が参加するワークショップでの議論を通じ、多面的に解決策を検討する。	
	日本思想史研究Ⅰ	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは伊勢神道関係資料。	隔年
	日本思想史研究Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは両部神道関係資料。	隔年
	日本思想史演習Ⅰ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは伊藤聡『神道の中世—伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀』	隔年
	日本思想史演習Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは佐藤弘夫『アマテラスの変貌』	隔年
実践哲学研究Ⅰ	この授業では、規範倫理学の基本的な考え方について学び、そのうえで規範倫理学の様々な立場の特徴などについての理解を深める。具体的には、義務論、帰結主義、徳倫理学などについての検討を行う。	隔年	

専攻科目 （国際・地域共創コース） 拡充専門科目	実践哲学研究Ⅱ	この授業では、西洋実践哲学における重要概念である自律を取り上げ、この概念に関わる諸理論についての理解を深める。具体的には、カント倫理学における自律、個人の自律、関係の中に位置づけられた自律、応用倫理学における自律などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学演習Ⅰ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『道徳形而上学の基礎づけ』を取り上げ、輪読する。授業は演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、善意志、定言命法、普遍化可能性、目的自体、自律などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学演習Ⅱ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『実践理性批判』を取り上げ、輪読する。授業は基本的には演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、道徳と自由、道徳と幸福、善と悪、道徳感情などについての検討を行う。	隔年
	日本古典・近代語研究Ⅰ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された蘭日辞典（『波留麻和解』『訳鍵』『ドゥーフ・ハルマ』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』）や英和辞典（『英和对訳袖珍辞書』）等について概説し、近世・近代翻訳語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
	日本古典・近代語研究Ⅱ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された国語辞書類（『東雅』『大和本草』『本草綱目啓蒙』『和漢三才図会』『片言』『物類称呼』『和訓栞』『雅言集覧』『俚諺集覧』等）について概説し、近世語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
	日本古典・近代語演習Ⅰ	江戸時代の主要な蘭日辞典である『波留麻和解』『訳鍵』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』の電子テキストを用いて、近世日本の漢字字体や漢字表記の運用実態について調査する。その際、まず単漢字での用字法の分析を行った後に、熟語についての調査を行う。	隔年
	日本古典・近代語演習Ⅱ	蘭学学習法について書かれた大槻玄沢『蘭学階梯』（天明三1783年成、天明八1788年刊）を読み、江戸で本格的な蘭学が始められた頃の社会的・学問的状况について調査する。注釈書も参照するが、原文での読解能力の修得を目標の一つとするので、授業では基本的に原文で読み進める。	隔年
	日本古典文学研究Ⅰ	日本古典文学の作品（主に韻文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学研究Ⅱ	日本古典文学の作品（主に韻文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『新古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学演習Ⅰ	日本古典文学の作品（主に散文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻四を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
日本古典文学演習Ⅱ	日本古典文学の作品（主に散文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻五を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年	

専攻科目 （国際・地域共創コース）	拡充専門科目	日本近代文学研究Ⅰ	戦前を代表する大衆作家（夢野久作）の作品を網羅的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺の情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、正確な読解を心懸ける。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにも自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
		日本近代文学研究Ⅱ	戦前日本を代表する探偵小説の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺の情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の方法を模索する。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養う。	隔年
		日本近代文学演習Ⅰ	久生十蘭の敗戦後作品を構造的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺の情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の地平を模索する。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにも自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
		日本近代文学演習Ⅱ	戦後を代表する文学表現者の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺の情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の方法を模索する。	隔年
		中国思想史研究Ⅰ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また中国最後の王朝である、清朝の真面目を理解させる。	隔年
		中国思想史研究Ⅱ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また近代化と伝統のはざままで揺れる、清末から民国初期の社会・歴史状況を考察していく。	隔年
		中国思想史演習Ⅰ	経書成立を知るための入門書といえる、馬宗霍・馬巨『経学通論』（中華書局、2011年）を選読して、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法を会得する。さらに儒教思想の歴史であるいわゆる「経学史」の根底を理解させる。	隔年
		中国思想史演習Ⅱ	江セン『新体経学講義（点校本）』（華東師範大学出版社、2014年）を精読し、漢文読解に必要な知識と方法を具体的に学び、さらに儒教史研究の歴史を深く知ることによって、中国古典学の基礎部分を修得する。	隔年
		中国近現代文学研究Ⅰ	「中国女性作家」研究。中国文学（および中国語で書かれた文学）の女性作家の作品と、研究論文の講読をとおして、中国文学史における女性作家の創作とその位置を研究し、中国文学史を再考する。	隔年
		中国近現代文学研究Ⅱ	中国・香港「モダニズム文学（実験文学）」研究。中国・香港の作家の「モダニズム文学（実験文学）」の作品と、研究論文の講読をとおして、世界文学と香港文学、中国文学の関係や、世界文学史における中国・香港文学の位置付けを考察する。	隔年
		中国近現代文学演習Ⅰ	「中国1930年代作家研究」。中国で1930年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1930年代の文学状況を検証していく。	隔年
		中国近現代文学演習Ⅱ	「中国1980年代作家研究」。中国で1980年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1980年代の文学状況を検証していく。	隔年

専攻科目	拡充専門科目 (国際・地域共創コース)	フランス文学研究 I	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学研究 II	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学研究 I」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学演習 I	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学演習 II	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学演習 I」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		美術史学研究 I	美術史学の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに方法論の発展の歴史と最新の方法論について学ぶ。また、欧米諸国と日本の美術史制度とその歴史を比較しながら学び、今日的な問題と課題について具体例を取り扱いながら検討する。	隔年
		美術史学研究 II	主に学会誌や専門雑誌に掲載された美術史研究論文を読み、内容を検討するとともに、その分析方法を整理する。伝統的な方法論やクライテリアを知るとともに、今日注目されている新しい研究の方法を吸収し、独自の研究に応用する訓練をする。	隔年
		フランス美術史研究 I	フランス美術の歴史の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに中世、17世紀、19世紀、20世紀の歴史編纂の歴史と方法論について学ぶ。具体的には、欧文（とくにフランス語と英語）の必須文献と最新の優れた論文を講読・分析し、批判的検討をするとともに、新知見の構築をめざす。	隔年
		フランス美術史研究 II	フランス美術史の動向と美術史研究の成果を理解する。欧文（とくにフランス語と英語）文献の購読などを通して、フランス美術史の基本的な方法論を修得するとともに、新しい研究方法にも通じ、各自の研究に応用する。	隔年
		英語学研究 I	生成文法の言語観を前提として、現代英語の文法現象のうち、文法の部門間の接点（インターフェイス）において生じていると考えられる現象を取り上げ、文法の部門間の関係がどうあるべきか先行研究を渉猟したうえで担当者の管見を披露する。今まで重点的に研究されてきた統語論と意味論の接点の現象に加え、統語論と音韻論の接点の現象と意味論と音韻論の接点の現象を扱い、文法理論のあるべき姿の可能性を提示する。	隔年
		英語学研究 II	英語の通時変化に関する担当者の管見を、主として生成文法的な理論基盤をもとにして提示する。具体的には、英語の通時変化の大きな流れを前提として概観したあと、英語史上生じた音韻変化、統語変化、意味変化から具体的な変化の一つを選び、言語変化を記述しその記述結果を理論的視点から解釈する。そのうえで、提示した解釈の英語の歴史変化への意味合いについて議論する。	隔年
英語学演習 I	英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の統語構造と意味構造に関連する論文を扱う。			

専攻科目 （国際・地域共創コース） 拡充専門科目	英語学演習Ⅱ	英語学演習Ⅰと同様に、英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の音韻論と形態論に関連する論文を扱う。	
	イギリス文学研究Ⅰ	20世紀の各文学理論の基本的な理念と、理論体系の歴史的発展を理解したうえで、批評論文の英語表現を正確に読み取る方法と文学作品の研究手法を学ぶ。具体的には文学理論の代表的な論文と個別文学作品の批評論文を精読し、その英語表現の理解を深め、批評の手法と視点を分析・検討し、個別作品研究への援用の方法を探求する。	隔年
	イギリス文学研究Ⅱ	20世紀末から21世紀に発表された最先端の文学批評の理解を深め、批評論文の難解な英語表現の読解方法を学ぶ。具体的には、ジェンダーから宗教に至る幅広いテーマをめぐる最先端の批評論文を精読し、英語表現を理解したうえで、近年の文学批評の動向を把握し、個別作品の批判的読解方法を学び、新たな論点と分析方法を探求する。	隔年
	イギリス文学演習Ⅰ	近代初期から現代にいたるイギリス文学の詩、戯曲、小説の代表的な作品を読解し、各作家の語りの特徴の分析方法と個別作品の英語表現の読解力を涵養する。具体的には、各時代の各ジャンルの代表的文学作品の一部を精読し、語りにおける英語表現の特徴と表象の諸要素を分析する方法を学び、作家・作品への理解を深める。	
	イギリス文学演習Ⅱ	近代から現代にいたるイギリス文学の散文を中心に、比較的マイナーなサブジャンル作品を精読し、多様な英語表現の読解力を涵養する。具体的には、対象作品の精読を行い、各書き手の語り的手法と英語表現の分析方法を学ぶ。特に、近代以降の「自己」の表象と一人称の語りの様相の関係を分析したうえで、各時代のイデオロギーと修辭的表現の諸要素の相関関係への理解を深める。	
	アメリカ文学研究Ⅰ	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年
	アメリカ文学研究Ⅱ	19世紀末から現代までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年
	アメリカ文学演習Ⅰ	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
	アメリカ文学演習Ⅱ	19世紀末から現代までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	

専攻科目 （国際・地域共創コース） 拡充専門科目	応用言語学研究Ⅰ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」と「転移」に関する文献を購読し、これまでの研究の歴史を概観する。そのうえで近年の言語間の影響と過去の転移研究との違いを正確に理解する。そのために、文献内容の理解を高めるための課題(study questions)に取り組み、その成果を発表し、討議する。さらに、受講者の第二言語習得の経験及び内省に基づき、受講者の母語が第二言語習得に与えた影響について、特定の語彙、文法項目を例にとり、発表、議論する。	隔年
	応用言語学研究Ⅱ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、「言語間の距離」、「個人差」に関する文献を精読し、言語間の距離と言語間の影響、および学習者の個人差と言語間の影響について深く考察する。そのうえで、言語間の影響に関する主要な研究論文を精読し、日本語のどのような語彙及び文法項目が学習言語（主に英語）の習得にどのような影響を与える可能性があるのかを発表資料に基づき発表し、受講者全員で議論する。	隔年
	応用言語学演習Ⅰ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、動詞の項構造情報、受動態、関係節などについて日本語が英語学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年
	応用言語学演習Ⅱ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、可算・不可算名詞、定表現、時制、空間表現などについて日本語が英語の学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年
	言語文法論研究Ⅰ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。イギリスの記述文法の伝統の中で書かれた研究を読む。動詞と助動詞、代名詞と数詞、形容詞と副詞、削除、情報構造、テキスト言語学などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論研究Ⅱ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。記述を中心としながらも、理論的側面も取り入れた研究を読む。否定、発話行為、付加詞、非境界性、比較、指示詞、照応形、形態論などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅰ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。主要部と補部、各フレーズの特徴、節の種類と特徴、修飾や程度の表現などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅱ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。語、句、機能範疇、疑問文、関係節、他動性、主要部移動などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	社会言語学研究Ⅰ	社会言語学の研究において注目されてきた「属性」のうち、性差・年齢差、集団語に注目して、これらに関する先行研究をテキストとして講義を進める。日本語の変種と性差・年齢差との関係とその特徴を多角的に説明、あるいは、集団語として主に若者語に関する研究を取り上げ、言語変化のプロセスや若者語の機能等について説明する。	隔年

専攻科目 拡充専門科目（国際・地域共創コース）	社会言語学研究Ⅱ	「言語生活」「言語意識」に関する先行研究をテキストとして講義を進める。言語生活では、メディア接触と言語変種、共通語と方言の併用、日本語非母語話者の日本語使用等の観点から説明する。言語意識では、言語行動への評価、方言意識、アイデンティティー等に注目しながら説明する。	隔年
	社会言語学演習Ⅰ	性差・年齢差、集団語といった属性に注目して、これらに関するテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	社会言語学演習Ⅱ	言語生活の変化や言語意識に注目して、これらに関するテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	考古学研究Ⅰ	考古学研究の基本文献について、特に理論考古学に関する論文を批判的に解説する。テキストはチャイルド、ビンフォード、ホッター、レンフルーらの著作、またはこれらに関連する論文から、受講生の関心を考慮して選択する。原則として原文を用いて理論の理解を深め、受講生自身の研究成果と併せて検討することを通じて、考古学からの歴史的思考力を鍛える。	隔年
	考古学研究Ⅱ	比較考古学の研究方法を解説し、具体的な考古資料に即して研究を実践指導する。比較考古学（この授業では民族考古学的方法・土俗考古学的方法を含む）のもつダイナミズムを理解するために、まず具体的研究例を学び、受講者毎に設定する課題に対し、実際の作業を通じて議論し、歴史と文化を描き出す際の理論的な問題点もあぶり出す。	隔年
	日本考古学研究Ⅰ	日本考古学研究の進め方、論文の書き方について訓練する。複数のオピニオン・リーダーによる研究文献を購読し、比較・検討することにより、日本考古学の現在の水準と問題点を探る。その上で、自分自身の研究を日本考古学の課題や歴史的課題と照合し討論する。テキスト及び課題は受講生の関心を考慮する。	隔年
	日本考古学研究Ⅱ	日本考古学の研究の流れを、具体的な考古資料に即して指導する。調査計画の策定から始め、最終的には自身の成果をまとめることを目標として、事実記載及び考古学的評価を含む短編の報告（調査報告、資料紹介または地域の文化財保護計画）の作成に取り組む。資料や課題は受講生の関心を考慮する。	隔年
	中国考古文化研究Ⅰ	甲骨文字の誕生から現在までの研究史について理解を深める。併せて考古資料、文献資料、出土文献資料それぞれの特性について学び、理解する。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	中国考古文化研究Ⅱ	甲骨文字研究の全体像について理解を深め、特に書体研究とISO/IEC10646への登録問題を通して、アカデミックな研究成果と実務規格との兼ね合いについて理解を深める。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	中国考古学研究Ⅰ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。加えて、清末以降の日中関係史について、中国考古学史を軸に学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年

専攻科目 （国際・地域共創コース） 拡充専門科目	中国考古学研究Ⅱ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。特に新石器時代末～二里頭期の状況を継続と断絶という観点から学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	日本文化史研究Ⅰ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に国家権力（朝廷や幕府、宗教権門）との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
	日本文化史研究Ⅱ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に地域権力（在地領主や地方寺社）との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
	日本古代中世史研究Ⅰ	日本の古代の歴史を茨城（常陸・北下総）の事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。日本文化史に関する研究姿勢、研究能力を、より高めることができる。	隔年
	日本古代中世史研究Ⅱ	日本古代中世史に関する研究成果を教員・学生が提示し、議論を通じて、ブラッシュアップする。日本の中世の歴史を事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。	隔年
	日本政治史研究Ⅰ	近世の政治史について論じた基本文献と、武士社会の権力と伝統の内実を記録した史料を読み、近世社会の政治的特質について学ぶ。具体的には、前半は尾藤正英『江戸時代とはなにか』を輪読し、後半は水戸藩の政治に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
	日本政治史研究Ⅱ	近世の国際政治史を論じた研究文献と、近世人の海域世界との接触について記録した史料を読み、東アジアという視野のもとで近世日本の特質について考える。具体的には、前半は山口啓二『鎖国と開国』を輪読し、後半は東アジア海域で活動した人びとに関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
	日本近世史研究Ⅰ	近世の百姓や町人について論じた基本文献と、庶民の視点で近世の風景を記録した史料を読み、近世の民間社会の実態について学ぶ。具体的には、前半は深谷克己『百姓成立』を輪読し、後半は市井でやり取りされた情報や伝承に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
	日本近世史研究Ⅱ	近世人の生命維持について論じた研究文献と、自然環境に適応した人びとの営みを記録した史料を読み、「生きる」という視点で近世社会の特質について考える。具体的には、前半は塚本学『生きることの近世史』を輪読し、後半は飢饉や自然災害に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
	日本社会史研究Ⅰ	近代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に19世紀後半から20世紀前半にかけての史料の輪読を進めることで、近代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
	日本社会史研究Ⅱ	現代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に20世紀前半から2中頃にかけての史料の輪読を進めることで、現代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
	日本近現代史研究Ⅰ	日本近代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に19世紀後半から20世紀前半の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、近代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年

専攻科目 （国際・地域共創コース）	拡充専門科目	日本近現代史研究Ⅱ	日本現代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に20世紀前半から中頃の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、現代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅰ	17世紀における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としてはジュンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定朔漠方略』や満洲語の一次史料である『康熙朝満文硃批奏摺』に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅱ	18世紀前半における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としては、ジュンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定準噶爾方略』や満洲語の一次史料である『雍正朝満文硃批奏摺』・『準噶爾使者档』、さらにはジュンガルを訪れたロシア使節の記録等に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅰ	清朝の八旗制度と中央ユーラシア周辺社会（ハルハ、ジュンガル、ホシュート、チベット等）に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅱ	近世東部ユーラシア世界（清朝、ロシアおよび日本）の歴史（関係史）及び社会に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅰ	ドイツの戦後社会における歩みを検討していく。その際に、1) ヨーロッパを中心とした国際関係をめぐる歴史、2) ドイツの国内政治史、3) 市民社会の構造的変化・家族やジェンダー問題、メディアや消費生活のあり方といった社会史という3つの軸を中心に分析する。	隔年
ヨーロッパ社会史研究Ⅱ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年		

専攻科目 拡充専門科目（国際・地域共創コース）	ヨーロッパ政治史研究Ⅰ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、経済的・政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
	ヨーロッパ政治史研究Ⅱ	ヨーロッパの20世紀史を論じた最新の研究をとりあげ、基本知識を確認するとともに、テキストを読み込んでいく。具体的には、二度の世界大戦とヨーロッパの国民国家体系が引き起こした問題、さらには社会主義（東西冷戦）などが主題となる。参加学生からの積極的な発言も求める。	隔年
	ヨーロッパ歴史文化研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパの歴史文化、とりわけ英仏独以外の近現代史に関する近年の重要な研究を紹介したうえで、受講生の関心に沿った研究報告（プレゼン）を課す。これによって、修論執筆に必要な文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
	ヨーロッパ歴史文化研究Ⅱ	本講義においては、近現代史を中心とするヨーロッパの歴史文化に関する研究に取り組むことで、国民史に基づく一国史観を相対化し、過去と未来をつなぐ歴史的視野を養う。以上を通して、修論執筆に必要な史料・文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
	ヨーロッパ近現代史研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する最新の研究に触れたうえで、その研究史的意義、多文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年
	ヨーロッパ近現代史研究Ⅱ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する古典的な研究に対してもその射程を広げ、その研究史的意義およびヨーロッパの歴史文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年
	行動機構論研究Ⅰ	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究Ⅱを履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年
	行動機構論研究Ⅱ	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究Ⅰを履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年
	行動機構論演習Ⅰ	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康に関連した心理学の諸理論、例えば心理学的ストレス理論、ソーシャルサポート、健康信念モデル、計画的行動理論、セルフエフィカシー、自己決定理論などについて理解を深める。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年

専攻科目 拡充専門科目（国際・地域共創コース）	行動機構論演習Ⅱ	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康増進に焦点を当て、介護ストレス、介護予防、健康行動、テクノロジーへの適応などの問題について、現場の課題と実践のあり方について考察する。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	認知行動論研究Ⅰ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解を通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論研究Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論演習Ⅰ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解を通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論演習Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年
	家族心理論研究	家族をめぐる歴史や定義について理解を深めながら、主として離婚・再婚、そして子どもの養育課題といった現代の家族における諸問題について検討する。また、生涯発達の視点も含めながら、家族のライフサイクルについて多面的に検討する。	隔年
	行動文化論研究Ⅰ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅰ（「現代の事例」に学ぶ）。現代の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげた研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
	行動文化論研究Ⅱ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅱ（「過去の事例」に学ぶ）。過去の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげた研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年

専攻科目	拡充専門科目（国際・地域共創コース）	行動文化論演習Ⅰ	社会心理学および関連分野の「古典的文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
		行動文化論演習Ⅱ	社会心理学および関連分野の「最近の文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
		生涯発達論研究Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に注目した知性、情動、身体、自他関係などの形成について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論研究Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に注目して、出来ることが当たり前ではないことから人間の生涯にわたる発達について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論演習Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に関する個別具体の課題について掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論演習Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に関する個別具体のテーマについて掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		文化人類学研究Ⅰ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。	隔年
		文化人類学研究Ⅱ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。アメリカの英文専門書の読解能力を高め、マヤ文明の特徴、旧世界の四大文明との共通性を理解できるようになることを目指す。	隔年
		文化人類学演習Ⅰ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。	隔年

専攻科目	拡充専門科目（国際・地域共創コース）	文化人類学演習Ⅱ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。学術雑誌論文の批判的読解を通じて、先スペイン期のメソアメリカ諸文明を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。	隔年
		比較文化論研究Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。具体的には特に、「集団」「伝統」「儀礼」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
		比較文化論研究Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、マルチサイトッド・エスノグラフィ、オートエスノグラフィ（自己エスノグラフィ）など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
		比較文化論演習Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。特に、広義の「語り」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
		比較文化論演習Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、組織エスノグラフィ、オートエスノグラフィ（自己エスノグラフィ）など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
		福祉分野に関する理論と支援の展開	社会福祉の基本的な理念や機能・役割について理解を深めたいうえで、特に、障害者（児）に関連した福祉現場において生じる、心理社会的な課題及び必要な支援について学ぶ。具体的には、身体障害者（児）、知的障害者（児）、発達障害者（児）、精神障害者に関する法・制度について学び、地域における支援の実際や今後の課題について、事例等を交えながら検討する。	
		教育分野に関する理論と支援の展開	地域社会における学校、いじめ、不登校、発達障害、児童虐待、アセスメント、コンサルテーション、心理教育をキーワードとし、スクールカウンセラーとして働くための基礎知識を身につける。また、教育分野における支援のあり方を通して、社会人としての姿勢を身につける。	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	司法・犯罪分野に関わる心理専門職の実践について学ぶ。具体的には、少年審判手続及び関係機関の連携について学ぶと同時に、非行メカニズムの理解、少年への支援・働きかけについて学習する。また、家事事件等に関する基礎知識及び家庭内紛争の解決に向けた専門職の実践について学ぶことにより、社会人としての姿勢を身につける。	
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	地域における産業・労働分野における支援に焦点を当てて、その理論と具体的実践について学ぶ。具体的には、組織の特徴、組織運営の実際、制度と法規、産業ストレスの実際、健康保持増進のための指針、障害者への就労支援、自殺予防と危機対応等について学ぶ。	

専攻科目	拡充専門科目 (国際・地域共創コース)	心理的アセスメントに関する理論と実践	将来、社会人として、心理臨床家の仕事を行う際に必要な臨床心理査定（アセスメント）について理論と施行法を教授する。実物の検査用紙や器具を用い、演習を通して心理査定の実際を学ぶ。 (オムニバス／全15回) (90 金丸 隆太／8回) 代表的な知能検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 描画法、質問紙法から代表的な心理検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。	オムニバス
		心理支援に関する理論と実践A	ロジャーズ、C.、来談者中心療法、カウンセリング、プレイセラピーをキーワードとし、ロジャーズ、C.の来談者中心療法についてその主要論文とそれに関連する文献を読みながら討論を行い、理解を深める。	
		心理支援に関する理論と実践B	公認心理師として、地域社会において活動を行なっていく上での基礎的な考え方、倫理的問題や治療構造等、心理面接を行う上での基本について、講義や事例検討を通して実践的に学ぶ。 (オムニバス／全15回) (108 大島 聖美／8回) 大学院でどのように学んでいくのか、倫理的問題や治療構造等、言語面接を行う上での基本について学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 事例論文や各自が実習で担当している事例報告を材料に、主に演習形式によって、心理療法の実践に生じる諸問題や展開の在り様について理解と対応の可能性を検討する。	オムニバス
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	家族、コミュニティ、関係行政論をキーワードとし、家族やコミュニティに焦点を当てた心理支援の理論と方法について学ぶ。さらに、これらの心理支援の背後にある法律や制度についても学ぶ。	
		心の健康教育に関する理論と実践	心理専門職者に必要な心の健康に関する諸理論を学ぶ。具体的には地域保健活動における予防の概念、ストレス理論、自殺予防と危機対応、心の成長モデル、表現活動と健康等について実践を交えながら学ぶ。 (オムニバス／全15回) (90 金丸 隆太／4回) ガイダンス、心の成長モデルに関する回を担当する。 (108 大島 聖美／4回) ストレスマネジメントおよびアサーショントレーニングについて、基礎的な知識と心理教育の実際について学ぶ。 (110 地井 和也／3回) 「睡眠の問題」、「自傷行為・自殺の問題」、「死と喪の作業」をテーマとして基礎的な知識と問題の予防に関する諸理論および心理教育の実践方法について学ぶ。 (55 正保 春彦／4回) 集団活動における心の教育の実践方法について学ぶ。また、まとめの回を担当する。	オムニバス

専攻科目	拡充専門科目（国際・地域共創コース）	保健医療分野に関する理論と支援の展開	精神医学の基礎と、統合失調症、気分障害をはじめとする代表的な精神疾患について学び、さらに、精神疾患の治療の基礎を学ぶ。精神医学の最近のトピックについて学ぶことにより、社会人としての心理専門職に必要な精神医学的見地を身につける。	
		投映法特論	ロールシャッハ・テスト（エクスナー法）の歴史・実施手順・コーディング・解釈について学び、被検者の心理的体験を理解し、自分自身で検査結果の整理を行うことができることをめざす。心理専門職者として、本テストを臨床現場で活用するための基本を習得する。	
		箱庭療法特論	箱庭療法の理論に関する講義と箱庭制作体験を通して箱庭療法の実践について学習する。具体的には、箱庭制作・見守り体験、事例検討を通して箱庭療法の実践の基礎を身につける。	
		現代ジャーナリズム研究	ネットを通じて知る機会が増えたとはいえ、信頼性の高さで群を抜くのは新聞、放送で、内外の情報、社会の主要な動きを知るのには欠かせない。では、依って立つ、その核心ともいえるジャーナリズムとは一体何なのか。どのような形で情報が収集され、我々に届けられるのか。なぜ、信頼性が高いのか。その論理、倫理は。先般の米大統領選、仏大統領選で話題になった蔓延するフェイクニュースについて考察し、メディアリテラシーの体得に努力する。その後、ジャーナリズムのあり方や役割などを学ぶ。	
		マスコミ研究	現代社会の中で、マスコミ・メディアは、どういった役割を果たしているのだろうか。企業のみならず政府、地方公共団体、さまざまな組織にとってメディア戦略は、その将来を決するような重大な役割を担っているともいえる。現代社会を生き抜く際に必ずかかわってくるメディアについての理解を深めることはかなり大きな意味を持つ。マスコミ関係の書籍の購読を通じてメディアへの理解を深める。	
		ポピュラー文化研究	ポピュラー文化はどのように形成されてきたのか、雑誌などの出版物を通して、それぞれの時代のポピュラー文化について考察する。とくに、少女文化の形成に注目する。明治以降から現在までの少女文化を範囲とし、文献を購読発表し、それについてディスカッションを行う。	
		映像メディア研究	発想するから始まり多くの人々の前で上映するまでの一連の映像制作の作業を通し、映像作品の制作と表現の基礎を学ぶ。特に「企画」し「具体化」し、伝える工夫を凝らす「構成」力を養うことに重点を置く。「映像」というメディアを通して、ものの見方、考え方を養い、他でも応用できるリテラシー力を身につける。	
		メディア文化研究	メディアとは何かを考えると、情報伝達の側面としてみるだけでは不十分なことに気づかされる。活字が主張し、映像が魅了するように、印刷技術の登場、ラジオ、テレビ、インターネットといったメディアの技術革新は人々に働きかけ、身体や精神、思想を組み替えてきた。様々なメディア装置（印刷技術、ラジオ、テレビ、映画、インターネット、SNS）の成り立ちを概観しながら、そのメディアが作りだした「文化」を考える。	
		メディア教育論研究	現代社会におけるメディア教育について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。日々変化を続けているメディア・テクノロジーを教育や学びの諸場面にどのように活用していくべきなのか、それによって教授者と学習者の位置づけや役割はどのように変化するのか、近未来の教育・学習スタイルはどのようなものになると考えられるのか等、複数の視点からメディア教育の現状と将来像について考察する。特に近年急速に普及したスマートフォン・タブレット型端末や電子テキストを活用した教育の方法やその課題・可能性を中心的な題材・事例として、文献講読と議論により理解を深める。	
		拡充専門科目（法学・行政学コース）		

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	電子メディア論研究	現代社会における電子メディア活用の諸場面について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。インターネットに関連する電子メディア・テクノロジーの歴史・背景や、社会への影響力、メディア特性などについて、資料・文献講読やディスカッションを通じて理解深化を目指す。さらに、情報・コンテンツの共有・共感・認知、コミュニケーション、情報の保護や権利などの観点からも考察を加え、高度情報化社会の諸問題について議論・考察する。	
	近代日本メディア史研究	近代日本における新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどマスメディアの歴史について考える授業。各時代のマス・コミュニケーションがどのようなものであったかを、できるだけ現物資料を用いて考察していく。マス・コミュニケーションの原理を歴史的な比較を通じて理解し、それによって現在のマスメディアに対する批判的視点を手に入れることを目標とする。授業は教員による講義形式を基本とするが、適宜、受講者どうし、および受講者と教員によるディスカッションを交えつつ進める。	
	映像広告論研究	日本におけるテレビコマーシャルの歴史（1950年代から1990年代）を映像資料・文献資料に基づいて解説する。また、映像資料および放送関係の文献資料についてその性質を理解し、扱いに習熟する。授業は教員による講義と、受講者どうしおよび受講者と教員によるディスカッションを適宜組み合わせで行う。	
	学習デザイン論研究	学習科学や認知科学の視点から人がどのように学習するのかについて理解し、学習を支援し促すための道具や物理的環境、人間関係をどのように設計したらよいのかについて考える。学習に関わる理論としては状況的学習、学習環境設計に関しては活動理論、デザイン実験アプローチ等を取り上げる。授業は、講義、文献講読、デザイン実習により進める。	
	情報デザイン研究	我々は日々の生活の中で自分達の生きる現実をデザインしつづけている。そのデザイン活動が、どのような道具を用いて、どんな風に行われているのかについて、人工物による媒介、実践コミュニティへの参画といった社会構成主義的な視点から考える。また、人と人、人と機械のコミュニケーションの成り立ちをインタラクションとヒューマンインタフェースの視点から考え、その支援方法について議論する。文献講読とプロジェクト型活動により授業を進める。	
	コミュニケーションデータ分析研究	コミュニケーションに関する社会学的なデータ分析の方法を学び実証研究の具体例に触れることで、社会調査の方法論やデータ分析の手法を身につけるとともに、先行研究にあらわれたデータの分析・解釈について適切に評価・判断できるようになることを目指す。	
	コミュニケーション社会学研究	現代社会における人々の日常的なコミュニケーションの特質や問題点を社会学的な視点や方法論から理解するために、当該領域の主要な先行研究やデータなどの資料を読み、それについて履修者がレポートし、参加者全員で質疑応答を行う。	
	多文化コミュニケーション論研究	多文化コミュニケーションの基礎理論を概観した上で、現存する具体的諸問題を把握し、クリティカルに議論していく。さらに、多様な背景をもつ人々が相互に理解し共に生きていくために、人と人、人と地域社会がどのように関わっていけばよいのか、その要因とこれからの課題を文献と映像から捉えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)多文化コミュニケーションに関する基礎理論を理解し、視野を広げることができる。 (2)多文化コミュニケーションに関する様々な具体的問題をクリティカルに議論することができる。	

専攻科目 拡充専門科目 (法学・行政学コース)	多文化関係学研究	多文化共生に関する基礎理論を概観した上で、国際社会と日本の関わり、日本の「内なる国際化」の現状と課題を中心に検討していく。それらを踏まえた上で、地域の多文化共生実現に向けて実行可能な取り組みを具体的に考えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)異文化間教育／多文化教育に関連する具体的事例、課題について理解することができる。 (2)多文化共生社会の実現に向けて、現在および将来的に自分ができることを具体的に考えることができる。	
	グローバル化と地域開発研究	グローバル化と地域開発について、人の移動（移民・難民等）や財・サービス・資金等の移動に着目し、国際交流・地域間交流をふまえて、地球規模課題と地域課題との関係について多角的に分析する。また、グローバル化する地域社会の持続可能な開発にむけて、多層性・多様性に注目し、理論的・実践的に研究する。	
	持続可能な開発とSDGs研究	国際社会全体が取り組む国連総会で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」およびこれに含まれるSDGs（持続可能な開発目標）を軸に、「誰一人取り残さない」共生社会に向けた現状と課題についてグローバル＋ローカルに、国際開発・国際協力、国内政策およびこれらの関連に着目し、事例等も踏まえて理論的・実践的に研究する。持続可能な開発・SDGsの3本柱である経済・社会・環境の調和のとれた持続可能性にかんがみ、行政・企業・市民社会等ステークホルダーの役割とパートナーシップについて検討する。	
	社会行動論研究Ⅰ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から世界を見渡し地域に根ざしたフィールドワークを用いた研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。フィールドワーク論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年
	社会行動論研究Ⅱ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から俯瞰的な視野と地域への足場を基本とするエスノグラフィックな研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。エスノグラフィック論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年
	社会行動論演習Ⅰ	日本だけでなくアジア（韓国・中国・台湾・ベトナムなど）で行われている質的研究に触れ、自身の研究を捉え直すことができる。異なる文化の研究とコミュニケーションを一社会人として図ることができる。テキストの他に質的研究の学術論文を読み込み、その問題の立て方、方法論の選択、結果から考察への展開を読み解く。	隔年
	社会行動論演習Ⅱ	映画を媒介とした対話、すなわち円卓シネマという実践・方法を、他の場面で応用し展開できるようにする。実際に日本以外も含めた世界の映画を取り上げ、それをめぐる対話を重ねる試みを行い、そこで紡ぎだされる事柄を質的に捉え分析する試みを一社会人として行えるようにする。	隔年
	スポーツ社会研究Ⅰ	スポーツが地域社会に果たす機能や役割について理解を深めたいうえで、海外の文化・歴史や教育制度との比較を通じて、現在日本で生じているスポーツ活動にかかる諸問題や課題について考察する。具体的には、運動部活動と地域クラブの連携、プロスポーツの地域共創への影響、スポーツとメディアの関係等であり、職場におけるコミュニケーション促進に寄与する。	

専攻科目 （法学・行政学コース）	スポーツ社会研究Ⅱ	世界的にスポーツ指導の現場では、発育発達段階に応じたアスリートセンタードの理念に基づいたコーチングが推奨されている。コーチングはスポーツの場面ばかりではなくあらゆる組織で注目されており、21世紀型能力の育成には欠かせない。事例等を交えながらチームづくりと組織づくりについて考察し、職場におけるプロジェクト運営に寄与する。	
	国際政治学研究Ⅰ	本講義では、受講者が、伝統的な安全保障概念とその国際政治上の問題について理解することを目標とする。なぜ、一見して非合理的な戦争という政策がたびたび選択され、そのための準備に莫大な資源が投入されるのか、またなぜ軍縮が難しいのか。そこで実現する「平和」のために安全保障論が何を論じてきたのかを理解できるようにする。 本講義では国際政治学における支配的なパラダイムのひとつである安全保障(security)の問題について検討する。現在の安全保障は、人間安全保障に代表されるように、政治から環境や気候変動、経済やエネルギーなど、概念を多様化・拡大化させている。その一方で、伝統的な安全保障概念を維持するべきという意見も根強い。このような転換期にある安全保障パラダイムについて、根本から再検討を試みる。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。	
	国際政治学研究Ⅱ	本講義では受講者は授業でとりあげた国際政治のもっとも現在のトピックである開発(development)について、その基礎的な知識を得るだけでなく、自らの専門的な見地から課題や問題点を見つけ、それらにたいして、一定の解決案を提示できるようになることが求められる。 本講義では国際政治学におけるもっとも重要なパラダイムである開発と安全保障の中から、開発をとりあげる。前期の安全保障についての議論とその成果もふまえて、開発についての検討を中心に平和学の視覚からも探求を深める。とくに、現在の地球環境問題を巡る国際政治の転換期において、それらのパラダイムがどのような変容をとげつつあるかに着目して議論を進める。また、開発と安全保障の概念的な共通点にも注目して、現代世界におけるパラダイムの本質についての考察を深める。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。	
	地方政治論研究Ⅰ	地方政治をめぐる先行研究の流れを把握し、最新の研究成果について理解する。地方政治および地方自治研究の系譜について確認し、最新の研究成果と研究方法について検討する。また政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。地方議会および地方政党組織の実態について検証し、中央政治とのリンクージュについても考察する。	
	地方政治論研究Ⅱ	地方政治研究の最近の動向を追う。また、政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。また最新の研究はどのような方法を用いているのかについても検討する。	
	社会地理学研究Ⅰ	人間と空間・環境との関係を考察する人文地理学の考え方と理論について学んだ上で、とくに都市に焦点をあてた「都市地理学」の分野について講義を行う。 世界には民族、社会階層、ジェンダーなど多様な人びとが共存し、最新技術や文化・情報が集約する一方で、スラム地域を内包する都市は、現代社会の諸問題が凝縮している。都市の形成・発展・衰退・再生の過程および社会空間構造を把握した上で、社会問題解決に向けてどのような方法があるか理論的に学ぶと共に自ら実践する方法を共に考える。	

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	社会地理学研究Ⅱ	世界および日本における諸地域の社会構造と空間との関係について学ぶ。社会的な差異や格差がどのように空間的に反映されるのかについて、文献輪読を通じて社会地理学的な理論を学んだ上で、環境、文化、宗教、人種・民族、社会制度、政治経済体制など様々な社会的要因がもたらす地域的差異について事例を挙げて考察する。そうした格差や差異がローカルな要因のみでなくグローバルな要因からも分析していく方法を習得する。授業では、該当地域を巡検することを通じて、その差異がいかに空間的に反映されているかを観察し問題を把握する。	
	経済地理学研究Ⅰ	現代における社会・経済構造の変容がもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方の都市・農村地域において深刻化しているフードデザート（食の砂漠）問題を中心に取り上げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。問題を客観的に分析するために、地域統計を用いた地域分析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
	経済地理学研究Ⅱ	経済地理学に関わる都市・地域問題、特に地域の人口減少問題や地域活性化について、その現代における社会・経済構造の変容がもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方において深刻化している人口減少問題や地域活性化に向けた課題を中心に取り上げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。特に、空間データや統計データを用いたGIS（地理情報システム）による空間解析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
	地域社会論研究Ⅰ	台湾史に関する基礎的文献を輪読しながら、台湾の地域社会の成り立ちを移民社会、植民地化、脱植民地化といったキーワードから理解する。また、台湾という地域の研究において何が問題となってきたのか、また台湾がどのような地域としてとらえられてきたのかを理解する。	
	地域社会論研究Ⅱ	台湾の政治社会に関する基礎文献を輪読しながら、ローカルレジームがどのように形成され、また民主化、台湾化以後どのように変容しているのかを考察する。	
	環境社会学研究Ⅰ	持続可能な社会の構築のための環境ガバナンスの在り方、環境ガバナンスを支える民主主義の在り方などについて、海外の事例を含め議論の背景、専門家の役割、シティズンシップ論の観点から考察する。	
	環境社会学研究Ⅱ	環境リスク社会と言われる現在、国内・海外において環境運動がどのように進展し、政策的にどのような応答があったのかを考察する。リスクと社会的不平等について、国際的な視点をもちつつ社会構造的に考察する。	
	社会事業史研究Ⅰ	日本の近代を中心に、社会事業の歴史を歴史社会学の方法と視点で学ぶ。まず歴史社会学的研究の方法を、テキストや先行研究を通じて学ぶ。これを踏まえて、貧困と生存権をめぐる思想、理論、および実践を、近代化・現代化の過程のなかに位置づけて考察する。前近代の社会における救済と相互扶助、近代化の過程で形成されていった公的な救済制度、戦争と社会福祉、第二次世界大戦後の改革などが主な論点となる。	

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	社会事業史研究Ⅱ	社会事業史研究の基礎として、「シティズンシップ」「生存権」「福祉国家」「貧困」の概念と学説を学び、公的扶助の歴史の概要を理解する。これらを踏まえて、イギリスの救貧制度、福祉国家、および民間の慈善事業の歴史を学び、日本の社会事業史と比較しながら、貧困をめぐるさまざまな思想と実践を知る。そして、国家、市民社会、共同体と個人との関係に関わるテーマを、歴史社会学的視点から考察する。	
	社会調査法研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査の基本的な考え方や調査技法の本質的特徴について理解するために、テキスト購読を行う。(2)各履修者の研究について検討するとともに、それを素材にして研究法や方法論に関わる議論を行う。	
	社会意識論研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査に関する基礎的な知識を身につけ、社会意識の調査・研究を必要な際に行えるよう、基礎固めをする。(2)社会科学の研究に必要な社会調査データの扱い方を社会意識論研究を参照しつつ身につける。	
	地誌学研究Ⅰ	地誌学は特定の地域における自然環境や社会・経済環境、および歴史・文化環境の総合的な分析であり、近年求められている「総合性」をもつ学問である。本講義では、いま一度、「総合性」をもつ学問としての地誌学を整理する。さらに地域スケールの異なる事例研究を設定し、地誌学的な分析によって地域の性格を解明することで、地誌学の基本的な考え方と方法論を学ぶ。	
	地誌学研究Ⅱ	本講義は、人間の経済活動のなかで、観光や余暇活動をはじめとしたツーリズムの現象を取り上げ、それらを地域活性化に関係させながら、地誌学の立場から検討する。具体的には、ツーリズムや地域活性化に加えてポスト生産主義をキーワードとし、世界中でみられるようになったポスト生産主義的な観点からのツーリズムを媒介とした地域活性化の仕組みとについて検討する。	
	家族社会学研究Ⅰ	ジェンダー論を軸にして家族社会学分野の研究と地域社会学分野の研究を架橋する作業を行う。具体的には、ネットワーク論、社会関係資本論などの研究動向をふまえつつ、震災・原発事故の事例研究を通じて家族社会学と地域社会学の融合的アプローチを学ぶ。	
	家族社会学研究Ⅱ	少子化対策や高齢社会対応と関連して展開されている日本の男女共同参画政策について、家族社会学や地域社会学分野の先行研究をふまえて批判的に考察を加える。具体的には、少子化対策についての先行研究をふまえて、日本、EU諸国、国連等のジェンダー政策、家族政策、人口政策の事例を検討する。	
	環境政策・経済学研究Ⅰ	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の数回にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 学生にはIPCC(気候変動に関する政府間パネル)報告書の輪読、適応情報プラットフォーム(http://www.adaptation-platform.nies.go.jp)等の情報整理を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
	環境政策・経済学研究Ⅱ	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の数回にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 気候変動、エネルギーに関する論文輪読、データ解析を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
	理論経済学研究Ⅰ	マクロ経済学、短期モデル、新しいケインジアン、財政政策、金融政策 経済成長など、標準的なマクロ経済学の理論について講義を行い、マクロ経済学の標準的なモデルについて理解する。	

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	理論経済学研究Ⅱ	ゲーム理論について、主に、Nash均衡解、協力ゲーム、非協力ゲームなど、ミクロ経済学の標準的なツールとしてのゲーム理論について学び、ゲーム理論の基本的な考え方を身につけ、Nash均衡解などの概念を利用できるようにする。	
	経済統計研究Ⅰ	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には、国民経済計算体型（SNA）と産業連関表の基本構造を理解した上で、地域経済分析システム（RESAS）を用いた地域経済構造分析や、市町村レベルの産業連関表を作成して経済効果の試算を行う。	
	経済統計研究Ⅱ	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には確率・統計学の基本知識、手法を復習した上で、EXCELやgretl等の計量経済分析ソフトを用いて回帰分析を中心とした計量経済学的実証分析ができるようになることが目的である。	
	経済政策研究Ⅰ	現代日本の経済政策について幅広く学ぶ。受講者には、課題文献のレジュメ作成だけでなく、関連する政策問題に関するレポート報告を求める。主目標は、①日本の経済政策の概要を知ること。②日本の経済政策の現代的な課題について、経済学的に考えることができることの2点。	
	経済政策研究Ⅱ	政策評価・行政評価の理念と方法を学ぶ。自治体評価、中央政府の政策評価、非営利民間組織の社会的インパクト評価等において、信頼できるデータやエビデンスに基づいてバイアスの小さい評価を実践するための基礎的方法論の習得を目指す。	
	財政学研究Ⅰ	現代財政について、制度・歴史・国際比較などの手法による幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題について考察する。 本演習では、とりわけ税制改革をめぐる各国の国際的動向について講義し、国内外の事例についてディスカッション・発表を行うものとする。	
	財政学研究Ⅱ	現代財政について、制度・歴史・国際比較など手法も用いた幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題を考察する。 本演習ではとりわけ、予算・社会保障に関する国際的動向を重視した講義を行い、それらを踏まえ国内外の事例についてのディスカッション・発表を行う。	
	金融論研究Ⅰ	金融論の基礎知識の理解に主眼を置きながら、併せて学んだ知識をベースに時事問題にも関心を持ち、自分なりに考える力を身につける。講義では、レジュメの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。主な講義内容は以下である。通貨の機能、金融機関の種類と機能、茨城県の金融マップ、フィンテック、資産の証券化、資金循環勘定、金融政策、金融行政、プルーデンス政策。	
	金融論研究Ⅱ	金融論の知識をベースに、具体的な問題を、グローバルに、日米比較をしながら考えていく。講義では、テキストの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。講義内容は以下である。これからの金融機関に求められるものは何か～協働・協創のエコシステムの世界で。地元資本が支えるアメリカ経済～「メインストリート」金融の強みに学ぶ。地域の疲弊を転換させる地域金融を目指して～日々の取り組みに息吹を吹き込む。	
	労働経済論研究Ⅰ	働き方改革と女性活躍推進をテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に取り扱う。	

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	労働経済論研究Ⅱ	日本社会に生じているワーク・ライフ・バランスをテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等をを主に取り扱う。	
	経営管理論研究Ⅰ	本講義では、修士レベルの組織行動論（organizational behavior）に関する基礎的な概念や理論を学習することを目的とする。企業・組織内の個人や集団を対象とし、心理学や意思決定論、社会学の知見を援用しながら、日本語および英語の文献を輪読する。具体的なトピックとして、パーソナリティ、態度、感情、認知、信頼、リーダーシップなどが挙げられる。報告者の発表を土台とし、受講者間の議論を深めることで、新たな視点への気づきや修士論文のテーマ策定に役立てる。	
	経営管理論研究Ⅱ	本講義では、経営管理論Ⅰを踏まえ、組織行動論に関する研究論文や文献（主に英語）を輪読し、より専門的な知識や研究手法の理解、論文執筆の基礎を学ぶことを目的とする。本講義では、専門的な知識の習得のみならず、当該論文ではどのように研究をデザインし、どのような手法を使って実証しているのかを理解することで、自分自身が研究を実施するための手法を考える基盤を作る。最終的には、自分自身で組織行動に関する研究の問いを導出し、問いに対してどのような研究デザインを行うかを考え、修士論文執筆に活かせるようにする。	
	マーケティング論研究Ⅰ	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学とって過言ではない。その知見は企業経営への影響を強める一方、近年は顧客との新たな関係が注目され、互いの影響力をどう捉えるかが重要になっている。そこで過去のマーケティング研究から近年の動向までを概観し、マーケティングの未来を展望する。	
	マーケティング論研究Ⅱ	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学とって過言ではない。本講座はマーケティング論研究Ⅰで概観した学術的な傾向を踏まえ、それらがもたらす新たな視点とはどのようなものかについて、さらなる検討を進めていく。とりわけ、主体間の構造という視点から関係を捉え、影響や効果からマーケティング活動の体系を展望する。	
	管理会計論研究Ⅰ	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。Ⅰでは、マネジメント・コントロールの基本概念と責任センターを中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
	管理会計論研究Ⅱ	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。Ⅱでは、戦略策定、予算編成、業績評価を中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
	監査論研究Ⅰ	財務諸表監査について研究する。 株式会社の利害保持者に開示される財務諸表の適正性を保証するのが財務諸表監査である。財務諸表の適正性を保証する財務諸表監査の基本的な仕組みを考察し、利害保持者の利害がいかんして調整されるのかを研究する。	
	監査論研究Ⅱ	財務諸表監査制度と監査手続について研究する。 我が国における財務諸表監査制度である、金融商品取引法監査と会社法に基づく監査とそれぞれに基づく具体的は監査手続について研究する。	

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	経営戦略論研究Ⅰ	本講義の目的は、(1)経営戦略論の基本的知識を習得し、(2)経営戦略の考え方を身につけて企業経営を研究できるようになることにある。 そのために、本講義では、経営戦略論の基本的な知識を習得するため、多様なトピックに触れた経営戦略論の教科書を輪読し、背後にある考え方を身につけるために、内容についての議論を行う。	
	経営戦略論研究Ⅱ	本講義の目的は、経営戦略論の古典を取り上げることで、研究における議論の進め方を習得することにある。 そのために、本講義では経営戦略論の古典を輪読する。内容の理解とともに、とりわけ優れた古典の輪読を通じて、(1)分析のフレームワークや(2)研究の論理的な構成についても議論を行う。	
	アジア経済論研究Ⅰ	本講義の内容は、2008年のグローバル金融危機以降のアジア経済の「躍進」を消費という切り口から考えるものである。本講義の到達目標は(1)2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、(2)各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、(3)自己の研究課題を設定する、の3点である。授業は初回のオリエンテーションと第15回のまとめを除き、テキストとして指定した『アジアの消費—明日の市場を探る』、大木博巳編著、ジェトロを輪読し、受講生とともに議論するという形式で進める。	
	アジア経済論研究Ⅱ	2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を「消費」という切り口から考える。教科書を用いた輪読形式で授業を進める。2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、自己の研究課題を設定することを講義の主眼とする。	
	日本経済史研究Ⅰ	日本経済史でこれまでに明らかにされてきた知識・知見や、これまでの研究史について理解を深める。そのために、日本経済史の通史を輪読（受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論）する。	
	日本経済史研究Ⅱ	日本経済史研究の方法論と資料論に関する知識を身に付ける。そのために、日本経済史研究の方法論と資料論に関する文献を輪読（受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論）する。	
	特定テーマ演習	「地方創生」「中心市街地活性化」「地域資源活用」「農商工連携」「観光入込客数増大」など、地域経済の振興や発展を考えるためには、さまざまな視点による検討が不可欠である。そこで本講座では、テーマに沿った講師による実践的な課題の検討を進めていく。幅広い議論を通じて未来を展望するとともに、問題解決に必要な視点の考察を通じて、応用的な思考能力を身につける。 授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	
	地域資源活用研究法	茨城県下の市町村から特定の研究対象を選定し、その地域の課題の解決に向けた調査・研究を行う。地域連携や地域貢献を特色とする本演習は、地域に根差した調査・研究を重視する。調査の成果はレポート等にまとめるとともに、学内あるいは現地で報告会を行う。 授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	地域連携創生研究演習	既存資料の収集・分析と行政計画のレビューをふまえ、地域の多様なステークホルダーからのヒアリングを行い地域課題等を明確にし、その解決に向けて地域資源を活用した地域創生に資する条例等の政策形成をめざし研究を行う。その上で、自治体、民間企業、NPO法人等の多様な主体が参加するワークショップでの議論を通じ、多面的に解決策を検討する。	
	日本思想史研究Ⅰ	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは伊勢神道関係資料。	隔年
	日本思想史研究Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは両部神道関係資料。	隔年
	日本思想史演習Ⅰ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは伊藤聡『神道の中世—伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀』	隔年
	日本思想史演習Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは佐藤弘夫『アマテラスの変貌』	隔年
	実践哲学研究Ⅰ	この授業では、規範倫理学の基本的な考え方について学び、そのうえで規範倫理学の様々な立場の特徴などについての理解を深める。具体的には、義務論、帰結主義、徳倫理学などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学研究Ⅱ	この授業では、西洋実践哲学における重要概念である自律を取り上げ、この概念に関わる諸理論についての理解を深める。具体的には、カント倫理学における自律、個人の自律、関係の中に位置づけられた自律、応用倫理学における自律などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学演習Ⅰ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『道徳形而上学の基礎づけ』を取り上げ、輪読する。授業は演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、善意志、定言命法、普遍化可能性、目的自体、自律などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学演習Ⅱ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『実践理性批判』を取り上げ、輪読する。授業は基本的には演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、道徳と自由、道徳と幸福、善と悪、道徳感情などについての検討を行う。	隔年
	日本古典・近代語研究Ⅰ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された蘭日辞典（『波留麻和解』『訳鍵』『ドゥーフ・ハルマ』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』）や英和辞典（『英和对訳袖珍辞書』）等について概説し、近世・近代翻訳語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
	日本古典・近代語研究Ⅱ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された国語辞書類（『東雅』『大和本草』『本草綱目啓蒙』『和漢三才図会』『片言』『物類称呼』『和訓栞』『雅言集覧』『俚諺集覧』等）について概説し、近世語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
日本古典・近代語演習Ⅰ	江戸時代の主要な蘭日辞典である『波留麻和解』『訳鍵』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』の電子テキストを用いて、近世日本の漢字字体や漢字表記語の運用実態について調査する。その際、まず単漢字での用字法の分析を行った後に、熟語についての調査を行う。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	日本古典・近代語演習Ⅱ	蘭学学習法について書かれた大槻玄沢『蘭学階梯』（天明三1783年成、天明八1788年刊）を読み、江戸で本格的な蘭学が始められた頃の社会的・学問的状況について調査する。注釈書も参照するが、原文での読解能力の修得を目標の一つとするので、授業では基本的に原文で読み進める。	隔年
	日本古典文学研究Ⅰ	日本古典文学の作品（主に韻文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学研究Ⅱ	日本古典文学の作品（主に韻文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『新古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学演習Ⅰ	日本古典文学の作品（主に散文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻四を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学演習Ⅱ	日本古典文学の作品（主に散文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻五を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本近代文学研究Ⅰ	戦前を代表する大衆作家（夢野久作）の作品を網羅的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺の情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、正確な読解を心懸ける。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにも自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
	日本近代文学研究Ⅱ	戦前日本を代表する探偵小説の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺の情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の方法を模索する。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養う。	隔年
	日本近代文学演習Ⅰ	久生十蘭の敗戦後作品を構造的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺の情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の地平を模索する。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにも自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
	日本近代文学演習Ⅱ	戦後を代表する文学表現者の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺の情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の方法を模索する。	隔年
	中国思想史研究Ⅰ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また中国最後の王朝である、清朝の真面目を理解させる。	隔年

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	中国思想史研究Ⅱ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また近代化と伝統のはざままで揺れる、清末から民国初期の社会・歴史状況を考察していく。	隔年
	中国思想史演習Ⅰ	経書成立を知るための入門書といえる、馬宗霍・馬巨『経学通論』（中華書局、2011年）を選読して、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法を会得する。さらに儒教思想の歴史であるいわゆる「経学史」の根底を理解させる。	隔年
	中国思想史演習Ⅱ	江セン『新体経学講義（点校本）』（華東師範大学出版社、2014年）を精読し、漢文読解に必要な知識と方法を具体的に学び、さらに儒教史研究の歴史を深く知ることによって、中国古典学の基礎部分を修得する。	隔年
	中国近現代文学研究Ⅰ	「中国女性作家」研究。中国文学（および中国語で書かれた文学）の女性作家の作品と、研究論文の講読をとおして、中国文学史における女性作家の創作とその位置を研究し、中国文学史を再考する。	隔年
	中国近現代文学研究Ⅱ	中国・香港「モダニズム文学（実験文学）」研究。中国・香港の作家の「モダニズム文学（実験文学）」の作品と、研究論文の講読をとおして、世界文学と香港文学、中国文学の関係や、世界文学史における中国・香港文学の位置付けを考察する。	隔年
	中国近現代文学演習Ⅰ	「中国1930年代作家研究」。中国で1930年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1930年代の文学状況を検証していく。	隔年
	中国近現代文学演習Ⅱ	「中国1980年代作家研究」。中国で1980年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1980年代の文学状況を検証していく。	隔年
	フランス文学研究Ⅰ	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
	フランス文学研究Ⅱ	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学研究Ⅰ」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
	フランス文学演習Ⅰ	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
	フランス文学演習Ⅱ	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学演習Ⅰ」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
	美術史学研究Ⅰ	美術史学の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに方法論の発展の歴史と最新の方法論について学ぶ。また、欧米諸国と日本の美術史制度とその歴史を比較しながら学び、今日的な問題と課題について具体例を取り扱いながら検討する。	隔年
美術史学研究Ⅱ	主に学会誌や専門雑誌に掲載された美術史研究論文を読み、内容を検討するとともに、その分析方法を整理する。伝統的な方法論やクライテリアを知るとともに、今日注目されている新しい研究の方法を吸収し、独自の研究に応用する訓練をする。	隔年	

専攻科目 （法学・行政学コース） 拡充専門科目	フランス美術史研究Ⅰ	フランス美術の歴史の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに中世、17世紀、19世紀、20世紀の歴史編纂の歴史と方法論について学ぶ。具体的には、欧文（とくにフランス語と英語）の必須文献と最新の優れた論文を講読・分析し、批判的検討をするとともに、新知見の構築をめざす。	隔年
	フランス美術史研究Ⅱ	フランス美術史の動向と美術史研究の成果を理解する。欧文（とくにフランス語と英語）文献の購読などを通して、フランス美術史の基本的な方法論を修得するとともに、新しい研究方法にも通じ、各自の研究に応用する。	隔年
	英語学研究Ⅰ	生成文法の言語観を前提として、現代英語の文法現象のうち、文法の部門間の接点（インターフェイス）において生じていると考えられる現象を取り上げ、文法の部門間の関係がどうあるべきか先行研究を渉猟したうえで担当者の管見を披露する。今まで重点的に研究されてきた統語論と意味論の接点の現象に加え、統語論と音韻論の接点の現象と意味論と音韻論の接点の現象を扱い、文法理論のあるべき姿の可能性を提示する。	隔年
	英語学研究Ⅱ	英語の通時変化に関する担当者の管見を、主として生成文法的な理論基盤をもとにして提示する。具体的には、英語の通時変化の大きな流れを前提として概観したあと、英語史上生じた音韻変化、統語変化、意味変化から具体的な変化の一つを選び、言語変化を記述しその記述結果を理論的視点から解釈する。そのうえで、提示した解釈の英語の歴史変化への意味合いについて議論する。	隔年
	英語学演習Ⅰ	英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の統語構造と意味構造に関連する論文を扱う。	
	英語学演習Ⅱ	英語学演習Ⅰと同様に、英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の音韻論と形態論に関連する論文を扱う。	
	イギリス文学研究Ⅰ	20世紀の各文学理論の基本的な理念と、理論体系の歴史的発展を理解したうえで、批評論文の英語表現を正確に読み取る方法と文学作品の研究手法を学ぶ。具体的には文学理論の代表的な論文と個別文学作品の批評論文を精読し、その英語表現の理解を深め、批評の手法と視点を分析・検討し、個別作品研究への援用の方法を探求する。	隔年
	イギリス文学研究Ⅱ	20世紀末から21世紀に発表された最先端の文学批評の理解を深め、批評論文の難解な英語表現の読解方法を学ぶ。具体的には、ジェンダーから宗教に至る幅広いテーマをめぐる最先端の批評論文を精読し、英語表現を理解したうえで、近年の文学批評の動向を把握し、個別作品の批判的読解方法を学び、新たな論点と分析方法を探求する。	隔年
	イギリス文学演習Ⅰ	近代初期から現代にいたるイギリス文学の詩、戯曲、小説の代表的な作品を読解し、各作家の語りの特徴の分析方法と個別作品の英語表現の読解力を涵養する。具体的には、各時代の各ジャンルの代表的文学作品の一部を精読し、語りにおける英語表現の特徴と表象の諸要素を分析する方法を学び、作家・作品への理解を深める。	
	イギリス文学演習Ⅱ	近代から現代にいたるイギリス文学の散文を中心に、比較的マイナーなサブジャンル作品を精読し、多様な英語表現の読解力を涵養する。具体的には、対象作品の精読を行い、各書き手の語りの手法と英語表現の分析方法を学ぶ。特に、近代以降の「自己」の表象と一人称の語りの様相の関係を分析したうえで、各時代のイデオロギーと修辭的表現の諸要素の相関関係への理解を深める。	

専攻科目 （法学・行政学コース）	拡充専門科目	アメリカ文学研究Ⅰ	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年
		アメリカ文学研究Ⅱ	19世紀末から現代までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年
		アメリカ文学演習Ⅰ	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
		アメリカ文学演習Ⅱ	19世紀末から現代までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
		応用言語学研究Ⅰ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」と「転移」に関する文献を購読し、これまでの研究の歴史を概観する。そのうえで近年の言語間の影響と過去の転移研究との違いを正確に理解する。そのために、文献内容の理解を高めるための課題(study questions)に取り組み、その成果を発表し、討議する。さらに、受講者の第二言語習得の経験及び内省に基づき、受講者の母語が第二言語習得に与えた影響について、特定の語彙、文法項目を例にとり、発表、議論する。	隔年
		応用言語学研究Ⅱ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、「言語間の距離」、「個人差」に関する文献を精読し、言語間の距離と言語間の影響、および学習者の個人差と言語間の影響について深く考察する。そのうえで、言語間の影響に関する主要な研究論文を精読し、日本語のどのような語彙及び文法項目が学習言語（主に英語）の習得にどのような影響を与える可能性があるのかを発表資料に基づき発表し、受講者全員で議論する。	隔年
		応用言語学演習Ⅰ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、動詞の項構造情報、受動態、関係節などについて日本語が英語学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年
		応用言語学演習Ⅱ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、可算・不可算名詞、定表現、時制、空間表現などについて日本語が英語の学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (法学・行政学コース)	言語文法論研究Ⅰ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。イギリスの記述文法の伝統の中で書かれた研究を読む。動詞と助動詞、代名詞と数詞、形容詞と副詞、削除、情報構造、テキスト言語学などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論研究Ⅱ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。記述を中心としながらも、理論的側面も取り入れた研究を読む。否定、発話行為、付加詞、非境界性、比較、指示詞、照応形、形態論などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅰ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。主要部と補部、各フレーズの特徴、節の種類と特徴、修飾や程度の表現などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅱ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。語、句、機能範疇、疑問文、関係節、他動性、主要部移動などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	社会言語学研究Ⅰ	社会言語学の研究において注目されてきた「属性」のうち、性差・年齢差、集団語に注目して、これらに関する先行研究をテキストとして講義を進める。日本語の変種と性差・年齢差との関係とその特徴を多角的に説明、あるいは、集団語として主に若者語に関する研究を取り上げ、言語変化のプロセスや若者語の機能等について説明する。	隔年
	社会言語学研究Ⅱ	「言語生活」「言語意識」に関する先行研究をテキストとして講義を進める。言語生活では、メディア接触と言語変種、共通語と方言の併用、日本語非母語話者の日本語使用等の観点から説明する。言語意識では、言語行動への評価、方言意識、アイデンティティー等に注目しながら説明する。	隔年
	社会言語学演習Ⅰ	性差・年齢差、集団語といった属性に注目して、これらに関するテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	社会言語学演習Ⅱ	言語生活の変化や言語意識に注目して、これらに関するテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	考古学研究Ⅰ	考古学研究の基本文献について、特に理論考古学に関する論文を批判的に解説する。テキストはチャイルド、ピンフォード、ホッダー、レンフルーらの著作、またはこれらに関連する論文から、受講生の関心を考慮して選択する。原則として原文を用いて理論の理解を深め、受講生自身の研究成果と併せて検討することを通じて、考古学からの歴史的思考力を鍛える。	隔年
	考古学研究Ⅱ	比較考古学の研究方法を解説し、具体的な考古資料に即して研究を実践指導する。比較考古学（この授業では民族考古学的方法・土俗考古学的方法を含む）のもつダイナミズムを理解するために、まず具体的研究例を学び、受講者毎に設定する課題に対し、実際の作業を通じて議論し、歴史と文化を描き出す際の理論的な問題点もあぶり出す。	隔年

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	日本考古学研究Ⅰ	日本考古学研究の進め方、論文の書き方について訓練する。複数のオピニオン・リーダーによる研究文献を購読し、比較・検討することにより、日本考古学の現在の水準と問題点を探る。その上で、自分自身の研究を日本考古学の課題や歴史的課題と照合し討論する。テキスト及び課題は受講生の関心を考慮する。	隔年
	日本考古学研究Ⅱ	日本考古学の研究の流れを、具体的な考古資料に即して指導する。調査計画の策定から始め、最終的には自身の成果をまとめることを目標として、事実記載及び考古学的評価を含む短編の報告（調査報告、資料紹介または地域の文化財保護計画）の作成に取り組む。資料や課題は受講生の関心を考慮する。	隔年
	中国考古文化研究Ⅰ	甲骨文字の誕生から現在までの研究史について理解を深める。併せて考古資料、文献資料、出土文献資料それぞれの特性について学び、理解する。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	中国考古文化研究Ⅱ	甲骨文字研究の全体像について理解を深め、特に書体研究とISO/IEC10646への登録問題を通して、アカデミックな研究成果と実務規格との兼ね合いについて理解を深める。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	中国考古学研究Ⅰ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。加えて、清末以降の日中関係史について、中国考古学史を軸に学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	中国考古学研究Ⅱ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。特に新石器時代末～二里頭期の状況を継続と断絶という観点から学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	日本文化史研究Ⅰ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に国家権力（朝廷や幕府、宗教権門）との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
	日本文化史研究Ⅱ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に地域権力（在地領主や地方寺社）との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
	日本古代中世史研究Ⅰ	日本の古代の歴史を茨城（常陸・北下総）の事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。日本文化史に関する研究姿勢、研究能力を、より高めることができる。	隔年
	日本古代中世史研究Ⅱ	日本古代中世史に関する研究成果を教員・学生が提示し、議論を通じて、ブラッシュアップする。日本の中世の歴史を事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。	隔年
	日本政治史研究Ⅰ	近世の政治史について論じた基本文献と、武士社会の権力と伝統の内実を記録した史料を読み、近世社会の政治的特質について学ぶ。具体的には、前半は尾藤正英『江戸時代とはなにか』を輪読し、後半は水戸藩の政治に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
	日本政治史研究Ⅱ	近世の国際政治史を論じた研究文献と、近世人の海域世界との接触について記録した史料を読み、東アジアという視野のもとで近世日本の特質について考える。具体的には、前半は山口啓二『鎖国と開国』を輪読し、後半は東アジア海域で活動した人びとに関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (法学・行政学コース)	日本近世史研究Ⅰ	近世の百姓や町人について論じた基本文献と、庶民の視点で近世の風景を記録した史料を読み、近世の民間社会の実態について学ぶ。具体的には、前半は深谷克己『百姓成立』を輪読し、後半は市井でやり取りされた情報や伝承に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
	日本近世史研究Ⅱ	近世人の生命維持について論じた研究文献と、自然環境に適応した人びとの営みを記録した史料を読み、「生きる」という視角で近世社会の特質について考える。具体的には、前半は塚本学『生きることの近世史』を輪読し、後半は飢饉や自然災害に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
	日本社会史研究Ⅰ	近代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に19世紀後半から20世紀前半にかけての史料の輪読を進めることで、近代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
	日本社会史研究Ⅱ	現代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に20世紀前半から2中頃にかけての史料の輪読を進めることで、現代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
	日本近現代史研究Ⅰ	日本近代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に19世紀後半から20世紀前半の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、近代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
	日本近現代史研究Ⅱ	日本現代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に20世紀前半から中頃の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、現代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
	ユーラシア歴史文化研究Ⅰ	17世紀における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としてはジュンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定朔漠方略』や満洲語の一次史料である『康熙朝満文硃批奏摺』に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
	ユーラシア歴史文化研究Ⅱ	18世紀前半における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としては、ジュンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定準噶爾方略』や満洲語の一次史料である『雍正朝満文硃批奏摺』・『準噶爾使者档』、さらにはジュンガルを訪れたロシア使節の記録等に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
	ユーラシア歴史社会研究Ⅰ	清朝の八旗制度と中央ユーラシア周辺社会（ハルハ、ジュンガル、ホシュート、チベット等）に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
	ユーラシア歴史社会研究Ⅱ	近世東部ユーラシア世界（清朝、ロシアおよび日本）の歴史（関係史）及び社会に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
アジア歴史文化研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目 (法学・行政学コース)	アジア歴史文化研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年
	アジア歴史社会研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年
	アジア歴史社会研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年
	ヨーロッパ社会史研究Ⅰ	ドイツの戦後社会における歩みを検討していく。その際に、1) ヨーロッパを中心とした国際関係をめぐる歴史、2) ドイツの国内政治史、3) 市民社会の構造的変化・家族やジェンダー問題、メディアや消費生活のあり方といった社会史という3つの軸を中心に分析する。	隔年
	ヨーロッパ社会史研究Ⅱ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
	ヨーロッパ政治史研究Ⅰ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、経済的・政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
	ヨーロッパ政治史研究Ⅱ	ヨーロッパの20世紀史を論じた最新の研究をとりあげ、基本知識を確認するとともに、テキストを読み込んでいく。具体的には、二度の世界大戦とヨーロッパの国民国家体系が引き起こした問題、さらには社会主義(東西冷戦)などが主題となる。参加学生からの積極的な発言も求める。	隔年
	ヨーロッパ歴史文化研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパの歴史文化、とりわけ英仏独以外の近現代史に関する近年の重要な研究を紹介したうえで、受講生の関心に沿った研究報告(プレゼン)を課す。これによって、修論執筆に必要な文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
	ヨーロッパ歴史文化研究Ⅱ	本講義においては、近現代史を中心とするヨーロッパの歴史文化に関する研究に取り組むことで、国民史に基づく一国史観を相対化し、過去と未来をつなぐ歴史的視野を養う。以上を通して、修論執筆に必要な史料・文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
	ヨーロッパ近現代史研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する最新の研究に触れたうえで、その研究史的意義、多文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年
ヨーロッパ近現代史研究Ⅱ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する古典的な研究に対してもその射程を広げ、その研究史的意義およびヨーロッパの歴史文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	行動機構論研究Ⅰ	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究Ⅱを履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年
	行動機構論研究Ⅱ	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究Ⅰを履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年
	行動機構論演習Ⅰ	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康に関連した心理学の諸理論、例えば心理学的ストレス理論、ソーシャルサポート、健康信念モデル、計画的行動理論、セルフエフィカシー、自己決定理論などについて理解を深める。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	行動機構論演習Ⅱ	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康増進に焦点を当て、介護ストレス、介護予防、健康行動、テクノロジーへの適応などの問題について、現場の課題と実践のあり方について考察する。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	認知行動論研究Ⅰ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解を通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論研究Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論演習Ⅰ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解を通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (法学・行政学コース)	認知行動論演習Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究方法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年
	家族心理論研究	家族をめぐる歴史や定義について理解を深めながら、主として離婚・再婚、そして子どもの養育課題といった現代の家族における諸問題について検討する。また、生涯発達の視点も含めながら、家族のライフサイクルについて多面的に検討する。	隔年
	行動文化論研究Ⅰ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅰ(「現代の事例」に学ぶ)。現代の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげる研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
	行動文化論研究Ⅱ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅱ(「過去の事例」に学ぶ)。過去の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげる研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
	行動文化論演習Ⅰ	社会心理学および関連分野の「古典的文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
	行動文化論演習Ⅱ	社会心理学および関連分野の「最近の文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
	生涯発達論研究Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に注目した知性、情動、身体、自他関係などの形成について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
	生涯発達論研究Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に注目して、出来ることが当たり前ではないことから人間の生涯にわたる発達について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
	生涯発達論演習Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に関する個別具体の課題について掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
	生涯発達論演習Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に関する個別具体のテーマについて掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年

専攻科目 拡充専門科目（法学・行政学コース）	文化人類学研究Ⅰ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。	隔年
	文化人類学研究Ⅱ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。アメリカの英文専門書の読解能力を高め、マヤ文明の特徴、旧世界の四大文明との共通性を理解できるようになることを目指す。	隔年
	文化人類学演習Ⅰ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。	隔年
	文化人類学演習Ⅱ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。学術雑誌論文の批判的読解を通じて、先スペイン期のメソアメリカ諸文明を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。	隔年
	比較文化論研究Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。具体的には特に、「集団」「伝統」「儀礼」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
	比較文化論研究Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、マルチサイテッド・エスノグラフィ、オートエスノグラフィ（自己エスノグラフィ）など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
	比較文化論演習Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。特に、広義の「語り」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
	比較文化論演習Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、組織エスノグラフィ、オートエスノグラフィ（自己エスノグラフィ）など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
	福祉分野に関する理論と支援の展開	社会福祉の基本的な理念や機能・役割について理解を深めたうえで、特に、障害者（児）に関連した福祉現場において生じる、心理社会的な課題及び必要な支援について学ぶ。具体的には、身体障害者（児）、知的障害者（児）、発達障害者（児）、精神障害者に関する法・制度について学び、地域における支援の実際や今後の課題について、事例等を交えながら検討する。	

専攻科目	拡充専門科目（法学・行政学コース）	教育分野に関する理論と支援の展開	地域社会における学校、いじめ、不登校、発達障害、児童虐待、アセスメント、コンサルテーション、心理教育をキーワードとし、スクールカウンセラーとして働くための基礎知識を身につける。また、教育分野における支援のあり方を通して、社会人としての姿勢を身につける。	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	司法・犯罪分野に関わる心理専門職の実践について学ぶ。具体的には、少年審判手続及び関係機関の連携について学ぶと同時に、非行メカニズムの理解、少年への支援・働きかけについて学習する。また、家事事件等に関する基礎知識及び家庭内紛争の解決に向けた専門職の実践について学ぶことにより、社会人としての姿勢を身につける。	
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	地域における産業・労働分野における支援に焦点を当てて、その理論と具体的実践について学ぶ。具体的には、組織の特徴、組織運営の実際、制度と法規、産業ストレスの実際、健康保持増進のための指針、障害者への就労支援、自殺予防と危機対応等について学ぶ。	
		心理的アセスメントに関する理論と実践	将来、社会人として、心理臨床家の仕事を行う際に必要な臨床心理査定（アセスメント）について理論と施行法を教授する。実物の検査用紙や器具を用い、演習を通して心理査定の実践を学ぶ。 (オムニバス／全15回) (90 金丸 隆太／8回) 代表的な知能検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 描画法、質問紙法から代表的な心理検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。	オムニバス
		心理支援に関する理論と実践A	ロジャーズ、C.、来談者中心療法、カウンセリング、プレイセラピーをキーワードとし、ロジャーズ、C.の来談者中心療法についてその主要論文とそれに関連する文献を読みながら討論を行い、理解を深める。	
		心理支援に関する理論と実践B	公認心理師として、地域社会において活動を行っていく上での基礎的な考え方、倫理的問題や治療構造等、心理面接を行う上での基本について、講義や事例検討を通して実践的に学ぶ。 (オムニバス／全15回) (108 大島 聖美／8回) 大学院でどのように学んでいくのか、倫理的問題や治療構造等、言語面接を行う上での基本について学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 事例論文や各自が実習で担当している事例報告を材料に、主に演習形式によって、心理療法の実践に生じる諸問題や展開の在り様について理解と対応の可能性を検討する。	オムニバス
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	家族、コミュニティ、関係行政論をキーワードとし、家族やコミュニティに焦点を当てた心理支援の理論と方法について学ぶ。さらに、これらの心理支援の背後にある法律や制度についても学ぶ。	

専攻科目	拡充専門科目（法学・行政学コース）	心の健康教育に関する理論と実践	<p>心理専門職者に必要な心の健康に関する諸理論を学ぶ。具体的には地域保健活動における予防の概念、ストレス理論、自殺予防と危機対応、心の成長モデル、表現活動と健康等について実践を交えながら学ぶ。</p> <p>（オムニバス／全15回）</p> <p>（90 金丸 隆太／4回） ガイダンス、心の成長モデルに関する回を担当する。</p> <p>（108 大島 聖美／4回） ストレスマネジメントおよびアサーショントレーニングについて、基礎的な知識と心理教育の実際について学ぶ。</p> <p>（110 地井 和也／3回） 「睡眠の問題」、「自傷行為・自殺の問題」、「死と喪の作業」をテーマとして基礎的知識と問題の予防に関する諸理論および心理教育の実践方法について学ぶ。</p> <p>（55 正保 春彦／4回） 集団活動における心の教育の実践方法について学ぶ。また、まとめの回を担当する。</p>	オムニバス
		保健医療分野に関する理論と支援の展開	精神医学の基礎と、統合失調症、気分障害をはじめとする代表的な精神疾患について学び、さらに、精神疾患の治療の基礎を学ぶ。精神医学の最近のトピックについて学ぶことにより、社会人としての心理専門職に必要な精神医学的見地を身につける。	
		投映法特論	ロールシャッハ・テスト（エクスナー法）の歴史・実施手順・コーディング・解釈について学び、被検者の心理的体験を理解し、自分自身で検査結果の整理を行うことができることをめざす。心理専門職者として、本テストを臨床現場で活用するための基本を習得する。	
	拡充専門科目（経済学・経営学コース）	箱庭療法特論	箱庭療法の理論に関する講義と箱庭制作体験を通して箱庭療法の実践について学習する。具体的には、箱庭制作・見守り体験、事例検討を通して箱庭療法の実践の基礎を身につける。	
		現代ジャーナリズム研究	ネットを通じて知る機会が増えたとはいえ、信頼性の高さで群を抜くのは新聞、放送で、内外の情報、社会の主要な動きを知るのには欠かせない。では、依って立つ、その核心ともいえるジャーナリズムとは一体何なのか。どのような形で情報が収集され、我々に届けられるのか。なぜ、信頼性が高いのか。その論理、倫理は。先般の米大統領選、仏大統領選で話題になった蔓延するフェイクニュースについて考察し、メディアリテラシーの体得に努力する。その後、ジャーナリズムのあり方や役割などを学ぶ。	
		マスコミ研究	現代社会の中で、マスコミ・メディアは、どういった役割を果たしているのだろうか。企業のみならず政府、地方公共団体、さまざまな組織にとってメディア戦略は、その将来を決するような重大な役割を担っているともいえる。現代社会を生き抜く際に必ずかかわってくるメディアについての理解を深めることはかなり大きな意味を持つ。マスコミ関係の書籍の購読を通じてメディアへの理解を深める。	
	ポピュラー文化研究	ポピュラー文化はどのように形成されてきたのか、雑誌などの出版物を通して、それぞれの時代のポピュラー文化について考察する。とくに、少女文化の形成に注目する。明治以降から現在までの少女文化を範囲とし、文献を購読発表し、それについてディスカッションを行う。		

専攻科目 （経済学・経営学コース）	拡充専門科目	映像メディア研究	発想するから始まり多くの人の前で上映するまでの一連の映像制作の作業を通し、映像作品の制作と表現の基礎を学ぶ。特に「企画」「具体化」し、伝える工夫を凝らす「構成」力を養うことに重点を置く。「映像」というメディアを通して、ものの見方、考え方を養い、他でも応用できるリテラシー力を身につける。	
		メディア文化研究	メディアとは何かを考えると、情報伝達の側面としてみるだけでは不十分なことに気づかされる。活字が主張し、映像が魅了するように、印刷技術の登場、ラジオ、テレビ、インターネットといったメディアの技術革新は人々に働きかけ、身体や精神、思想を組み替えてきた。様々なメディア装置（印刷技術、ラジオ、テレビ、映画、インターネット、SNS）の成り立ちを概観しながら、そのメディアがつくりだした「文化」を考える。	
		メディア教育論研究	現代社会におけるメディア教育について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。日々変化を続けているメディア・テクノロジーを教育や学びの諸場面にどのように活用していくべきなのか、それによって教授者と学習者の位置づけや役割はどのように変化するか、近未来の教育・学習スタイルはどのようなものになると考えられるのか等、複数の視点からメディア教育の現状と将来像について考察する。特に近年急速に普及したスマートフォン・タブレット型端末や電子テキストを活用した教育の方法やその課題・可能性を中心的な題材・事例として、文献講読と議論により理解を深める。	
		電子メディア論研究	現代社会における電子メディア活用の諸場面について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。インターネットに関連する電子メディア・テクノロジーの歴史・背景や、社会への影響力、メディア特性などについて、資料・文献講読やディスカッションを通じて理解深化を目指す。さらに、情報・コンテンツの共有・共感・認知、コミュニケーション、情報の保護や権利などの観点からも考察を加え、高度情報化社会の諸問題について議論・考察する。	
		近代日本メディア史研究	近代日本における新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどマスメディアの歴史について考える授業。各時代のマス・コミュニケーションがどのようなものであったかを、できるだけ現物資料を用いて考察していく。マス・コミュニケーションの原理を歴史的な比較を通じて理解し、それによって現在のマスメディアに対する批判的視点を手に入れることを目標とする。授業は教員による講義形式を基本とするが、適宜、受講者どうし、および受講者と教員によるディスカッションを交えつつ進める。	
		映像広告論研究	日本におけるテレビコマーシャルの歴史（1950年代から1990年代）を映像資料・文献資料に基づいて解説する。また、映像資料および放送関係の文献資料についてその性質を理解し、扱いに習熟する。授業は教員による講義と、受講者どうしおよび受講者と教員によるディスカッションを適宜組み合わせで行う。	
		学習デザイン論研究	学習科学や認知科学の視点から人がどのように学習するのかについて理解し、学習を支援し促すための道具や物理的環境、人間関係をどのように設計したらよいかについて考える。学習に関わる理論としては状況的学習、学習環境設計に関しては活動理論、デザイン実験アプローチ等を取り上げる。授業は、講義、文献購読、デザイン実習により進める。	

専攻科目 （経済学・経営学コース） 拡充専門科目	情報デザイン研究	我々は日々の生活の中で自分達の生きる現実をデザインしつづけている。そのデザイン活動が、どのような道具を用いて、どんな風に行われているのかについて、人工物による媒介、実践コミュニティへの参画といった社会構成主義的な視点から考える。また、人と人、人と機械のコミュニケーションの成り立ちをインタラクションとヒューマンインタフェースの視点から考え、その支援方法について議論する。文献講読とプロジェクト型活動により授業を進める。	
	コミュニケーションデータ分析研究	コミュニケーションに関する社会学的なデータ分析の方法を学び実証研究の具体例に触れることで、社会調査の方法論やデータ分析の手法を身につけるとともに、先行研究にあらわれたデータの分析・解釈について適切に評価・判断できるようになることを目指す。	
	コミュニケーション社会学研究	現代社会における人々の日常的なコミュニケーションの特質や問題を社会学的な視点や方法論から理解するために、当該領域の主要な先行研究やデータなどの資料を読み、それについて履修者がレポートし、参加者全員で質疑応答を行う。	
	多文化コミュニケーション論研究	多文化コミュニケーションの基礎理論を概観した上で、現存する具体的諸問題を把握し、クリティカルに議論していく。さらに、多様な背景をもつ人々が相互に理解し共に生きていくために、人と人、人と地域社会がどのように関わっていけばよいのか、その要因とこれからの課題を文献と映像から捉えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)多文化コミュニケーションに関する基礎理論を理解し、視野を広げることができる。 (2)多文化コミュニケーションに関する様々な具体的問題をクリティカルに議論することができる。	
	多文化関係学研究	多文化共生に関する基礎理論を概観した上で、国際社会と日本の関わり、日本の「内なる国際化」の現状と課題を中心に検討していく。それらを踏まえた上で、地域の多文化共生実現に向けて実行可能な取り組みを具体的に考えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)異文化間教育／多文化教育に関連する具体的事例、課題について理解することができる。 (2)多文化共生社会の実現に向けて、現在および将来的に自分ができることを具体的に考えることができる。	
	グローバル化と地域開発研究	グローバル化と地域開発について、人の移動（移民・難民等）や財・サービス・資金等の移動に着目し、国際交流・地域間交流をふまえて、地球規模課題と地域課題との関係について多角的に分析する。また、グローバル化する地域社会の持続可能な開発にむけて、多層性・多様性に注目し、理論的・実践的に研究する。	
	持続可能な開発とSDGs研究	国際社会全体が取り組む国連総会で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」およびこれに含まれるSDGs（持続可能な開発目標）を軸に、「誰一人取り残さない」共生社会に向けた現状と課題についてグローバル＋ローカルに、国際開発・国際協力、国内政策およびこれらの関連に着目し、事例等も踏まえて理論的・実践的に研究する。持続可能な開発・SDGsの3本柱である経済・社会・環境の調和のとれた持続可能性にかんがみ、行政・企業・市民社会等ステークホルダーの役割とパートナーシップについて検討する。	
	社会行動論研究 I	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から世界を見渡し地域に根ざしたフィールドワークを用いた研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。フィールドワークにかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (経済学・経営学コース)	社会行動論研究Ⅱ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から俯瞰的な視野と地域への足場を基本とするエスノグラフィックな研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。エスノグラフィ論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年
	社会行動論演習Ⅰ	日本だけでなくアジア（韓国・中国・台湾・ベトナムなど）で行われている質的研究に触れ、自身の研究を捉え直すことができる。異なる文化の研究とコミュニケーションを一社会人として図ることができる。テキストの他に質的研究の学術論文を読み込み、その問題の立て方、方法論の選択、結果から考察への展開を読み解く。	隔年
	社会行動論演習Ⅱ	映画を媒介とした対話、すなわち円卓シネマという実践・方法を、他の場面で応用し展開できるようになる。実際に日本以外も含めた世界の映画を取り上げ、それをめぐる対話を重ねる試みを行い、そこで紡ぎだされる事柄を質的に捉え分析する試みを一社会人として行えるようにする。	隔年
	スポーツ社会研究Ⅰ	スポーツが地域社会に果たす機能や役割について理解を深めたいうで、海外の文化・歴史や教育制度との比較を通じて、現在日本で生じているスポーツ活動にかかる諸問題や課題について考察する。具体的には、運動部活動と地域クラブの連携、プロスポーツの地域共創への影響、スポーツとメディアの関係等であり、職場におけるコミュニケーション促進に寄与する。	
	スポーツ社会研究Ⅱ	世界的にスポーツ指導の現場では、発育発達段階に応じたアスリートセンタードの理念に基づいたコーチングが推奨されている。コーチングはスポーツの場面ばかりではなくあらゆる組織で注目されており、21世紀型能力の育成には欠かせない。事例等を交えながらチームづくりと組織づくりについて考察し、職場におけるプロジェクト運営に寄与する。	
	国際政治学研究Ⅰ	本講義では、受講者が、伝統的な安全保障概念とその国際政治学上の問題について理解することを目標とする。なぜ、一見して非合理的な戦争という政策がたびたび選択され、そのための準備に莫大な資源が投入されるのか、またなぜ軍縮が難しいのか。そこで実現する「平和」のために安全保障論が何を論じてきたのかを理解できるようにする。 本講義では国際政治学における支配的なパラダイムのひとつである安全保障(security)の問題について検討する。現在の安全保障は、人間安全保障に代表されるように、政治から環境や気候変動、経済やエネルギーなど、概念を多様化・拡大化させている。その一方で、伝統的な安全保障概念を維持するべきという意見も根強い。このような転換期にある安全保障パラダイムについて、根本から再検討を試みる。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。	
	国際政治学研究Ⅱ	本講義では受講者は授業でとりあげた国際政治のもっとも現在のなトピックである開発(development)について、その基礎的な知識を得るだけでなく、自らの専門的な見地から課題や問題点を見つけ、それらにたいして、一定の解決案を提示できるようになることが求められる。 本講義では国際政治学におけるもっとも重要なパラダイムである開発と安全保障の中から、開発をとりあげる。前期の安全保障についての議論とその成果もふまえて、開発についての検討を中心に平和学の視覚からも探求を深める。とくに、現在の地球環境問題を巡る国際政治の転換期において、それらのパラダイムがどのような変容をとげつつあるかに着目して議論を進める。また、開発と安全保障の概念的な共通点にも注目して、現代世界におけるパラダイムの本質についての考察を深める。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。	

専攻科目 （経済学・経営学コース） 拡充専門科目	地方政治論研究 I	地方政治をめぐる先行研究の流れを把握し、最新の研究成果について理解する。地方政治および地方自治研究の系譜について確認し、最新の研究成果と研究手法について検討する。また政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。地方議会および地方政党組織の実態について検証し、中央政治とのリンケージについても考察する。	
	地方政治論研究 II	地方政治研究の最近の動向を追う。また、政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。また最新の研究はどのような方法を用いているのかについても検討する。	
	社会地理学研究 I	人間と空間・環境との関係を考察する人文地理学の考え方と理論について学んだ上で、とくに都市に焦点をあてた「都市地理学」の分野について講義を行う。 世界には民族、社会階層、ジェンダーなど多様な人びとが共存し、最新技術や文化・情報が集約する一方で、スラム地域を内包する都市は、現代社会の諸問題が凝縮している。都市の形成・発展・衰退・再生の過程および社会空間構造を把握した上で、社会問題解決に向けてどのような方法があるか理論的に学ぶと共に自ら実践する方法を共に考える。	
	社会地理学研究 II	世界および日本における諸地域の社会構造と空間との関係について学ぶ。社会的な差異や格差がどのように空間的に反映されるのかについて、文献輪読を通じて社会地理学的な理論を学んだ上で、環境、文化、宗教、人種・民族、社会制度、政治経済体制など様々な社会的要因がもたらす地域的差異について事例を挙げて考察する。そうした格差や差異がローカルな要因のみでなくグローバルな要因からも分析していく方法を習得する。授業では、該当地域を巡検することを通じて、その差異がいかに空間的に反映されているかを観察し問題を把握する。	
	経済地理学研究 I	現代における社会・経済構造の変容がもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方の都市・農村地域において深刻化しているフードデザート（食の砂漠）問題を中心に取り上げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。問題を客観的に分析するために、地域統計を用いた地域分析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
	経済地理学研究 II	経済地理学に関わる都市・地域問題、特に地域の人口減少問題や地域活性化について、その現代における社会・経済構造の変容がもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方において深刻化している人口減少問題や地域活性化に向けた課題を中心に取り上げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。特に、空間データや統計データを用いたGIS（地理情報システム）による空間解析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
	地域社会論研究 I	台湾史に関する基礎的文献を輪読しながら、台湾の地域社会の成り立ちを移民社会、植民地化、脱植民地化といったキーワードから理解する。また、台湾という地域の研究において何が問題となってきたのか、また台湾がどのような地域としてとらえられてきたのかを理解する。	
	地域社会論研究 II	台湾の政治社会に関する基礎文献を輪読しながら、ローカルレジームがどのように形成され、また民主化、台湾化以後どのように変容しているのかを考察する。	

拡充専門科目 (経済学・経営学コース)	環境社会学研究Ⅰ	持続可能な社会の構築のための環境ガバナンスの在り方、環境ガバナンスを支える民主主義の在り方などについて、海外の事例を含め議論の背景、専門家の役割、シティズンシップ論の観点から考察する。	
	環境社会学研究Ⅱ	環境リスク社会と言われる現在、国内・海外において環境運動がどのように進展し、政策的にどのような応答があったのかを考察する。リスクと社会的不平等について、国際的な視点をもちつつ社会構造的に考察する。	
	社会事業史研究Ⅰ	日本の近代を中心に、社会事業の歴史を歴史社会学の方法と視点で学ぶ。まず歴史社会学的研究の方法を、テキストや先行研究を通じて学ぶ。これを踏まえて、貧困と生存権をめぐる思想、理論、および実践を、近代化・現代化の過程のなかに位置づけて考察する。前近代の社会における救済と相互扶助、近代化の過程で形成されていった公的な救済制度、戦争と社会福祉、第二次世界大戦後の改革などが主な論点となる。	
	社会事業史研究Ⅱ	社会事業史研究の基礎として、「シティズンシップ」「生存権」「福祉国家」「貧困」の概念と学説を学び、公的扶助の歴史の概要を理解する。これらを踏まえて、イギリスの救貧制度、福祉国家、および民間の慈善事業の歴史を学び、日本の社会事業史と比較しながら、貧困をめぐるさまざまな思想と実践を知る。そして、国家、市民社会、共同体と個人との関係に関わるテーマを、歴史社会学の視点から考察する。	
	社会調査法研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査の基本的な考え方や調査技法の本質的特徴について理解するために、テキスト購読を行う。(2)各履修者の研究について検討するとともに、それを素材にして研究法や方法論に関わる議論を行う。	
	社会意識論研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査に関する基礎的な知識を身につけ、社会意識の調査・研究を必要な際に行えるよう、基礎固めをする。(2)社会科学の研究に必要な社会調査データの扱い方を社会意識論研究を参照しつつ身につける。	
	地誌学研究Ⅰ	地誌学は特定の地域における自然環境や社会・経済環境、および歴史・文化環境の総合的な分析であり、近年求められている「総合性」をもつ学問である。本講義では、いま一度、「総合性」をもつ学問としての地誌学を整理する。さらに地域スケールの異なる事例研究を設定し、地誌学的な分析によって地域の性格を解明することで、地誌学の基本的な考え方や方法論を学ぶ。	
	地誌学研究Ⅱ	本講義は、人間の経済活動のなかで、観光や余暇活動をはじめとしたツーリズムの現象を取り上げ、それらを地域活性化に関係させながら、地誌学の立場から検討する。具体的には、ツーリズムや地域活性化に加えてポスト生産主義をキーワードとし、世界中でみられるようになったポスト生産主義的な観点からのツーリズムを媒介とした地域活性化の仕組みとについて検討する。	
	家族社会学研究Ⅰ	ジェンダー論を軸にして家族社会学分野の研究と地域社会学分野の研究を架橋する作業を行う。具体的には、ネットワーク論、社会関係資本論などの研究動向をふまえつつ、震災・原発事故の事例研究を通じて家族社会学と地域社会学の融合的アプローチを学ぶ。	
	家族社会学研究Ⅱ	少子化対策や高齢社会対応と関連して展開されている日本の男女共同参画政策について、家族社会学や地域社会学分野の先行研究をふまえて批判的に考察を加える。具体的には、少子化対策についての先行研究をふまえて、日本、EU諸国、国連等のジェンダー政策、家族政策、人口政策の事例を検討する。	

専攻科目 （経済学・経営学コース）	拡充専門科目	環境政策・経済学研究I	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の回数にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 学生にはIPCC(気候変動に関する政府間パネル)報告書の輪読、適応情報プラットフォーム(http://www.adaptation-platform.nies.go.jp)等の情報整理を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
		環境政策・経済学研究II	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の回数にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 気候変動、エネルギーに関する論文輪読、データ解析を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
		憲法研究 I	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討する。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。	
		憲法研究 II	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討を行う。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。	
		民法研究A I	各受講者が民法を中心に、家族法の問題についてそれぞれテーマを設定し、毎回調査報告を行ってもらう。本授業では、民法の成立過程および法改正を中心に調査報告してもらう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらう。	
		民法研究A II	各受講者が民法を中心とした家族法に関する問題についてそれぞれテーマを設定し、そのテーマについて諸外国の法制度について調査し、比較法的考察を行ってもらう。受講者には、毎回調査報告を行ってもらう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらう。	
		民法研究B I	民法（物権法）の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法（物権法）という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、所有権、抵当権、区分建物所有、登記制度、担保制度。	
		民法研究B II	民法（債権法）の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法（債権法）という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、契約、債務不履行、売買、賃貸借、金銭消費貸借、連帯債務、保証制度。	
刑法研究 I	刑法について研究する。いわゆる刑法総論および刑法各論といった実体刑法を対象とする。もちろん、刑法典以外の様々な特別法も検討対象に含まれる。 学部教育における実体刑法に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。			

専攻科目 拡充専門科目 (経済学・経営学コース)	刑法研究Ⅱ	実体刑法以外の刑事法の諸分野について研究する。刑法総論各論以外の、刑事訴訟法や刑事政策学を対象とするが、憲法等の関連分野も視野に入れて検討する。 学部教育における刑事訴訟法等に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。	
	商法・経済法研究Ⅰ	商法および会社法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたい。特に、株式会社をめぐる現代的な課題について学ぶ。具体的には株式会社に関する定めを整理し、現行制度の問題点の所在を確認し、崩壊背の方向性について考える素養を身につけることを目的とする。	
	商法・経済法研究Ⅱ	経済法および知的財産法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたい。わが国の法令の特徴及び独禁法・知的財産法の世界的潮流を把握するために米国・欧州共同体の法令をも検討対象とする。経済法および知的財産法の領域における国内外の日々の事件について自ら分析・評価できようになることを目標とする。	
	労働法研究Ⅰ	国際化、多様化が進み社会が大きく変化中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働者及び使用者の概念、採用内定、試用期間、公務員の労働基本権、職場における男女の平等、就業規則による労働条件決定と変更、賃金、労働時間。	
	労働法研究Ⅱ	国際化、多様化が進み社会が大きく変化中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働災害・通勤災害、昇格及び降格、配転、出向、転籍、解雇、有期契約労働、パートタイム労働、労働者派遣。	
	社会保障法研究Ⅰ	社会保障法分野の内、授業の前半は医療保険を、後半は年金保険を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会保険（医療保険・年金保険）法制度を理解する。また、社会保険（医療保険・年金保険）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会保険（医療保険・年金保険）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	
	社会保障法研究Ⅱ	社会保障法分野の内、授業の前半は社会福祉を、後半は生活保護を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会福祉・公的扶助（生活保護）法制度を理解する。また、社会福祉・公的扶助（生活保護）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会福祉・公的扶助（生活保護）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	

専攻科目	拡充専門科目（経済学・経営学コース）	行政法研究Ⅰ	行政法研究Ⅰの授業では、行政法の基本理論について学びながら、社会問題に対する洞察を深めていくことにする。行政の主要領域である、社会保障行政、教育行政等をテーマとして、それぞれの公共政策上の問題を、行政法的な視点から検討を行っていくこととする。	
		行政法研究Ⅱ	行政法研究Ⅱの授業では、国・公共団体と国民・住民との間で法的紛争が生じた場合の行政法学上の諸問題について、分析、検討を行うこととする。行政不服審査の案件となっている事例や裁判例を素材として扱う予定である。	
		比較法研究Ⅰ	1. 比較法の研究領域がミクロとマクロの二つの領域からなり、それぞれに固有な研究方法を学ぶ。 2. 明治期のわが国の法制度に大きな影響を与えたドイツ法が、ローマ法や自然法とどのような関係をもって生成し、その固有な発達を遂げたかを、歴史的な観点をもとに考察する。	
		比較法研究Ⅱ	1. わが国の法制度に大きな影響を与えた英米法と大陸法を歴史的な観点から考察する。 2. イギリス法、アメリカ法、フランスの特色を、歴史、法の様式、特色ある法制度などの観点から明確にする。	
		国際法研究Ⅰ	特定の人権問題について、日本の裁判例とヨーロッパ人権裁判所の裁判例を比較し、国際人権法の観点からみた日本の課題について考える。具体的には、ヨーロッパ人権条約及び裁判所の仕組み等について概観した上で、拷問の禁止をはじめ、ノン・ルフールマンの原則と犯罪人引渡しや退去強制、被拘禁者の処遇、性暴力からの保護など、さまざまな人権問題について判例を通して検討する。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、日本の判例およびヨーロッパ人権裁判所の判例について調査し、比較できるようにすることを目指す。	
		国際法研究Ⅱ	国際人権法を実施するための国内的・国際的な人権保障システムの現状を確認し、課題について検討する。具体的には、国際人権法における国内の実施及び国際の実施のためのさまざまな制度を概観した上で、人権条約の報告制度とその課題、個人通報制度と調査制度、国連の人権活動、そして、人権の地域的保障について学ぶ。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、国内的・国際的な人権保障システムについて理解し、課題について検討できるようにすることを目指す。	
		行政学研究Ⅰ	本科目では、行政学理論と行政研究の方法論について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	
		行政学研究Ⅱ	本科目では、行政研究の方法論と行政の実態について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	

専攻科目 （経済学・経営学コース）	拡充専門科目	公共政策論研究 I	公共政策は、公共財の供給、公共利益・公益（不特定多数の人々の利益）の実現、公共サービスの提供、公的問題の解決などを目的とする。その担い手は、「新しい公共」が喧伝される今日、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、新公共管理論（NPM）の考え方を批判的に検討しつつ、公共政策を3つのセクターの組織の視点、とくにそれらが構成員に提供する選択的誘因の点からも考えたい。	
		公共政策論研究 II	「新しい公共」が喧伝される今日、公共政策の担い手は、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、3つのセクターの中でもとくにサードセクターに着目し、日本の様々なNGO/NPO、具体的には非営利法人を、法人の設立と税制上の優遇措置の点から検討していく。	
		公共哲学研究 I	公共哲学の中心潮流およびアプローチについて概観する。前半では、現代の公共哲学、政治哲学の復活に寄与した20世紀の代表的な政治哲学者を取り上げた後、後半では、現在の主要な潮流および論点を概観する。	
		公共哲学研究 II	古典的な文献の読解を通じ、西洋を中心とした公共哲学・政治哲学に対して、歴史的な理解を得るとともに、これら古典が現代の理論研究に対してどのような貢献を加えているかを学ぶ。	
		特定テーマ演習	「地方創生」「中心市街地活性化」「地域資源活用」「農商連携」「観光入込客数増大」など、地域経済の振興や発展を考えるためには、さまざまな視点による検討が不可欠である。そこで本講座では、テーマに沿った講師による実践的な課題の検討を進めていく。幅広い議論を通じて未来を展望するとともに、問題解決に必要な視点の考察を通じて、応用的な思考能力を身につける。授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	
		地域資源活用研究法	茨城県下の市町村から特定の研究対象を選定し、その地域の課題の解決に向けた調査・研究を行う。地域連携や地域貢献を特色とする本演習は、地域に根差した調査・研究を重視する。調査の成果はレポート等にまとめるとともに、学内あるいは現地で報告会を行う。授業概要にかかわる現任者など、外部講師による講義を交えた授業を行う。	
		地域連携創生研究演習	既存資料の収集・分析と行政計画のレビューをふまえ、地域の多様なステークホルダーからのヒアリングを行い地域課題等を明確にし、その解決に向けて地域資源を活用した地域創生に資する条例等の政策形成をめざし研究を行う。その上で、自治体、民間企業、NPO法人等の多様な主体が参加するワークショップでの議論を通じ、多面的に解決策を検討する。	
		日本思想史研究 I	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは伊勢神道関係資料。	隔年
		日本思想史研究 II	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは両部神道関係資料。	隔年
		日本思想史演習 I	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは伊藤聡『神道の中世—伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀』	隔年

専攻科目 （経済学・経営学コース） 拡充専門科目	日本思想史演習Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを旨とする。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは佐藤弘夫『アマテラスの変貌』	隔年
	実践哲学研究Ⅰ	この授業では、規範倫理学の基本的な考え方について学び、そのうえで規範倫理学の様々な立場の特徴などについての理解を深める。具体的には、義務論、帰結主義、徳倫理学などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学研究Ⅱ	この授業では、西洋実践哲学における重要概念である自律を取り上げ、この概念に関わる諸理論についての理解を深める。具体的には、カント倫理学における自律、個人の自律、関係の中に位置づけられた自律、応用倫理学における自律などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学演習Ⅰ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『道徳形而上学の基礎づけ』を取り上げ、輪読する。授業は演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、善意志、定言命法、普遍化可能性、目的自体、自律などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学演習Ⅱ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『実践理性批判』を取り上げ、輪読する。授業は基本的には演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、道徳と自由、道徳と幸福、善と悪、道徳感情などについての検討を行う。	隔年
	日本古典・近代語研究Ⅰ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された蘭日辞典（『波留麻和解』『訳鍵』『ドゥーフ・ハルマ』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』）や英和辞典（『英和对訳袖珍辞書』）等について概説し、近世・近代翻訳語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
	日本古典・近代語研究Ⅱ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された国語辞書類（『東雅』『大和本草』『本草綱目啓蒙』『和漢三才図会』『片言』『物類称呼』『和訓栞』『雅言集覧』『俚諺集覧』等）について概説し、近世語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
	日本古典・近代語演習Ⅰ	江戸時代の主要な蘭日辞典である『波留麻和解』『訳鍵』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』の電子テキストを用いて、近世日本の漢字字体や漢字表記語の運用実態について調査する。その際、まず単漢字での用字法の分析を行った後に、熟語についての調査を行う。	隔年
	日本古典・近代語演習Ⅱ	蘭学学習法について書かれた大槻玄沢『蘭学階梯』（天明三1783年成、天明八1788年刊）を読み、江戸で本格的な蘭学が始められた頃の社会的・学問的状況について調査する。注釈書も参照するが、原文での読解能力の修得を目標の一つとするので、授業では基本的に原文で読み進める。	隔年
	日本古典文学研究Ⅰ	日本古典文学の作品（主に韻文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
日本古典文学研究Ⅱ	日本古典文学の作品（主に韻文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『新古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年	

専攻科目 （経済学・経営学コース） 拡充専門科目	日本古典文学演習Ⅰ	日本古典文学の作品（主に散文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻四を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学演習Ⅱ	日本古典文学の作品（主に散文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻五を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本近代文学研究Ⅰ	戦前を代表する大衆作家（夢野久作）の作品を網羅的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、正確な読解を心懸ける。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにより自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
	日本近代文学研究Ⅱ	戦前日本を代表する探偵小説の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の方法を模索する。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養う。	隔年
	日本近代文学演習Ⅰ	久生十蘭の敗戦後作品を構造的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の地平を模索する。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにより自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
	日本近代文学演習Ⅱ	戦後を代表する文学表現者の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の方法を模索する。	隔年
	中国思想史研究Ⅰ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また中国最後の王朝である、清朝の真面目を理解させる。	隔年
	中国思想史研究Ⅱ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また近代化と伝統のはざままで揺れる、清末から民国初期の社会・歴史状況を考察していく。	隔年
	中国思想史演習Ⅰ	経書成立を知るための入門書といえる、馬宗霍・馬巨『経学通論』（中華書局、2011年）を選読して、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法を会得する。さらに儒教思想の歴史であるいわゆる「経学史」の根底を理解させる。	隔年
	中国思想史演習Ⅱ	江セン『新体経学講義（点校本）』（華東師範大学出版社、2014年）を精読し、漢文読解に必要な知識と方法を具体的に学び、さらに儒教史研究の歴史を深く知ることによって、中国古典学の基礎部分を修得する。	隔年

専攻科目 （経済学・経営学コース）	拡充専門科目	中国近現代文学研究Ⅰ	「中国女性作家」研究。中国文学（および中国語で書かれた文学）の女性作家の作品と、研究論文の講読をとおして、中国文学史における女性作家の創作とその位置を研究し、中国文学史を再考する。	隔年
		中国近現代文学研究Ⅱ	中国・香港「モダニズム文学（実験文学）」研究。中国・香港の作家の「モダニズム文学（実験文学）」の作品と、研究論文の講読をとおして、世界文学と香港文学、中国文学の関係や、世界文学史における中国・香港文学の位置付けを考察する。	隔年
		中国近現代文学演習Ⅰ	「中国1930年代作家研究」。中国で1930年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1930年代の文学状況を検証していく。	隔年
		中国近現代文学演習Ⅱ	「中国1980年代作家研究」。中国で1980年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1980年代の文学状況を検証していく。	隔年
		フランス文学研究Ⅰ	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学研究Ⅱ	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学研究Ⅰ」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学演習Ⅰ	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		フランス文学演習Ⅱ	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学演習Ⅰ」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
		美術史学研究Ⅰ	美術史学の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに方法論の発展の歴史と最新の方法論について学ぶ。また、欧米諸国と日本の美術史制度とその歴史を比較しながら学び、今日的な問題と課題について具体例を取り扱いながら検討する。	隔年
		美術史学研究Ⅱ	主に学会誌や専門雑誌に掲載された美術史研究論文を読み、内容を検討するとともに、その分析方法を整理する。伝統的な方法論やクライテリアを知るとともに、今日注目されている新しい研究の方法を吸収し、独自の研究に応用する訓練をする。	隔年
		フランス美術史研究Ⅰ	フランス美術の歴史の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに中世、17世紀、19世紀、20世紀の歴史編纂の歴史と方法論について学ぶ。具体的には、欧文（とくにフランス語と英語）の必須文献と最新の優れた論文を講読・分析し、批判的検討をするとともに、新知見の構築をめざす。	隔年
		フランス美術史研究Ⅱ	フランス美術史の動向と美術史研究の成果を理解する。欧文（とくにフランス語と英語）文献の購読などを通して、フランス美術史の基本的な方法論を修得するとともに、新しい研究方法にも通じ、各自の研究に応用する。	隔年
		英語学研究Ⅰ	生成文法の言語観を前提として、現代英語の文法現象のうち、文法の部門間の接点（インターフェイス）において生じていると考えられる現象を取り上げ、文法の部門間の関係がどうあるべきか先行研究を渉猟したうえで担当者の管見を披露する。今まで重点的に研究されてきた統語論と意味論の接点の現象に加え、統語論と音韻論の接点の現象と意味論と音韻論の接点の現象を扱い、文法理論のあるべき姿の可能性を提示する。	隔年

専攻科目 （経済学・経営学コース） 拡充専門科目	英語学研究Ⅱ	英語の通時変化に関する担当者の管見を、主として生成文法的な理論基盤をもとにして提示する。具体的には、英語の通時変化の大きな流れを前提として概観したあと、英語史上生じた音韻変化、統語変化、意味変化から具体的な変化の一つを選び、言語変化を記述しその記述結果を理論的視点から解釈する。そのうえで、提示した解釈の英語の歴史変化への意味合いについて議論する。	隔年
	英語学演習Ⅰ	英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の統語構造と意味構造に関連する論文を扱う。	
	英語学演習Ⅱ	英語学演習Ⅰと同様に、英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の音韻論と形態論に関連する論文を扱う。	
	イギリス文学研究Ⅰ	20世紀の各文学理論の基本的な理念と、理論体系の歴史的発展を理解したうえで、批評論文の英語表現を正確に読み取る方法と文学作品の研究手法を学ぶ。具体的には文学理論の代表的な論文と個別文学作品の批評論文を精読し、その英語表現の理解を深め、批評の手法と視点を分析・検討し、個別作品研究への援用の方法を探求する。	隔年
	イギリス文学研究Ⅱ	20世紀末から21世紀に発表された最先端の文学批評の理解を深め、批評論文の難解な英語表現の読解方法を学ぶ。具体的には、ジェンダーから宗教に至る幅広いテーマをめぐる最先端の批評論文を精読し、英語表現を理解したうえで、近年の文学批評の動向を把握し、個別作品の批判的読解方法を学び、新たな論点と分析方法を探求する。	隔年
	イギリス文学演習Ⅰ	近代初期から現代にいたるイギリス文学の詩、戯曲、小説の代表的な作品を読解し、各作家の語りの特徴の分析方法と個別作品の英語表現の読解力を涵養する。具体的には、各時代の各ジャンルの代表的文学作品の一部を精読し、語りにおける英語表現の特徴と表象の諸要素を分析する方法を学び、作家・作品への理解を深める。	
	イギリス文学演習Ⅱ	近代から現代にいたるイギリス文学の散文を中心に、比較的マイナーなサブジャンル作品を精読し、多様な英語表現の読解力を涵養する。具体的には、対象作品の精読を行い、各書き手の語りの手法と英語表現の分析方法を学ぶ。特に、近代以降の「自己」の表象と一人称の語りの様相の関係を分析したうえで、各時代のイデオロギーと修辭的表現の諸要素の相関関係への理解を深める。	
	アメリカ文学研究Ⅰ	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年
	アメリカ文学研究Ⅱ	19世紀末から現代までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (経済学・経営学コース)	アメリカ文学演習Ⅰ	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
	アメリカ文学演習Ⅱ	19世紀末から現代までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
	応用言語学研究Ⅰ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」と「転移」に関する文献を購読し、これまでの研究の歴史を概観する。そのうえで近年の言語間の影響と過去の転移研究との違いを正確に理解する。そのために、文献内容の理解を高めるための課題(study questions)に取り組み、その成果を発表し、討議する。さらに、受講者の第二言語習得の経験及び内省に基づき、受講者の母語が第二言語習得に与えた影響について、特定の語彙、文法項目を例にとり、発表、議論する。	隔年
	応用言語学研究Ⅱ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、「言語間の距離」、「個人差」に関する文献を精読し、言語間の距離と言語間の影響、および学習者の個人差と言語間の影響について深く考察する。そのうえで、言語間の影響に関する主要な研究論文を精読し、日本語のどのような語彙及び文法項目が学習言語(主に英語)の習得にどのような影響を与える可能性があるのかを発表資料に基づき発表し、受講者全員で議論する。	隔年
	応用言語学演習Ⅰ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、動詞の項構造情報、受動態、関係節などについて日本語が英語学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年
	応用言語学演習Ⅱ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、可算・不可算名詞、定表現、時制、空間表現などについて日本語が英語の学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年
	言語文法論研究Ⅰ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。イギリスの記述文法の伝統の中で書かれた研究を読む。動詞と助動詞、代名詞と数詞、形容詞と副詞、削除、情報構造、テキスト言語学などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論研究Ⅱ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。記述を中心としながらも、理論的側面も取り入れた研究を読む。否定、発話行為、付加詞、非境界性、比較、指示詞、照応形、形態論などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年

専攻科目 （経済学・経営学コース）	言語文法論演習Ⅰ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。主要部と補部、各フレーズの特徴、節の種類と特徴、修飾や程度の表現などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅱ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。語、句、機能範疇、疑問文、関係節、他動性、主要部移動などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	社会言語学研究Ⅰ	社会言語学の研究において注目されてきた「属性」のうち、性差・年齢差、集団語に注目して、これらに関する先行研究をテキストとして講義を進める。日本語の変種と性差・年齢差との関係とその特徴を多角的に説明、あるいは、集団語として主に若者語に関する研究を取り上げ、言語変化のプロセスや若者語の機能等について説明する。	隔年
	社会言語学研究Ⅱ	「言語生活」「言語意識」に関する先行研究をテキストとして講義を進める。言語生活では、メディア接触と言語変種、共通語と方言の併用、日本語非母語話者の日本語使用等の観点から説明する。言語意識では、言語行動への評価、方言意識、アイデンティティー等に注目しながら説明する。	隔年
	社会言語学演習Ⅰ	性差・年齢差、集団語といった属性に注目して、これらに関連したテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	社会言語学演習Ⅱ	言語生活の変化や言語意識に注目して、これらに関連したテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	考古学研究Ⅰ	考古学研究の基本文献について、特に理論考古学に関する論文を批判的に解説する。テキストはチャイルド、ビンフォード、ホッダー、レンフルーらの著作、またはこれらに関連する論文から、受講生の関心を考慮して選択する。原則として原文を用いて理論の理解を深め、受講生自身の研究成果と併せて検討することを通じて、考古学からの歴史的思考力を鍛える。	隔年
	考古学研究Ⅱ	比較考古学の研究方法を解説し、具体的な考古資料に即して研究を実践指導する。比較考古学（この授業では民族考古学的方法・土俗考古学的方法を含む）のもつダイナミズムを理解するために、まず具体的研究例を学び、受講者毎に設定する課題に対し、実際の作業を通じて議論し、歴史と文化を描き出す際の理論的な問題点もあぶり出す。	隔年
	日本考古学研究Ⅰ	日本考古学研究の進め方、論文の書き方について訓練する。複数のオピニオン・リーダーによる研究文献を購読し、比較・検討することにより、日本考古学の現在の水準と問題点を探る。その上で、自分自身の研究を日本考古学の課題や歴史的課題と照合し討論する。テキスト及び課題は受講生の関心を考慮する。	隔年
	日本考古学研究Ⅱ	日本考古学の研究の流れを、具体的な考古資料に即して指導する。調査計画の策定から始め、最終的には自身の成果をまとめることを目標として、事実記載及び考古学的評価を含む短編の報告（調査報告、資料紹介または地域の文化財保護計画）の作成に取り組む。資料や課題は受講生の関心を考慮する。	隔年

専攻科目	拡充専門科目 (経済学・経営学コース)	中国考古文化研究Ⅰ	甲骨文字の誕生から現在までの研究史について理解を深める。併せて考古資料、文献資料、出土文献資料それぞれの特性について学び、理解する。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
		中国考古文化研究Ⅱ	甲骨文字研究の全体像について理解を深め、特に書体研究とISO/IEC10646への登録問題を通して、アカデミックな研究成果と実務規格との兼ね合いについて理解を深める。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
		中国考古学研究Ⅰ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。加えて、清末以降の日中関係史について、中国考古学史を軸に学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
		中国考古学研究Ⅱ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。特に新石器時代末～二里頭期の状況を継続と断絶という観点から学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
		日本文化史研究Ⅰ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に国家権力(朝廷や幕府、宗教権門)との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
		日本文化史研究Ⅱ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に地域権力(在地領主や地方寺社)との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
		日本古代中世史研究Ⅰ	日本の古代の歴史を茨城(常陸・北下総)の事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。日本文化史に関する研究姿勢、研究能力を、より高めることができる。	隔年
		日本古代中世史研究Ⅱ	日本古代中世史に関する研究成果を教員・学生が提示し、議論を通じて、ブラッシュアップする。日本の中世の歴史を事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。	隔年
		日本政治史研究Ⅰ	近世の政治史について論じた基本文献と、武士社会の権力と伝統の内実を記録した史料を読み、近世社会の政治的特質について学ぶ。具体的には、前半は尾藤正英『江戸時代とはなにか』を輪読し、後半は水戸藩の政治に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
		日本政治史研究Ⅱ	近世の国際政治史を論じた研究文献と、近世人の海域世界との接触について記録した史料を読み、東アジアという視野のもとで近世日本の特質について考える。具体的には、前半は山口啓二『鎖国と開国』を輪読し、後半は東アジア海域で活動した人びとに関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
		日本近世史研究Ⅰ	近世の百姓や町人について論じた基本文献と、庶民の視点で近世の風景を記録した史料を読み、近世の民間社会の実態について学ぶ。具体的には、前半は深谷克己『百姓成立』を輪読し、後半は市井でやり取りされた情報や伝承に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年

専攻科目 （経済学・経営学コース）	拡充専門科目	日本近世史研究Ⅱ	近世人の生命維持について論じた研究文献と、自然環境に適応した人びとの営みを記録した史料を読み、「生きる」という視角で近世社会の特質について考える。具体的には、前半は塚本学『生きることの近世史』を輪読し、後半は飢饉や自然災害に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
		日本社会史研究Ⅰ	近代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に19世紀後半から20世紀前半にかけての史料の輪読を進めることで、近代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
		日本社会史研究Ⅱ	現代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に20世紀前半から2中頃にかけての史料の輪読を進めることで、現代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
		日本近現代史研究Ⅰ	日本近代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に19世紀後半から20世紀前半の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、近代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
		日本近現代史研究Ⅱ	日本現代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に20世紀前半から中頃の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、現代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅰ	17世紀における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としてはジュンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定朔漠方略』や満洲語の一次史料である『康熙朝満文硃批奏摺』に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
		ユーラシア歴史文化研究Ⅱ	18世紀前半における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としては、ジュンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定準噶爾方略』や満洲語の一次史料である『雍正朝満文硃批奏摺』・『準噶爾使者档』、さらにはジュンガルを訪れたロシア使節の記録等に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅰ	清朝の八旗制度と中央ユーラシア周辺社会（ハルハ、ジュンガル、ホシユート、チベット等）に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
		ユーラシア歴史社会研究Ⅱ	近世東部ユーラシア世界（清朝、ロシアおよび日本）の歴史（関係史）及び社会に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
		アジア歴史文化研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年
アジア歴史文化研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年		

専攻科目 （経済学・経営学コース）	拡充専門科目	アジア歴史社会研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年
		アジア歴史社会研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅰ	ドイツの戦後社会における歩みを検討していく。その際に、1) ヨーロッパを中心とした国際関係をめぐる歴史、2) ドイツの国内政治史、3) 市民社会の構造的変化・家族やジェンダー問題、メディアや消費生活のあり方といった社会史という3つの軸を中心に分析する。	隔年
		ヨーロッパ社会史研究Ⅱ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
		ヨーロッパ政治史研究Ⅰ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、経済的・政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
		ヨーロッパ政治史研究Ⅱ	ヨーロッパの20世紀史を論じた最新の研究をとりあげ、基本知識を確認するとともに、テキストを読み込んでいく。具体的には、二度の世界大戦とヨーロッパの国民国家体系が引き起こした問題、さらには社会主義（東西冷戦）などが主題となる。参加学生からの積極的な発言も求める。	隔年
		ヨーロッパ歴史文化研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパの歴史文化、とりわけ英仏独以外の近現代史に関する近年の重要な研究を紹介したうえで、受講生の関心に沿った研究報告（プレゼン）を課す。これによって、修論執筆に必要な文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
		ヨーロッパ歴史文化研究Ⅱ	本講義においては、近現代史を中心とするヨーロッパの歴史文化に関する研究に取り組むことで、国民史に基づく一国史観を相対化し、過去と未来をつなぐ歴史的視野を養う。以上を通して、修論執筆に必要な史料・文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
		ヨーロッパ近現代史研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する最新の研究に触れたうえで、その研究史的意義、多文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年
		ヨーロッパ近現代史研究Ⅱ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する古典的な研究に対してもその射程を広げ、その研究史的意義およびヨーロッパの歴史文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年
		行動機構論研究Ⅰ	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究Ⅱを履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年

専攻科目 （経済学・経営学コース） 拡充専門科目	行動機構論研究Ⅱ	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究Ⅰを履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年
	行動機構論演習Ⅰ	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康に関連した心理学の諸理論、例えば心理学的ストレス理論、ソーシャルサポート、健康信念モデル、計画的行動理論、セルフエフィカシー、自己決定理論などについて理解を深める。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	行動機構論演習Ⅱ	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康増進に焦点を当て、介護ストレス、介護予防、健康行動、テクノロジーへの適応などの問題について、現場の課題と実践のあり方について考察する。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	認知行動論研究Ⅰ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解を通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論研究Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論演習Ⅰ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解を通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論演習Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年
	家族心理論研究	家族をめぐる歴史や定義について理解を深めながら、主として離婚・再婚、そして子どもの養育課題といった現代の家族における諸問題について検討する。また、生涯発達の視点も含めながら、家族のライフサイクルについて多面的に検討する。	隔年

専攻科目 （経済学・経営学コース）	拡充専門科目	行動文化論研究Ⅰ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅰ（「現代の事例」に学ぶ）。現代の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげる研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
		行動文化論研究Ⅱ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅱ（「過去の事例」に学ぶ）。過去の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげる研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
		行動文化論演習Ⅰ	社会心理学および関連分野の「古典的文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
		行動文化論演習Ⅱ	社会心理学および関連分野の「最近の文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
		生涯発達論研究Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に注目した知性、情動、身体、自他関係などの形成について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論研究Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に注目して、出来ることが当たり前ではないことから人間の生涯にわたる発達について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論演習Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に関する個別具体の課題について掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論演習Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に関する個別具体のテーマについて掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		文化人類学研究Ⅰ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。	隔年
		文化人類学研究Ⅱ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。アメリカの英文専門書の読解能力を高め、マヤ文明の特徴、旧世界の四大文明との共通性を理解できるようになることを目指す。	隔年

専攻科目 （経済学・経営学コース）	拡充専門科目	文化人類学演習Ⅰ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。	隔年
		文化人類学演習Ⅱ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。学術雑誌論文の批判的読解を通じて、先スペイン期のメソアメリカ諸文明を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。	隔年
		比較文化論研究Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。具体的には特に、「集団」「伝統」「儀礼」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
		比較文化論研究Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、マルチサイトド・エスノグラフィ、オートエスノグラフィ（自己エスノグラフィ）など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
		比較文化論演習Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。特に、広義の「語り」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
		比較文化論演習Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、組織エスノグラフィ、オートエスノグラフィ（自己エスノグラフィ）など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
		福祉分野に関する理論と支援の展開	社会福祉の基本的な理念や機能・役割について理解を深めたいうで、特に、障害者（児）に関連した福祉現場において生じる、心理社会的な課題及び必要な支援について学ぶ。具体的には、身体障害者（児）、知的障害者（児）、発達障害者（児）、精神障害者に関する法・制度について学び、地域における支援の実際や今後の課題について、事例等を交えながら検討する。	
		教育分野に関する理論と支援の展開	地域社会における学校、いじめ、不登校、発達障害、児童虐待、アセスメント、コンサルテーション、心理教育をキーワードとし、スクールカウンセラーとして働くための基礎知識を身につける。また、教育分野における支援のあり方を通して、社会人としての姿勢を身につける。	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	司法・犯罪分野に関わる心理専門職の実践について学ぶ。具体的には、少年審判手続及び関係機関の連携について学ぶと同時に、非行メカニズムの理解、少年への支援・働きかけについて学習する。また、家事事件等に関する基礎知識及び家庭内紛争の解決に向けた専門職の実践について学ぶことにより、社会人としての姿勢を身につける。	
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	地域における産業・労働分野における支援に焦点を当てて、その理論と具体的実践について学ぶ。具体的には、組織の特徴、組織運営の実際、制度と法規、産業ストレスの実際、健康保持増進のための指針、障害者への就労支援、自殺予防と危機対応等について学ぶ。	

専攻科目 （経済学・経営学コース） 拡充専門科目	心理的アセスメントに関する理論と実践	将来、社会人として、心理臨床家の仕事を行う際に必要な臨床心理査定（アセスメント）について理論と施行法を教授する。実物の検査用紙や器具を用い、演習を通して心理査定の実際を学ぶ。 (オムニバス／全15回) (90 金丸 隆太／8回) 代表的な知能検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 描画法、質問紙法から代表的な心理検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。	オムニバス
	心理支援に関する理論と実践A	ロジャーズ、C.、来談者中心療法、カウンセリング、プレイセラピーをキーワードとし、ロジャーズ、C.の来談者中心療法についてその主要論文とそれに関連する文献を読みながら討論を行い、理解を深める。	
	心理支援に関する理論と実践B	公認心理師として、地域社会において活動を行なっていく上での基礎的な考え方、倫理的問題や治療構造等、心理面接を行う上での基本について、講義や事例検討を通して実践的に学ぶ。 (オムニバス／全15回) (108 大島 聖美／8回) 大学院でどのように学んでいくのか、倫理的問題や治療構造等、言語面接を行う上での基本について学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 事例論文や各自が実習で担当している事例報告を材料に、主に演習形式によって、心理療法の実践に生じる諸問題や展開の在り様について理解と対応の可能性を検討する。	オムニバス
	家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	家族、コミュニティ、関係行政論をキーワードとし、家族やコミュニティに焦点を当てた心理支援の理論と方法について学ぶ。さらに、これらの心理支援の背後にある法律や制度についても学ぶ。	
	心の健康教育に関する理論と実践	心理専門職者に必要な心の健康に関する諸理論を学ぶ。具体的には地域保健活動における予防の概念、ストレス理論、自殺予防と危機対応、心の成長モデル、表現活動と健康等について実践を交えながら学ぶ。 (オムニバス／全15回) (90 金丸 隆太／4回) ガイダンス、心の成長モデルに関する回を担当する。 (108 大島 聖美／4回) ストレスマネジメントおよびアサーショントレーニングについて、基礎的な知識と心理教育の実際について学ぶ。 (110 地井 和也／3回) 「睡眠の問題」、「自傷行為・自殺の問題」、「死と喪の作業」をテーマとして基礎的知識と問題の予防に関する諸理論および心理教育の実践方法について学ぶ。 (55 正保 春彦／4回) 集団活動における心の教育の実践方法について学ぶ。また、まとめの回を担当する。	オムニバス
	保健医療分野に関する理論と支援の展開	精神医学の基礎と、統合失調症、気分障害をはじめとする代表的な精神疾患について学び、さらに、精神疾患の治療の基礎を学ぶ。精神医学の最近のトピックについて学ぶことにより、社会人としての心理専門職に必要な精神医学的見地を身につける。	

専攻科目	拡充専門科目（経済学・経	投映法特論	ロールシャッハ・テスト（エクスナー法）の歴史・実施手順・コーディング・解釈について学び、被検者の心理的体験を理解し、自身自身で検査結果の整理を行うことができることをめざす。心理専門職者として、本テストを臨床現場で活用するための基本を習得する。	
		箱庭療法特論	箱庭療法の理論に関する講義と箱庭制作体験を通して箱庭療法の実践について学習する。具体的には、箱庭制作・見守り体験、事例検討を通して箱庭療法の実践の基礎を身につける。	
	拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	現代ジャーナリズム研究	ネットを通じて知る機会が増えたとはいえ、信頼性の高さを群を抜くのは新聞、放送で、内外の情報、社会の主要な動きを知るには欠かせない。では、依って立つ、その核心ともいえるジャーナリズムとは一体何なのか。どのような形で情報が収集され、我々に届けられるのか。なぜ、信頼性が高いのか。その論理、倫理は。先般の米大統領選、仏大統領選で話題になった蔓延するフェイクニュースについて考察し、メディアリテラシーの体得に努力する。その後、ジャーナリズムのあり方や役割などを学ぶ。	
		マスコミ研究	現代社会の中で、マスコミ・メディアは、どういった役割を果たしているのだろうか。企業のみならず政府、地方公共団体、さまざまな組織にとってメディア戦略は、その将来を決するような重大な役割を担っているともいえる。現代社会を生き抜く際に必ずかかわってくるメディアについての理解を深めることはかなり大きな意味を持つ。マスコミ関係の書籍の購読を通じてメディアへの理解を深める。	
		ポピュラー文化研究	ポピュラー文化はどのように形成されてきたのか、雑誌などの出版物を通して、それぞれの時代のポピュラー文化について考察する。とくに、少女文化の形成に注目する。明治以降から現在までの少女文化を範囲とし、文献を購読発表し、それについてディスカッションを行う。	
		映像メディア研究	発想するから始まり多くの人の前で上映するまでの一連の映像制作の作業を通し、映像作品の制作と表現の基礎を学ぶ。特に「企画」し「具体化」し、伝える工夫を凝らす「構成」力を養うことに重点を置く。「映像」というメディアを通して、ものの見方、考え方を養い、他でも応用できるリテラシー力を身につける。	
		メディア文化研究	メディアとは何かを考えると、情報伝達の側面としてみるだけでは不十分なことに気づかされる。活字が主張し、映像が魅了するように、印刷技術の登場、ラジオ、テレビ、インターネットといったメディアの技術革新は人々に働きかけ、身体や精神、思想を組み替えてきた。様々なメディア装置（印刷技術、ラジオ、テレビ、映画、インターネット、SNS）の成り立ちを概観しながら、そのメディアが作りだした「文化」を考える。	
		メディア教育論研究	現代社会におけるメディア教育について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。日々変化を続けているメディア・テクノロジーを教育や学びの諸場面にどのように活用していくべきなのか、それによって教授者と学習者の位置づけや役割はどのように変化するのか、近未来の教育・学習スタイルはどのようなものになると考えられるのか等、複数の視点からメディア教育の現状と将来像について考察する。特に近年急速に普及したスマートフォン・タブレット型端末や電子テキストを活用した教育の方法やその課題・可能性を中心的な題材・事例として、文献講読と議論により理解を深める。	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	電子メディア論研究	現代社会における電子メディア活用の諸場面について、多角的に情報や資料を収集・読解し議論を交えながら探究することを本講義の目的とする。インターネットに関連する電子メディア・テクノロジーの歴史・背景や、社会への影響力、メディア特性などについて、資料・文献講読やディスカッションを通じて理解深化を目指す。さらに、情報・コンテンツの共有・共感・認知、コミュニケーション、情報の保護や権利などの観点からも考察を加え、高度情報化社会の諸問題について議論・考察する。	
	近代日本メディア史研究	近代日本における新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどマスメディアの歴史について考える授業。各時代のマス・コミュニケーションがどのようなものであったかを、できるだけ現物資料を用いて考察していく。マス・コミュニケーションの原理を歴史的な比較を通じて理解し、それによって現在のマスメディアに対する批判的視点を手に入れることを目標とする。授業は教員による講義形式を基本とするが、適宜、受講者どうし、および受講者と教員によるディスカッションを交えつつ進める。	
	映像広告論研究	日本におけるテレビコマーシャルの歴史（1950年代から1990年代）を映像資料・文献資料に基づいて解説する。また、映像資料および放送関係の文献資料についてその性質を理解し、扱いに習熟する。授業は教員による講義と、受講者どうしおよび受講者と教員によるディスカッションを適宜組み合わせで行う。	
	学習デザイン論研究	学習科学や認知科学の視点から人がどのように学習するのかについて理解し、学習を支援し促すための道具や物理的環境、人間関係をどのように設計したらよいのかについて考える。学習に関わる理論としては状況的学習、学習環境設計に関しては活動理論、デザイン実験アプローチ等を取り上げる。授業は、講義、文献購読、デザイン実習により進める。	
	情報デザイン研究	我々は日々の生活の中で自分達の生きる現実をデザインしつづけている。そのデザイン活動が、どのような道具を用いて、どんな風に行われているのかについて、人工物による媒介、実践コミュニティへの参画といった社会構成主義的な視点から考える。また、人と人、人と機械のコミュニケーションの成り立ちをインタラクションとヒューマンインタフェースの視点から考え、その支援方法について議論する。文献講読とプロジェクト型活動により授業を進める。	
	コミュニケーションデータ分析研究	コミュニケーションに関する社会学的なデータ分析の方法を学び実証研究の具体例に触れることで、社会調査の方法論やデータ分析の手法を身につけるとともに、先行研究にあらわれたデータの分析・解釈について適切に評価・判断できるようになることを目指す。	
	コミュニケーション社会学研究	現代社会における人々の日常的なコミュニケーションの特質や問題点を社会学的な視点や方法論から理解するために、当該領域の主要な先行研究やデータなどの資料を読み、それについて履修者がレポートし、参加者全員で質疑応答を行う。	
	多文化コミュニケーション論研究	多文化コミュニケーションの基礎理論を概観した上で、現存する具体的諸問題を把握し、クリティカルに議論していく。さらに、多様な背景をもつ人々が相互に理解し共に生きていくために、人と人、人と地域社会がどのように関わっていけばよいのか、その要因とこれからの課題を文献と映像から捉えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)多文化コミュニケーションに関する基礎理論を理解し、視野を広げることができる。 (2)多文化コミュニケーションに関する様々な具体的問題をクリティカルに議論することができる。	

専攻科目 （地域政策研究（社会人）コース）	拡充専門科目 （地域政策研究（社会人）コース）	多文化関係学研究	多文化共生に関する基礎理論を概観した上で、国際社会と日本の関わり、日本の「内なる国際化」の現状と課題を中心に検討していく。それらを踏まえた上で、地域の多文化共生実現に向けて実行可能な取り組みを具体的に考えていく。 到達目標は、主に以下の2点である。 (1)異文化間教育／多文化教育に関連する具体的事例、課題について理解することができる。 (2)多文化共生社会の実現に向けて、現在および将来的に自分ができることを具体的に考えることができる。	
		グローバル化と地域開発研究	グローバル化と地域開発について、人の移動（移民・難民等）や財・サービス・資金等の移動に着目し、国際交流・地域間交流をふまえて、地球規模課題と地域課題との関係について多角的に分析する。また、グローバル化する地域社会の持続可能な開発にむけて、多層性・多様性に注目し、理論的・実践的に研究する。	
		持続可能な開発とSDGs研究	国際社会全体が取り組む国連総会で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」およびこれに含まれるSDGs（持続可能な開発目標）を軸に、「誰一人取り残さない」共生社会に向けた現状と課題についてグローバル＋ローカルに、国際開発・国際協力、国内政策およびこれらの関連に着目し、事例等も踏まえて理論的・実践的に研究する。持続可能な開発・SDGsの3本柱である経済・社会・環境の調和のとれた持続可能性にかんがみ、行政・企業・市民社会等ステークホルダーの役割とパートナーシップについて検討する。	
		社会行動論研究Ⅰ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から世界を見渡し地域に根ざしたフィールドワークを用いた研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。フィールドワーク論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年
		社会行動論研究Ⅱ	人間を質的にとらえるセンスを身につけ、社会心理学の立場から俯瞰的な視野と地域への足場を基本とするエスノグラフィックな研究をするための方法論と実践力を身につけることができる。エスノグラフィック論にかかわる深い理解につなげる講読を行う。教科書を読み解きながら、量的研究とは異なる質的研究の方法論および学問の知のあり方を考え実践に結びつける。	隔年
		社会行動論演習Ⅰ	日本だけでなくアジア（韓国・中国・台湾・ベトナムなど）で行われている質的研究に触れ、自身の研究を捉え直すことができる。異なる文化の研究とコミュニケーションを一社会人として図ることができる。テキストの他に質的研究の学術論文を読み込み、その問題の立て方、方法論の選択、結果から考察への展開を読み解く。	隔年
		社会行動論演習Ⅱ	映画を媒介とした対話、すなわち円卓シネマという実践・方法を、他の場面で応用し展開できるようにする。実際に日本以外も含めた世界の映画を取り上げ、それをめぐる対話を重ねる試みを行い、そこで紡ぎだされる事柄を質的に捉え分析する試みを一社会人として行えるようにする。	隔年
		スポーツ社会研究Ⅰ	スポーツが地域社会に果たす機能や役割について理解を深めたいうえで、海外の文化・歴史や教育制度との比較を通じて、現在日本で生じているスポーツ活動にかかる諸問題や課題について考察する。具体的には、運動部活動と地域クラブの連携、プロスポーツの地域共創への影響、スポーツとメディアの関係等であり、職場におけるコミュニケーション促進に寄与する。	

専攻科目	拡充専門科目 (地域政策研究(社会人)コース)	スポーツ社会研究Ⅱ	世界的にスポーツ指導の現場では、発育発達段階に応じたアスリートセンタードの理念に基づいたコーチングが推奨されている。コーチングはスポーツの場面ばかりではなくあらゆる組織で注目されており、21世紀型能力の育成には欠かせない。事例等を交えながらチームづくりと組織づくりについて考察し、職場におけるプロジェクト運営に寄与する。	
		国際政治学研究Ⅰ	本講義では、受講者が、伝統的な安全保障概念とその国際政治上の問題について理解することを目標とする。なぜ、一見して非合理的な戦争という政策がたびたび選択され、そのための準備に莫大な資源が投入されるのか、またなぜ軍縮が難しいのか。そこで実現する「平和」のために安全保障論が何を論じてきたのかを理解できるようにする。 本講義では国際政治学における支配的なパラダイムのひとつである安全保障(security)の問題について検討する。現在の安全保障は、人間安全保障に代表されるように、政治から環境や気候変動、経済やエネルギーなど、概念を多様化・拡大化させている。その一方で、伝統的な安全保障概念を維持するべきという意見も根強い。このような転換期にある安全保障パラダイムについて、根本から再検討を試みる。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。	
		国際政治学研究Ⅱ	本講義では受講者は授業でとりあげた国際政治のもっとも現在のトピックである開発(development)について、その基礎的な知識を得るだけでなく、自らの専門的な見地から課題や問題点を見つけ、それらにたいして、一定の解決案を提示できるようになることが求められる。 本講義では国際政治学におけるもっとも重要なパラダイムである開発と安全保障の中から、開発をとりあげる。前期の安全保障についての議論とその成果もふまえて、開発についての検討を中心に平和学の視覚からも探求を深める。とくに、現在の地球環境問題を巡る国際政治の転換期において、それらのパラダイムがどのような変容をとげつつあるかに着目して議論を進める。また、開発と安全保障の概念的な共通点にも注目して、現代世界におけるパラダイムの本質についての考察を深める。授業は講義部分と演習部分を織り交ぜながら行われ、受講生は能動的に学修に関与する。	
		地方政治論研究Ⅰ	地方政治をめぐる先行研究の流れを把握し、最新の研究成果について理解する。地方政治および地方自治研究の系譜について確認し、最新の研究成果と研究方法について検討する。また政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。地方議会および地方政党組織の実態について検証し、中央政治とのリンケージについても考察する。	
		地方政治論研究Ⅱ	地方政治研究の最近の動向を追う。また、政治の現場の動向についても取り上げ、地方政治の実態についても理解を深める。また最新の研究はどのような方法を用いているのかについても検討する。	
		社会地理学研究Ⅰ	人間と空間・環境との関係を考察する人文地理学の考え方と理論について学んだ上で、とくに都市に焦点をあてた「都市地理学」の分野について講義を行う。 世界には民族、社会階層、ジェンダーなど多様な人びとが共存し、最新技術や文化・情報が集約する一方で、スラム地域を内包する都市は、現代社会の諸問題が凝縮している。都市の形成・発展・衰退・再生の過程および社会空間構造を把握した上で、社会問題解決に向けてどのような方法があるか理論的に学ぶと共に自ら実践する方法を共に考える。	

専攻科目	拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	社会地理学研究Ⅱ	世界および日本における諸地域の社会構造と空間との関係について学ぶ。社会的な差異や格差がどのように空間的に反映されるのかについて、文献輪読を通じて社会地理学的な理論を学んだ上で、環境、文化、宗教、人種・民族、社会制度、政治経済体制など様々な社会的要因がもたらす地域的差異について事例を挙げて考察する。そうした格差や差異がローカルな要因のみでなくグローバルな要因からも分析していく方法を習得する。授業では、該当地域を巡検することを通じて、その差異がいかに空間的に反映されているかを観察し問題を把握する。	
		経済地理学研究Ⅰ	現代における社会・経済構造の変容がもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方の都市・農村地域において深刻化しているフードデザート（食の砂漠）問題を中心に取り上げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。問題を客観的に分析するために、地域統計を用いた地域分析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
		経済地理学研究Ⅱ	経済地理学に関わる都市・地域問題、特に地域の人口減少問題や地域活性化について、その現代における社会・経済構造の変容がもたらす都市・地域問題について、経済地理学的視点から学ぶ。特に地方において深刻化している人口減少問題や地域活性化に向けた課題を中心に取り上げる。文献輪読によって、問題の歴史や背景をはじめ、様々な地域における事例研究を学びつつ、その要因とメカニズムについて考える。特に、空間データや統計データを用いたGIS（地理情報システム）による空間解析手法についても学ぶ。また、実際に問題を抱える都市・地域に巡検で訪れて、課題や問題の現場を観察し、それに対する対策の有効性について学ぶ。	
		地域社会論研究Ⅰ	台湾史に関する基礎的文献を輪読しながら、台湾の地域社会の成り立ちを移民社会、植民地化、脱植民地化といったキーワードから理解する。また、台湾という地域の研究において何が問題となってきたのか、また台湾がどのような地域としてとらえられてきたのかを理解する。	
		地域社会論研究Ⅱ	台湾の政治社会に関する基礎文献を輪読しながら、ローカルレジームがどのように形成され、また民主化、台湾化以後どのように変容しているのかを考察する。	
		環境社会学研究Ⅰ	持続可能な社会の構築のための環境ガバナンスの在り方、環境ガバナンスを支える民主主義の在り方などについて、海外の事例を含め議論の背景、専門家の役割、シティズンシップ論の観点から考察する。	
		環境社会学研究Ⅱ	環境リスク社会と言われる現在、国内・海外において環境運動がどのように進展し、政策的にどのような応答があったのかを考察する。リスクと社会的不平等について、国際的な視点をもちつつ社会構造的に考察する。	
		社会事業史研究Ⅰ	日本の近代を中心に、社会事業の歴史を歴史社会学の方法と視点で学ぶ。まず歴史社会学的研究の方法を、テキストや先行研究を通じて学ぶ。これを踏まえて、貧困と生存権をめぐる思想、理論、および実践を、近代化・現代化の過程のなかに位置づけて考察する。前近代の社会における救済と相互扶助、近代化の過程で形成されていった公的な救済制度、戦争と社会福祉、第二次世界大戦後の改革などが主な論点となる。	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人コース））	社会事業史研究Ⅱ	社会事業史研究の基礎として、「シティズンシップ」「生存権」「福祉国家」「貧困」の概念と学説を学び、公的扶助の歴史の概要を理解する。これらを踏まえて、イギリスの救貧制度、福祉国家、および民間の慈善事業の歴史を学び、日本の社会事業史と比較しながら、貧困をめぐるさまざまな思想と実践を知る。そして、国家、市民社会、共同体と個人との関係に関わるテーマを、歴史社会学的視点から考察する。	
	社会調査法研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査の基本的な考え方や調査技法の本質的特徴について理解するために、テキスト購読を行う。(2)各履修者の研究について検討するとともに、それを素材にして研究法や方法論に関わる議論を行う。	
	社会意識論研究	この授業では、次の(1)(2)を行う。(1)社会調査に関する基礎的な知識を身につけ、社会意識の調査・研究を必要な際に行えるよう、基礎固めをする。(2)社会科学の研究に必要な社会調査データの扱い方を社会意識論研究を参照しつつ身につける。	
	地誌学研究Ⅰ	地誌学は特定の地域における自然環境や社会・経済環境、および歴史・文化環境の総合的な分析であり、近年求められている「総合性」をもつ学問である。本講義では、いま一度、「総合性」をもつ学問としての地誌学を整理する。さらに地域スケールの異なる事例研究を設定し、地誌学的な分析によって地域の性格を解明することで、地誌学の基本的な考え方と方法論を学ぶ。	
	地誌学研究Ⅱ	本講義は、人間の経済活動のなかで、観光や余暇活動をはじめとしたツーリズムの現象を取り上げ、それらを地域活性化に関係させながら、地誌学の立場から検討する。具体的には、ツーリズムや地域活性化に加えてポスト生産主義をキーワードとし、世界中でみられるようになったポスト生産主義的な観点からのツーリズムを媒介とした地域活性化の仕組みとについて検討する。	
	家族社会学研究Ⅰ	ジェンダー論を軸にして家族社会学分野の研究と地域社会学分野の研究を架橋する作業を行う。具体的には、ネットワーク論、社会関係資本論などの研究動向をふまえつつ、震災・原発事故の事例研究を通じて家族社会学と地域社会学の融合的アプローチを学ぶ。	
	家族社会学研究Ⅱ	少子化対策や高齢社会対応と関連して展開されている日本の男女共同参画政策について、家族社会学や地域社会学分野の先行研究をふまえて批判的に考察を加える。具体的には、少子化対策についての先行研究をふまえて、日本、EU諸国、国連等のジェンダー政策、家族政策、人口政策の事例を検討する。	
	環境政策・経済学研究Ⅰ	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の数回にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 学生にはIPCC(気候変動に関する政府間パネル)報告書の輪読、適応情報プラットフォーム(http://www.adaptation-platform.nies.go.jp)等の情報整理を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
	環境政策・経済学研究Ⅱ	気候変動の適応策、緩和策に関して、環境政策、経済学の観点から講義とセミナーを行う。講義は最初の数回にとどめ、後半は演習、セミナー形式とする。 気候変動、エネルギーに関する論文輪読、データ解析を通じて、持続可能な適応策、緩和策についてレポート、分析をまとめてプレゼンする。	
憲法研究Ⅰ	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討する。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できようになることを目標とする。		

専攻科目	拡充専門科目 (地域政策研究(社会人)コース)	憲法研究Ⅱ	最近の憲法学説および憲法判例を素材として、人権、平和主義、統治機構等の論点を検討を行う。報告者の報告を基に、参加者全員で討議を行い、国内外の最新の憲法学説および憲法判例を理解できるようになることを目標とする。	
		民法研究AⅠ	各受講者が民法を中心に、家族法の問題についてそれぞれテーマを設定し、毎回調査報告を行ってもらおう。本授業では、民法の成立過程および法改正を中心に調査報告してもらおう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらおう。	
		民法研究AⅡ	各受講者が民法を中心とした家族法に関する問題についてそれぞれテーマを設定し、そのテーマについて諸外国の法制度について調査し、比較法的考察を行ってもらおう。受講者には、毎回調査報告を行ってもらおう。授業では、他の受講者のテーマについても議論に参加してもらおう。	
		民法研究BⅠ	民法(物権法)の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法(物権法)という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、所有権、抵当権、区分建物所有、登記制度、担保制度。	
		民法研究BⅡ	民法(債権法)の条文・判例・学説を学ぶことにより、日常生活で生じる法律問題や社会人として仕事を通し出会う法律問題に対し、民法(債権法)という専門分野の知識を活用し、入口段階での解決策を自ら考える力を身につける。講義では、レジュメ説明のほか、具体的な事例についてディスカッション等を行うことにより、問題解決能力のほか、社会人に求められる論理的な思考や説得力あるプレゼンテーション能力も身につける。主な講義内容は、契約、債務不履行、売買、賃貸借、金銭消費貸借、連帯債務、保証制度。	
		刑法研究Ⅰ	刑法について研究する。いわゆる刑法総論および刑法各論といった実体刑法を対象とする。もちろん、刑法典以外の様々な特別法も検討対象に含まれる。 学部教育における実体刑法に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。	
		刑法研究Ⅱ	実体刑法以外の刑事法の諸分野について研究する。刑法総論各論以外の、刑事訴訟法や刑事政策学を対象とするが、憲法等の関連分野も視野に入れて検討する。 学部教育における刑事訴訟法等に関する基礎知識の整理確認を行いつつ、さらに現在の議論状況の分析を行うことにより、問題に関するより深い理解を得ることを目指す。 また、研究に当たっては、常に近代刑法原則を意識しつつ、新しい現代的諸問題に取り組んでいくこととしたい。	
		商法・経済法研究Ⅰ	商法および会社法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたい。特に、株式会社をめぐる現代的な課題について学ぶ。具体的には株式会社に関する定め概要を理解し、現行制度の問題点の所在を確認し、崩壊背の方向性について考える素養を身につけることを目的とする。	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	商法・経済法研究Ⅱ	経済法および知的財産法の基本的な理念・機能・役割について理解を深めたいと、わが国の法令の特徴及び独禁法・知的財産法の世界的潮流を把握するために米国・欧州共同体の法令をも検討対象とする。経済法および知的財産法の領域における国内外の日々の事件について自ら分析・評価できようになることを目標とする。	
	労働法研究Ⅰ	国際化、多様化が進み社会が大きく変化する中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働者及び使用者の概念、採用内定、試用期間、公務員の労働基本権、職場における男女の平等、就業規則による労働条件決定と変更、賃金、労働時間。	
	労働法研究Ⅱ	国際化、多様化が進み社会が大きく変化する中、地域で活躍する一社会人として、将来のキャリアプラン、ライフプランを描くためにも労働法の知識は不可欠となる。この講義では、労働法に関する伝統的な重要判例又は最新の判例に関するレポートの作成やプレゼンテーション、報告内容に関するディスカッション等を通じて、労働法の基本的な概念や考え方を学ぶ。必要に応じて地域の現場で活躍するゲストスピーカーを招いて話を聞き、より深い知識を身に付ける。 主な講義内容は以下である。労働災害・通勤災害、昇格及び降格、配転、出向、転籍、解雇、有期契約労働、パートタイム労働、労働者派遣。	
	社会保障法研究Ⅰ	社会保障法分野の内、授業の前半は医療保険を、後半は年金保険を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会保険（医療保険・年金保険）法制度を理解する。また、社会保険（医療保険・年金保険）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会保険（医療保険・年金保険）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	
	社会保障法研究Ⅱ	社会保障法分野の内、授業の前半は社会福祉を、後半は生活保護を取り上げる。テキストの輪読を通して、社会福祉・公的扶助（生活保護）法制度を理解する。また、社会福祉・公的扶助（生活保護）をめぐる法理論ならびに重要判例について各自で調べてきてもらい、討論する。最終的には、これからの社会福祉・公的扶助（生活保護）政策について、歴史的展開と改革論議を踏まえた考察をおこなう。	
	行政法研究Ⅰ	行政法研究Ⅰの授業では、行政法の基本理論について学びながら、社会問題に対する洞察を深めていくことにする。行政の主要領域である、社会保障行政、教育行政等をテーマとして、それぞれの公共政策上の問題を、行政法的な視点から検討を行っていくこととする。	
	行政法研究Ⅱ	行政法研究Ⅱの授業では、国・公共団体と国民・住民との間で法的紛争が生じた場合の行政法学上の諸問題について、分析、検討を行うこととする。行政不服審査の案件となっている事例や裁判例を素材として扱う予定である。	
	比較法研究Ⅰ	1. 比較法の研究領域がマイクロとマクロの二つの領域からなり、それぞれに固有な研究方法を学ぶ。 2. 明治期のわが国の法制度に大きな影響を与えたドイツ法が、ローマ法や自然法とどのような関係をもって生成し、その固有な発達を遂げたかを、歴史的な観点をもとに考察する。	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	比較法研究Ⅱ	1. わが国の法制度に大きな影響を与えた英米法と大陸法を歴史的な観点から考察する。 2. イギリス法、アメリカ法、フランスの特色を、歴史、法の様式、特色ある法制度などの観点から明確にする。	
	国際法研究Ⅰ	特定の人権問題について、日本の裁判例とヨーロッパ人権裁判所の裁判例を比較し、国際人権法の観点からみた日本の課題について考える。具体的には、ヨーロッパ人権条約及び裁判所の仕組み等について概観した上で、拷問の禁止をはじめ、ノン・ルフールマンの原則と犯罪人引渡しや退去強制、被拘禁者の処遇、性暴力からの保護など、さまざまな人権問題について判例を通して検討する。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、日本の判例およびヨーロッパ人権裁判所の判例について調査し、比較できるようにすることを旨とする。	
	国際法研究Ⅱ	国際人権法を実施するための国内的・国際的な人権保障システムの現状を確認し、課題について検討する。具体的には、国際人権法における国内の実施及び国際の実施のためのさまざまな制度を概観した上で、人権条約の報告制度とその課題、個人通報制度と調査制度、国連の人権活動、そして、人権の地域的保障について学ぶ。授業形態としては、毎回報告者が予め作成してきたレジュメにしたがって口頭報告を行ってもらい、その後全体討論を行うことを予定している。同授業の受講者は、国際法の専門知識を深め、とりわけ、国内的・国際的な人権保障システムについて理解し、課題について検討できるようにすることを旨とする。	
	行政学研究Ⅰ	本科目では、行政学理論と行政研究の方法論について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	
	行政学研究Ⅱ	本科目では、行政研究の方法論と行政の実態について、理解を深め、自分自身の研究を進める一助となることを目的とする。授業では、テキストを事前に読了し、そのテキストを題材として、議論を深めていく。具体的なテキストは、指定する教科書をベースにしつつも、受講生の学力や希望にも応じて適宜追加する。	
	公共政策論研究Ⅰ	公共政策は、公共財の供給、公共利益・公益（不特定多数の人々の利益）の実現、公共サービスの提供、公的問題の解決などを目的とする。その担い手は、「新しい公共」が喧伝される今日、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、新公共管理論（NPM）の考え方を批判的に検討しつつ、公共政策を3つのセクターの組織の視点、とくにそれらが構成員に提供する選択的誘因の点からも考えたい。	
	公共政策論研究Ⅱ	「新しい公共」が喧伝される今日、公共政策の担い手は、もはやファーストセクターの政府（行政）に止まらず、セカンドセクターの企業、およびサードセクターのNGO・NPOも含むと考えられている。そこでこの授業では、3つのセクターの中でもとくにサードセクターに着目し、日本の様々なNGO/NPO、具体的には非営利法人を、法人の設立と税制上の優遇措置の点から検討していく。	
	公共哲学研究Ⅰ	公共哲学の中心的な潮流およびアプローチについて概観する。前半では、現代の公共哲学、政治哲学の復活に寄与した20世紀の代表的な政治哲学者を取り上げた後、後半では、現在の主要な潮流および論点を概観する。	

専攻科目	拡充専門科目 (地域政策研究(社会人)コース)	公共哲学研究Ⅱ	古典的な文献の読解を通じ、西洋を中心とした公共哲学・政治哲学に対して、歴史的な理解を得るとともに、これら古典が現代の理論研究に対してどのような貢献を加えているかを学ぶ。	
		理論経済学研究Ⅰ	マクロ経済学、短期モデル、新しいケインジアン、財政政策、金融政策、経済成長など、標準的なマクロ経済学の理論について講義を行い、マクロ経済学の標準的なモデルについて理解する。	
		理論経済学研究Ⅱ	ゲーム理論について、主に、Nash均衡解、協力ゲーム、非協力ゲームなど、ミクロ経済学の標準的なツールとしてのゲーム理論について学び、ゲーム理論の基本的な考え方を身につけ、Nash均衡解などの概念を利用できるようにする。	
		経済統計研究Ⅰ	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には、国民経済計算体系(SNA)と産業連関表の基本構造を理解した上で、地域経済分析システム(RESAS)を用いた地域経済構造分析や、市町村レベルの産業連関表を作成して経済効果の試算を行う。	
		経済統計研究Ⅱ	経済分析をするために必要な経済統計データの見方、作り方、使い方とともにその具体的な分析手法について、実際のデータを試行錯誤的に取り扱いながら学ぶ。具体的には確率・統計学の基本知識、手法を復習した上で、EXCELやgretl等の計量経済分析ソフトを用いて回帰分析を中心とした計量経済学的実証分析ができるようになることが目的である。	
		経済政策研究Ⅰ	現代日本の経済政策について幅広く学ぶ。受講者には、課題文献のレジュメ作成だけでなく、関連する政策問題に関するレポート報告を求める。主目標は、①日本の経済政策の概要を知ること。②日本の経済政策の現代的な課題について、経済学的に考えることができることの2点。	
		経済政策研究Ⅱ	政策評価・行政評価の理念と方法を学ぶ。自治体評価、中央政府の政策評価、非営利民間組織の社会的インパクト評価等において、信頼できるデータやエビデンスに基づいてバイアスの小さい評価を実践するための基礎的方法論の習得を目指す。	
		財政学研究Ⅰ	現代財政について、制度・歴史・国際比較などの手法による幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題について考察する。 本演習では、とりわけ税制改革をめぐる各国の国際的動向について講義し、国内外の事例についてディスカッション・発表を行うものとする。	
		財政学研究Ⅱ	現代財政について、制度・歴史・国際比較など手法も用いた幅広い観点から検討し、21世紀に問われる新しい社会・政治課題を考察する。 本演習ではとりわけ、予算・社会保障に関する国際的動向を重視した講義を行い、それらを踏まえ国内外の事例についてのディスカッション・発表を行う。	
金融論研究Ⅰ	金融論の基礎知識の理解に主眼を置きながら、併せて学んだ知識をベースに時事問題にも関心を持ち、自分なりに考える力を身につける。講義では、レジュメの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。主な講義内容は以下である。通貨の機能、金融機関の種類と機能、茨城県の金融マップ、フィンテック、資産の証券化、資金循環勘定、金融政策、金融行政、プルーデンス政策。			

専攻科目 拡充専門科目 (地域政策研究 (社会人)コース)	金融論研究Ⅱ	金融論の知識をベースに、具体的な問題を、グローバルに、日米比較をしながら考えていく。講義では、テキストの説明のほか、振り返りシートの作成、DVDの鑑賞、およびこれらに関するディスカッションを行う。講義内容は以下である。これからの金融機関に求められるものは何か～協働・協創のエコシステムの世界で。地元資本が支えるアメリカ経済～「メインストリート」金融の強みに学ぶ。地域の疲弊を転換させる地域金融を目指して～日々の取り組みに息吹を吹き込む。	
	労働経済論研究Ⅰ	働き方改革と女性活躍推進をテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に扱う。	
	労働経済論研究Ⅱ	日本社会に生じているワーク・ライフ・バランスをテーマにした文献・資料を素材として、多面的に日本の職場や勤労者の生活を理解し、今後の日本社会のあり方について考察する。政策研修研究機構の調査報告等を主に扱う。	
	経営管理論研究Ⅰ	本講義では、修士レベルの組織行動論 (organizational behavior) に関する基礎的な概念や理論を学習することを目的とする。企業・組織内の個人や集団を対象とし、心理学や意思決定論、社会学の知見を援用しながら、日本語および英語の文献を輪読する。具体的なトピックとして、パーソナリティ、態度、感情、認知、信頼、リーダーシップなどが挙げられる。報告者の発表を土台とし、受講者間の議論を深めることで、新たな視点への気づきや修士論文のテーマ策定に役立てる。	
	経営管理論研究Ⅱ	本講義では、経営管理論Ⅰを踏まえ、組織行動論に関する研究論文や文献 (主に英語) を輪読し、より専門的な知識や研究手法の理解、論文執筆の基礎を学ぶことを目的とする。本講義では、専門的な知識の習得のみならず、当該論文ではどのように研究をデザインし、どのような手法を使って実証しているのかを理解することで、自分自身が研究を実施するための手法を考える基盤を作る。最終的には、自分自身で組織行動に関する研究の問いを導出し、問いに対してどのような研究デザインを行うかを考え、修士論文執筆に活かせるようにする。	
	マーケティング論研究Ⅰ	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学といって過言ではない。その知見は企業経営への影響を強める一方、近年は顧客との新たな関係が注目され、互いの影響力をどう捉えるかが重要になっている。そこで過去のマーケティング研究から近年の動向までを概観し、マーケティングの未来を展望する。	
	マーケティング論研究Ⅱ	マーケティング研究は、企業と顧客との主体間関係の科学といって過言ではない。本講座はマーケティング論研究Ⅰで概観した学術的な傾向を踏まえ、それらがもたらす新たな視点とはどのようなものかについて、さらなる検討を進めていく。とりわけ、主体間の構造という視点から関係を捉え、影響や効果からマーケティング活動の体系を展望する。	
	管理会計論研究Ⅰ	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。Ⅰでは、マネジメント・コントロールの基本概念と責任センターを中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書 of 学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人コース））	管理会計論研究Ⅱ	本講義では、マネジメント・コントロールの理論と実務での活用について理解していくことを目的とする。Ⅱでは、戦略策定、予算編成、業績評価を中心に取り上げる。毎回の講義ごとに指定図書の学生の担当者を割り振り、担当者がプレゼンテーションを実施する。その後、当該プレゼン内容について質疑応答を実施して、理解の深化を図る。	
	監査論研究Ⅰ	財務諸表監査について研究する。 株式会社の利害保持者に開示される財務諸表の適正性を保証するのが財務諸表監査である。財務諸表の適正性を保証する財務諸表監査の基本的な仕組みを考察し、利害保持者の利害がいかんして調整されるのかを研究する。	
	監査論研究Ⅱ	財務諸表監査制度と監査手続について研究する。 我が国における財務諸表監査制度である、金融商品取引法監査と会社法に基づく監査とそれぞれに基づく具体的は監査手続について研究する。	
	経営戦略論研究Ⅰ	本講義の目的は、(1)経営戦略論の基本的知識を習得し、(2)経営戦略の考え方を身につけて企業経営を研究できるようになることにある。 そのために、本講義では、経営戦略論の基本的な知識を習得するため、多様なトピックに触れた経営戦略論の教科書を輪読し、背後にある考え方を身につけるために、内容についての議論を行う。	
	経営戦略論研究Ⅱ	本講義の目的は、経営戦略論の古典を取り上げることで、研究における議論の進め方を習得することにある。 そのために、本講義では経営戦略論の古典を輪読する。内容の理解とともに、とりわけ優れた古典の輪読を通じて、(1)分析のフレームワークや(2)研究の論理的な構成についても議論を行う。	
	アジア経済論研究Ⅰ	本講義の内容は、2008年のグローバル金融危機以降のアジア経済の「躍進」を消費という切り口から考えるものである。本講義の到達目標は(1) 2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、(2) 各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、(3) 自己の研究課題を設定する、の3点である。授業は初回のオリエンテーションと第15回のまとめを除き、テキストとして指定した『アジアの消費—明日の市場を探る』、大木博巳編著、ジェトロを輪読し、受講生とともに議論するという形式で進める。	
	アジア経済論研究Ⅱ	2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を「消費」という切り口から考える。教科書を用いた輪読形式で授業を進める。2008年グローバル金融危機以降のアジア経済を理解することができる、各回の報告を通じて、アジア経済に関する研究論文の書き方を身につける、自己の研究課題を設定することを講義の主眼とする。	
	日本経済史研究Ⅰ	日本経済史でこれまでに明らかにされてきた知識・知見や、これまでの研究史について理解を深める。そのために、日本経済史の通史を輪読（受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論）する。	
	日本経済史研究Ⅱ	日本経済史研究の方法論と資料論に関する知識を身に付ける。そのために、日本経済史研究の方法論と資料論に関する文献を輪読（受講生がレジメを作成・報告し、その後に討論）する。	
	日本思想史研究Ⅰ	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは伊勢神道関係資料。	隔年

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人コース））	日本思想史研究Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する文献を読む。講読を通じて、日本宗教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。特に、仏教、神道をめぐる中世的思惟について、深く追究できるようにする。テキストは両部神道関係資料。	隔年
	日本思想史演習Ⅰ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは伊藤聡『神道の中世—伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀』	隔年
	日本思想史演習Ⅱ	中世の神仏習合思想に関する研究書を読む。講読を通じて、日本仏教を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。併せて日本仏教、日本思想史、中世文学に関する幅広い知識を身につけ、自らの研究に活かすことができるようにする。テキストは佐藤弘夫『アマテラスの変貌』	隔年
	実践哲学研究Ⅰ	この授業では、規範倫理学の基本的な考え方について学び、そのうえで規範倫理学の様々な立場の特徴などについての理解を深める。具体的には、義務論、帰結主義、徳倫理学などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学研究Ⅱ	この授業では、西洋実践哲学における重要概念である自律を取り上げ、この概念に関わる諸理論についての理解を深める。具体的には、カント倫理学における自律、個人の自律、関係の中に位置づけられた自律、応用倫理学における自律などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学演習Ⅰ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『道徳形而上学の基礎づけ』を取り上げ、輪読する。授業は演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、善意志、定言命法、普遍化可能性、目的自体、自律などについての検討を行う。	隔年
	実践哲学演習Ⅱ	西洋の実践哲学における最重要著作のひとつであるイマヌエル・カントの著作『実践理性批判』を取り上げ、輪読する。授業は基本的には演習形式にて行う。具体的には、この著作の論述に即しながら、道徳と自由、道徳と幸福、善と悪、道徳感情などについての検討を行う。	隔年
	日本古典・近代語研究Ⅰ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された蘭日辞典（『波留麻和解』『訳鍵』『ドゥーフ・ハルマ』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』）や英和辞典（『英和对訳袖珍辞書』）等について概説し、近世・近代翻訳語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
	日本古典・近代語研究Ⅱ	江戸時代後期から幕末にかけて編纂された国語辞書類（『東雅』『大和本草』『本草綱目啓蒙』『和漢三才図会』『片言』『物類称呼』『和訓栞』『雅言集覧』『俚諺集覧』等）について概説し、近世語研究の基礎資料として用いる際の注意点について言及する。	隔年
	日本古典・近代語演習Ⅰ	江戸時代の主要な蘭日辞典である『波留麻和解』『訳鍵』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』の電子テキストを用いて、近世日本の漢字字体や漢字表記語の運用実態について調査する。その際、まず単漢字での用字法の分析を行った後に、熟語についての調査を行う。	隔年
	日本古典・近代語演習Ⅱ	蘭学学習法について書かれた大槻玄沢『蘭学階梯』（天明三1783年成、天明八1788年刊）を読み、江戸で本格的な蘭学が始められた頃の社会的・学問的状況について調査する。注釈書も参照するが、原文での読解能力の修得を目標の一つとするので、授業では基本的に原文で読み進める。	隔年
日本古典文学研究Ⅰ	日本古典文学の作品（主に韻文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	日本古典文学研究Ⅱ	日本古典文学の作品（主に韻文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とする。『新古今和歌集』の和歌を、一首毎に刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学演習Ⅰ	日本古典文学の作品（主に散文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻四を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本古典文学演習Ⅱ	日本古典文学の作品（主に散文）の正確な読解力を身につけ、併せて、作品に就いて、自ら調べ考察し、それを文章化する能力を身につけることを目標とし、『平家物語』巻五を、巻四を、各章段ごとに、刊本、写本を含む伝本の比較や注釈書等の文献を詳細に検討しながら精密に読解し、考察、鑑賞する。特に仏教関係の文献や漢詩文との影響関係に注意する。	隔年
	日本近代文学研究Ⅰ	戦前を代表する大衆作家（夢野久作）の作品を網羅的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、正確な読解を心懸ける。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにより自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
	日本近代文学研究Ⅱ	戦前日本を代表する探偵小説の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の方法を模索する。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養う。	隔年
	日本近代文学演習Ⅰ	久生十蘭の敗戦後作品を構造的に研究する。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の地平を模索する。作品の背後に、膨大な過去の文学的営為があることを理解し、かつ「読む」という行為にともなう、意識の広がりにより自覚的になる。さらに文学作品を理解するために必須の、柔軟な思考を養うことを目標とする。	隔年
	日本近代文学演習Ⅱ	戦後を代表する文学表現者の長編・短編小説を精読する。特に各作品のプロットと構造に注目して分析を行いたい。同時代の文化状況、歴史的背景を視野におさめ、かつ、周辺的な情報（隣接領域におけるサブテキスト等）にあたり、新しい読解の方法を模索する。	隔年
	中国思想史研究Ⅰ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また中国最後の王朝である、清朝の真面目を理解させる。	隔年
	中国思想史研究Ⅱ	1901年、上海において、識字教科書として編集された『澄衷蒙学堂字課図説』を読み解きながら、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法に習熟させる。また近代化と伝統のはざままで揺れる、清末から民国初期の社会・歴史状況を考察していく。	隔年
中国思想史演習Ⅰ	経書成立を知るための入門書といえる、馬宗霍・馬巨『経学通論』（中華書局、2011年）を選読して、漢文および現代中国語の読解能力を向上させ、資料検索の方法を会得する。さらに儒教思想の歴史であるいわゆる「経学史」の根底を理解させる。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目 (地域政策研究 (社会人 コース)	中国思想史演習Ⅱ	江セン『新体経学講義(点校本)』(華東師範大学出版社、2014年)を精読し、漢文読解に必要な知識と方法を具体的に学び、さらに儒教史研究の歴史を深く知ることによって、中国古典学の基礎部分を修得する。	隔年
	中国近現代文学研究Ⅰ	「中国女性作家」研究。中国文学(および中国語で書かれた文学)の女性作家の作品と、研究論文の講読をとおして、中国文学史における女性作家の創作とその位置を研究し、中国文学史を再考する。	隔年
	中国近現代文学研究Ⅱ	中国・香港「モダニズム文学(実験文学)」研究。中国・香港の作家の「モダニズム文学(実験文学)」の作品と、研究論文の講読をとおして、世界文学と香港文学、中国文学の関係や、世界文学史における中国・香港文学の位置付けを考察する。	隔年
	中国近現代文学演習Ⅰ	「中国1930年代作家研究」。中国で1930年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1930年代の文学状況を検証していく。	隔年
	中国近現代文学演習Ⅱ	「中国1980年代作家研究」。中国で1980年代に活躍した作家をとりあげ、研究する。作品を講読し、担当者が報告する。討論の中で、1980年代の文学状況を検証していく。	隔年
	フランス文学研究Ⅰ	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
	フランス文学研究Ⅱ	フランス近・現代の文学作品を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学研究Ⅰ」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
	フランス文学演習Ⅰ	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を身につけることと、フランス文化の視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
	フランス文学演習Ⅱ	フランス近・現代の文学作品について、定評のある評論を原文で精読する。到達目標は、「フランス文学演習Ⅰ」の学修を踏まえ、文学研究の遂行に必要なフランス語読解力を十分に身につけることと、フランス文化の多様な視点から世界を俯瞰できるようになることである。	隔年
	美術史学研究Ⅰ	美術史学の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに方法論の発展の歴史と最新の方法論について学ぶ。また、欧米諸国と日本の美術史制度とその歴史を比較しながら学び、今日的な問題と課題について具体例を取り扱いながら検討する。	隔年
	美術史学研究Ⅱ	主に学会誌や専門雑誌に掲載された美術史研究論文を読み、内容を検討するとともに、その分析方法を整理する。伝統的な方法論やクライテリアを知るとともに、今日注目されている新しい研究の方法を吸収し、独自の研究に応用する訓練をする。	隔年
	フランス美術史研究Ⅰ	フランス美術の歴史の基礎的知識の修得を前提としたうえで、とくに中世、17世紀、19世紀、20世紀の歴史編纂の歴史と方法論について学ぶ。具体的には、欧文(とくにフランス語と英語)の必須文献と最新の優れた論文を講読・分析し、批判的検討をするとともに、新知見の構築をめざす。	隔年
	フランス美術史研究Ⅱ	フランス美術史の動向と美術史研究の成果を理解する。欧文(とくにフランス語と英語)文献の購読などを通して、フランス美術史の基本的な方法論を修得するとともに、新しい研究方法にも通じ、各自の研究に応用する。	隔年

専攻科目 拡充専門科目 (地域政策研究 (社会人 コース)	英語学研究 I	生成文法の言語観を前提として、現代英語の文法現象のうち、文法の部門間の接点（インターフェイス）において生じていると考えられる現象を取り上げ、文法の部門間の関係がどうあるべきか先行研究を渉猟したうえで担当者の管見を披露する。今まで重点的に研究されてきた統語論と意味論の接点の現象に加え、統語論と音韻論の接点の現象と意味論と音韻論の接点の現象を扱い、文法理論のあるべき姿の可能性を提示する。	隔年
	英語学研究 II	英語の通時変化に関する担当者の管見を、主として生成文法的な理論基盤をもとにして提示する。具体的には、英語の通時変化の大きな流れを前提として概観したあと、英語史上生じた音韻変化、統語変化、意味変化から具体的な変化の一つを選び、言語変化を記述しその記述結果を理論的視点から解釈する。そのうえで、提示した解釈の英語の歴史変化への意味合いについて議論する。	隔年
	英語学演習 I	英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の統語構造と意味構造に関連する論文を扱う。	
	英語学演習 II	英語学演習 I と同様に、英語学の最新の研究成果を提示している論文の講読と討論。最新の言語学雑誌に掲載されている英語の言語現象をあつかった論文を5～6編選び、受講者が論文内容を紹介し、その内容について受講者と担当者と討論する。主として現代英語の音韻論と形態論に関連する論文を扱う。	
	イギリス文学研究 I	20世紀の各文学理論の基本的な理念と、理論体系の歴史的発展を理解したうえで、批評論文の英語表現を正確に読み取る方法と文学作品の研究手法を学ぶ。具体的には文学理論の代表的な論文と個別文学作品の批評論文を精読し、その英語表現の理解を深め、批評の手法と視点を分析・検討し、個別作品研究への援用の方法を探求する。	隔年
	イギリス文学研究 II	20世紀末から21世紀に発表された最先端の文学批評の理解を深め、批評論文の難解な英語表現の読解方法を学ぶ。具体的には、ジェンダーから宗教に至る幅広いテーマをめぐる最先端の批評論文を精読し、英語表現を理解したうえで、近年の文学批評の動向を把握し、個別作品の批判的読解方法を学び、新たな論点と分析方法を探求する。	隔年
	イギリス文学演習 I	近代初期から現代にいたるイギリス文学の詩、戯曲、小説の代表的な作品を読解し、各作家の語りの特徴の分析方法と個別作品の英語表現の読解力を涵養する。具体的には、各時代の各ジャンルの代表的文学作品の一部を精読し、語りにおける英語表現の特徴と表象の諸要素を分析する方法を学び、作家・作品への理解を深める。	
	イギリス文学演習 II	近代から現代にいたるイギリス文学の散文を中心に、比較的マイナーなサブジャンル作品を精読し、多様な英語表現の読解力を涵養する。具体的には、対象作品の精読を行い、各書き手の語りの手法と英語表現の分析方法を学ぶ。特に、近代以降の「自己」の表象と一人称の語りの様相の関係を分析したうえで、各時代のイデオロギーと修辭的表現の諸要素の相関関係への理解を深める。	
アメリカ文学研究 I	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	アメリカ文学研究Ⅱ	19世紀末から現代までのアメリカ文学の主要な作家、作品について学ぶ。毎回設定された時代区分やテーマに従って、担当者が当時の社会背景や文学動向を調査し、発表する。また、その区分における代表的な文学作品あるいはその抜粋を精読して読解力を養う。同時に、通史的にテキストを読んでいくことで文学史の観点から作品を評価する方法を身につける。受講者は毎回の課題テキストを事前に読みこみ、コメントを用意しておくことが求められる。	隔年
	アメリカ文学演習Ⅰ	植民地時代から20世紀初頭までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
	アメリカ文学演習Ⅱ	19世紀末から現代までのアメリカ文学の代表的テキストおよびそれに関連した批評史上の重要文献を題材に、発表と討論を通じて研究に必要な基礎能力を養う。授業では担当者がテキストの精読・分析、二次資料の調査、発表資料の作成を事前にしたうえで発表を行い、それに基づいて受講者全体で討論する。受講者は討論に参加できるよう、毎回の課題テキストを読みこんでおくことが求められる。	
	応用言語学研究Ⅰ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」と「転移」に関する文献を購読し、これまでの研究の歴史を概観する。そのうえで近年の言語間の影響と過去の転移研究との違いを正確に理解する。そのために、文献内容の理解を高めるための課題(study questions)に取り組み、その成果を発表し、討議する。さらに、受講者の第二言語習得の経験及び内省に基づき、受講者の母語が第二言語習得に与えた影響について、特定の語彙、文法項目を例にとり、発表、議論する。	隔年
	応用言語学研究Ⅱ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、「言語間の距離」、「個人差」に関する文献を精読し、言語間の距離と言語間の影響、および学習者の個人差と言語間の影響について深く考察する。そのうえで、言語間の影響に関する主要な研究論文を精読し、日本語のどのような語彙及び文法項目が学習言語（主に英語）の習得にどのような影響を与える可能性があるのかを発表資料に基づき発表し、受講者全員で議論する。	隔年
	応用言語学演習Ⅰ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、動詞の項構造情報、受動態、関係節などについて日本語が英語学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年
	応用言語学演習Ⅱ	第二言語を学習する際に、母語と学習言語との間に生じる「言語間の影響」に関して、具体的な語彙及び文法項目に関して、学習者の母語が学習言語に与える影響について、研究論文をもとに考察する。そのうえで、母語が日本語で、学習言語が英語の場合を例にとり、可算・不可算名詞、定表現、時制、空間表現などについて日本語が英語の学習に与える影響を深く考察し、発表を行い、議論する。	隔年
	言語文法論研究Ⅰ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。イギリスの記述文法の伝統の中で書かれた研究を読む。動詞と助動詞、代名詞と数詞、形容詞と副詞、削除、情報構造、テキスト言語学などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人コース））	言語文法論研究Ⅱ	テキストを用いて文法の諸問題を考えていく。記述を中心としながらも、理論的側面も取り入れた研究を読む。否定、発話行為、付加詞、非境界性、比較、指示詞、照応形、形態論などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅰ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。主要部と補部、各フレーズの特徴、節の種類と特徴、修飾や程度の表現などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	言語文法論演習Ⅱ	演習形式で文法の諸問題を考えていく。生成文法の手法を用いた文法の分析を概観する。語、句、機能範疇、疑問文、関係節、他動性、主要部移動などが扱われる。毎回テキストを深く読み込み、経験的事実を整理して、それをいかに説明するかを考えることが要求される。	隔年
	社会言語学研究Ⅰ	社会言語学の研究において注目されてきた「属性」のうち、性差・年齢差、集団語に注目して、これらに関する先行研究をテキストとして講義を進める。日本語の変種と性差・年齢差との関係とその特徴を多角的に説明、あるいは、集団語として主に若者語に関する研究を取り上げ、言語変化のプロセスや若者語の機能等について説明する。	隔年
	社会言語学研究Ⅱ	「言語生活」「言語意識」に関する先行研究をテキストとして講義を進める。言語生活では、メディア接触と言語変種、共通語と方言の併用、日本語非母語話者の日本語使用等の観点から説明する。言語意識では、言語行動への評価、方言意識、アイデンティティー等に注目しながら説明する。	隔年
	社会言語学演習Ⅰ	性差・年齢差、集団語といった属性に注目して、これらに関したテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	社会言語学演習Ⅱ	言語生活の変化や言語意識に注目して、これらに関したテーマの設定、テーマ解明のための調査、調査データの分類・分析を実際に行いながら、社会言語学的研究の方法を学ぶ。また、テーマに関連する先行研究の精読を並行して行う。どのような属性に関するテーマとするかは、年度ごとに異なる。	隔年
	考古学研究Ⅰ	考古学研究の基本文献について、特に理論考古学に関する論文を批判的に解説する。テキストはチャイルド、ビンフォード、ホッター、レンフルーらの著作、またはこれらに関連する論文から、受講生の関心を考慮して選択する。原則として原文を用いて理論の理解を深め、受講生自身の研究成果と併せて検討することを通じて、考古学からの歴史的思考力を鍛える。	隔年
	考古学研究Ⅱ	比較考古学の研究方法を解説し、具体的な考古資料に即して研究を実践指導する。比較考古学（この授業では民族考古学的方法・土俗考古学的方法を含む）のもつダイナミズムを理解するために、まず具体的研究例を学び、受講者毎に設定する課題に対し、実際の作業を通じて議論し、歴史と文化を描き出す際の理論的な問題点もあぶり出す。	隔年
	日本考古学研究Ⅰ	日本考古学研究の進め方、論文の書き方について訓練する。複数のオピニオン・リーダーによる研究文献を購読し、比較・検討することにより、日本考古学の現在の水準と問題点を探る。その上で、自分自身の研究を日本考古学の課題や歴史的課題と照合し討論する。テキスト及び課題は受講生の関心を考慮する。	隔年

専攻科目 （地域政策研究（社会人）コース）	日本考古学研究Ⅱ	日本考古学の研究の流れを、具体的な考古資料に即して指導する。調査計画の策定から始め、最終的には自身の成果をまとめることを目標として、事実記載及び考古学的評価を含む短編の報告（調査報告、資料紹介または地域の文化財保護計画）の作成に取り組む。資料や課題は受講生の関心を考慮する。	隔年
	中国考古文化研究Ⅰ	甲骨文字の誕生から現在までの研究史について理解を深める。併せて考古資料、文献資料、出土文献資料それぞれの特性について学び、理解する。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	中国考古文化研究Ⅱ	甲骨文字研究の全体像について理解を深め、特に書体研究とISO/IEC10646への登録問題を通して、アカデミックな研究成果と実務規格との兼ね合いについて理解を深める。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	中国考古学研究Ⅰ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。加えて、清末以降の日中関係史について、中国考古学史を軸に学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	中国考古学研究Ⅱ	中国考古学史の基本的な知見について理解を深める。特に新石器時代末～二里頭期の状況を継続と断絶という観点から学ぶ。その上で、受講生各人の研究について報告ならびに討論を行い、修士論文の作成へとつなげていく。	隔年
	日本文化史研究Ⅰ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に国家権力（朝廷や幕府、宗教権門）との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
	日本文化史研究Ⅱ	日本の古代・中世における文化の形成・展開を、主に地域権力（在地領主や地方寺社）との関係から歴史的に考察し、地域の具体的な事例に即して研究する能力を涵養する。	隔年
	日本古代中世史研究Ⅰ	日本の古代の歴史を茨城（常陸・北下総）の事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。日本文化史に関する研究姿勢、研究能力を、より高めることができる。	隔年
	日本古代中世史研究Ⅱ	日本古代中世史に関する研究成果を教員・学生が提示し、議論を通じて、ブラッシュアップする。日本の中世の歴史を事例に即して具体的に考察し、史料から歴史像を復元する能力を高める。	隔年
	日本政治史研究Ⅰ	近世の政治史について論じた基本文献と、武士社会の権力と伝統の内実を記録した史料を読み、近世社会の政治的特質について学ぶ。具体的には、前半は尾藤正英『江戸時代とはなにか』を輪読し、後半は水戸藩の政治に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
日本政治史研究Ⅱ	近世の国際政治史を論じた研究文献と、近世人の海域世界との接触について記録した史料を読み、東アジアという視野のもとで近世日本の特質について考える。具体的には、前半は山口啓二『鎖国と開国』を輪読し、後半は東アジア海域で活動した人びとに関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年	
日本近世史研究Ⅰ	近世の百姓や町人について論じた基本文献と、庶民の視点で近世の風景を記録した史料を読み、近世の民間社会の実態について学ぶ。具体的には、前半は深谷克己『百姓成立』を輪読し、後半は市井でやり取りされた情報や伝承に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目 (地域政策研究 (社会人)コース)	日本近世史研究Ⅱ	近世人の生命維持について論じた研究文献と、自然環境に適応した人びとの営みを記録した史料を読み、「生きる」という視角で近世社会の特質について考える。具体的には、前半は塚本学『生きることの近世史』を輪読し、後半は飢饉や自然災害に関わる史料の分析を行う。また、地域社会における文化財や史料の保存・活用に必要な専門的な知識と技術を身につける。	隔年
	日本社会史研究Ⅰ	近代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に19世紀後半から20世紀前半にかけての史料の輪読を進めることで、近代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
	日本社会史研究Ⅱ	現代日本社会に関連する史料の読解と分析を進める。主に20世紀前半から2中頃にかけての史料の輪読を進めることで、現代日本社会の歴史とその史料の特質について理解を深めていく。	隔年
	日本近現代史研究Ⅰ	日本近代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に19世紀後半から20世紀前半の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、近代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
	日本近現代史研究Ⅱ	日本現代史を理解する上で重要と思われる研究文献を輪読する。主に20世紀前半から中頃の歴史を対象とする研究文献を読み、それに関連したテーマを検討していくことを通して、現代史研究の手法や史学史についての理解を深めていく。	隔年
	ユーラシア歴史文化研究Ⅰ	17世紀における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としてはジューンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定朔漠方略』や満洲語の一次史料である『康熙朝満文硃批奏摺』に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
	ユーラシア歴史文化研究Ⅱ	18世紀前半における清朝と周辺地域の歴史と文化について専門的な見地から考察を加える。具体的な事例としては、ジューンガル及びロシアとの関係を取り上げる。当該分野の基本的な史料である『平定準噶爾方略』や満洲語の一次史料である『雍正朝満文硃批奏摺』・『準噶爾使者档』、さらにはジューンガルを訪れたロシア使節の記録等に当たりながら、史料を使った歴史研究の手法について学ぶ。	隔年
	ユーラシア歴史社会研究Ⅰ	清朝の八旗制度と中央ユーラシア周辺社会（ハルハ、ジューンガル、ホシユート、チベット等）に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
	ユーラシア歴史社会研究Ⅱ	近世東部ユーラシア世界（清朝、ロシアおよび日本）の歴史（関係史）及び社会に関する専門的な研究論文を取り上げ、それぞれの研究論文の手法（問題設定、史料の扱い方、論理展開、結論の妥当性等）について専門的な見地から検討を加える。	隔年
	アジア歴史文化研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年
アジア歴史文化研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に文化と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年	

専攻科目 （地域政策研究（社会人）コース）	アジア歴史社会研究Ⅰ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は学生の専門地域を中心とする。	隔年
	アジア歴史社会研究Ⅱ	近現代に植民地統治を経験したアジア地域において、その植民地統治が在地社会にもたらした変容を、主に社会構造と政治のかかわりから探究することを目標に、その分野にかかわる近年の専門書を読解する。対象地域は南アジアを中心とする。	隔年
	ヨーロッパ社会史研究Ⅰ	ドイツの戦後社会における歩みを検討していく。その際に、1) ヨーロッパを中心とした国際関係をめぐる歴史、2) ドイツの国内政治史、3) 市民社会の構造的変化・家族やジェンダー問題、メディアや消費生活のあり方といった社会史という3つの軸を中心に分析する。	隔年
	ヨーロッパ社会史研究Ⅱ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
	ヨーロッパ政治史研究Ⅰ	ヨーロッパ諸国の歴史を、ドイツを軸に、経済的・政治的・社会的な側面から具体的に検討していく。さらにここで取り上げられた諸国および現代社会の相互比較から、現代社会の歴史的位相と構造的な特質について考えていく。	隔年
	ヨーロッパ政治史研究Ⅱ	ヨーロッパの20世紀史を論じた最新の研究をとりあげ、基本知識を確認するとともに、テキストを読み込んでいく。具体的には、二度の世界大戦とヨーロッパの国民国家体系が引き起こした問題、さらには社会主義（東西冷戦）などが主題となる。参加学生からの積極的な発言も求める。	隔年
	ヨーロッパ歴史文化研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパの歴史文化、とりわけ英仏独以外の近現代史に関する近年の重要な研究を紹介したうえで、受講生の関心に沿った研究報告（プレゼン）を課す。これによって、修論執筆に必要な文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
	ヨーロッパ歴史文化研究Ⅱ	本講義においては、近現代史を中心とするヨーロッパの歴史文化に関する研究に取り組むことで、国民史に基づく一国史観を相対化し、過去と未来をつなぐ歴史的視野を養う。以上を通して、修論執筆に必要な史料・文献の紹介・整理を行う訓練とする。	隔年
	ヨーロッパ近現代史研究Ⅰ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する最新の研究に触れたうえで、その研究史的意義、多文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年
	ヨーロッパ近現代史研究Ⅱ	本講義においては、ヨーロッパ近現代史に関する古典的な研究に対してもその射程を広げ、その研究史的意義およびヨーロッパの歴史文化への理解を深める。具体的には、和書もしくは洋書の輪読を行い、内容を掴んだうえで受講生はレジュメを作成したうえで研究発表を行う。	隔年
行動機構論研究Ⅰ	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究Ⅱを履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	行動機構論研究Ⅱ	「地域に暮らす高齢者の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学の諸問題」について、受講生が問いを定め、それに関して調べ、意見をまとめるという一連の研究活動をおこなう。過去に行動機構論研究Ⅰを履修済みの学生には、新たに別の問いを定めて研究を行うことを求める。また受講生の研究計画に応じた健康心理学の研究方法を併せて講義する。	隔年
	行動機構論演習Ⅰ	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康に関連した心理学の諸理論、例えば心理学的ストレス理論、ソーシャルサポート、健康信念モデル、計画的行動理論、セルフエフィカシー、自己決定理論などについて理解を深める。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	行動機構論演習Ⅱ	地域社会に暮らす人々の健康増進、疾患予防、事故防止に関する健康心理学について学ぶ。とくに高齢者とかれらの生活を支える人々の健康増進に焦点を当て、介護ストレス、介護予防、健康行動、テクノロジーへの適応などの問題について、現場の課題と実践のあり方について考察する。指定された文献を事前に読み込み、その内容を踏まえて授業中にディスカッションを行う演習授業である。	隔年
	認知行動論研究Ⅰ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解することを通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論研究Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域の実験・調査方法や心理統計技法といった研究法の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論演習Ⅰ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、自身の研究と関連する認知心理学領域研究の理解することを通して自身の研究を俯瞰的に捉え直すこと、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年
	認知行動論演習Ⅱ	人間の認知機能について理解を深めることを目的とする。特に感覚・知覚、記憶、イメージ、注意を中心に、各種認知機能の特性やそれらを支えるメカニズム、さらにはそれらを解明するための心理学実験や調査方法、収集されたデータの分析方法等といった研究法についても議論し、理解を深める。本演習では、最新の認知心理学領域研究の動向を理解すること、さらには、認知心理学領域で使用される専門用語や発表されているモデル等の理解に重点をおく。	隔年
	家族心理論研究	家族をめぐる歴史や定義について理解を深めながら、主として離婚・再婚、そして子どもの養育課題といった現代の家族における諸問題について検討する。また、生涯発達の視点も含めながら、家族のライフサイクルについて多面的に検討する。	隔年

専攻科目	拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	行動文化論研究Ⅰ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅰ（「現代の事例」に学ぶ）。現代の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげる研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
		行動文化論研究Ⅱ	テーマは、人びとの集い、つながり、コミュニティの社会心理学Ⅱ（「過去の事例」に学ぶ）。過去の事例を取り上げ、集団やつながりの形成過程、慣習や集団規範の生成や変化といったテーマについて、関係性を重視した社会心理学の観点から学ぶ。また、とりあげる研究成果を参考にして、現代社会を考察する視座を得る。	隔年
		行動文化論演習Ⅰ	社会心理学および関連分野の「古典的文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
		行動文化論演習Ⅱ	社会心理学および関連分野の「最近の文献」を講読する。参加者は文献を精読した上でコメントを用意し、議論の素材とする。関連する論文を探索、参照して議論の幅を広げる。元の文献に再度あたり、とりあげているテーマについての考察を深める。	隔年
		生涯発達論研究Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に注目した知性、情動、身体、自他関係などの形成について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論研究Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に注目して、出来ることが当たり前ではないことから人間の生涯にわたる発達について学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論演習Ⅰ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に乳幼児期に関する個別具体の課題について掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		生涯発達論演習Ⅱ	人間の生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。特に高齢期や障害に関する個別具体のテーマについて掘り下げて学ぶ。受講者は指定された文献を読んだうえで、授業内での議論を行い、生涯にわたる心の発達の成り立ちについて理解を深める。	隔年
		文化人類学研究Ⅰ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。	隔年
		文化人類学研究Ⅱ	マヤ文明に関する英文の専門書を精読する。毎回の授業では、受講生が前もって予習範囲を精読し、レジュメを作成すること、および高度な語学能力が前提条件になる。最新かつ最も詳細なマヤ文明の研究書Robert J. Sharer 2006 The Ancient Maya. Sixth Edition. を批判的に読解しながら、マヤ文明研究の到達点と今後の課題について広く深く考察する。アメリカの英文専門書の読解能力を高め、マヤ文明の特徴、旧世界の四大文明との共通性を理解できるようになることを目指す。	隔年

専攻科目	拡充専門科目 (地域政策研究(社会人 コース))	文化人類学演習Ⅰ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。	隔年
		文化人類学演習Ⅱ	The Ancient Civilizations of Mesoamerica: A Readerに掲載されている、先スペイン期のメソアメリカ諸文明に関する専門的な英文の学術論文を読みながら、人類学としての先産業文明の比較研究の理論・方法論について広く深く学ぶ。毎週の入念な予習・準備と高度な語学能力が必要不可欠である。学術雑誌論文の批判的読解を通じて、先スペイン期のメソアメリカ諸文明を研究する上で不可欠な文献読解能力を高め、資料探索の方法に習熟することを目指す。	隔年
		比較文化論研究Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。具体的には特に、「集団」「伝統」「儀礼」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
		比較文化論研究Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、マルチサイトッド・エスノグラフィ、オートエスノグラフィ(自己エスノグラフィ)など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
		比較文化論演習Ⅰ	民俗学の文献を講読し、伝統文化の現代的状況を理解するための視点と方法について議論する。特に、広義の「語り」研究の蓄積について先行研究を検討しながら、新しい視点の彫琢を目指す。	隔年
		比較文化論演習Ⅱ	フィールドワークのデータにもとづいて学術論文を作成するため、データの分析方法について検討する。特に、長期のフィールドワークにもとづく民族誌を精読し、生のデータを分析し、議論する方法について議論する。基本的に、組織エスノグラフィ、オートエスノグラフィ(自己エスノグラフィ)など、近年の動向にもとづいた民族誌を扱う。	隔年
		福祉分野に関する理論と支援の展開	社会福祉の基本的な理念や機能・役割について理解を深めたいうえで、特に、障害者(児)に関連した福祉現場において生じる、心理社会的な課題及び必要な支援について学ぶ。具体的には、身体障害者(児)、知的障害者(児)、発達障害者(児)、精神障害者に関する法・制度について学び、地域における支援の実際や今後の課題について、事例等を交えながら検討する。	
		教育分野に関する理論と支援の展開	地域社会における学校、いじめ、不登校、発達障害、児童虐待、アセスメント、コンサルテーション、心理教育をキーワードとし、スクールカウンセラーとして働くための基礎知識を身につける。また、教育分野における支援のあり方を通して、社会人としての姿勢を身につける。	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	司法・犯罪分野に関わる心理専門職の実践について学ぶ。具体的には、少年審判手続及び関係機関の連携について学ぶと同時に、非行メカニズムの理解、少年への支援・働きかけについて学習する。また、家事事件等に関する基礎知識及び家庭内紛争の解決に向けた専門職の実践について学ぶことにより、社会人としての姿勢を身につける。	
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	地域における産業・労働分野における支援に焦点を当てて、その理論と具体的実践について学ぶ。具体的には、組織の特徴、組織運営の実際、制度と法規、産業ストレスの実際、健康保持増進のための指針、障害者への就労支援、自殺予防と危機対応等について学ぶ。	

専攻科目 拡充専門科目（地域政策研究（社会人）コース）	心理的アセスメントに関する理論と実践	将来、社会人として、心理臨床家の仕事を行う際に必要な臨床心理査定（アセスメント）について理論と施行法を教授する。実物の検査用紙や器具を用い、演習を通して心理査定の実際を学ぶ。 (オムニバス／全15回) (90 金丸 隆太／8回) 代表的な知能検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 描画法、質問紙法から代表的な心理検査を取り上げて、理論、施行法、解釈法について演習を通して学ぶ。	オムニバス
	心理支援に関する理論と実践A	ロジャーズ、C.、来談者中心療法、カウンセリング、プレイセラピーをキーワードとし、ロジャーズ、C.の来談者中心療法についてその主要論文とそれに関連する文献を読みながら討論を行い、理解を深める。	
	心理支援に関する理論と実践B	公認心理師として、地域社会において活動を行なっていく上での基礎的な考え方、倫理的問題や治療構造等、心理面接を行う上での基本について、講義や事例検討を通して実践的に学ぶ。 (オムニバス／全15回) (108 大島 聖美／8回) 大学院でどのように学んでいくのか、倫理的問題や治療構造等、言語面接を行う上での基本について学ぶ。 (110 地井 和也／7回) 事例論文や各自が実習で担当している事例報告を材料に、主に演習形式によって、心理療法の実践に生じる諸問題や展開の在り様について理解と対応の可能性を検討する。	オムニバス
	家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	家族、コミュニティ、関係行政論をキーワードとし、家族やコミュニティに焦点を当てた心理支援の理論と方法について学ぶ。さらに、これらの心理支援の背後にある法律や制度についても学ぶ。	
	心の健康教育に関する理論と実践	心理専門職者に必要な心の健康に関する諸理論を学ぶ。具体的には地域保健活動における予防の概念、ストレス理論、自殺予防と危機対応、心の成長モデル、表現活動と健康等について実践を交えながら学ぶ。 (オムニバス／全15回) (90 金丸 隆太／4回) ガイダンス、心の成長モデルに関する回を担当する。 (108 大島 聖美／4回) ストレスマネジメントおよびアサーショントレーニングについて、基礎的な知識と心理教育の実際について学ぶ。 (110 地井 和也／3回) 「睡眠の問題」、「自傷行為・自殺の問題」、「死と喪の作業」をテーマとして基礎的知識と問題の予防に関する諸理論および心理教育の実践方法について学ぶ。 (55 正保 春彦／4回) 集団活動における心の教育の実践方法について学ぶ。また、まとめの回を担当する。	オムニバス
	保健医療分野に関する理論と支援の展開	精神医学の基礎と、統合失調症、気分障害をはじめとする代表的な精神疾患について学び、さらに、精神疾患の治療の基礎を学ぶ。精神医学の最近のトピックについて学ぶことにより、社会人としての心理専門職に必要な精神医学的見地を身につける。	

専攻科目	拡充専門科目（社会人）	投射法特論	ロールシャッハ・テスト（エクスナー法）の歴史・実施手順・コーディング・解釈について学び、被検者の心理的体験を理解し、自分自身で検査結果の整理を行うことができることをめざす。心理専門職者として、本テストを臨床現場で活用するための基本を習得する。	
	コース	箱庭療法特論	箱庭療法の理論に関する講義と箱庭制作体験を通して箱庭療法の実践について学習する。具体的には、箱庭制作・見守り体験、事例検討を通して箱庭療法の実践の基礎を身につける。	
	研究指導科目	社会科学的研究法	<p>研究活動を展開する上で踏まえるべき研究倫理の基礎について、ガイドライン等に基づき具体的に学ぶ。また、各専門分野における研究テーマについて、関連する重要文献の文献講読等を行い、討議を行う中で、研究理論や研究動向を理解し、研究方法を習得すると共に、自らの研究テーマを深化し、研究方法を精緻化し、修士論文作成のための基盤を構築する。大学院専門委員が取りまとめ担当となり、専攻内の複数の教員によるオムニバス形式にて開講する。</p> <p>（オムニバス形式/全15回） （1 内田聡/1回） ガイダンス：人文社会科学の世界 (22 葉 倩璋/1回) 研究倫理 (13 鈴木 栄幸/3回) メディア・情報文化分野における研究テーマについて、関連する重要文献の文献講読等を行い、討議を行う中で、研究理論や研究動向を理解し、研究方法を習得すると共に、自らの研究テーマを深化し、研究方法を精緻化し、修士論文作成のための基盤を構築する。 (22 葉 倩璋/3回) 国際・地域共創分野における研究テーマについて、関連する重要文献の文献講読等を行い、討議を行う中で、研究理論や研究動向を理解し、研究方法を習得すると共に、自らの研究テーマを深化し、研究方法を精緻化し、修士論文作成のための基盤を構築する。 (5 井上 拓也/3回) 法学・行政学分野における研究テーマについて、関連する重要文献の文献講読等を行い、討議を行う中で、研究理論や研究動向を理解し、研究方法を習得すると共に、自らの研究テーマを深化し、研究方法を精緻化し、修士論文作成のための基盤を構築する。 (2 田中 泉/3回) 経済学・経営学分野における研究テーマについて、関連する重要文献の文献講読等を行い、討議を行う中で、研究理論や研究動向を理解し、研究方法を習得すると共に、自らの研究テーマを深化し、研究方法を精緻化し、修士論文作成のための基盤を構築する。 (22 葉 倩璋/1回) 全体の振り返りとまとめ</p>	オムニバス
	専門基礎演習	修士論文の基礎となる各自の研究テーマについて、指導教員による指導を通じて固める。修士論文の執筆テーマをもとにした、学生の発表に基づき、授業担当者との討議を行う。研究テーマを深化させながら、研究計画、研究方法等を授業担当者から指導・助言受けながら進める。		
	課題研究演習 I	<p>修士論文執筆のための指導。</p> <p>修士論文執筆予定の2年次を対象として、前半は、論文執筆予定者の発表を基礎として、修士論文の構成とテーマ全体についての指導を行う。後半は、研究テーマにもとづき、修士論文の具体的な論点や議論の展開、データの分析方法など、執筆予定者の発表をもとにして授業担当者がコメントを加える。</p>		

専攻科目	研究指導科目	課題研究演習Ⅱ	課題研究演習Ⅰから連続する修士論文執筆のための指導。課題研究演習Ⅰを基礎として、論文執筆予定者から修士論文の草稿を章ごとに提出してもらい、各回の発表について担当者がコメントを行い、そのコメントに基づく執筆者は改訂版を作成する。そのサイクルを繰り返し、最終的に修士論文を完成させる。完成後は、執筆者が完成後の展望についての発表を行い、それについて授業担当者が具体的なコメントを加える。	
		政策特定課題研究演習	特定課題の提出のための指導。特定課題提出予定の2年次を対象として、前半は、課題の作成予定者の発表を基礎として、構成とテーマ全体についての指導を行う。後半は、課題とするテーマにもとづき、具体的な論点や議論の展開、データの分析方法など、執筆予定者の発表をもとにして授業担当者がコメントを加える。	
		政策プレゼン研究演習	政策特定課題研究演習から連続する特定課題のための指導。執筆予定者から特定課題文の草稿を章ごとに提出してもらい、各回の発表について担当者がコメントを行い、そのコメントに基づく執筆者は改訂版を作成する。そのサイクルを繰り返し、最終的に特定課題を完成させる。完成後は、執筆者が完成後の展望についての発表を行い、それについて授業担当者が具体的なコメントを加える。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。